

駒ヶ谷遺跡Ⅱ

—南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書—

2002年2月

(財)大阪府文化財調査研究センター

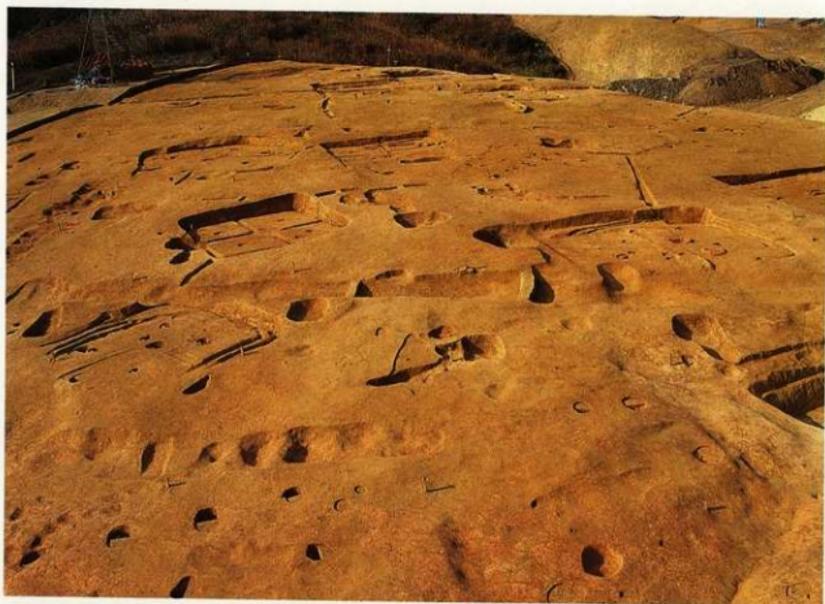
II 秘畫谷 六 附



1. 駒ヶ谷遺跡周辺航空写真（西から、二上山・飛鳥川をのぞむ）



2. 駒ヶ谷遺跡周辺航空写真（東南から、石川・古市古墳群をのぞむ）



3. A地区西半(1A区)全景(東から)



4. 竪穴住居20(北東から)



5. 竪穴住居32(東から)



6. 竪穴住居41(北東から)



7. 竪穴住居42(北東から)



8. A地区東半(2A区)全景(東から)



9. 掘立柱建物505(北東から)



10. 掘立柱建物506(南から)



11. 竪穴住居500(南東から)



12. 焼土坑17(南東から)



13. 石杵 (赤色顔料精製用石製品) [C地区包含層出土]

序 文

駒ヶ谷遺跡は、大和と河内・難波宮をつなぐ古代官道である竹内街道（丹比道）を見下ろす丘の上に所在する。この地は、東南方向に二上山の稜線をまじかに望む、緑多き田園地帯でもある。

平成8、9年に当センターによって行われた発掘調査では、丘陵裾の緩傾斜地から、6世紀後半の前方後円墳である「蔵塚古墳」が発見され、その周囲には飛鳥・奈良・平安時代の建物群も多数検出された。特に、奈良時代には大型の建物、三彩壺や多量の製塩土器を投棄した井戸、「古厨」と記された墨書土器などが検出されたことは目を引く。官道沿いの迎賓施設として機能した建物群とも想像され、当遺跡の立地の重要性を強く認識させる調査成果であった。

今回の調査は、さらに西側の丘陵尾根上を中心に行われた。前回の調査区から連続すると思われる古代を中心とした建物群に加え、古墳時代初頭の堅穴住居群も多数検出されたことは注目できる。約10年前に駒ヶ谷遺跡調査会の調査で発見された遺跡西部の丘陵尾根上の弥生時代後期～古墳時代初頭の集落跡が、さらに東へ広がったことになる。いわば、今回の調査により、従来遺跡の東西で検出されていた弥生時代後期～古墳時代初頭と飛鳥・奈良時代それぞれの施設群の広がりがほぼ確認できたのである。

これらの調査成果から、古代官道沿いの重要施設と想像される駒ヶ谷遺跡には、6世紀段階では地域社会のモニュメントとしての前方後円墳が設営され、それをさかのぼる3世紀には中規模集落群の展開する歴史的環境にあったことになる。つまり、古墳時代～古代という国家形成期に飛鳥川流域における中核地域の一部として機能しつづけた地点の実態が明らかになったとも言えよう。これは、奈良盆地と大阪平野をつなぐ小地域の重要性の歴史を知る上で有意義な成果と言えるのではないかと。

最後に、発掘調査と遺物整理・報告書作成作業の実施にあたり、多大なご協力を賜った大阪府教育委員会、国土交通省近畿地方整備局、羽曳野市教育委員会をはじめとする関係各位に深く感謝するとともに、今後とも当センターへのご支援を賜るよう切に希望して、序の言葉に代えさせていただきます。

平成14年2月28日

財団法人大阪府文化財調査研究センター
理事長 水野正好

例 言

1. 本書は、南阪奈道路の建設工事に伴って調査を行った、駒ヶ谷遺跡の発掘調査報告書である。駒ヶ谷遺跡は、大阪府羽曳野市飛鳥に所在する。
2. 発掘調査および遺物整理・報告書作成事業は、大阪府教育委員会の指導の下に国土交通省近畿地方整備局大阪国道工事事務所の委託を受けて、財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した。
3. 発掘調査は1999年6月24日～2000年3月31日に、遺物整理・報告書作成作業は2000年4月1日～2001年3月31日に行った。調査や遺物整理・報告書作成作業の実施にあたっては、南部調査事務所が所管し、南部調査事務所長瀬川健、調査第3係長寺川史郎の指示の下、関係技師山本美野里・若林邦彦、専門調査員仲原知之（現和歌山県教育庁文化財課）が担当した。
4. 発掘調査および報告書作成作業の過程で、次の方々をはじめとする諸氏・諸機関にご協力・ご教示を賜った。記して感謝の意を表する。（敬称略、所属団体50音順・団体内50音順）
山田隆一（大阪府教育委員会）、鍋島隆宏（太子町教育委員会）、伊藤聖浩・井原稔・笠井敏光・河内一浩・武村英治・高野学・森田和伸・吉沢則男（羽曳野市教育委員会）
5. 本書の編集および執筆は仲原・若林が担当し、各執筆分担は目次に示した。
6. 現地調査および遺物整理・報告書作成作業には下記の非常勤職員の協力を得た。
秋山敦子・宇川里香・岡本悦子・川田嘉代子・坂口恵美・田中映子・中筋英子・中村慎子・山口純枝・行川勝

凡 例

1. 挿図の縮尺は不同であり、各図版タイトル・スケールに表示している。ただし、遺構配置図は1/400、各遺構の平面図・断面図は1/80、各遺物の実測図は、土器では1/4、石器では1/2・2/3、鉄製品では1/1を基本としている。
2. 遺構平面図・断面図の標高は、東京湾平均海面を基準とした数値（T.P.）で表記している。
3. 平面図は、国土座標系、第6座標系に準拠し、座標数値の記載はメートル単位で表す。なお、方位矢印の示す方向は座標北を示す。
4. 土色の表現に関しては、小山正忠・竹原秀雄編1998『新版標準土色帖』第8版農林水産省農林水産技術会議事務局監修・（財）日本色彩研究所色票監修・日本色研事業株式会社発行に準拠した。
5. 各遺構の名称は、遺構の種類を問わずに通し番号を付している。したがって、遺構名中の数値は、数字表現に関する遺構種類（溝・柱穴・土坑）とは無関係である。また、この結果遺構名中の番号が重複することはない。
6. 挿図中の遺物番号は、各図ごとに1から順に付している。また、文中での各遺物は、挿図番号－遺物番号（例えば図4. 2の1であれば、4. 2-1）といったスタイルで表示している。

駒ヶ谷遺跡Ⅱ

～南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書～

目次

巻頭カラー図版

- 1・2. 駒ヶ谷遺跡周辺航空写真 3. A地区西半(1A区)全景
4. 竪穴住居20 5. 竪穴住居32 6. 竪穴住居41 7. 竪穴住居42
8. A地区東半(2A地区)全景 9. 掘立柱建物505 10. 掘立柱建物506
11. 竪穴住居500 12. 焼土坑17 13. 石杵(赤色顔料精製用石製品)[C地区包含層出土]

序文

例言・凡例

第1章 調査に至る経緯と経過	1 (若林)
第2章 位置と環境	3 (仲原)
第3章 発掘調査の方法	10 (仲原)
第4章 A地区の調査成果	
第1節 弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構・遺物	13 (仲原)
第2節 古墳時代後期～古代の遺構・遺物	57 (若林)
第5章 B地区の調査成果	75 (仲原)
第6章 C地区の調査成果	85 (若林)
第7章 基礎分析・考察	
第1節 弥生時代後期～古墳時代初頭の駒ヶ谷遺跡と南河内地域	113 (仲原)
第2節 古墳時代後期～古代の駒ヶ谷遺跡	135 (若林)
第8章 調査成果のまとめ	143 (仲原・若林)

第7章

図7.1 駒ヶ谷遺跡の既往調査区と遺構分布図1/4000 114

図7.2 A地区壱穴住居配置図1/400 115

図7.3 南河内地域の住居内土塊図1/200 120

図7.4 A地区壱穴住居変遷図 123

図7.5 駒ヶ谷遺跡壱穴住居面積 125

図7.6 壱穴住居面積 127

図7.7 南河内地域の丘部上集居の標高概念図 128

図7.8 駒ヶ谷遺跡の集居構造1/800 129

図7.9 東山遺跡の集居構造1/800 129

図7.10 寛弘寺遺跡の集居構造1/800 130

図7.11 古墳時代後期の駒ヶ谷遺跡 136

図7.12 埴野の主要古墳の分布 136

図7.13 古代の駒ヶ谷遺跡 139

図7.14 古道（推定）と古代寺院遺跡の分布 139

写真目次

写真 駒ヶ谷遺跡周辺航空写真（1947年撮影） 9

写真2.1 駒ヶ谷遺跡周辺航空写真（北から） 9

写真4.1 壱穴住居20上層土器だまり（北東から） 23

写真4.2 壱穴住居20南炭化物だまり（東から） 23

写真4.3 壱穴住居30甲1（南から） 29

写真4.4 壱穴住居30柱穴3（北から） 29

写真4.5 壱穴住居31屋内高床部（西から） 31

写真4.6 壱穴住居41土塊1（南西から） 35

写真4.7 壱穴住居42土器出土状況①（南から） 39

写真4.8 壱穴住居43甲1（西から） 42

写真4.9 土塊56土器出土状況（西から） 50

写真4.10 溝49土器出土状況（東から） 56

写真5.1 谷部下層土層断面（南から） 76

写真5.2 谷部下層土器出土状況①（南西から） 76

写真5.3 谷部下層土器出土状況②（南から） 79

写真5.4 炭化物だまり8羽口・埋出状況（北から） 83

写真5.5 ミニチュア高床出土状況（南から） 83

写真5.6 炭化物だまり8上層断面（西から） 83

写真6.1 C地区全景航空写真（南から） 112

写真6.2 C地区全景航空写真（北から） 112

表目次

表2.1 石川流域遺跡（弥生時代～古墳時代初期） 7

表4.1 A区検出遺構の概要①～⑥ 14, 16～19

表5.1 B地区検出遺構の概要 75

表6.1 C地区検出遺構の概要①～⑤ 86, 87, 89, 90

表7.1 壱穴住居一覧 117

表7.2 壱穴住居面積表 127

写真図版目次

図版1 駒ヶ谷遺跡周辺航空写真（1956年撮影）

図版2 A地区全景① A地区西平（1A地区）航空写真
A地区東平（2A地区）航空写真

図版3 A地区全景② A地区西平（北東から）・A地区西平（南から）

図版4 A地区全景③ A地区東平（東から）・A地区東平（南西から）

図版5 A地区遺構① 壱穴住居20（東から）
壱穴住居20上層土器だまり（東から）
壱穴住居23（東から）

図版6 A地区遺構② 壱穴住居30（東から）
壱穴住居31（東から）
壱穴住居31屋内高床部（北から）

図版7 A地区遺構③ 壱穴住居32（東から）
壱穴住居41（東から）
壱穴住居41土器出土状況（東から）
壱穴住居42（北東から）
壱穴住居42土器出土状況①（西から）
壱穴住居42土器出土状況②（東から）

図版9 A地区遺構④ 壱穴住居43（北から）
壱穴住居50（北東から）
壱穴住居50上層土器群（北東から）

図版10 A地区遺構⑤ 土塊4検出状況（北から）
土塊4土器出土状況（南から）
土塊5土器出土状況（西から）
土塊22（北から）
土塊46（北から）
溝49土器出土状況（東から）
溝2検出状況（南から）
溝2大型鉢出土状況（北東から）
溝2土器出土状況（北東から）

図版11 A地区遺構⑦ 壱穴住居500（南から）・500（南東から）
壱穴住居500壁（西から）
壱穴住居物409（北から）
壱穴住居物501・503（南から）
壱穴住居物504（南から）
壱穴住居物505（北から）
壱穴住居物506（南から）
壱穴住居物507（南から）

図版12 A地区遺構⑧ 壱穴住居物516・517（南から）
土塊470埋出状況（東から）
土塊478（南から）

図版13 A地区遺構⑨ 土塊17検出状況（南から）
土塊17上層断面（南東から）
土塊17完備状況（南から）

図版14 A地区遺構⑩ 土塊25（南から）
土塊45（南から）
溝6須臾器出土状況（東から）
炭化物だまり8検出状況（北から）
炭化物だまり8全景（北東から）
炭化物だまり8羽口出土状況（北東から）

図版15 A地区遺構⑪ 谷部（北東部）埋出状況（南西から）
谷部下層土器出土状況①（北から）
谷部下層土器出土状況②（東から）

図版16 A地区遺構⑫ C地区西平（南から）・C地区西平（北東から）

図版17 A地区遺構⑬ C地区西平（南から）・C地区西平（北東から）

図版18 A地区遺構⑭ C地区西平（南から）・C地区西平（北東から）

図版19 B地区遺構① 壱穴住居200断面（東から）
壱穴住居111（北東から）
壱穴住居201（北西から）
壱穴住居202・壱穴住居199（北東から）
壱穴住居203北平（南西から）
壱穴住居物206（北東から）
壱穴住居物207（東から）
壱穴住居物209（南から）

図版20 B地区遺構② 土塊110（南東から）
土塊28埋出状況（北東から）
土塊28（北東から）

図版21 C地区全景① C地区全景写真

図版22 C地区全景② C地区西平（南から）・C地区西平（北東から）

図版23 C地区遺構① C地区堆積状況（壱穴住居200断面）（南西から）
壱穴住居200土層断面（東から）
壱穴住居111（北東から）
壱穴住居201（北西から）
壱穴住居202・壱穴住居199（北東から）
壱穴住居203北平（南西から）
壱穴住居物206（北東から）
壱穴住居物207（東から）
壱穴住居物209（南から）

図版24 C地区遺構② 溝108・109全景（東から）
溝108・109土層断面（東から）
溝108埋出状況（北東から）

図版25 C地区遺構③ A地区出土土器・B地区出土土器
B地区出土土器・C地区出土土器
B地区出土土器製品（輪郭口）

図版26 C地区遺構④ 溝108・109全景（東から）
溝108・109土層断面（東から）
溝108埋出状況（北東から）

図版27 C地区遺構⑤ A地区出土土器（磁石・石鏃・尖頭器・石斧）
B地区出土土器（四石）
C地区出土土器①（ヤヌカイ土製品）
C地区出土土器②（磁石・石斧）
C地区出土土器③（礫石器）
C地区出土土器④（礫石器）
C地区土塊208出土層状岩
C地区土塊208出土層

図版28 出土遺物① A地区出土土器・B地区出土土器

図版29 出土遺物② B地区出土土器・C地区出土土器
B地区出土土器製品（輪郭口）

図版30 出土遺物③ A地区出土土器（磁石・石鏃・尖頭器・石斧）

図版31 出土遺物④ B地区出土土器（四石）

図版32 出土遺物⑤ C地区出土土器①（ヤヌカイ土製品）

図版33 出土遺物⑥ C地区出土土器②（磁石・石斧）

図版34 出土遺物⑦ C地区出土土器③（礫石器）

図版35 出土遺物⑧ C地区土塊208出土層状岩

図版36 出土遺物⑨ C地区土塊208出土層
A地区出土土器製品・A地区土塊46出土土器



駒ヶ谷遺跡周辺航空写真（1947年撮影）

第1章 調査に至る経緯と経過

胸ヶ谷遺跡における今回の調査は、南河内郡美原町丹上の近畿自動車道松原那智勝浦線との分岐点を始点とし、奈良県北葛城郡新庄町芥之庄を終点とする南阪奈道路建設に伴って行われた。当遺跡は、羽曳野市飛鳥地区に所在し、1985年に羽曳野市胸ヶ谷地区の地域振興・整備に先立って羽曳野市教育委員会によって行われた分布調査（羽曳野市教育委員会1986『羽曳野市胸ヶ谷地区埋蔵文化財分布調査概報』）で遺物散布地として認識された。さらに、1989年に羽曳野市教育委員会が中心となった「胸ヶ谷遺跡調査会」が組織されて試掘調査（羽曳野市教育委員会1992『羽曳野市胸ヶ谷地区埋蔵文化財試掘調査報告書』）を行った結果、広域に遺跡が分布することが明らかとなっている。

これらの成果に基づき、(財)大阪府文化財調査研究センターが1996・1997年に南阪奈道路建設に伴う発掘調査を行っている。この調査では古墳時代後期の前方後円墳や古代～中世の建物群などが検出され、報告書（(財)大阪府文化財調査研究センター1999『胸ヶ谷遺跡』）が刊行されている。この際、大阪府教育委員会・羽曳野市教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センターにより協議が行われ、従来飛鳥第1・第2散布地、胸ヶ谷第2散布地として掌握されていた範囲も周知の胸ヶ谷遺跡の範囲に含むことが定められた。また新規発見の前方後円墳は小字名を冠して「蔵塚古墳」と呼称されることとなった。

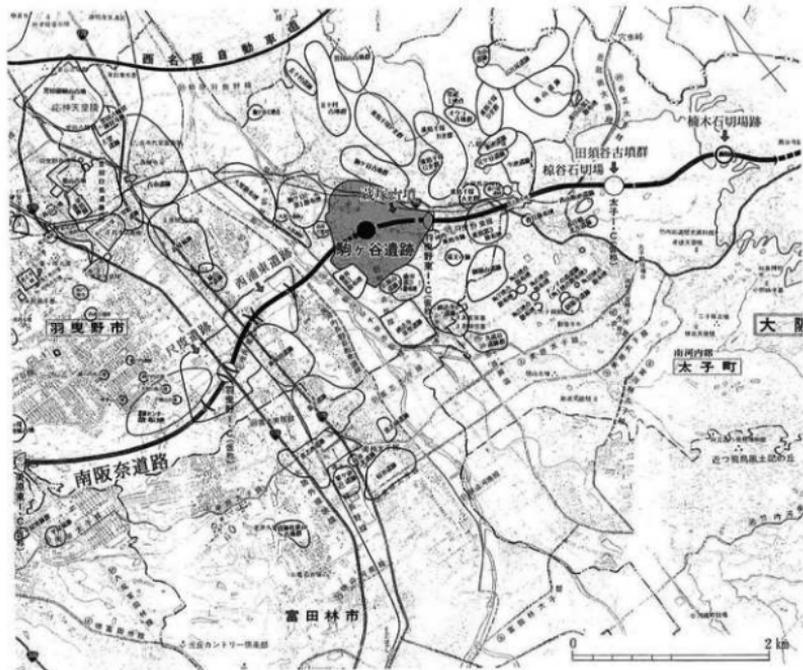


図1.1 南阪奈道路と調査地 (S=1/50000)

今回の調査は、当センターが大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下に建設省近畿地方建設局大阪国道工事事務所からの委託を受けて行われた。調査対象となったのは前回の調査地から西側の丘陵地の道路予定地である。約12274㎡にわたる今回の調査地は、胸ヶ谷遺跡調査会の試掘調査によって弥生時代後期～古墳時代初頭の方形台状墓・竪穴住居などが検出された領域の東側の支尾根と谷部に相当し、過去の試掘調査でも弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が出土していた範囲である。

調査は1999年6月24日～2000年3月31日にかけて行われた。調査区域を東から順にA・B・C地区に3分割して調査を進めたが、実際にはさらに各地区を分割し3地区の作業がほぼ同時に進行した。調査の結果、古墳時代初頭の竪穴住居群や古墳時代後期～古代の掘立柱建物群など多数の遺構・遺物が検出された。これにより既往の調査で丘陵上に確認されていた弥生時代後期～古墳時代初頭の集落域が東側の支尾根にまで広がっていたことが判明する。また当センターが1996・1997年の調査区で検出した古代を中心とする掘立柱建物群が丘陵裾部の傾斜地まで展開していたことも明確となった。調査後は2000年4月から当センター古市分室において遺物整理・報告書作成作業を行い、本書の刊行に至っている。

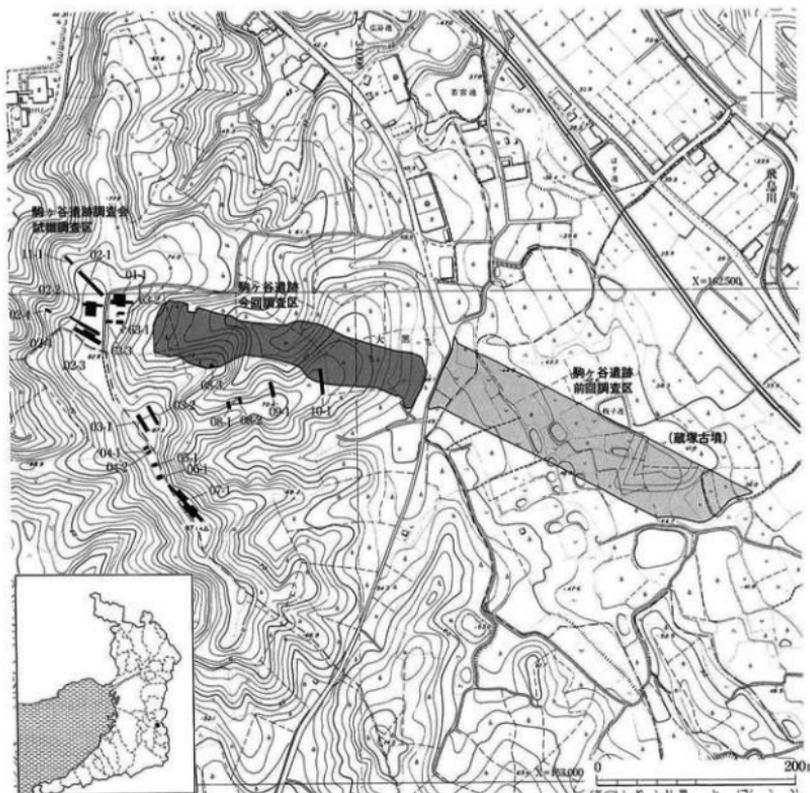


図1. 2 調査位置図 (S=1/5000)

第2章 位置と環境

1. 自然環境

駒ヶ谷遺跡周辺の地形分類については、原秀禎氏が空中写真の判読と現地踏査による詳細な検討をおこなっている（原秀禎1992「羽曳野市駒ヶ谷地区周辺地域の地形分類」『羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財試掘調査報告書』羽曳野市教育委員会）。また氏の論考をもとにして、既刊の『蔵塚古墳』・『駒ヶ谷遺跡』両報告書の「自然環境」においても地形分類について記載されている（江浦洋・本田奈都子他1998『蔵塚古墳』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書24、本田奈都子1999『駒ヶ谷遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書41）。ここではこれらを参考にして駒ヶ谷遺跡周辺の自然環境について記述をおこなうことにする。

駒ヶ谷遺跡は、太子町に接する羽曳野市東端地域に所在し、石川と飛鳥川にはさまれた標高約85mのほぼ独立した大黒丘陵と呼ばれる尾根上を中心に、その主尾根から派生する支尾根やその尾根東麓から低位段丘面にかけての範囲に位置している。大黒丘陵は、大阪層群により構成される南北方向に細長くのびる丘陵で、その東麓・西麓ともにいくつもの開析谷が入り込んでいる。この開析谷は丘陵を侵食し、丘陵から派生するような形で小さな尾根を多く形成している。大黒丘陵の西側を北流する石川は、その右岸の丘陵裾に狭い氾濫低地をつくっている。大黒丘陵の東側を北流する飛鳥川は、大阪府と奈良県境に位置する二上山西麓に連なる鉢伏山を区切るように流れ、この飛鳥川沿いには氾濫低地が形成されている。

大黒丘陵の丘陵部一帯は、明治時代初期以降大半がブドウ畑として利用されており、地形はかなり改変を受けている。また近年の大規模な土砂採取による地形改変が進んでいる箇所も認められる。丘陵部や段丘を侵食する開析谷では谷水田に利用されているところもある。飛鳥川左岸の低位段丘地帯は、開析谷をせきとめた溜池が多いことなど、あまり水はけがよくない土地で水田耕作には適していない。この段丘部でもブドウ畑が広がっているが、ここでは金剛砂採取のために深い掘削をおこなったのち埋め戻したところも多く、本来の地形がかなり失われている可能性もある。石川右岸や飛鳥川に沿った氾濫低地は水田として利用されるが、飛鳥川沿いでも金剛砂の採取に伴う掘削がおこなわれていた。現在飛鳥川沿いには、飛鳥川右岸の氾濫低地上に飛鳥の集落、そしてその下流には駒ヶ谷の集落が竹内街道沿いに位置している。

駒ヶ谷遺跡については、大黒丘陵の丘陵頂部やそこから派生する支尾根上になだらかな平坦面があり、そこに弥生時代後期から古墳時代初頭（庄内式期）の集落や墓域が営まれていた。この尾根上は眺望に優れ、飛鳥川や石川を見下ろすことができる。また飛鳥川左岸には大黒丘陵と飛鳥川の間に丘陵地より一段低い段丘面が広がっており、所々に2m以上の段丘崖を形成している。当センターがおこなった前回の駒ヶ谷遺跡の調査などから、この段丘崖は一様に平坦ではなく、飛鳥川へと流れ込む開析谷によって細かく分断されていることがわかった。このように平坦面がなく、かつ開析谷が多数入っている丘陵裾部から低位段丘上にかけて、駒ヶ谷遺跡内に位置する古墳時代後期の前方後円墳である蔵塚古墳や古代を中心とする掘立柱建物群が立地している。これらは飛鳥川の氾濫や洪水などを受けない場所に位置し、そのうえ飛鳥川沿いをはしる古い交通路（竹内街道）を意識していた立地であった可能性が高いといえる。

2. 石川流域における弥生集落の動向

今回の調査では弥生時代後期～古墳時代初頭と古墳時代後期～古代の2時期の遺構群が確認できたので、この時期にしばって南河内地域の周辺遺跡を概観したい。そのうち古墳時代と飛鳥・奈良時代についてはそれぞれ『葦塚古墳』・『胸ヶ谷遺跡』両報告書の「歴史的環境」で述べられているので、ここでは弥生時代の遺跡動向をまとめることにする。南河内地域の弥生時代後期～古墳時代初頭の土器編年と集落動向についてはすでに鍋島隆宏氏・山田隆一氏による精力的な論考が発表されており(鍋島2000「南河内・石川流域における弥生後期集落の動向—土器編年再考—」[古代文化]52-7(財)古代学協会)・山田2001「大阪府南部、石川流域における弥生時代後期から古墳時代初頭社会の特質」[弥生時代の集落](大阪府立弥生文化博物館編、学生社)、参考にする部分が多かった。なお鍋島氏は、集落立地について丘陵上と低位段丘～扇状地の集落に分類しており、この分類を参考にして集落立地をみていく。

南河内地域では石川が南北に貫流しており、その流域で集落が展開している。弥生時代前期の遺物が出土する遺跡の大半が石川左岸の低地～低位段丘上に認められ、特に川北、西大井、船橋、国府、土師の里遺跡などの現在の石川・大和川合流地点付近に集中している。国府遺跡で前期の土器棺墓などの遺構が調査されているが、他遺跡では遺物の出土のみで明確な遺構例はほとんどない。石川左岸の東阪田遺跡や石川右岸の胸ヶ谷遺跡の低位段丘部分からも前期新段階の遺物が出土しているが、ここでも遺構は未検出である。なお石川流域で出土した遺物は前期でも新段階に属するものがほとんどであり、中段階の資料が国府、西大井遺跡で若干認められるのみで、古段階の資料は確認されていない。

中期前葉では遺跡数が若干増加するが、遺構を伴う例は依然として少ない。前期に引き続き国府遺跡を中心とした石川・大和川合流地点周辺で集中して遺物が出土するが、国府遺跡以外では明確な遺構は未検出である。国府、土師の里遺跡では以後中期後葉まで継続して遺物が出土する。国府遺跡は遺構が継続して認められることから継続型の拠点集落と捉えられるが、実態は不明な点が多い。東阪田遺跡では前期から継続して遺物が認められ、後期まで遺物が出土するが、遺構はほとんど確認されていない。東阪田遺跡に隣接する喜志遺跡ではこの時期に集落が成立し、大溝が掘削される。喜志遺跡は中期後葉まで集落が継続する。石川右岸では中期前葉の遺物を出土する遺跡は左岸より少ない。ただお旅山遺跡では包含層から当該期の土器が多量に出土しており、周囲に集落が営まれていたと考えられる。

中期中葉～後葉にかけて石川左岸で遺跡が増加する。国府遺跡周辺では土師の里遺跡の他に川北、船橋、林、鳥泉北遺跡で遺物が認められ、依然として一帯に集落が集中している。中野、甲田南遺跡は中期中葉～後葉の堅穴住居群や方形周溝墓などが多数認められ、喜志遺跡とともに盛期を迎える。喜志遺跡や喜志集落の墓域である喜志西遺跡では同時期の方形周溝墓群が調査されている。喜志、中野、甲田南遺跡はともに居住域とそれに隣接する墓域が確認され、集落構造を理解するうえで注目できる。また喜志、中野遺跡は、この頃出現する城山遺跡とともにサヌカイト製石器の完成品・未成品が多量に出土し石器製作遺跡と考えられている。石川左岸ではこの他に甲田南遺跡より上流に位置する細井、塩谷、菱子尻、汐の宮、栄町、高向遺跡などで中期中葉～後葉の遺物が出土しており、多くの集落が営まれるようになる。一方で石川右岸ではこの時期もほとんど遺跡はなく、明確に遺構が確認されているのは中期中葉～後葉の堅穴住居が検出された三日市・三日市北遺跡のみである。安堂遺跡では中期中葉～後葉の遺構が確認されているが、この遺跡は国府遺跡周辺の遺跡群との関連で捉えた方がよさそうである。石川左岸では中期中葉に営まれた集落は中期後葉まで継続し、石川右岸も同様の状況である。ただし後期に丘陵上に展開する玉手山、寛弘寺、東山遺跡などの一部がこの時期に出現している可能性がある。



図 2. 1 周辺遺跡図 (S=1/8000)

後期には石川左岸でそれまで低位段丘に立地していた集落が消滅する。喜志、中野、甲田南遺跡をはじめ、それより上流でも後期の遺物は出土しない。また前期より継続していた国府遺跡でも明確な遺構が確認できなくなる。ただ国府遺跡周辺では川北、船橋遺跡のように遺構が認められる遺跡もあり、集落が移動したと捉えることもできる。こうした前段階までの集落が消滅する一方、これまで集落のなかった丘陵上に石叟、高屋城跡、蔵の内・馬谷・尺度遺跡が出現し、低地から丘陵への立地変化がうかがえる。またこれまで集落が希薄であった石川右岸でも丘陵上に集落が出現し、玉手山、五十村、駒ヶ谷、御嶺山、チンチの森、東山（業室西峰は同一か）、寛弘寺（西大寺山は同一）、彼方、大師山遺跡が一定距離をおいて営まれるようになる。石川右岸でこの時期の低地～段丘上の集落はほとんどみられない。

丘陵上集落の存続時期を個別にみると、駒ヶ谷遺跡は主体が後期中葉～後葉であり、前葉に出現していた可能性もある。玉手山遺跡は主体が後期前葉～中葉で、中期後葉の遺物が出土している。御嶺山、チンチの森遺跡では後期前葉～中葉を主体とする堅穴住居が検出されている。東山、寛弘寺遺跡では中期末に出現した可能性があり、確実に後期前葉には堅穴住居群が存在する。後期を通じて多数の堅穴住居群が検出され、両者とも後期前葉と中葉の間に断絶している可能性がある。彼方遺跡は後期中葉～後葉に営まれているが主体は後葉であり、古墳時代初頭まで継続するようである。石川左岸の石叟、高屋城跡も主体は後期中葉～後葉であるが前葉に成立した可能性もある。五十村、業室西峰、蔵の内・馬谷・尺度遺跡は丘陵上集落であると考えられるが実態は不明である。丘陵上の集落は大半が後期のうちに衰退するが、古墳時代初頭（庄内式期）まで継続する集落もある。駒ヶ谷遺跡では今回の調査で庄内式期の堅穴住居群が確認されたが、古墳時代前期（布留式期）まで継続しない。他の丘陵上の集落も布留式期までは継続せず、いずれも庄内式期の段階で消滅する。このように後期に展開した石川流域の丘陵上集落は、一部で庄内式期まで継続するものの、大半が後期のうちに終焉を迎えている。

丘陵上の集落が衰退する庄内式期には、再び低地～段丘上の集落が増加してくる。石川左岸では川北、船橋、尺度、東阪田遺跡など、石川右岸では伽山、上所、神山遺跡などの段丘上の集落で堅穴住居が多数検出されている。川北、船橋遺跡は前段階から継続する集落かもしれないが、この時期に明確に堅穴住居などの遺構がみられるようになり布留式期まで継続する。また扇状地上の尺度遺跡は、後期の丘陵上の集落である蔵の内・馬谷・尺度遺跡とは立地的にも時期的にも隔絶するようであるが、集団が移動した可能性がある。この扇状地上の尺度遺跡では、弥生時代後期後葉～庄内式期の堅穴住居群や、方形区画に囲まれた建物群が確認されている。これらも布留式期を迎える頃には衰退している。

布留式期にも引き続き低地～段丘上に集落が展開し、石川左岸の西浦銅鑄出土地、東阪田、喜志遺跡などで堅穴住居が検出されている。石川右岸でも伽山、上所、神山、柿ヶ坪遺跡などの段丘上に集落が継続している。これらの大半は古墳時代中期には継続しない集落である。

以上駒ヶ谷遺跡周辺の集落の動向を概観した結果、弥生時代前期～中期には石川左岸の低地～段丘に展開した集落が、後期には丘陵上に展開することがわかる。後期の集落は石川左岸だけでなく、これまで集落がわずかであった石川右岸にも出現する。そして古墳時代初頭になると再び低地～段丘上に集落が営まれるようになる。後期に丘陵上の集落が展開するのは、戦争や自然災害などの要因が考えられているが現時点では説得力のある解釈をみないようである。今回の駒ヶ谷遺跡の調査では、これまでに調査されていた後期の居住域がある丘陵中心部から派生する尾根上で後期後葉～古墳時代初頭の居住域が確認された。古墳時代初頭は低地～段丘上へと集落が移っている時期にあたり、今回の調査成果は後期における丘陵上集落の成立や消滅の背景を探るうえで一視点を与えることが期待できる。

〔参考文献〕

安堂遺跡

柏原市古文化研究会1987「安堂遺跡1986年度」

玉手山遺跡

柏原市教委1987「玉手山遺跡1983・1984年度」・1994「玉手山遺跡」

五十村遺跡

羽曳野市史編纂委員会編1994「羽曳野市史」第3巻史料編1 駒ヶ谷遺跡

(財)大阪府文化財調査研究センター 1999「駒ヶ谷遺跡」、羽曳野市教委1992「羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財試掘調査報告書」

お旗山遺跡

羽曳野市教委1986「羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財分布調査概報」・1992「羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財試掘調査報告書」、羽曳野市史編纂委員会編1994「羽曳野市史」第3巻史料編1

御嶺山遺跡

大阪府教委1971「近飛鳥遺跡分布調査概要」、笠井敏光1992「御嶺山遺跡」[第31回埋蔵文化財研究会会報]・羽曳野市教委1992「羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財試掘調査報告書」、羽曳野市史編纂委員会編1994「羽曳野市史」第3巻史料編1

チンチの森遺跡

大阪府教委1971「近飛鳥遺跡分布調査概要」、(財)大阪文化財センター 1979「太子町西山地区特定土地地区画整理事業予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書」、鍋島隆宏2000「南河内・石川流域における弥生後期集落の動向」[古代文化]52-7(古代学協会)

伽山遺跡

大阪府教委1982「伽山遺跡発掘調査概要・Ⅱ」

上所遺跡

山田隆一2001「大阪府南部、石川流域における弥生時代後期から古墳時代初期社会の特質」[弥生時代の集落](学生社)

紫雲西峰遺跡

大阪府教委1971「近飛鳥遺跡分布調査概要」

東山遺跡

大阪府教委1985「東山遺跡試掘調査報告書」、(財)大阪文化財センター 1980「東山遺跡」、河内町教委1998「東山遺跡発掘調査報告書」

山城遺跡

(財)大阪文化財センター 1980「東山遺跡」

別井遺跡

鍋島隆宏2000「南河内・石川流域における弥生後期集落の動向」[古代文化]52-7(古代学協会)

神山遺跡

大阪府教委1988「神山遺跡発掘調査概要・Ⅰ」・1989「神山遺跡発掘調査概要・Ⅱ」

西大寺山遺跡

山田隆一2001「大阪府南部、石川流域における弥生時代後期から古墳時代初期社会の特質」[弥生時代の集落](学生社)

寛弘寺遺跡

大阪府教委1985「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅲ」・1986「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅳ」・1987「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅴ」・1989「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅵ」・1989「寛弘寺古墳群発掘調査概要・Ⅶ」・1990「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅷ」・1992「寛弘寺古墳群発掘調査概要・Ⅷ」・1993「寛弘寺

遺跡発掘調査概要・Ⅸ」・1994「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅹ」・1995「寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅺ」・藤田道子1996「まとめ—高地性集落としての寛弘寺遺跡」[寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅻ]

柿ヶ坪遺跡

大阪府教委1995「柿ヶ坪・尾平・西板持・寛弘寺遺跡発掘調査概要」

西板持遺跡

大阪府教委1984「西板持遺跡発掘調査概要」

彼方遺跡

栗田薫1992「彼方遺跡」[第31回埋蔵文化財研究会会報]・弥生時代の石器第Ⅱ部第5分冊(埋蔵文化財研究会)・1996「彼方遺跡出土の絵画土器「甕を射る狩人」」[みづほ]19(大和弥生文化の会)

大師山遺跡

関西大学文学部考古学研究室編1977「河内長野 大師山」

三日月遺跡

河内長野市史編纂委員会編1994「河内長野市史」第1巻(上)、三日月遺跡調査会1986「三日月遺跡調査概要Ⅱ」

川北遺跡

大阪府教委1981「川北遺跡発掘調査概要」

船橋遺跡

大阪府教委1980「船橋遺跡発掘調査概要」・1994「本郷・船橋・太平寺遺跡発掘調査概要」、(財)大阪文化財センター 1976「船橋遺跡試掘調査報告書Ⅱ」・1976「船橋遺跡試掘調査報告書Ⅲ」、柏原市教委1994「船橋遺跡」、藤井寺市史編纂委員会編1986「藤井寺市史」第3巻史料編1(財)大阪府文化財調査研究センター 1998「船橋遺跡」

国府遺跡

大阪府教委1971「国府遺跡発掘調査概要」・1972「国府遺跡発掘調査概要・Ⅱ」・1973「国府遺跡発掘調査概要・Ⅲ」・1979「国府遺跡発掘調査概要・Ⅳ」・1981「国府遺跡発掘調査概要・Ⅴ」、山本雅治1974「河内国府遺跡出土の弥生式土器」[大阪文化誌]1-1-3

林遺跡

大阪府教委1978「国府遺跡発掘調査概要・Ⅵ」、(財)大阪文化財センター 1977「林遺跡発掘調査報告書」

西大井遺跡

大阪府教委1993「西大井遺跡発掘調査概要1991年度」、(財)大阪府文化財調査研究センター 1995「西大井遺跡」

鳥泉北遺跡

羽曳野市教委1995「古市遺跡群Ⅶ」・1996「古市遺跡群Ⅷ」、羽曳野市史編纂委員会編1994「羽曳野市史」第3巻史料編1 土師の里遺跡

大阪府教委1983「土師の里遺跡発掘調査概要・Ⅴ」

チンチ山遺跡

羽曳野市史編纂委員会編1994「羽曳野市史」第3巻史料編1 高屋城跡

羽曳野市教委1996「古市遺跡群Ⅷ」、羽曳野市史編纂委員会編1994「羽曳野市史」第3巻史料編1

城山遺跡

大阪府教委1987「高屋城跡(城山遺跡)発掘調査概要」

石曳遺跡

大阪府教委1991「石曳遺跡発掘調査概要・Ⅰ」

歳の内遺跡・農林センター散布地(馬谷遺跡)、尺度遺跡

羽曳野市史編纂委員会編1994「羽曳野市史」第3巻史料編1

西浦銅鐸出土地

羽曳野市教委1991「重要文化財西浦銅鐸」

尺度道跡

(財)大阪府文化財調査研究センター 1999『尺度道跡Ⅰ』

東阪田道跡

大阪府教委1981『東阪田道跡～1979年度第4区の調査～』、羽
曳野市教委1980『東阪田道跡』・1984『古市道跡群Ⅴ』

喜志道跡

大阪府教委1978『喜志道跡発掘調査概要』・1980『喜志道跡・
東阪田道跡発掘調査概要Ⅲ』・1981『喜志・東阪田道跡発掘調
査概要Ⅳ』・1982『喜志道跡・東阪田道跡発掘調査概要Ⅴ』・
1988『石川左岸幹線管渠築造道跡群発掘調査概要・Ⅲ』、小林
義孝1983『喜志道跡の遺構分布(弥生時代)』『喜志・東阪田
道跡発掘調査概要・Ⅵ』(大阪府教委、富田林市教委1988
『喜志道跡発掘調査概要Ⅱ』・1995『平成6年度富田林市内道
跡群発掘調査報告書』・1997『平成8年度富田林市内道跡群発
掘調査報告書』、富田林市史編集委員会1985『富田林市史』
1、羽曳野市教委1989『古市道跡群Ⅹ』・1992『古市道跡群
Ⅺ』・1994『古市道跡群Ⅻ』、羽曳野市史編集委員会編1994
『羽曳野市史』3史料編1

喜志西道跡

岩瀬達・栗田薫1994『喜志集落における弥生時代中期墓域の
形成について』『喜志西道跡発掘調査概要・Ⅲ』

中野道跡

大阪府教委1982『中野道跡発掘調査概要』、大谷女子大学資料
館編1979『中野道跡発掘調査報告書』、富田林市教委1982『中
野道跡発掘調査概要Ⅲ』・1983『中野道跡発掘調査概要Ⅳ』・
1984『中野道跡発掘調査概要Ⅴ』・1994『平成5年度富田林市
内道跡群発掘調査概要』

甲田南道跡

栗田薫1996『甲田南道跡の弥生時代集落の歴史的意義』『平成
7年度富田林市内道跡群発掘調査報告書』(富田林市教委)、
大阪府教委1982『甲田南道跡発掘調査概要報告書』、小林義孝
1985『甲田南道跡』区4-A住居跡出土板状鉄斧、『甲田南道
跡発掘調査概要・Ⅴ』・1994『甲田南道跡の弥生時代』『甲田
南道跡発掘調査概要』、山崎頼人1998『156の弥生紡績車』『大
阪文化財研究』14(財)大阪府文化財調査研究センター)、
山田隆一1994『甲田南道跡出土の鉄斧について』『平成5年度
富田林市内道跡群発掘調査概要』(富田林市教委)

細井道跡

富田林市史編集委員会編1985『富田林市史』第1巻

塩谷道跡

河内長野市史編集委員会編1994『河内長野市史』第1巻(上)
本文編考古、峯正明1977『大師山古墳周辺地域分布調査に
よって新たに確認した道跡』『河内長野大師山』

菱子尻道跡

大阪府教委1973『菱子尻道跡発掘調査概要』

栄町道跡

鍋島隆宏2000『南河内・石川流域における弥生後期集落の動
向』『古代文化』52-7(古代学協会)

高向道跡

河内長野市史編集委員会編1994『河内長野市史』第1巻(上)

奥山道跡

柏原市教委1998『奥山道跡発掘調査概要』

高尾山道跡

柏原市教委1994『柏原市所在道跡発掘調査概要』、柏原市史編
纂委員会編1973『柏原市史』第2巻本編(1)



写真2.1 駒ヶ谷道跡周辺航空写真(北から駒ヶ谷道跡より南側をのぞむ)

第3章 発掘調査の方法

駒ヶ谷遺跡の調査は、遺跡の略称を除いて基本的には当センターの前身の一つである(財)大阪文化財センターが制定した『遺跡調査基本マニュアル』(大阪文化財センター 1988『遺跡調査基本マニュアル』)に則って実施している。

地区割 地区割については、国土座標(第Ⅵ座標系)を基準線とし、大阪府全域を共通の方式で区割できるように、大小6段階の区画を設定している。第Ⅰ区画は、1/10,000地形図の地区割図を利用したもので、縦6km、横8kmが1区画となる。南西端を基点とし、縦軸A～O、横軸0～8で表示する。第Ⅱ区画は、1/2,500地形図の地区割図を利用したもので、第Ⅰ区画を縦1.5km、横2.0kmに16分割している。南西端を1とし、北東端を16とする東方向への平行式の地区名表示である。第Ⅲ区画は、第Ⅱ区画内を100m単位で区画するもので、縦15、横20に区分される。表示は北東端を基点に縦A～O、横1～20となる。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画内を10m単位で区画するもので、縦・横各10に区分される。表示は北東端を基点に縦a～j、横1～10となる。第Ⅴ区画は、第Ⅳ区画内を5m単位で4分割するもので、遺物の取り上げ等の際に第Ⅳ区画を面として細分する場合に使用する。北東側Ⅰ、北西側Ⅱ、南東側Ⅲ、南西側Ⅳと呼称する。第Ⅵ区画は、第Ⅴ区画を5m単位ではなく、任意に細分する場合に使用し、北東端を基点に必要な桁まで表示する。ちなみに駒ヶ谷遺跡の調査範囲の第Ⅰ区画はE-6、第Ⅱ区画は15と16にまたがっている。第Ⅲ区画以下は、A1(第Ⅲ区画)a1(第Ⅳ区画)-1(第Ⅴ区画)S2.30m W3.10m(第Ⅵ区画)というように表示される。今回の調査では、包含層などの遺物取り上げの際に主に第Ⅳ区画までを使用し、遺物取り上げラベルにF20i5やF1h4～h5のように地区を記入している。なお、調査全般にわたってこの地区割を用いており、個々の遺構図に示した座標値も上記の国土座標に準拠している。

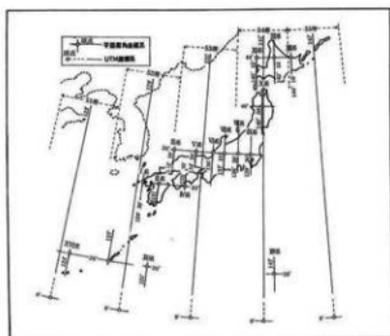
方位 方位は座標北を使用している。これは地区割や測量基準線も国土座標を使用している関係からである。ちなみに他の方位との関係は、真北が東へ0°12′、磁北が西へ6°40′振っている。

水準 水準は全国で共通基準となっている東京湾平均海面(T.P.)を使用している。大阪ではT.P.の他に大阪湾平均海面(O.P.)も併用され、両者のレベル差はT.P.±0m=O.P.+1.3mと定められている。

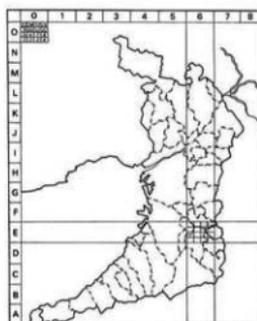
測量 今回の調査ではヘリコプターを用いた航空測量を行い、1/50の平面図とそれを縮小編集した1/100の遺構全体図を作成している。その他、状況にあわせて臨機に実測図を作成している。

調査区 今回の調査では、調査地全体を地形の形状によって、東から順にA地区～C地区の地区名で区分した。また各地区の地形形状や面積、調査の際の実状からさらに細分し、調査に着手した順に1から番号をつけた。よって1A地区のように数字を前に出し、調査区名を後ろに付する方式をとった。

遺構番号 遺構番号については、調査・整理段階の混乱を避けるため遺構の種類に関わらず、調査段階では通し番号をつけている。その後整理段階で遺構名を番号の前に付して、溝1や柱穴10というように呼び表している。遺構によっては遺構番号が大きな数字になっているものもあるが、この数字は必ずしも同一種類の遺構数を示すものではないので注意されたい。よって同番号の遺構は存在していないことになる。ただし今回の調査では、A地区の竪穴住居内の施設(柱穴・炉・土坑)に限っては、例外的に竪穴住居ごとに柱穴1や柱穴2、炉1などのようにそれぞれ1から順に番号をつけて扱っている。



国土座標系図



第I・II区画

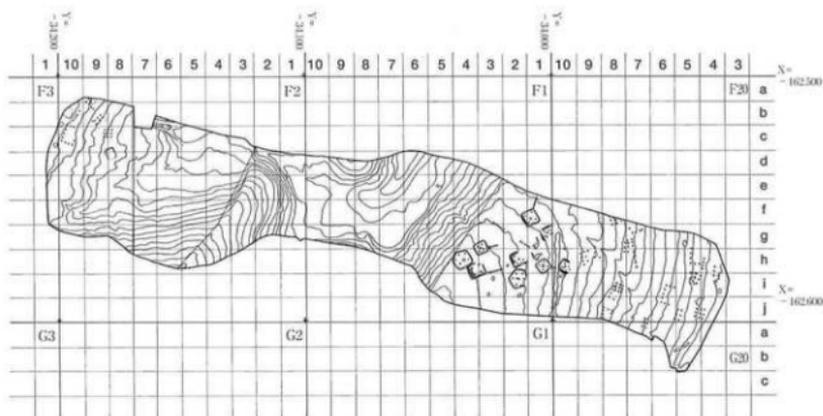


図 3. 1 国土座標系と地区割図

第4章 A地区の調査成果

第1節 弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構・遺物

1. 基本層序と検出遺構の概略

A地区は東側になだらかに傾斜する小尾根から裾部にあたる部分で、1A・2A区にわけて調査した。この尾根ではかつて駒ヶ谷遺跡調査会が試掘調査をおこない、弥生時代後期の遺物包含層を確認している（羽曳野市教委1992『羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財調査報告書』）。この尾根周辺は近現代のブドウ畑造成により平坦化され、調査区内にはブドウ畑関連の根痕跡や攪乱が多くみられる。今回の調査では、一部ブドウ畑造成による削平があったものの、試掘調査で確認された遺物包含層を尾根上から裾まで全体的に1層分、部分的には2層分確認した。調査区東端では南北方向の谷の西肩部分を抽出したが、調査区端のため掘り下げはおこなっていない。この谷埋土は後述するB地区の谷と同様の砂層である。

基本的な層序は、1層＝近現代攪乱層、3層＝古墳時代後期～古代の遺物包含層、2層＝弥生時代後期～古墳時代初頭を中心とした遺物包含層の3つの層で構成される。3層は調査区東側の斜面裾部で確認した土壌化層で、3-1・2層に細分できる。3-2層は調査区北東端でのみ残存する。3-1・2層とも少量ではあるが古墳時代後期～古代の遺物を含み、中世以降の遺物は全く含まない。2層は調査区全域を覆う包含層で2-1・2層に細分できる。2-1層は弥生時代後期～古墳時代初頭の土器と若干の須恵器が混ざる層である。2-2層は弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物包含層であり遺物量も多い。この2-1層下面でわずかに古墳時代後期～古代の遺構である焼土坑17や一部の掘立柱建物などを検出している。古墳時代後期～古代の遺構の多くは地山面で検出したが、本来はそれらも2-1層下面の遺構であったと考えられる。弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構はほぼすべて地山面検出である。

弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構は1A区側の尾根上を中心に分布し、2A区側の裾部には広がらない。検出遺構は、竪穴住居、溝列、焼土坑、溝、土坑などである。竪穴住居は9棟（多角形2棟・方形7棟）あり、いずれも良好な状態で検出できた。それぞれに主柱穴や煙、壁溝があり、いくつかの住居では排水溝や南側壁溝に接する土坑が認められる。なお当該期の掘立柱建物は検出していない。

古墳時代後期～古代の遺構は、2A区側の斜面裾部を中心に認められ、前回の駒ヶ谷遺跡の調査で抽出した掘立柱建物群が当調査区まで広がっていることがわかった。当該期の遺構は、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構が広がる1A区側の尾根上には展開せず、溝44が集落の西限を画する役割を果たしていた可能性がある。溝44より西側には焼土坑が4基確認されるだけである。検出した遺構は、竪穴住居、掘立柱建物、焼土坑、土坑、溝、柱穴である。竪穴住居は、竈を備えた方形のものが1棟検出できた。掘立柱建物は21棟確認でき、このほか掘立柱建物として確定できなかった柱穴も数多くあり、本来はさらに多く掘立柱建物が存在していたと予想できる。ほとんどの掘立柱建物は東側の柱穴が削平される傾向にあるために本来の規模が把握できないものが多い。また調査区北側の掘立柱建物のいくつかは調査区外につづくものがあり、掘立柱建物群はさらに北側に広がっていると推定できる。

このようにA地区では大きくわけて2時期の遺構群が検出できた。それら遺構群のうち、弥生時代後期～古墳時代初頭は尾根上、古墳時代後期～古代は裾部を中心にそれぞれ分布域を異にしている。そのため遺構の検出や認識は比較的容易で、各時期の遺構配置や全体像を把握することができた。

表4.1 A地区検出遺構の概要(1)

遺構番号	遺 種	トレンチ	地 区	幅員(北端×南端×長さ) 内寸(内寸)	主 色	所 見
1	溝	IA	F1a1・F1b1・F1c1・F1d1	9000×600×20	HOY95 60#砂	古墳後周～古代(前期)築造層より、上部に近現代堆積。穿穴径200-300mm。調査区域へつづく。
2	溝	IA	F1e1・F1f1	9000×700×15	HOY95 60#砂～細砂	古墳後周～古墳。穿穴径層より上層堆積。上部片集中。溝の西側へつづく。調査区域(内区)へつづく。
3	土坑	IA	F1j1・F1k1	220×100×31	HOY95 60#砂(灰を含む)	古墳後周～古墳。穿穴径層より上層堆積。古墳中層土層あり。
4	土坑	IA	F1h1	175×100×11	2.5V4 60#砂(1mm程度や多く含む)、上部片集中	古墳後周～古墳。穿穴径層より上層堆積。上部片集中。
5	土坑	IA	F1g1	100×100×-	-	古墳後周～古墳(上部あり)。穿穴径層より上層堆積。
6	溝	IA	F2b10・F1p1	~800×30	5YR5 60#砂(1mm程度や多く含む)	古墳後周～現代(早期)に近現代堆積物多量。下部からには築造層多量出土。上部からは近現代堆積物多量。
7	土器だまり	IA	F2b10・h10	-	-	古墳後周～古墳(上部あり)。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
8	土坑	IA	F1d1	180×130×-	HOY95 60#砂	古墳後周～古墳(上部あり)。穿穴径層より上層堆積。
9	土器だまり	IA	F1e1	-	-	古墳後周～古墳(上部あり)。溝内に上部片集中。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
12	土器だまり	IA	F1h1・F1i1	700×25×20	HOY95 60#砂	古墳後周～古墳。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
14	土坑	IA	F1j1・F1k1	160×60×-	HOY95 60#砂	古墳後周～古代(築造層あり)。穿穴径層より上層堆積。調査区域。
15	土坑	IA	F1d1	120×160×-	HOY95 60#砂	古墳後周～古墳(上部あり)。穿穴径層より上層堆積。
16	柱穴	IA	F1a1	600×40×-	HOY95 60#砂	古墳後周～古墳(上部あり)。穿穴径層より上層堆積。
17	礎土坑	IA	F1d1	130×50×35	HOY95 60#砂～細砂(灰化物・塵を含む含む)。 HOY91 60#砂～細砂(灰化物多量含む)。2.5V4 60#砂(1mm程度や多く含む)。 HOY91 60#砂～細砂(灰化物多量含む)。	(古墳後周)～古代(築造層あり)層で堆積。上部灰を含む。中層は2.5V4。下部は灰化物多量。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
18	土坑	IA	F1j1	140×120×25	HOY95 60#砂	古墳後周～古墳。穿穴径層より上層堆積。
19	土坑	IA	F1k1	80×35×-	HOY95 60#砂(灰多く含む)	古墳後周～古墳(上部あり)。穿穴径層より上層堆積。
20	穿穴径層	IA	F1h1・F1i1	730×710×30	HOY95 60#砂～細砂(塵多量)。HOY96 60#砂～細砂(塵多量)。HOY95 60#砂～細砂	古墳後周～古墳(上部あり)。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。上部に土器だまりあり。穿穴径層より上層堆積。
21	落ち込み	IA	F1h1・F1i1	-	-	遺構ではない。
22	礎土坑	IA	F1d1	115×80×15	HOY91 60#砂～細砂(灰化物・上部片集中。塵土・塵を含む含む)。	古墳後周～古墳。上部に灰化物多量。礎土坑に含む。灰化物多量土層の上部あり。
23	穿穴径層	IA	F1h1・F1i1・F1j1・F1k1	600×200×20	HOY95 60#砂～細砂(塵を含む含む)。HOY95 60#砂～細砂(塵を含む含む)。	古墳後周～古墳。方格。築造層あり(層)。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。上部に土器だまりあり。穿穴径層より上層堆積。
24	土器だまり	IA	F1e1	-	-	古墳後周～古代(築造層あり)。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
25	礎土坑	IA	F1d1	65×50×10	HOY95 60#砂。2.5V4 60#砂(1mm程度や多く含む)。 HOY95 60#砂(灰化物多量含む)。	古墳後周～古墳(上部に灰化物多量)。穿穴径層より上層堆積。礎土坑に含む。上部に土器だまりあり。穿穴径層より上層堆積。
26	土坑	IA	F1h1	150×90×10	HOY95 60#砂(灰多く含む)。	古墳後周～古墳。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
27	礎土	IA	F1j1・F1k1	-	-	現代の礎。
28	落ち込み	IA	F1h1・F1i1	-	-	遺構ではない。
29	落ち込み	IA	F1h1・F1i1・F1j1	300×40×15	HOY95 60#砂(小塵多量含む)	遺構ではない(遺構ではなさそう)。
30	穿穴径層	IA	F1h1・F1i1・F1j1・F1k1	530×510×10	HOY95 60#砂～細砂(塵多量含む)。	(古墳後周～古墳)～現代。土層あり。F1j1、F1k1、土層。調査層あり(500×200)。上部に土器だまりあり。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
31	穿穴径層	IA	F1e1	300×200×25	HOY95 60#砂～細砂(灰化物・塵多量含む)。	古墳後周～古墳。方格。ペナド築造層あり(層)。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。上部に土器だまりあり。穿穴径層より上層堆積。
32	穿穴径層	IA	F1h1・F1i1	770×720×45	HOY95 60#砂～細砂(灰化物多量含む)。HOY95 60#砂～細砂(灰化物多量含む)。	古墳後周～古墳(上部あり)。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。上部に土器だまりあり。穿穴径層より上層堆積。
33	礎土	IA	F1d1	-	-	石列や方格(ブドウ型)あり。穿穴径層より上層堆積。
34	礎土	IA	F1g1	-	-	石列や方格(ブドウ型)あり。穿穴径層より上層堆積。
35	土坑	IA	F1j1	30×30×-	HOY95 60#砂	古墳後周～古墳(上部あり)。穿穴径層より上層堆積。
36	土坑	IA	F1h1	30×25×-	HOY95 60#砂	古墳後周～古墳(上部あり)。穿穴径層より上層堆積。
37	落ち込み	IA	F1h1・F1i1	100×100×20	HOY95 60#砂	時期不明(遺構ではない)。
38	落ち込み	IA	F1h1・F1i1	100×120×15	HOY95 60#砂	時期不明(遺構ではない)。
39	落ち込み	IA	F1h1	100×140×10	HOY95 60#砂	時期不明(遺構ではない)。
40	落ち込み	IA	F1h1・F1i1・F1j1・F1k1	-	-	遺構ではない。
41	穿穴径層	IA	F1h1・F1i1・F1j1	615×600×15	HOY95 60#砂(灰化物・2mm塵多量含む)。2.5V4 60#砂(1mm程度や多く含む)。 HOY91 60#砂(灰化物多量含む)。	古墳後周～古墳。方格。築造層あり(層)。F1j1、F1k1、土層。調査層あり(500×200)。上部に土器だまりあり。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
42	穿穴径層	IA	F1h1・F1i1	515×500×35	HOY95 60#砂～細砂(塵多量含む)。HOY91 60#砂～細砂(塵多量含む)。 HOY91 60#砂(灰化物多量含む)。	古墳後周～古墳。方格。築造層あり(層)。F1h1、F1i1、土層。調査層あり(500×200)。上部に土器だまりあり。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
43	穿穴径層	IA	F1e1	500×1440×35	HOY95 60#砂(灰化物多量含む)。HOY95 60#砂(土器・灰化物・2mm塵多量含む)。	古墳後周～古墳。方格。築造層あり(層)。F1e1、土層。調査層あり(500×200)。上部に土器だまりあり。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
44	溝	IA	F2b10・F1h10	6300×200×30	HOY95 60#砂。2.5V4 60#砂～細砂	古墳後周～古代(築造層あり)層。調査区域へつづく。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。上部に土器だまりあり。穿穴径層より上層堆積。
45	礎土坑	IA	F1j1	80×80×20	HOY95 60#砂～細砂(上部多量)。灰化物多量含む)。 HOY95 60#砂(灰化物多量含む)。 2.5V4 60#砂(1mm程度や多く含む)。	(古墳後周)～古代(築造層あり)層で堆積。上部灰を含む。中層は2.5V4。下部は灰化物多量。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
46	礎土坑	IA	F1d1	120×115×30	2.5V4 60#砂(1mm程度や多く含む)。2.5V4 60#砂(1mm程度や多く含む)。 HOY95 60#砂(灰化物多量含む)。	古墳後周～古墳。礎土坑(礎土)に含む。灰化物多量。上部に土器だまりあり。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
47	土坑	IA	F1g1	120×80×13	HOY95 60#砂	古墳後周～古墳。礎土坑(礎土)に含む。灰化物多量。上部に土器だまりあり。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
48	土器だまり	IA	F1e1	-	-	古墳後周～古墳。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
49	溝	IA	F1h1	280×170×20	HOY95 60#砂～細砂(1mm程度含む)。上部に土器だまりあり。	古墳後周～古墳。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
50	穿穴径層	IA	F2b10・F2h10	500×540×35	HOY95 60#砂(灰化物・2mm塵多量含む)。2.5V4 60#砂(1mm程度や多く含む)。 HOY95 60#砂(灰化物多量含む)。	古墳後周～古墳。方格。築造層あり(層)。F1h1、F1i1、土層。調査層あり(500×200)。上部に土器だまりあり。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
51	土坑	IA	F2h10	71×68×12	HOY95 60#砂～細砂	古墳後周～古墳。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
52	礎土坑	IA	F2b10・F1h10	80×65×15	HOY91 60#砂～細砂(1mm程度含む)。5YR5 60#砂～シルト(礎土に含む)。HOY91 60#砂～細砂(灰化物多量含む)。	古代。下部に築造層と上部に灰を含む。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
53	土坑	IA	F1g1	450×160×20	HOY95 60#砂(5mm小塵含む。灰を含む)。上部あり	古墳後周～古墳。上部に古墳上部片集中。
54	土器だまり	IA	F2b10・F2h10	-	-	古代。土器だまりに隣接(調査層あり)。
55	土器だまり	IA	F1g1	-	-	古墳後周～古代。古墳後周～古墳の上部あり。穿穴径層より上層堆積。
56	土坑	IA	F1h1	117×68×32	HOY95 60#砂(1mm程度含む)。HOY95 60#砂(土器あり)	古墳後周～古墳。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
57	土坑	IA	F2b10・F2h10	70×45×15	HOY95 60#砂(小塵含む)。	古墳後周～古墳(礎土坑)。存存。
58	土器だまり	IA	F2h10	-	-	古墳後周～古墳。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
59	土坑	IA	F2h10	227×80×17	HOY95 60#砂～細砂(塵多量)。HOY95 60#砂(土器あり)	古墳後周～古墳。穿穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
60	柱穴	IA	F1g1	30×25×40	HOY95 60#砂(3mm程度や多く含む)。	古墳後周～古墳。柱穴径層より上層堆積。上部片より5割に達。
61	土器だまり	IA	F2b10	-	-	古墳後周～古墳(礎土坑)。調査層より上層堆積。上部片より5割に達。
62	土器だまり	IA	F2b10・F2h10	-	-	古墳後周～古墳(礎土坑)。調査層より上層堆積。上部片より5割に達。
63	柱穴	IA	F2b10	45×40×20	HOY95 60#砂(シルト)2.5V4 60#砂(1mm程度や多く含む)。 HOY91 60#砂～細砂(灰化物多量含む)。	(古墳後周)～古代。柱穴径層より上層堆積。

表4.1 A地区検出遺構の概要(5)

遺構	遺構	トピ	地 区	位置 (北緯・東経) および 方位角	色 色	所 見
370	柱穴	2A	F2008	65°45'±25	10YR5-6/10中砂・細砂 (25YR68-8.5ト土混ざる)	古墳前期-古代。掘り出し物あり。柱あり
371	柱穴	2A	F2008	70°45'±45	10YR4-4/6中砂・中砂 (混含む)。10YR5-6/10中砂 (混含む)。	古墳前期-古代。掘り出し物あり。調査方向は掘り出し物ありとされている。柱あり
372	柱穴	2A	F2008	80°75'±35	10YR5-6/10中砂・10YR4-4/6中砂。10YR5-6/10中砂・細砂 (25YR68-8.5ト土混ざる)。	古墳前期-古代。掘り出し物あり。調査方向は掘り出し物ありとされている。柱あり
373	柱穴	2A	F2008	80°75'±15	10YR5-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり。調査方向は掘り出し物ありとされている
374	柱穴	2A	F2008	70°40'±30	10YR5-6/10中砂 (混含む)。10YR5-6/10中砂・25YR68-8.5ト土混ざる。10YR5-6/10中砂・細砂。25YR68-8.5ト土混ざる。	古墳前期-古代。掘り出し物あり。柱あり
375	柱穴	2A	F2008	65°55'±40	10YR5-6/10中砂 (25YR68-8.5ト土混ざる)。25Y7-3.5ト土混ざる。	古墳前期-古代。掘り出し物あり(1976年)に切りぬれる。柱あり
376	柱穴	2A	F2008	65°55'±30	10YR4-4/6中砂 (混含む)。10YR5-6/10中砂・細砂 (混含む)。	古墳前期-古代。掘り出し物あり
377	柱穴	2A	F2008	40°±45'±30	10YR5-6/10中砂・細砂 (3.5ト混含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
378	柱穴	2A	F2008	65°40'±25	10YR5-6/10中砂・細砂	古墳前期-古代。掘り出し物あり
379	柱穴	2A	F2008	90°75'±25	10YR5-6/10中砂 (混含む)。10YR5-6/10中砂・細砂・25YR68-8.5ト土混ざる。	古墳前期-古代。掘り出し物あり
379	柱穴	2A	F2008	100°30'±30	10YR5-6/10中砂 (混含む)。10YR5-6/10中砂・細砂・25YR68-8.5ト土混ざる。	古墳前期-古代。掘り出し物あり
380	柱穴	2A	F2008	95°35'±30	10YR4-4/6土より粗砂。10YR5-6/10中砂・細砂 (混含む)。	古墳前期-古代。掘り出し物あり。柱あり
381	柱穴	2A	F2008	40°±30'±10	10YR5-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
382	柱穴	2A	F2008	85°±30'±30	10YR5-6/10中砂・細砂 (混含む)。10YR5-6/10中砂・25Y7-3.5ト土混ざる。	古墳前期-古代。掘り出し物あり
383	柱穴	2A	F2007	75°±60'±15	10YR5-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり。一部風化に切りぬれる
384	柱穴	2A	F2007	65°45'±30	10YR5-6/10中砂 (混含む)。10YR5-6/10中砂・細砂・25Y7-3.5ト土混ざる。	古墳前期-古代。掘り出し物あり
385	柱穴	2A	F2007	100°75'±15	10YR5-6/10中砂・中砂 (混含む)。10YR5-6/10中砂・25YR68-8.5ト土混ざる。	古墳前期-古代。掘り出し物あり
386	柱穴	2A	F2007	30°±45'±30	10YR5-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
387	柱穴	2A	F2007	45°±45'±15	10YR5-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
388	柱穴	2A	F2007	30°±45'±15	10YR5-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
389	柱穴	2A	F2007・F2008	75°75'±55	10YR7-6/10中砂 (5YR7-6/10中砂を混ざる。2.5トあり)。	古墳前期-古代。掘り出し物あり。柱あり
390	柱穴	2A	F2007・F2008	75°70'±75	10YR5-6/10中砂 (混含む)。10YR5-6/10中砂・10YR4-4/6中砂・10YR4-4/6中砂 (混含む)。10YR4-4/6中砂・10YR4-4/6中砂 (混含む)。10YR5-6/10中砂・10YR4-4/6中砂 (混含む)。	古墳前期-古代。掘り出し物あり。柱あり
391	柱穴	2A	F2007	30°±45'±30	10YR5-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
392	柱穴	2A	F2007・F2008	60°±35'±70	10YR5-6/10中砂 (5YR7-6/10中砂を混ざる。2.5トあり)。	古墳前期-古代。掘り出し物あり
393	柱穴	2A	F2007	70°±65'±30	10YR5-6/10中砂・細砂 (混含む)。10YR5-6/10中砂・細砂・25Y7-3.5ト土混ざる。	古墳前期-古代。掘り出し物あり
394	柱穴	2A	F2007・F2008	55°±50'±25	10YR5-6/10中砂・細砂 (混含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
395	柱穴	2A	F2007	60°±50'±25	10YR5-6/10中砂・細砂 (混含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
396	柱穴	2A	F2007	60°±70'±30	10YR5-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
397	柱穴	2A	F2007	55°±20'±15	10YR5-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
398	柱穴	2A	F2007	30°±30'±10	10YR5-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
399	柱穴	2A	F2007	30°±45'±40	10YR5-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
400	柱穴	2A	F2007	120°±85'±75	10YR5-6/10中砂・細砂 (混含む)。10YR5-6/10中砂 (混含む)。25YR68-8.5ト土混ざる。	古墳前期-古代。掘り出し物あり
401	柱穴	2A	F2007	100°±95'±45	10YR5-6/10中砂 (混含む)。25YR68-8.5ト土混ざる。10YR5-6/10中砂・細砂 (混含む)。	古墳前期-古代。掘り出し物あり
402	柱穴	2A	F2007	30°±30'±25	10YR5-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
403	柱穴	2A	F2008	80°±70'±30	10YR5-6/10中砂 (土125Y7-3.5ト土混ざる)	古代。古墳前期-古代。掘り出し物あり
404	柱穴	2A	F2008	90°±30'±30	10YR5-6/10中砂・細砂 (混含む)。10YR5-6/10中砂 (土125Y7-3.5ト土混ざる)	古代 (風化1-2)。掘り出し物あり
405	柱穴	2A	F2004	40°±50'±20	10YR5-6/10中砂・25YR68-8.5ト土混ざる。柱あり	古墳前期-古代。掘り出し物あり。柱あり
406	柱穴	2A	F2005	40°75'±16	10YR5-6/10中砂	古墳前期-古代
407	柱穴	2A	F2005	145°±55'±30	25YR68-8.5ト土混ざる。10YR5-6/10中砂 (土125Y7-3.5ト土混ざる)。	古墳前期-古代。掘り出し物あり。土層厚1.5m
408	柱穴	2A	F2006	40°±40'±20	10YR6-6/10中砂・細砂 (混含む。マンゴウ含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
409	柱穴	2A	F2007	30°±(40'±15)	10YR5-6/10中砂・細砂 (混含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
410	柱穴	2A	F2007	40°±40'±9	10YR5-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
411	柱穴	2A	F2008	40°±40'±9	10YR5-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
412	柱穴	2A	F2008	55°±55'±14	10YR5-6/10中砂・細砂 (5YR7-6/10中砂を混ざる。混含む)	古墳前期-古代
413	柱穴	2A	F2008	30°±30'±5	10YR5-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代
414	柱穴	2A	F2008	40°±40'±10	10YR5-6/10中砂・細砂	古墳前期-古代
415	柱穴	2A	F2008	35°±35'±5	10YR5-6/10中砂	古墳前期-古代
416	柱穴	2A	F2008・F2008	40°±40'±15	10YR5-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代
417	柱穴	2A	F2008	40°±40'±9	10YR5-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代
418	柱穴	2A	F2008	65°±15'±10	10YR5-6/10中砂 (混含む)。	古墳前期-古代
419	柱穴	2A	F2008・F2008	35°±30'±5	10YR5-6/10中砂・細砂 (混含む)	古墳前期-古代
420	柱穴	2A	F2008	40°±40'±6	10YR5-6/10中砂・細砂	古墳前期-古代
421	柱穴	2A	F2008	40°±40'±15	10YR5-6/10中砂・細砂 (混含む)	古墳前期-古代
422	柱穴	2A	F2008	35°±40'±6	10YR5-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代
423	柱穴	2A	F2008	(40'±35'±15)	10YR5-6/10中砂・細砂 (混含む)	古墳前期-古代
424	柱穴	2A	F2008	30°±45'±30	10YR5-6/10中砂・細砂 (25Y7-3.5ト土混ざる)。10YR5-6/10中砂 (混含む)	柱あり。古墳前期-古代
425	柱穴	2A	F2008	60°±50'±5	10YR5-6/10中砂・細砂 (混含む)	古墳前期-古代
426	柱穴	2A	F2008	40°±55'±23	10YR5-6/10中砂・細砂 (混含む)	古墳前期-古代
427	柱穴	2A	F2008	30°±55'±14	10YR5-6/10中砂	古墳前期-古代
428	柱穴	2A	F2008	40°±40'±18	10YR5-6/10中砂・細砂	古墳前期-古代
429	柱穴	2A	F2008	55°±30'±18	10YR5-6/10中砂・細砂 (混含む)	古墳前期-古代
430	柱穴	2A	F2008	40°±55'±11	10YR6-6/10中砂 (25YR68-8.5ト土混ざる)	古墳前期-古代
431	柱穴	2A	F2008	35°±35'±7	10YR6-6/10中砂 (25Y7-3.5ト土混ざる)	古墳前期-古代
432	柱穴	2A	F2008	35°±30'±10	25YR68-8.5ト土混ざる。10YR6-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代
433	柱穴	2A	F2008	35°±32'±10	10YR6-6/10中砂 (25Y7-3.5ト土混ざる)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
434	柱穴	2A	F2008	30°±30'±10	10YR6-6/10中砂 (25Y7-3.5ト土混ざる)	古墳前期-古代
435	柱穴	2A	F2008	40°±30'±20	10YR6-6/10中砂 (25Y7-3.5ト土混ざる)	古墳前期-古代
436	柱穴	2A	F2008	40°±30'±20	10YR6-6/10中砂 (25Y7-3.5ト土混ざる)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
437	柱穴	2A	F2008	40°±10'±15	10YR6-6/10中砂 (25Y7-3.5ト土混ざる)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
438	柱穴	2A	F2008	30°±45'±20	10YR6-6/10中砂 (25YR68-8.5ト土混ざる)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
439	柱穴	2A	F2008	55°±45'±10	10YR6-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
440	柱穴	2A	F2008	40°±25'±10	10YR6-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代。掘り出し物あり
441	柱穴	2A	F2008	30°±30'±28	10YR6-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代
442	柱穴	2A	F2008	30°±30'±28	10YR6-6/10中砂 (混含む)	古墳前期-古代
443	柱穴	2A	F2008	40°±35'±45	10YR6-6/10中砂 (25Y7-3.5ト土混ざる)	古墳前期-古代

表4. 1 A地区検出遺構の概要(6)

遺構番号	遺 積	トレンチ	地 区	規模(長軸×短軸×高さ) (内は埋存部)	主 意	備 考
644	柱穴	2A	F267	20×20×20	10YR5-60YR-細砂(25Y7.3シトト混ざる)	古墳前期-古代
645	柱穴	2A	F268	60×70×40	10YR6-60YR-細砂(2Y3R6.8シトト混ざる)、25Y7.3-26YR-シルト、2Y3R6.8細砂-シルト、10YR6.6細砂(埋積)	古墳前期-古代、柱痕あり
646	柱穴	2A	F268	65×65×30	10YR6-60YR-細砂(2Y3R6.8シトト混ざる)、25Y7.3シトト(10YR5.6細砂混じる)、10YR6.6細砂(埋積)	古墳前期-古代、柱痕あり
647	柱穴	2A	F268	50×40×50	10YR6.6細砂+2Y3R6.8シルト(埋わすか含む)、10YR6.6細砂-シルト(埋積)	古墳前期-古代、掘立柱建物300、柱痕あり
648	柱穴	2A	F267	120×65×40	10YR5.60YR(埋わすか含む)	古墳前期-古代、掘立柱建物315
649	柱穴	2A	F267	25×25×20	2Y3R6.8シルト(10YR6.6細砂混じる)、10YR6.6細砂(埋積)	古墳前期-古代、柱痕あり
650	柱穴	2A	F267	75×75×10	10YR5.60YR(埋あり)	古墳前期-古代
651	柱穴	2A	F267	40×40×-	10YR5.60YR-細砂	古墳前期-古代
652	柱穴	2A	F266	55×30×20	10YR5.60YR(2Y3R6.8シトト混ざる)	古墳前期-古代
653	柱穴	2A	F266	60×60×15	10YR5.60YR-細砂(2Y3R6.8シトト混ざる)	古墳前期-古代
654	柱穴	2A	F266	45×45×25	10YR5.60YR(2Y3R6.8シトト混ざる)	古墳前期-古代
655	柱穴	2A	F266	45×45×15	10YR5.60YR(2Y3R6.8シトト混ざる)	古墳前期-古代
656	柱穴	2A	F265	30×30×25	10YR5.60YR-細砂(マンガン含む)	古墳前期-古代
657	柱穴	2A	F265	45×40×10	10YR5.60YR(埋含む)	古墳前期-古代
658	柱穴	2A	F265	25×25×16	10YR5.60YR(2Y3R6.8シトト混ざる)	古墳前期-古代
659	柱穴	2A	F265	30×25×12	10YR5.60YR	古墳前期-古代
661	柱穴	2A	F265	25×25×4	10YR5.60YR	古墳前期-古代
662	柱穴	2A	F264	25×25×6	10YR5.60YR	古墳前期-古代
663	柱穴	2A	F264	25×25×16	10YR5.60YR	古墳前期-古代
664	柱穴	2A	F264	85×80×55	10YR2.00YR(埋+1部含む)、10YR5.60YR(埋+マンガン含む)、10YR5.60YR、25Y7.3シトト(2Y3R6.8シトト混ざる)	古墳前期-古代、掘立柱建物320、溝401に上部印られる
665	柱穴	2A	F264・F264	70×55×60	10YR5.60YR(埋+1部含む)、10YR5.60YR、10YR5.60YR(2Y3R6.8シトト混ざる)、10YR5.60YR+2Y3R6.8シトト、マンガン含む、10YR5.60YR(2Y3R6.8シトト混ざる、灰多量含む、柱痕)	古墳前期-古代、掘立柱建物320、柱痕あり、溝425に上部印られる
666	柱穴	2A	F264	30×30×25	10YR5.60YR(埋含む)	古代か
667	柱穴	2A	F264	70×70×65	10YR5.60YR(埋+1部含む)、10YR5.60YR(10YR5.60YR細砂混ざる、マンガン含む)、10YR5.60YR-細砂(2Y3R6.8シトト混ざる)、10YR5.60YR、2Y3R6.8シトト+10YR5.60YR、25Y7.3シトト(2Y3R6.8シトト混ざる)、10YR5.60YR(2Y3R6.8シトト混ざる、柱痕)	古墳前期-古代、掘立柱建物320、柱痕あり、溝425に上部印られる
668	柱穴	2A	F264	40×40×8	10YR5.60YR	古墳前期-古代
669	柱穴	2A	F264	35×30×30	10YR5.60YR	古墳前期-古代、掘立柱建物320
670	柱穴	2A	F265	30×30×45	10YR5.60YR	堀穴(1500cm×溝幅)、古墳前期-古代(埋込500より上層)
671	柱穴	2A	F265	35×25×40	10YR5.60YR	堀穴(1500cm×溝幅)、古墳前期-古代(埋込500より上層)
672	柱穴	2A	F265	70×55×25	10YR5.60YR(若干2Y3R6.8シトトまじる)、10YR5.60YR(埋積)	古墳前期-古代、柱痕あり、溝464掘立柱建物21として調査
673	柱穴	2A	F265	50×50×30	10YR5.60YR+2Y3R6.8シトト(埋あり)、10YR5.60YR(埋積)	古墳前期-古代、柱痕あり、溝464掘立柱建物21として調査、掘込に知らぬ

2. 弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構・遺物

A地区では大きく分けて2時期の遺構群を検出しているため、記述するにあたっては時期別（弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代後期～古代）に分けておこなっていくことにする。まずここでは弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構とそこから出土した遺物を中心に記載していく。なおA地区の竪穴住居の主軸は、すべて正方位に対して西側に振っているが、記述の際には個別平面図の下側を便宜上南側としておこなうこととする。

【竪穴住居20】(図4. 2～6)

F1-h4・h5地区で検出した竪穴住居で、平面形が五角形を呈している。A地区の竪穴住居群の中で最も西側に位置し、住居の西端部はB地区の斜面上端に接している。竪穴住居23とともに屋根上の最高所の平坦面につくられている。住居の規模は、東西長730cm・南北長710cmで、1辺の長さが350～650cmの五角形である。南東隅がほぼ直角になっているなど正五角形にはなっておらず、やや不整形な五角形を呈している。外周壁より内側の住居面積は44.5㎡で、今回の調査で検出した竪穴住居の中で最大の規模を有している。

住居は地山面を大きく掘り込んでつくられており、検出した最大の深さは40cmである。一部に外周の壁がほとんど削平され、壁溝のみが残存する部分もある。しかし住居床面までは削平を受けておらず、床面の残りは良好で、厚さ8cmの貼床が1面認められる。その貼床面上で主柱穴を5本、炉を1基検出した。

主柱穴は、浅いものでも深さ55cm、最も深いものでは深さ70cmをはかる。柱穴5の埋土に大きな礫が入りこんでいるため、この柱穴では柱が抜き取られたとも考えられるが、これ以外の柱穴では明確に建てなおしや抜き取りの痕跡は認められない。柱穴埋土の下層にはシルト質の層が確認できるものがあり、シルト質の土を敷いたあと柱を立てた可能性がある。なお今回の調査では各竪穴住居の柱穴に礎石や礎石を用いた痕跡は全くなかった。それぞれの柱穴は、住居の五角形の角に対応する位置にほぼ等間隔に配置されている。

住居の中央部の南寄りにつくられている炉1は、長軸120cm、短軸100cm、深さ20cmの規模で、やや南北に長い楕円形を呈している。埋土には炭化物を多く含んでおり、炉周辺の床面には炭層がうすく広がっていた。

壁溝は、その一部をブドウ畑関係の掘削によって切られているが、幅15cmの1重の壁溝が住居の壁にそって五角形にめぐっていることが確認できる。排水溝は検出していないが、本来はB地区側の斜面にのびていた可能性がある。柱穴・炉・壁溝以外には土坑などの諸施設は認められなかった。

南側の肩部には炭化物がたまっていた(写真4.2)。この炭化物は南側壁溝を覆うように検出されたことから、竪穴住居の廃絶時に廃棄されたものである可能性が高い。このほかには竪穴住居機能時や廃絶直後ともなう遺物はほとんど出土していない。

この竪穴住居は、壁溝や貼床、主柱穴などに建替えや拡張などの痕跡は認められず、はじめから五角形のプランでつくられた住居であったと考えられる。竪穴住居20は、その南東部に隣接する竪穴住居23の北端部を切ってつくられており、現地でも確認した切り合い関係からは竪穴住居20の方が後出する住居であると判断した。

竪穴住居20の埋土は、大きく3層に分けることができる。その埋土の堆積状況から長期間凹みの状態

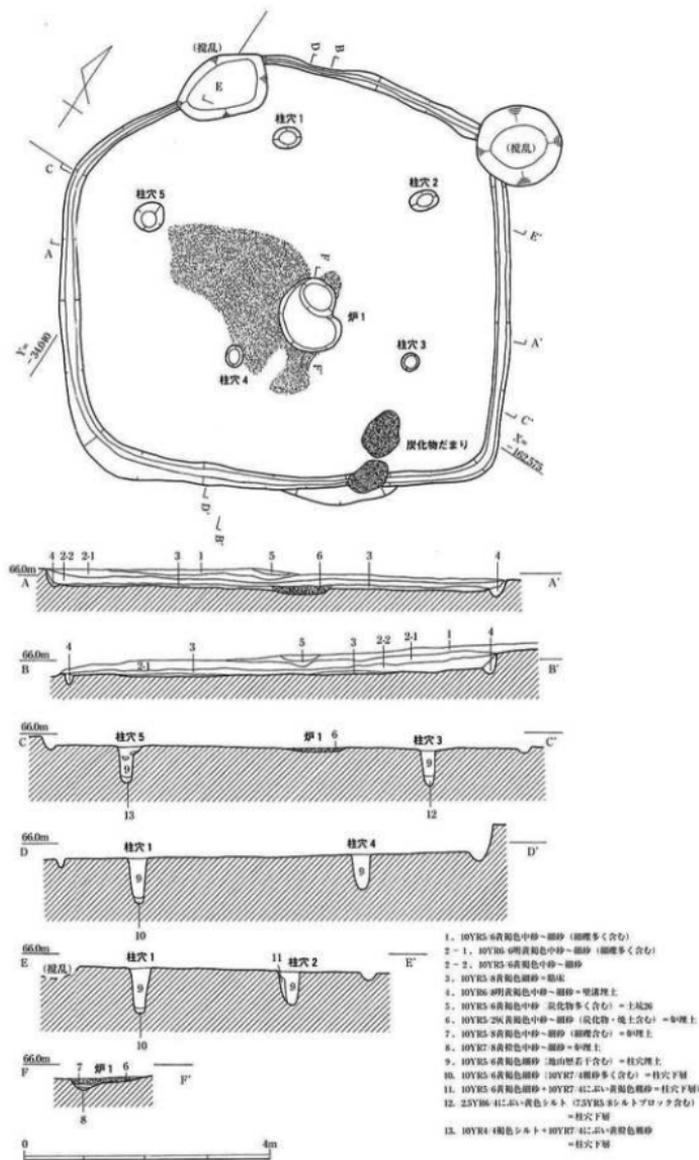


图 4. 2 A地区 竪穴住居20平面図・断面図 (S=1/80)

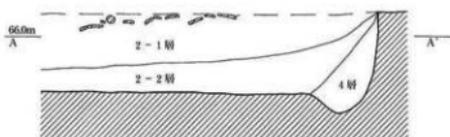
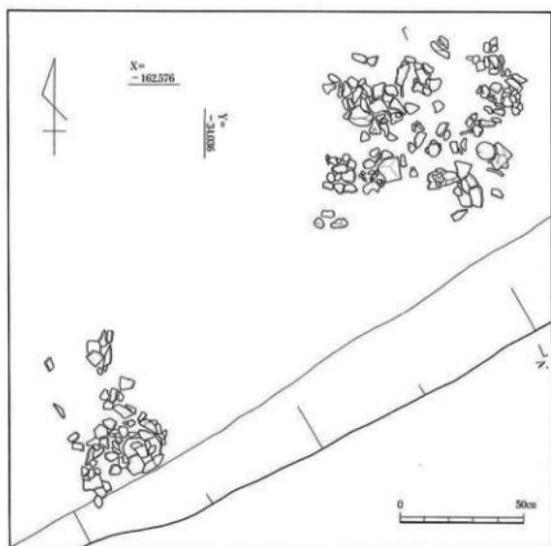
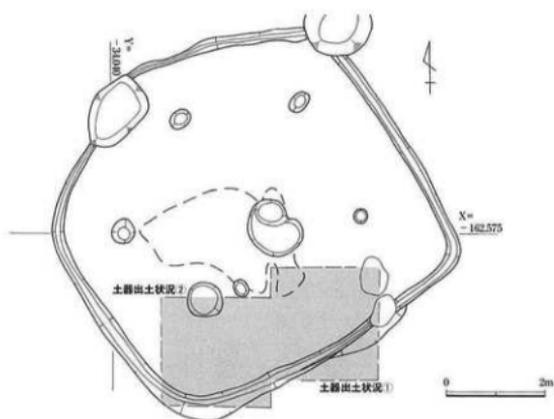


图 4. 3 A地区 竖穴住居20上层土器群出土状況①平面图·断面图 (S=1/20)

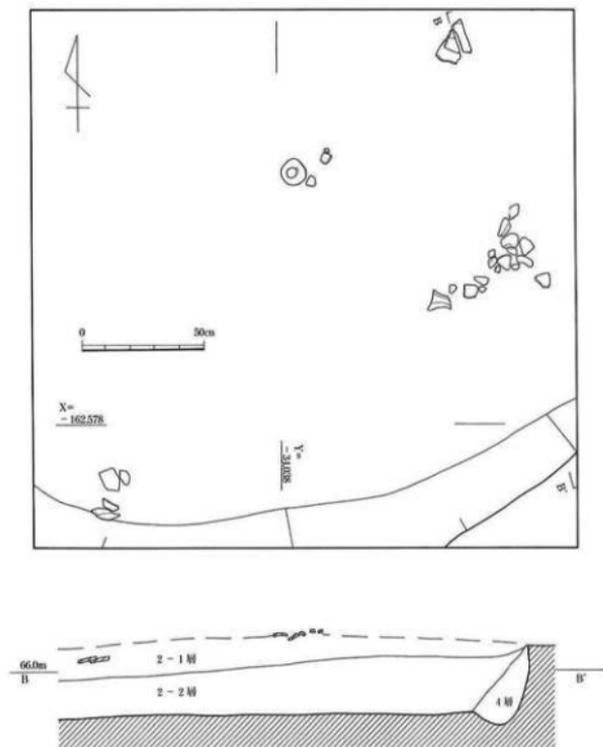


図4.4 A地区 竪穴住居20上層土器群出土状況②平面図・断面図 (S=1/20)



写真4.1 竪穴住居20上層土器だまり (北東から)



写真4.2 竪穴住居20南壁炭化物だまり (東から)

であったことがわかる。そのうち最上層の1層とした埋土上面から掘り込まれた炭化物を含有する土坑26を検出した。また住居の南半を中心として、2-1層中からは多量の土器片が集中して検出された(図4.3・4、写真4.1)。完形に復元できる個体はほとんど含まれていないので、堅穴住居廃絶後の凹みに土器が多量に廃棄された状況であると推定できる。住居内の遺物の大半はここから出土したものである。

出土した土器は一部に弥生時代後期中葉まで遡る可能性のある個体も含まれるが、おおむね弥生時代後期後葉～古墳時代初頭(庄内式期)の時期の所産であると考えられる。図4.5の、床面直上のもはなく、すべて埋土上層のものである。1は、二重口縁壺の口縁部と考えられ、内面にヘラミガキを施している。2～9は、壺もしくは鉢と考えられる底部である。調整がみえないものも多いが、3にはハケ、7・8にはユビオサエが確認でき、6の底部には穿孔が1つあけられている。10～16は甕で、いずれにも外面にタタキ調整が認められ、タタキ後のナデがみられるものもある。内面の調整はナデあるいはハケである。11はやや器壁があつく、口縁部をつまみ上げるようにして面を作り出している。弥生時代後期中葉まで遡る可能性がある個体である。13の外面下半部にはユビオサエがみられる。17～23は高坏である。坏部の形態がわかる17～19はいずれも口縁部が反するタイプである。18の坏部外面には縦方向のヘラミガキがみえる。17・18は屈曲部から端部までが長くなっているが、19は少し短い。19の脚部は明確に屈曲をもって広がる形態で、古墳時代初頭の所産であろう。20～23は高坏の脚部で、21は高坏でなく台付鉢の脚部であるかもしれない。脚部外面にはいずれも縦方向のヘラミガキが施されている。20・23の外面にはハケの後ヘラミガキで調整しているのが観察でき、脚部上端には工具痕が残る。20は脚部の形態がわかる個体で、19と違ってほとんど屈曲部をもたずに広がっていく形態をしている。これら高坏の形状から弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の遺物であると判断できる。

石器は埋土上層より2点出土している(図4.6)。1は和泉砂岩製の投弾である。製作痕或使用痕

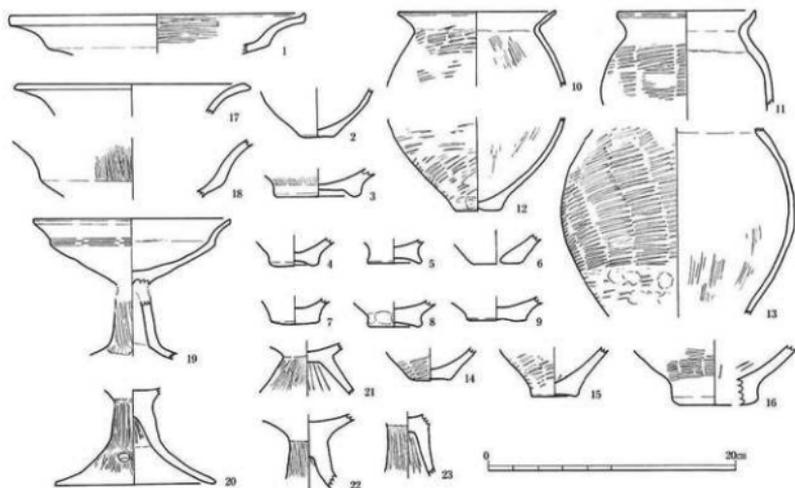


図4.5 A地区 堅穴住居20上層出土土器(S=1/4)

は確認できないが、整った球体を呈していることから投弾としての機能を有していたと判断した。2は和泉砂岩製の砥石である。上面と側面の2面を砥石面として使用しており、砥石面は平滑で長軸方向を中心とした擦痕が観察できる。なお駒ヶ谷遺跡の地山には石器を製作できるような和泉砂岩の礫はみられない。したがって当遺跡で出土する和泉砂岩については、石器あるいは石器に使用する目的として他所より持ち込まれた礫であるといえる。

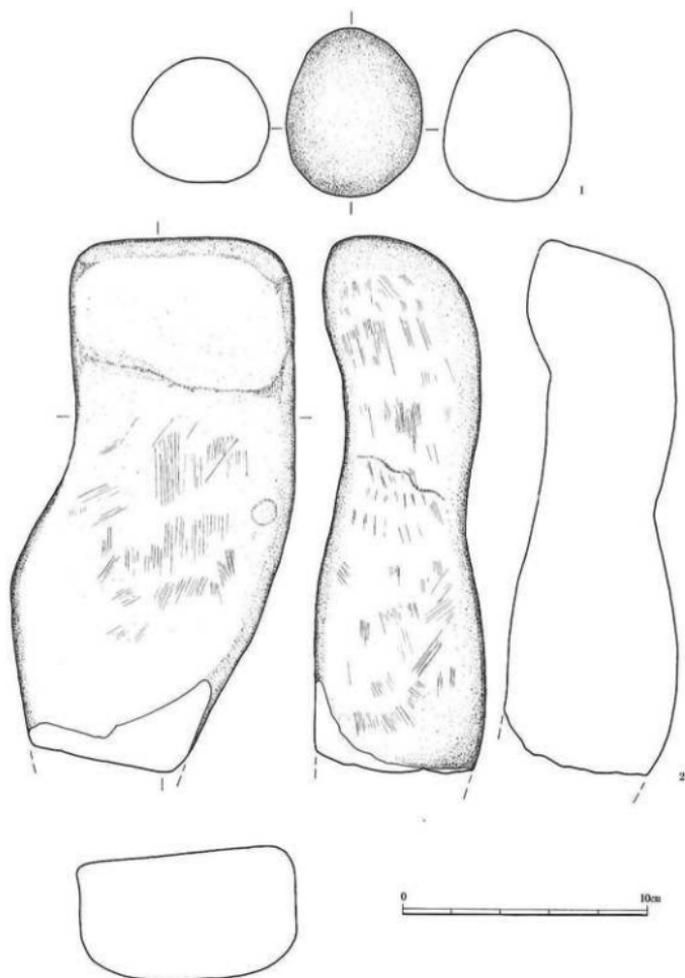


図4.6 A地区 竪穴住居20上層出土石器 (s=1/2)

【竪穴住居23】(図4.7)

F1h3・h4・i3・i4地区で検出した方形の竪穴住居で、竪穴住居20・30とともに屋根上の平坦面に位置している。北西部に隣接する竪穴住居20によって北壁が切られている。また住居の北東側は削平を受けて壁溝の一部を欠いている。規模は、最も大きく拡張された段階で、東西長660cm、南北長590cmのやや東西に長い方形を呈しており、検出した最大の深さは20cmである。住居面積は最も拡張された段階で36.5㎡である。住居内の埋土は1層のみで、上面が大きく削平されていることをうかがわせる。

壁溝は、竪穴住居検出時には南側から西側にかけて2重、東側では1重確認した。その後貼床面除去後の地山面でも西側壁溝の内側にさらに2重の壁溝の可能性が高い小溝を確認した。なお東側壁溝の下層には土坑状の落ち込みがあり、それを埋めて住居がつけられている。南側壁溝からは図示できなかったが手焙形土器片が出土している。南東隅の壁溝から斜面に沿って東に検出長さ700cm、幅30cm、深さ10cmの排水溝がのびる。

床面には、貼床が2面確認でき、建替えがあったことがわかる。貼床の厚さは古い段階では8cm、新しい段階では14cmである。東側の床面がやや高まっており屋内高床部(ベッド状遺構)があった可能性もあるが、全体的に床面が削平されている傾向にあるために明確に屋内高床部の検出はできなかった。新しい段階の貼床は削平を受けている箇所も多く、最終的な柱穴の確認は古い段階の貼床面でおこなった。主柱穴は8本あり、それらは深さが30~40cmの比較的浅い柱穴4本と、深さ50~90cmの深い柱穴4本のグループに分けることができる。深い柱穴のうち数本は新しい貼床面上で検出できていたこともあり、これら4本の柱穴は建替え後のものであると判断した。したがって浅い柱穴は、建替え前の住居にともなう柱穴であることが推定できる。浅い柱穴4本は内側にあり、深い柱穴4本は外側にあるので、この住居では建替えにともなう全体的に拡張されたと考えられる。柱穴のいくつかには竪穴住居20の柱穴と同じく下層にシルト質の層が認められるものがある。柱穴3には柱痕が確認できる。柱穴8の埋土上層からは土器片が柱穴を覆うような状況で出土した。柱穴を抜き取った際に埋められた土器であろうか。柱穴・壁溝以外に土坑などのその他の諸施設は検出していない。

土層断面の観察により最も西側の壁溝が新しい貼床面から、その内側の壁溝が古い貼床面から掘り込まれている状況が確認できた。この2本の壁溝は、西側で1本に合流していることから、西側~北側にかけては建替えの際に古い壁溝の一部を利用して新しい壁溝がつけられているといえる。これよりさらに内側の2本の小溝は古い段階の貼床面下の地山面での検出である。したがってこの内側の小溝については、外側の壁溝より先行する段階の壁溝であると考えられる。この2本の小溝の先後関係は断面や平面観察では判然としなかった。それぞれが住居の西側の壁溝であるとした場合、最大3回の建替えがおこなわれた可能性がある。ただし最も内側の小溝を壁溝と考えると住居規模がかなり小さくなることから、この小溝については間仕切りなど別機能の溝と考える方がいいかもしれない。この場合住居は2回建替えられたことになる。

この住居の中央を南北に古墳時代後期~古代の溝1がはしり、この溝に切られることによって中央にあったと推定できる炉が消滅している可能性が高い。

遺構検出状況から竪穴住居23は20に切られていると判断したが、出土遺物の残りがよくなかったので遺物から追認することはできなかった。竪穴住居内から出土した土器は弥生時代後期~古墳時代初頭の範囲におさまると考えられるが、図化できるものはなかった。したがって細かい時期比定はできない状況にある。

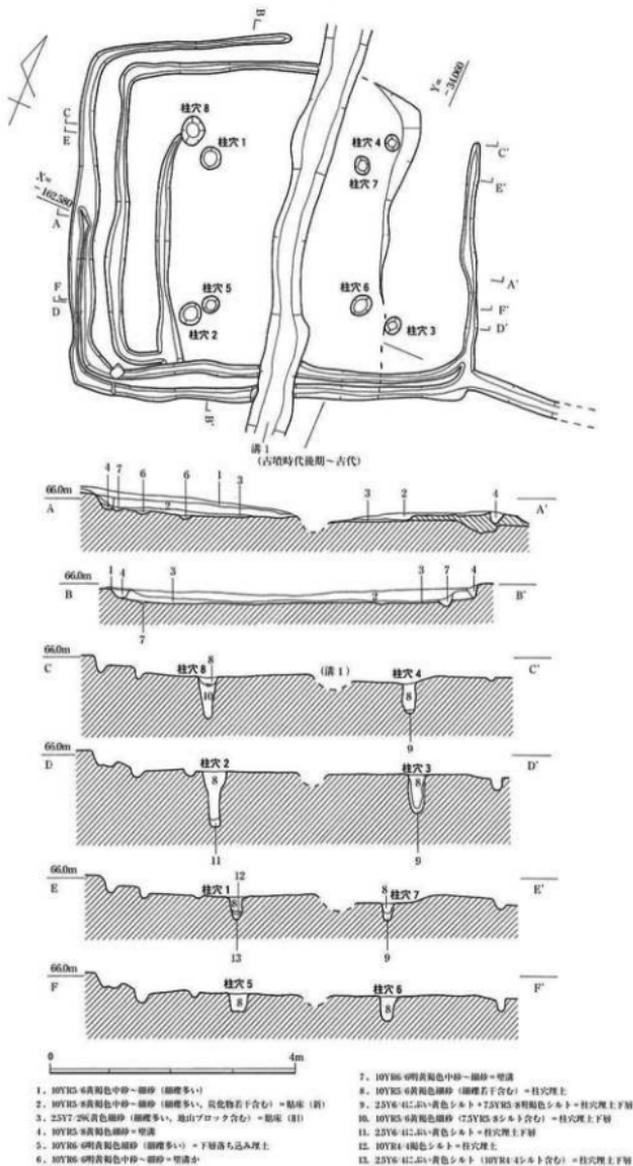


图 4. 7 A 地区 窠穴住居23平面图・断面图 (S=1/80)

【竪穴住居30】(図4. 8・9)

F1-g3・g4・h3・h4地区で検出した方形の竪穴住居で、南西側の竪穴住居20・23とともに屋根上の平坦面に位置している。北西隅の一部は古墳時代後期～古代の溝1に切られているが、かろうじて溝1の底面で竪穴住居の壁溝が残存していたことにより住居規模が確定できた。住居の規模は、東西長530cm、南北長510cmでほぼ正方形を呈している。住居面積は24.2㎡で、今回調査した当該期の竪穴住居の中では最も小さい規模である。住居の埋土は1層であるが、包含層掘削時にそのほとんどを掘削してしまったため上層堆積に伴う遺物はわずかしき出土していない。全体的に上面は削平されているが、住居西壁は比較的残りがよく検出した深さは30cmをはかる。

壁溝は方形に1重めぐっている。東側壁溝からは幅20cm、深さ10cmの排水溝が東側へ1本のびている。この排水溝は等高線に直交して流れている。その東端は土坑47に切られているため本来の長さは確認できなかった。

南側壁溝の内側には土坑1があり、壁溝に取り付くようにつくられている。半円状の形状をした土坑で、規模は東西長120cm、南北長70cm、深さ35cmである。この土坑と壁溝には切り合い関係はなく、同時に埋没したことがわかり、両者は竪穴住居がつくられた当初から同時に機能していた施設であったと考えられる。この住居の他に同じように南側壁溝の内側に取り付く土坑を竪穴住居31・41で確認している。それぞれ同様に南側壁溝の内側にあることから同じ機能を果たした土坑であると推測できる。その機能としては貯蔵穴や出入り口などの施設であった可能性が考えられるが、機能を確定する要素は見せなかった。

床面には厚さ10cmの貼床が1面認められる。その貼床面上で支柱穴を4本、炉を1基検出した。支柱穴は深さ55～65cmで、柱穴の土層断面からは抜き取りや建てなおしの痕跡は見受けられなかった。しかし各柱穴の埋土上層からは土器片が集中して出土している状況が確認できた。すべての柱穴の上層にまとも土器片が認められることから、それぞれの柱を抜き取った後に意図的に土器片が埋められた可能性がある。

炉1は、竪穴住居の中央に配置されており、65cm×55cmの楕円形を呈している。深さは15cmをはかり、埋土には炭化物や焼土などが含まれている。また南から東側にかけての炉の壁際には被熱によって赤変して焼土化した部分が認められる。

竪穴住居30では壁溝や貼床、柱穴などの諸施設に建替えを示す痕跡はまったく認められなかった。

竪穴住居内から出土した遺物は少なく、床面に残された完形土器などの住居使用時から廃絶直後を示す遺物は出土していない。ただし、先述したとおり各柱穴の埋土上層からはまとも土器片が出土している。図4. 9)のうち、1・3・4は住居内埋土からの出土で、2・5は柱穴3の埋土上層、6は柱穴4の埋土上層からそれぞれ出土している。7は土坑1からの出土である。1は壺の頸部で、肩部に突帯がめぐっている。2は壺の底部と考えられるもので、外面はハケで調整され底部には穿孔が認められる。3は壺か鉢の底部、4は壺の底部と考えられる。5・6は高坏の脚部で、5の外面には縦方向のヘラミガキが施されている。7は小型器台の可能性のある脚部である。外面にはヘラミガキが施される。これらはおおむね弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の遺物であると推定でき、特に7は古墳時代初頭にまで下る可能性がある。このためこの住居の廃絶時期は古墳時代初頭であった可能性が高いと推定できる。

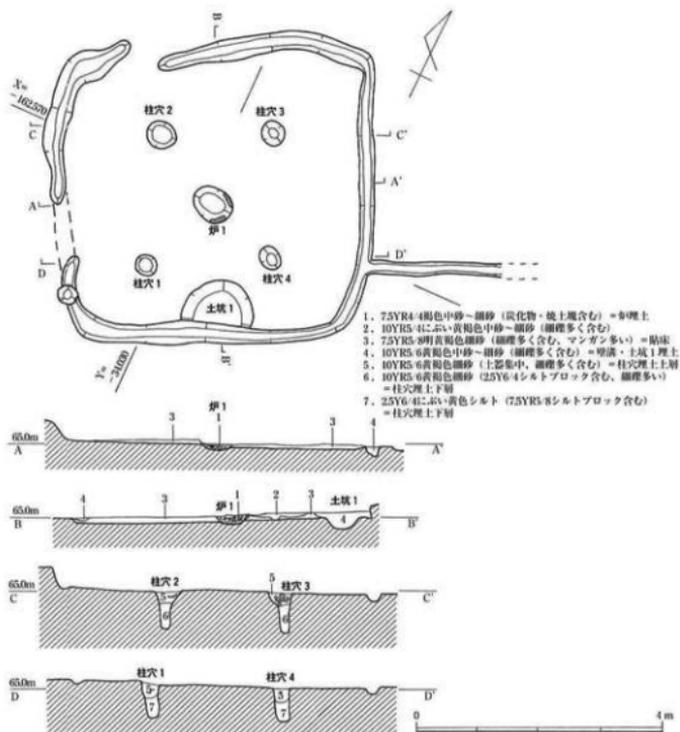


図4. 8 A地区 竪穴住居30平面図・断面図 (S=1/80)

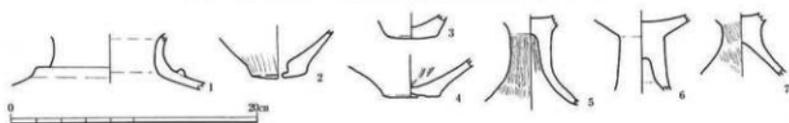


図4. 9 A地区 竪穴住居30出土土器 (S=1/80)



写真4. 3 竪穴住居30炉1 (南から)



写真4. 4 竪穴住居30柱穴3 (北から)

【竪穴住居31】(図4. 10・11)

F1-h2地区で検出した方形の竪穴住居で、竪穴住居23の約10m東の緩斜面上に位置している。北東隅の一部は攪乱によって切られている。住居内の埋土は1層で、上面はかなり削平されている。住居東半はさらに削平されているため東側壁溝は検出できなかった。かろうじて壁溝の南東隅が検出できたことにより、最も拡張された段階の住居規模が東西長590cm、南北長580cmであると判断できた。住居面積は、住居の東端を壁溝南東隅までとして算出すると33.3㎡になる。最も残りのよい住居西壁の深さは25cmである。

この住居には貼床が2面あり、建替えが1回おこなわれている。新しい段階の住居には壁溝が1重にめぐっている。新しい段階の貼床は、約15cmの厚さで古い段階の貼床を覆っており、住居の西側～北側にかけて高さ15cm、幅110cmの屋内高床部(ベッド状遺構)をつくりだしている。屋内高床部は住居中央部や南側にはつづかず、住居東半は削平のためその有無は確認できなかった。この屋内高床部を除去した下層より厚さ10cmの古い段階の貼床と1重の壁溝を検出した。この古い段階の壁溝は、新しい壁溝の内側にあり、ちょうど屋内高床部がつくられている住居の西側～北側でのみ検出できた。つまり古い壁溝は屋内高床部をつくる際に埋められたものであり、この住居が西側～北側にかけて拡張されていることがわかる。古い壁溝の内側は他の貼床面よりも一段高くなっていることから、古い段階の住居にも屋内高床部があったと推測でき、その大半が住居拡張の際に壊された可能性が高い。住居の東端部分では排水溝の痕跡と思われる東側へのびる溝が検出できたが、新旧どちらの住居にともなうものであるか判断できなかった。

屋内高床部で囲まれた内側で炉と土坑、柱穴を検出したが、この部分では貼床面が削平されていたためにどの段階の床面に属するものか判断できなかった。しかしそれほど大きく床面が削平されているわけではないので、炉と土坑に関しては拡張前からあったものを拡張後も使用していたと考えられる。炉1は、住居のほぼ中央に1基配置されていて、その規模は長軸85cm、短軸75cmのやや楕円ぎみの円形を呈し、深さは10cmである。炉埋土には炭化物が含まれ、壁際には被熱によって赤変して焼土化した部分が認められる。

土坑1は、竪穴住居30・41と同じく南側壁溝にほぼ接する位置につくられていて、壁溝との切り合い関係はない。規模は南北長75cm、東西長75cmで、深さ20cmである。南半部分は東西に長い楕円形を呈しており、北半部分はやや小さい柱穴状に落ち込む形状をしている。南半と北半部分は切り合い関係がなく一連の遺構であると判断した。

柱穴は深さ25～55cmのものを5本確認したが、そのうち主柱穴として確実に組み合うと考えられるのは柱穴1・2・3の組み合わせである。これらと組み合う北東側の柱穴は攪乱によって消滅したものと推定できる。柱穴2は古い段階の貼床面から掘り込まれる柱穴であることから、これらの柱穴の組み合わせは拡張前の住居に伴うものである。拡張後の住居の柱穴は、柱穴が削平されて失われていないとすれば、柱穴1・5・3の組み合わせであったと推定できる。この場合柱穴1は古い段階の柱穴を新しい段階でも利用したと理解しなければならない。柱穴4もその候補ではあるが、拡張の際に柱穴の柱間をかなり縮めたと理解しなければならず不自然である。したがって柱穴4は他とは違う役割を果たした柱穴かもしれない。住居西半に関しては各柱穴の深さから考えて柱穴が削平されて失われたとは考えにくい。いずれにしても住居の東半が削平を受けているため、柱穴の新旧やその組み合わせを決しがたいのが現状である。

竪穴住居31と32とは切り合い関係はないが、その距離がほとんど接していることから同時に併存することはなかったと考えられる。

出土遺物は細片が多く、図化できたものは2点のみである(図4.11)。1は住居埋土中から出土した壺あるいは鉢の底部である。弥生時代後期中葉～古墳時代初頭の範疇でとらえられよう。その他の出土土器は細片ばかりで細かい時期比定はできなかった。2は不定形板状鉄製品で、住居北西部の床面付近の埋土を水洗選別し、その結果見つかった数片のうちの1つである。見つかった数片は同一個体もしくは同様の性格を有した鉄片であり、製品というより鉄素材である可能性があることから不定形板状鉄製品と呼ぶべきであろう。

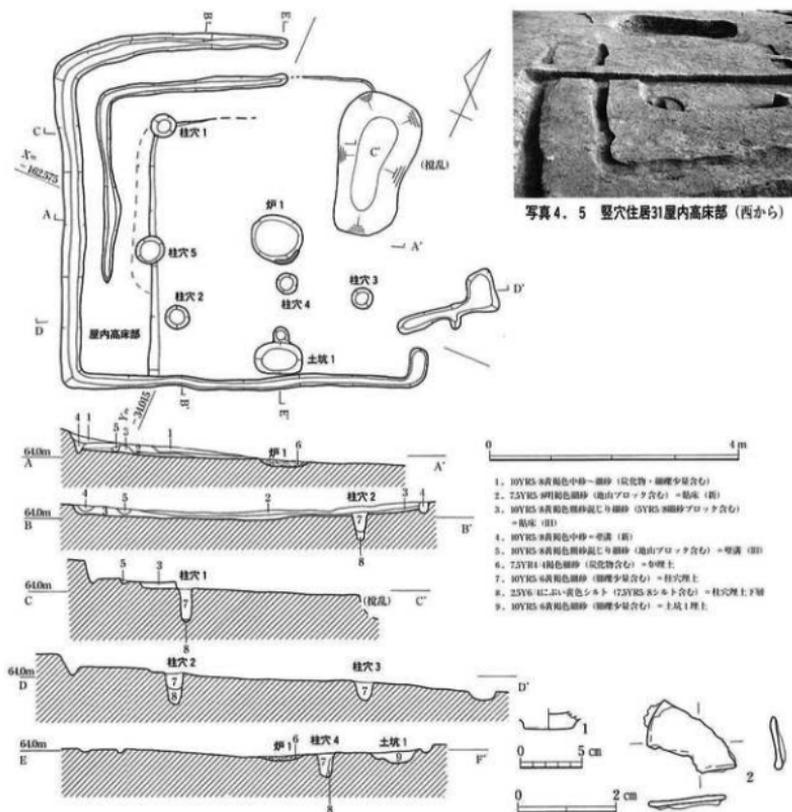


図4.10 A地区 竪穴住居31平面図・断面図(S=1/80)

出土土器は、古墳時代初頭まで下る可能性のある個体も含んでいるが、おおむね弥生時代後期中葉～後葉の範疇でとらえられる。図4.14は、底部片と高坏脚部のみで全体を復元できるものはなかった。3の壺底部と6の鉢底部は住居埋土からの出土である。2は壺の底部と考えられ、住居の床面直上から出土している。4は壺底部、5は鉢あるいは壺の底部で、壁溝からの出土である。鉢あるいは壺の底部と考えられる1は柱穴4から、7の高坏脚部は柱穴3からそれぞれ出土している。7はハケ後にヘラミガキ調整する脚部である。住居の存続時期は弥生時代後期後葉であろうか。

住居南端付近の埋土より砥石が1点出土している(図4.14-8)。灰褐色の石材で、凝灰岩製であろう。4面を砥石面として使用しており、いずれの面も長軸方向の擦痕がよくみえる。使用頻度が高いためか4面とも少し凹面を呈している。重量は269.1gである。石材や形態からみておそらく鉄製品用の砥石であろう。

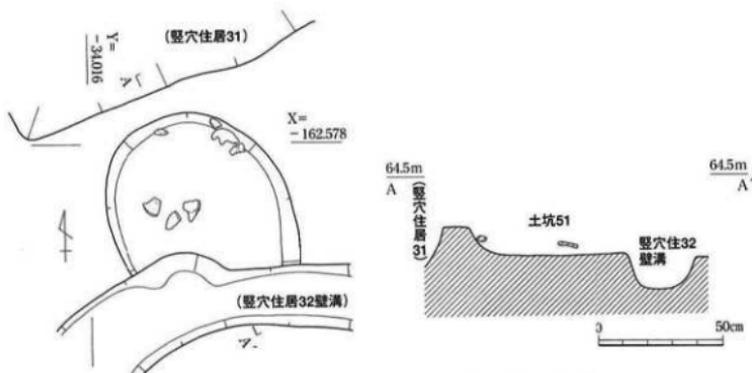


図4.13 A地区 土坑51平面図・断面図 (S=1/20)

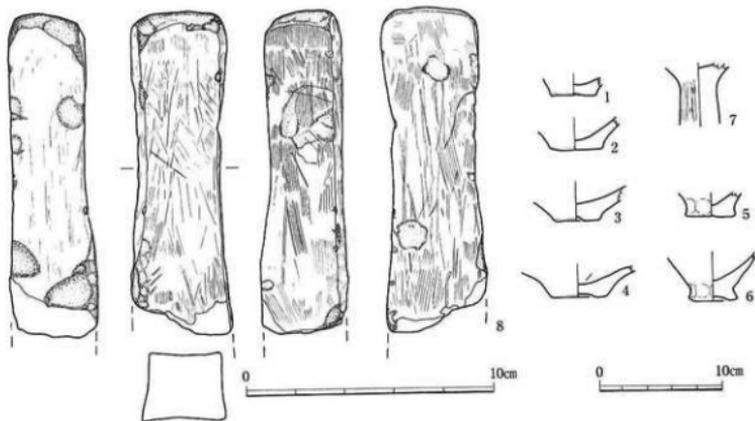


図4.14 A地区 竪穴住居32出土遺物 (S=1~7:1/4、8:1/2)

【竪穴住居41】(図4. 15~17)

F1-f1・f2・g1・g2地区で検出した方形の竪穴住居で、A地区で調査した竪穴住居の中で最も北側に位置している。住居の規模は、東西長615cm、南北長600cmのほぼ正方形を呈し、深さは15cmをはかる。住居面積は34.7㎡である。住居内の埋土は2層に分けられるが、いずれもうすい堆積しか残っておらず、上面はかなり削平を受けていると考えられる。

壁溝は西側のみが2重にめぐっており、他の部分では1重にめぐっている。2重になっている西側壁溝は、切り合い関係がはっきりとせず先後関係は明らかにできなかった。この壁溝の北東隅からは北東側方向にむかって1本の排水溝がまっすぐのびている。排水溝の規模は、長さ530cm、幅30cm、深さ20cmで、調査区北端付近までつづいている。

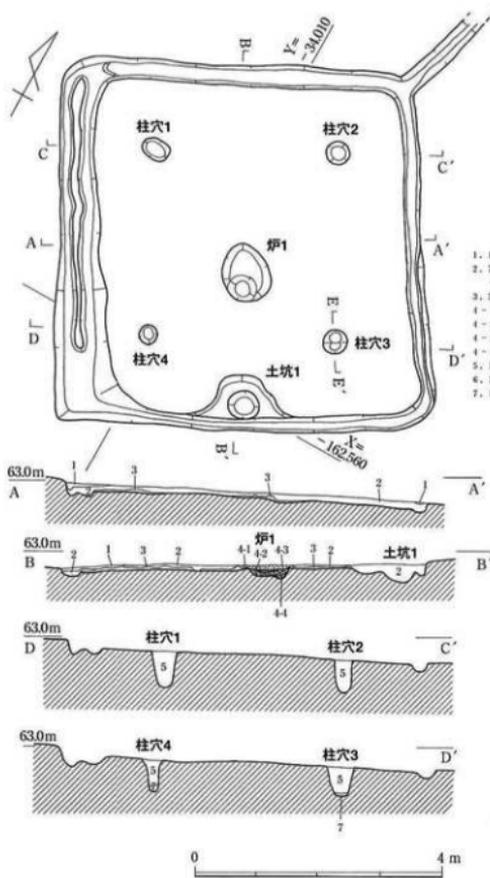


図4. 15 A地区 竪穴住居41平面図・断面図 (S=1/80)



写真4. 6 竪穴住居41土坑1(南西から)

1. HV86 赤褐色土層 (炭化物・繊維多く含む、土器片あり)
2. 7SV85 赤褐色土層 (粘土質アロク含む、炭化物少量含む)
→ 準埋土・土坑1埋土と同C
3. 5YR4 赤褐色土層 - 2SV6 赤褐色土層 (炭化物・繊維多く含む) → 埋土
- 4-1. 1PV85 赤褐色土層 (炭化物・埋土層少量含む) → 埋土
- 4-2. 1PV85 赤褐色土層 (炭化物・埋土層少量含む) → 埋土
- 4-3. 1PV85 赤褐色土層 (炭化物・埋土層少量含む) → 埋土
- 4-4. 1PV85 赤褐色土層 (炭化物・埋土層少量含む) → 埋土
5. HV85 赤褐色土層 (繊維少量含む) → 柱穴埋土
6. HV85 赤褐色土層 (2SV85 赤褐色土層・繊維多く含む) → 柱穴埋土上層
7. HV85 赤褐色土層 + 7SV85 赤褐色土層 (アロク含む) → 柱穴埋土下層

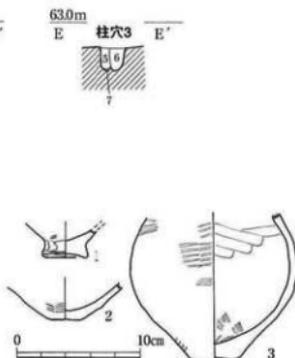


図4. 16 A地区 竪穴住居41出土土器 (S=1/4)

床面には貼床が1面認められ、最も厚いところでは8cmの厚さであるが、部分的に貼床が認められない箇所がある。貼床面上で支柱穴を4本、炉を1基、土坑を1基検出した。支柱穴は、深さ50~60cmである。柱穴3には建てなおしの痕跡が認められる。柱穴3・4の埋土下層にはシルト質の層が確認でき、柱を設置する際に柱穴底にシルト質の土を敷いたと推定できる。

炉1は、住居の中央に位置し、やや南北に長い楕円形を呈している。規模は、長軸95cm、短軸80cm、深さ20cmである。炉埋土には炭化物和焼土の層が互層になった状況を確認することができる。一部壁際

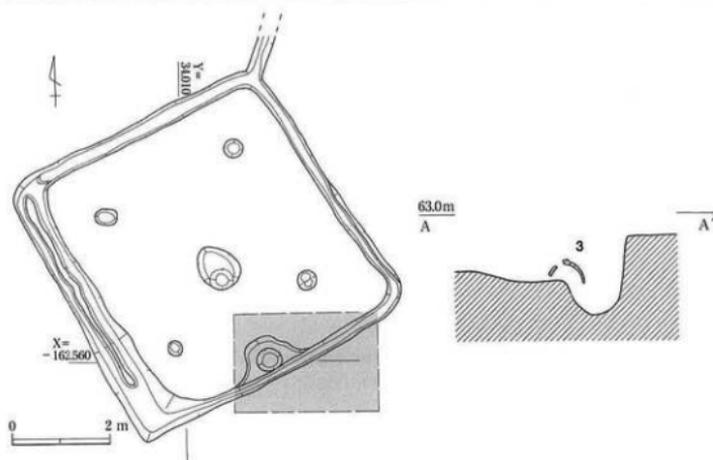
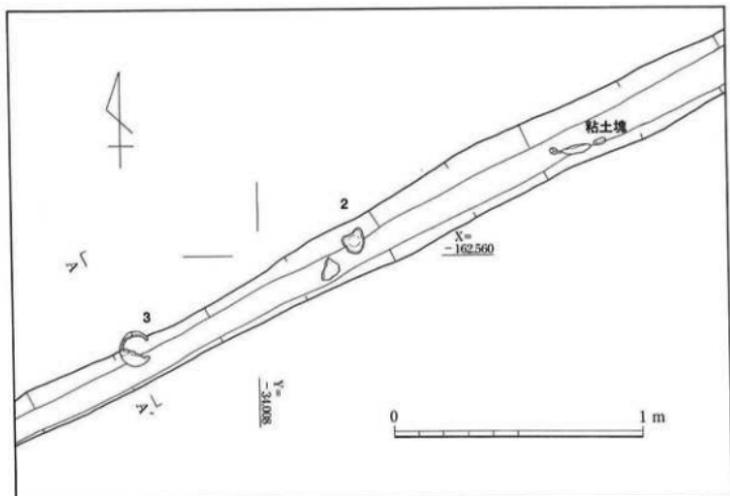


図4.17 A地区 竪穴住居41壁溝土器出土状況平面図・断面図 (s=1/20)

が被熱により赤変して焼土化した部分がみられる。

土坑1は、東西長160cm、南北長70cm、深さ30cmの規模をはかる。竪穴住居30・31と同様に南側壁溝の内側に接している。壁溝との切り合い関係は認められず、同時に機能していたと考えられる。土坑の南半部分は円形状に1段落ち込んでおり、北半部分も若干凹んでいる。この土坑1の形状は竪穴住居31の土坑1に類似している。

貼床面は1面しかないが、柱穴3に建てなおしの痕跡が認められることや西側壁溝が2重になっていることから、1回の建替えがおこなわれたことがわかる。2重になっている西側壁溝については前後関係が判然としなかったが、おそらく西側に拡張したものと考えられる。

南側壁溝内からは、甕の体部などの土器が数個体と粘土塊が数点出土しており、これらはほぼ床面に接して出土していることから住居の機能時から廃絶直後の所産であるといえる(図4・17)。壁溝内から出土した土器(図4・16)は、鉢底部(1)、甕と考えられる底部(2)、甕の胴部～底部(3)の3点である。1は外面にタタキとユビオサエが施され、2は外面にタタキの後ナデ調整がなされている。3の外面はタタキの後ナデが、内面はハケの後ナデが施される。これらの時期は弥生時代後期後葉～古墳時代初期の範囲でとらえられるであろう。なお南側壁溝から出土した粘土塊は、塊状で取り上げることができなかったため図示していない。またこれ以外の住居にともなう遺物はいずれも細片ばかりで図化しうるものはなかった。

【竪穴住居42】(図4・18～21)

F1-h1・i1地区で検出した方形の竪穴住居で、竪穴住居31・32の東側、竪穴住居50の西側に位置している。主軸は約45度西へ振っている。竪穴住居42は、南側壁溝の一部がブドウ畑関係の攪乱で切られているものの、今回検出した中では最も残りがよい竪穴住居である。住居の規模は、東西長535cm、南北長500cmで、深さは西壁では55cm、東壁では10cmをはかる。住居面積は25.0㎡である。住居の埋土は大きく2層にわけられ、そのうち上層堆積の1層とした下部からは須恵器片が数点出土している。このことからこの住居は廃絶後、古墳時代後期まで人為的に埋められることなく長期間凹み状になっていたことがわかる。

壁溝は、東側が2重にめぐっており、他の部分は1重である。南側壁溝の攪乱に切られる部分では、壁溝がやや内側に膨らんでいることから、この場所に竪穴住居30・31・41と同様の土坑があった可能性がある。壁溝南東隅からは、東方向にむかって排水溝が1本のびている。排水溝の規模は、幅25cm、深さ15cmで、排水溝の東端は古墳時代後期の溝44に切られている。なお排水溝が竪穴住居50の方へむかってのびていることから、竪穴住居42と50の同時併存は考えにくい。

床面は、貼床が1面確認でき、その厚さは20cmと今回調査した竪穴住居中で最も厚い貼床である。この貼床面上から主柱穴を4本、炉を1基検出した。主柱穴は、深さ55～65cmをはかり、建てなおしや抜き取りの痕跡は認められない。柱穴埋土下層にはシルト質の層が確認できる。

炉1は、長軸115cm、短軸110cm、深さ10cmの規模で、住居の中央に配置されている。炉埋土には炭化物が多く含まれており、壁際には被熱による赤変した部分はみられない。

東側壁溝が2重になっていることから建替えが1回あった可能性がある。しかし2本の壁溝がほとんど接していることや柱穴や貼床、炉などに建替えの痕跡がみとめられないことなどから、住居の建替えにともなって東側に拡張したというより、壁溝の掘りなおしなどの住居の修繕をおこなった結果壁溝が2重になったと推定したい。

床面直上および壁溝内からはほぼ完形の土器が数点出土している（図4・19・20）。今回の調査の中で最も良好な状態で検出した床面出土の土器群である。これらの土器は、壁溝の底に接しているものや床面直上のものがあり、住居の機能時から廃絶直後の土器群であるといえる。図4化した土器（図4・21）はすべて床面直上および壁溝内から出土した土器である。図4・21の土器番号は、図4・19・20の出土状況の土器番号と対応している。図4・21-3・4は出土状況図にはないが両者とも北側壁溝内から出土した土器で、3は鉢底部、4は鉢もしくは壺の底部である。4の外面にはタタキ後ナデが、内面にはハケの後ナデが施されている。5は壺底部で床面直上から出土した。6は北側壁溝内から2の台石の横で逆位の状態で出土した壺で、外面にヘラミガキが施されている。7はほぼ完形の鉢で、壁溝の北東隅から出土した。外面は横ナデ調整後タタキが施される。8はほぼ完形の小型器台で、北側壁溝内から出土している。外面にはヘラミガキが残る。図示した口縁部内面はナデで調整されるのに対し、図示した脚部内面はナデ調整をせず接合痕を残している。器形からみて本来は上下逆さである器種であろうが、内面を調整している側を上にして図示した。9は高坏脚部で、北東部の床面直上からの出土である。

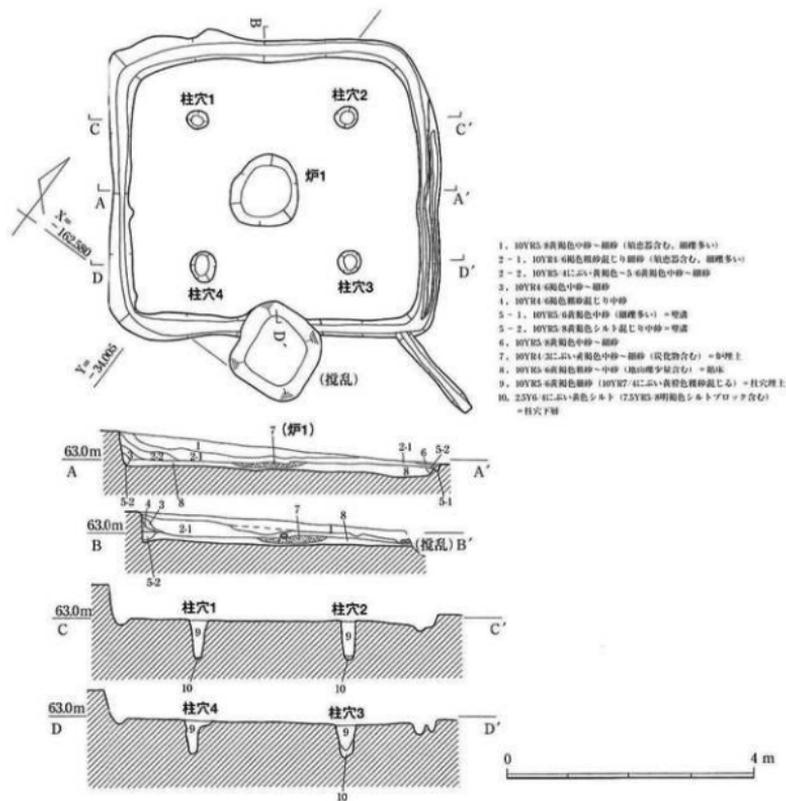


図4・18 A地区 竪穴住居42平面図・断面図（S=1/80）

調整は不明瞭で、脚部内面に鋭い屈曲部がみられる。10・11は板形高坏で、それぞれ南側壁溝、北側壁溝内から出土している。10は口縁部、脚端部とも欠損し、体部の調整も不明である。11は完形に復元できる個体で、外面の脚部～脚裾部および脚裾部内面にヘラミガキが施される。坏部内面も不明瞭ながらヘラミガキが観察できるが、坏部外面は表面剥離のため調整は不明である。これらの土器は弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の範疇におさまると考えられ、特に小型器台や高坏など古墳時代初頭（庄内式期）の所産と推定できる。この竪穴住居の機能時から廃絶直後の時期をおおむねこの時期にあてることができる。しかし図化できなかった床面出土の土器片の中に、布留系甕と思われる外面ハケ調整の体部片があり、この住居の機能～廃絶時期が庄内式期後半である可能性がある。

壁溝内から土器とともに出土した台石(2)は、板状の石材（泥岩製か）で完形品である。表裏面とも使用痕などは観察できないが、その出土状況から住居で使用された可能性は高い。

なお住居埋土中から完形の凹基無茎式の石鎌（図4. 21-1）が1点出土している。重量は0.5gである。その大きさや形態から縄文時代後期～晩期の所産であると推定でき、この住居にともなうものとは考えにくい遺物である。胸ヶ谷遺跡およびその周辺では縄文時代の遺跡・遺物は未発見であるので、縄文人が狩猟の際に置き忘れたものか、弥生人がそれを拾ってきたものであろうか。

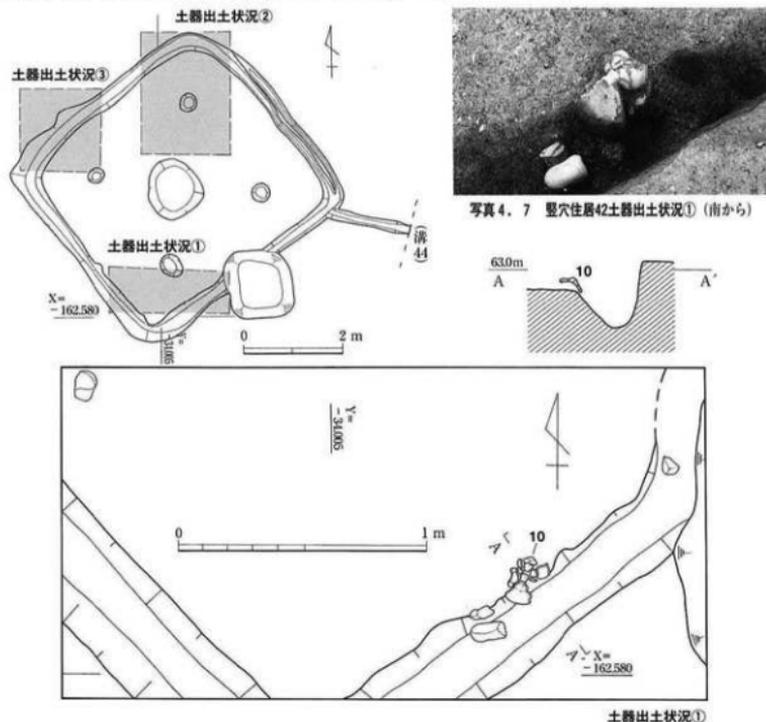
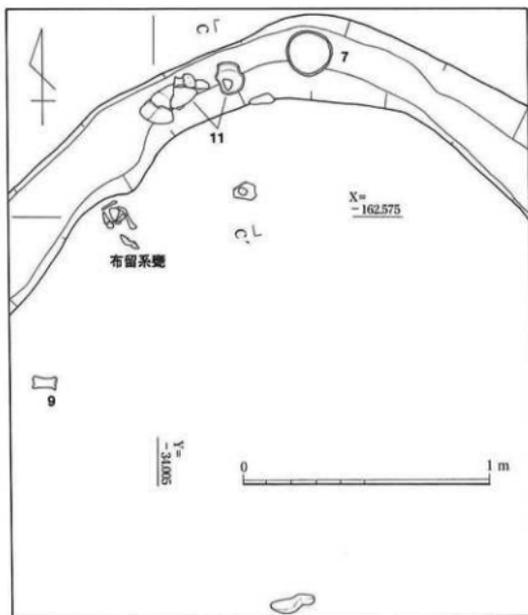


図4. 19 A地区 竪穴住居42土器出土状況①平面図・断面図（S=1/20）



土器出土状況②



土器出土状況③

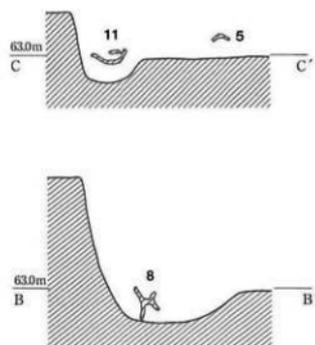


图 4. 20 A地区 竪穴住居42土器出土状況②③平面图・断面图 (S=1/20)

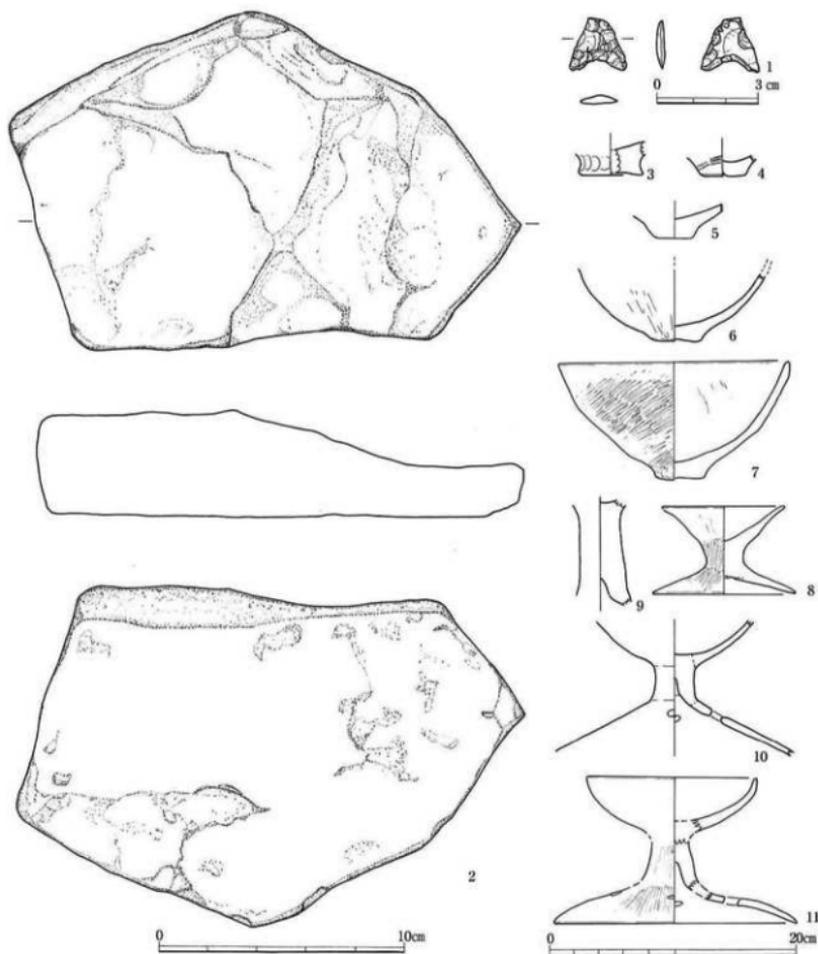


図4. 21 A地区 竪穴住居42出土遺物 (S=1 :2/3, 2:1/2, 3~11:1/4)

【竪穴住居43】(図4. 22・23)

F1-g1地区で検出した方形の竪穴住居で、竪穴住居41の南東側に位置する。住居の東側が削平されているため東側壁溝は検出できなかったが、かろうじて壁溝の北東隅が残存しており、東西長が530cmであることがわかる。住居北西隅の一部は攪乱によって切られている。住居の南半は、近現代の攪乱によって全体的に削平を受けている。そのため中央の炉1より南側では床面はほとんど失われており、特に南側壁溝が想定される位置付近では壁溝が完全に削られるまで掘り込まれている。残りのよい部分では住居内埋土が3層認められ、特に攪乱に切られていない西壁の一部は最も残りがよく深さ35cmをはかる。

住居面積は25.0㎡と推定される。

床面には、断面観察により貼床が2面確認できた。貼床の厚さは、古い段階のものは10cm、新しい段階のものは8cmで、いずれも比較的残りがよい。壁溝は、西側・北側で2重になっており、外側が新しい段階の貼床面に、内側が古い段階の貼床面にそれぞれ属している。このことからこの住居では1回建替えがおこなわれ、西側・北側に拡張したことがわかる。南側から東側へ拡張したかどうかは明らかにできなかった。排水溝は検出していない。

柱穴は計9本検出し、それらは深さ40~50cmの深い柱穴5本と、深さ10~25cmの浅い柱穴4本のグループに分けることができる。深い柱穴は住居の主柱穴であると考えられる。浅い柱穴は、柱穴3のように位置的に主柱穴を構成する可能性もあるが、他の主柱穴の深さと比較して別の機能を考えるべきか

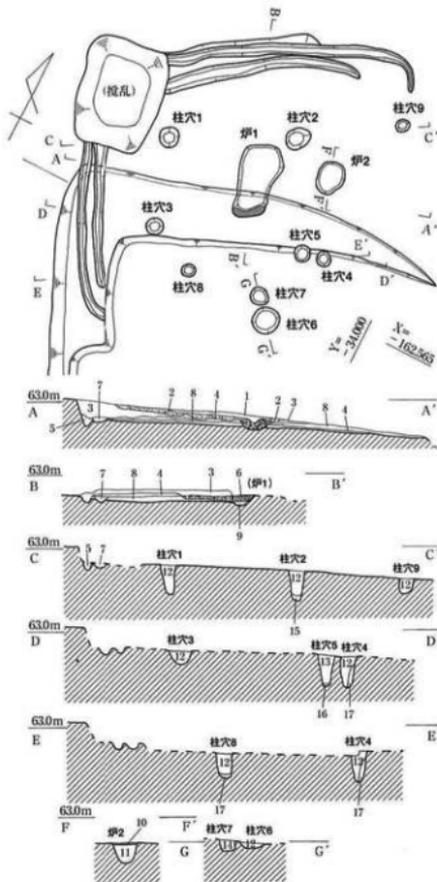


図4. 22 A地区 竪穴住居43平面図・断面図 (S=1/80)



写真4. 8 竪穴住居43炉1 (西から)

1. 10YR5-6黄褐色中砂 (土器片・炭化物少量含む、燧石多い)
2. 10YR5-6黄褐色中砂-細砂 (土器片・炭化物多く含む、燧石多い)
3. 10YR5-6黄褐色中砂 (土器片・炭化物少量含む、燧石多い)
4. 2.5YR5-8暗褐色細砂粒じり中砂 (燧石多い) = 築床 (前)
5. 10YR5-6黄褐色中砂-細砂 (燧石多い) = 築床 (前)
6. 7.5YR4-4暗褐色中砂-細砂 (炭化物・粘土塊・土器片含む) = ①1埋土上層
7. 10YR5-6黄褐色中砂 (炭化物・粘土ブロック少量含む) = 燧石 (前)
8. 10YR5-6黄褐色中砂-細砂 (燧石少量含む) = 燧石 (前)
9. 10YR5-6黄褐色細砂 (燧石少量含む) = ①1埋土下層
10. 2.5YR4-6黄褐色シルト (粘土) = ①2土層
11. 2.5YR5-8暗褐色中砂-細砂 (燧石少量含む) = ①2埋土下層
12. 10YR5-6黄褐色細砂 (燧石多い) = 柱穴埋土
13. 10YR5-6黄褐色細砂 (7.5YR5-8シルトブロック含む) = 柱穴埋土
14. 10YR5-6黄褐色細砂 (2.5YR4-5シルトブロック含む) = 柱穴埋土
15. 5YR-4Eラズベリ黄褐色シルト (7.5YR5-8シルト・炭化物含む) = 柱穴埋土下層
16. 2.5YR-6E黄褐色シルト (7.5YR5-8シルトブロック含む) = 柱穴埋土下層
17. 2.5YR-6E黄褐色シルト (10YR5-6燧石含む) = 柱穴埋土下層

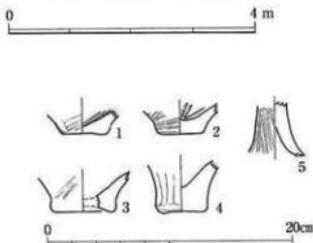


図4. 23 A地区 竪穴住居43上層出土土器 (S=1/4)

もしれない。柱穴9は深さや位置などから主柱穴とは考えにくい。柱穴6・7も主柱穴とは考えにくく、むしろ位置的に竪穴住居30や31・41にみられるような壁溝に接する土坑である可能性もある。竪穴住居31と41の土坑の例では南北に2つの凹みをもつ構造になっていることから、柱穴6・7を一連のひとつの土坑であったと考えることもできる。

炉は2基検出でき、住居に中央に炉1があり、炉1の北東側に炉2が配置される。炉1は、新しい貼床面で検出でき、長軸120cm、短軸70cm、深さ15cmの細長い構造をしている。南側の壁際には厚く焼土がみられる。埋土には全体的に炭化物が含まれている。炉2は、住居の中央から少しはずれたところに位置し、長軸55cm、短軸45cm、深さ35cmの規模である。炉の上面が焼土で充填されているが、炉の下層には焼土・炭化物は含んでいない。他の住居の中央炉と比較して、炭化物を含まないことなどから炉2は炊飯などにともなうものでなく、別機能を果たしたものである可能性が高い。炉2の埋土はすべて水洗したが、機能を特定できるものは含まれていなかった。炉2が通常の中央炉とは考えにくいことから、この住居では建替えが1回おこなわれたにもかかわらず新しい段階の中央炉しか検出されていないことになる。建替えの際に古い段階の炉をきれいに削平したとも考えられるが、炉の深さや貼床の厚さを考慮すると、建替え後も前段階の炉をそのまま使いつづけたか、もしくは前段階の炉と同位置につくりなおしたと推定したい。炉の平面形が正円形でなく長楕円になったことも2時期にわたって使われた結果であろうか。

出土遺物は削平が大きいこともあってそれほど多くない。固化した遺物(図4・23)はすべて埋土上層のものである。1～3は甕もしくは鉢の底部で、外面はタタキで調整される。タタキの後に、1にはユビオサエが、2・3にはナデが施される。4は鉢の底部であろうか。外面はユビナデで調整される。5は高脚甕で、外面にヘラケズリが施される。これらの遺物はいずれも弥生時代後期後葉～古墳時代初期の範疇であると推定できることから、この住居の廃絶時期がこの時期におさまると判断できる。

【竪穴住居50】(図4・24～26)

F-20h10・i10地区で検出した方形の竪穴住居で、竪穴住居42の東側に位置する。この時期の竪穴住居群中では最も東側につくられた住居である。南から東側は削平されている。西側の一部は古墳時代後期の溝41に切られているが、溝の底で壁溝の隅が検出できた。規模は、東西長550cmで深さは40cmである。南北長は削平のため明らかにはできないが、540cmを越える規模である。住居面積は24.6㎡と推定できる。

床面は、貼床が1面確認できるが、最も厚い部分でも6cmで全体的に残りが悪い。壁溝は、最終的には3重になっている部分もあるが、貼床面上では最も外側の壁溝1重のみが検出できた。この外側の壁溝より内側にある壁溝は、貼床面除去後の地山面での検出であり、この住居には少なくとも1回の建替えがあり、外側に拡張されたことがわかる。外側の壁溝は方形にめぐるが、内側の壁溝はやや隅丸方形にめぐっていた可能性がある。内側の壁溝の内、2重になっている部分があるが、その前後関係は確認できなかった。そのためこの住居の建替えが1回であったのか2回であったのか結論づけることはできなかった。なお排水溝は検出していない。

柱穴は、深さ30～50cmの計8本検出したが、そのうち柱穴1～5が主柱穴を構成すると考えられる。柱穴4・5には切り合い関係があり、柱穴4が5を切っている。このことからこの住居に建替えがあったことがわかる。柱穴6～8は位置的に主柱穴とは考えたいが、柱穴7はその規模や形態から他の主柱穴との違いがみられない。柱穴7は古い段階の住居の主柱穴、もしくは竪穴住居31の柱穴4と同

様に別の役割をもった柱穴なのであろうか。柱穴6と8は、その位置から竪穴住居30・31・41にみられるような土坑の可能性もある。特に柱穴8は壁溝に接している点からもその可能性が高いといえる。なおこの柱穴8は柱穴2に切られている。

炉1は、住居中央に1基検出でき、その規模は径60cm、深さ20cmである。炉を検出した部分は貼床面が削平されていると考えられ、炉は地山面での検出である。炉埋土には炭化物が多く含まれる。

住居内の埋土は大きく分けて2層であるが、そのうち埋土上層である1層中に多量の弥生土器が集中しており、竪穴住居廃絶後の凹みに廃棄されたものと考えられる(図4.25)。また埋土上層には炭化物がたまっている箇所もある。

竪穴住居50に向かって竪穴住居42の排水溝が向かってきており、この両者の同時併存は考えにくい。

出土遺物の大半は埋土上層からのものである。図化した遺物(図4.26)のうち18の高坏脚部が床面

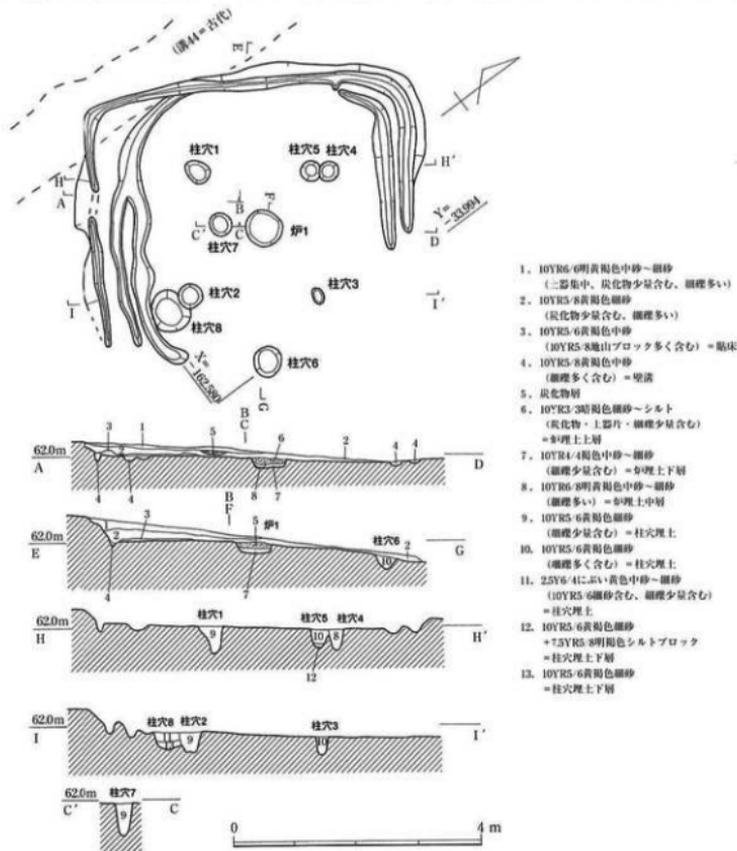


図4.24 A地区 竪穴住居50平面図・断面図 (S=1/80)

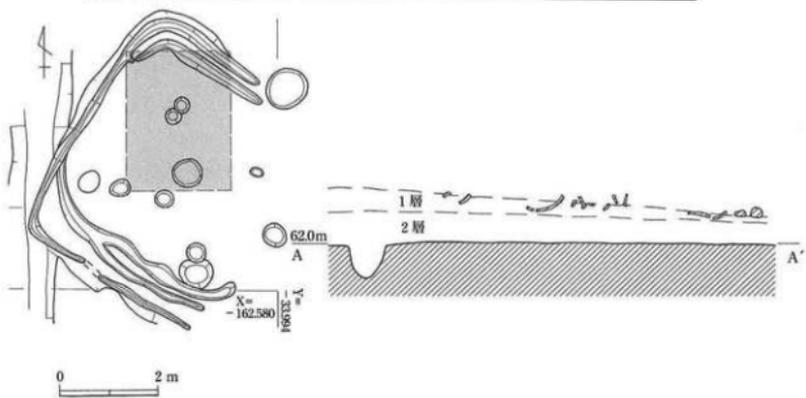
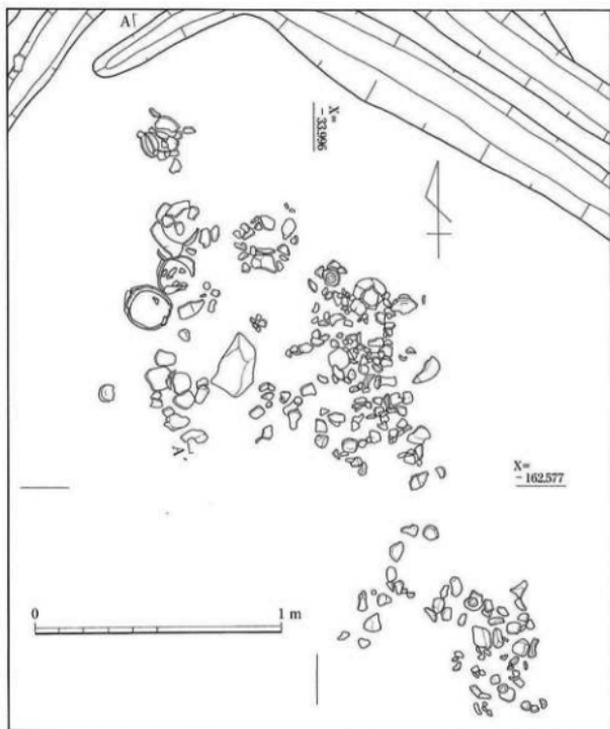


图 4. 25 A地区 竖穴住居50上層土器群出土状況平面图・断面图 (S=1/20)

付近から、20・22の鉄製品が炉1埋土から出土していて、それ以外はすべて埋土上層からの出土である。1～4は甕で、1は広口甕、2は円形浮文を貼りつけた二重口縁甕、3は直口甕の口縁部である。4は小形の甕と考えられる。5・6は甕で、下半部を欠いている。5は全体的に調整は不明瞭ではあるが、体部外面にはタタキが、体部内面にはケズリが施されている。口縁部は明瞭に外反し、内面の口縁部と体部境には稜が認められる。6は体部外面下半にタタキが、上半にハケが施されている。体部内面はヘラケズリの後にナデで調整されている。口縁部は明瞭に外反し、内面には稜が認められる。5・6とも内面にケズリを施すなど庄内式土器の影響を感じさせるが、胎土は在地のものと考えられる。なお駒ヶ谷遺跡では典型的な庄内甕は出土していない。7～12は甕もしくは鉢の底部で、外面はタタキ調整されている。内面はハケで調整したものやハケの後にナデで調整したものがみられる。13～18は高坏脚部である。脚部は下半部で明確に広がる形態のものが多くようである。調整が不明瞭なものが多いが、15の外面は縦方向のヘラミガキが施されている。18は透孔があり、脚部上半部からなだらかに広がっている。これらの土器の時期は弥生時代後期後葉を含む古墳時代初頭の範疇でとらえられるが、住居廃絶後に埋土上層に廃棄された遺物であるのでこの住居の使用時期を厳密に示すとは限らない。

図化した鉄製品は4点である(図4・26)。これ以外にも細かい鉄片が数片出土している。19・21は埋土上層の土器群に混じって出土し、20・22は炉1埋土を水洗した際に選別できたものである。19は錆で厚く覆われているため全体の形状は把握しにくい、破断面観察により刀子状の鉄製品であると推定できる。先端部は残存していると考えられる。20は先端部が残存し、鋭く尖っていることから針状鉄製品と考えられる。21は欠損部が大きいため元の形状を復元することは難しいが、破断面が方形を呈し茎状になっていることから鉄鍔である可能性がある。22も欠損部が大きいため本来の形状を推測することは困難である。鉄素材であった可能性があるので不定形板状鉄製品と呼称しておく。鉄鍔の可能性もあろうか。

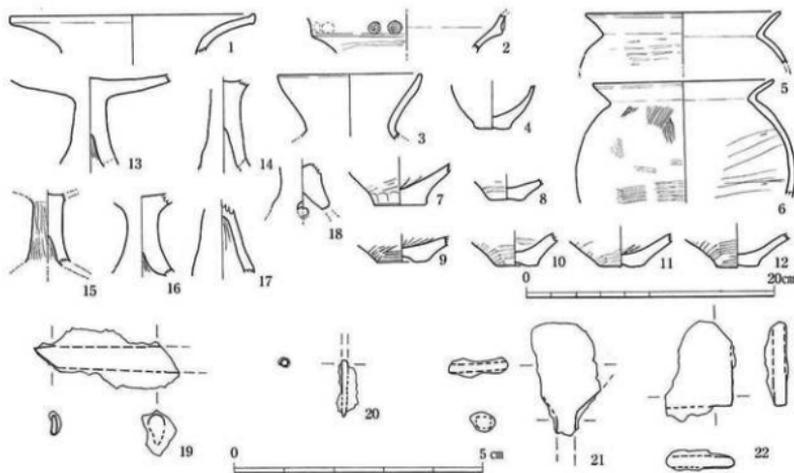


図4・26 A地区 竪穴住居50出土遺物 (S=1～18:1/4、19～22:1/1)

【櫛列290・櫛列291】(図4. 27・28)

櫛列290は、F1-g2・h2地区で検出した1列の柱穴列で、長さ455cmにわたって並んでいる。櫛列291は、F1-g3・f3地区で検出した柱穴列で、櫛列290と同様に長さ505cmにわたって1列に並んでいる。この2つの柱穴列は、780cmの間隔を開けてはいるものの一直線に並んでおり、一連の施設であったことが推定でき、櫛列としての機能が考えられる。両者が一連の櫛列であったとすると、ちょうど中央部分が柱穴もなく広く開いていることから、その部分は出入り口的な機能を果たす部分であると考えられる。A地区ではこれ以外に櫛列などの柱穴列は確認していない。

櫛列290は、柱穴60・85・86・87・88・90によって構成される。櫛列291は、柱穴92・93・94・95・96・97によって構成されている。櫛列290・291の各柱穴は深さが40~60cmと残りはよく、柱穴88と90など柱痕が確認できたものもある。両櫛列はともに6つの柱穴によって列が構成されており、両者の共通性をうかがわせる。これらの柱穴は一定の間隔では並んでおらず、建物のような建造物を構成する柱列ではないと想定できるので、櫛列であった可能性は高いといえる。また周辺にはこれらの柱穴と同様の規模である柱穴89と柱穴91が検出された。櫛列の周辺にはこの他に柱穴は見当たらず、この2つの柱穴については櫛列に関連する柱穴であろう。しかし櫛列とは一直線に並ばないので、その機能については明らかにできなかった。なお櫛列の周辺を一段掘り下げて確認してみたが、この他には柱穴などの遺構は検出できなかった。

この櫛列の時期については、櫛列290に属している柱穴60の埋土中層より弥生時代後期中葉~後葉のタキギ甕(図4. 28-1)が1個体出土していることから、弥生時代後期後葉以前であることがわかる。この土器は、櫛列廃絶の際に柱が抜き取られ、その直後に完形のまま口縁部を上に向けて柱穴に埋められたものであろうと推測できる。

櫛列は、堅穴住居20・23・30がある尾根上の平坦面からやや下がった緩斜面上に、等高線に沿うように

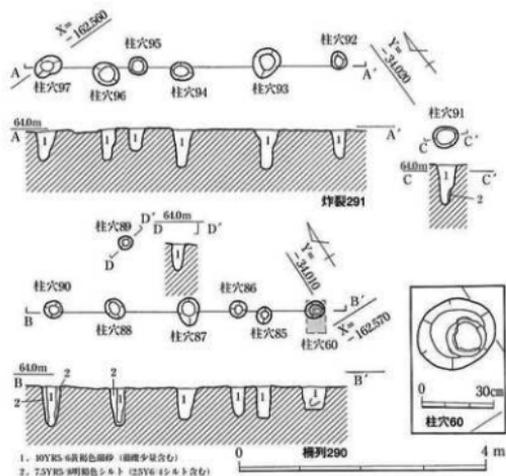


図4. 27 A地区 櫛列290・291平面図・断面図
(S=1/80)、柱穴60平面図(S=1/20)

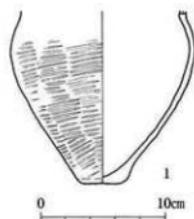


図4. 28 A地区 櫛列290
柱穴60出土土器(S=1/4)

つくられている。櫛列の機能については、これを屋根上平坦面の竪穴住居域と外側とを区画するものであったとすると、櫛列の内側には竪穴住居20・23・30・31・32が含まれることになり、櫛列中央部分は出入り口的な施設であったと解釈できる。この場合は、竪穴住居41・43は櫛列の外側に位置することになってしまうので、この櫛列が竪穴住居41・43の営まれる以前の時期のものであると考えなくてはならなくなる。またこの櫛列を屋根上の竪穴住居20・23・30と緩斜面の竪穴住居41・43を区画する施設であったとも考えられる。しかしこの場合は、竪穴住居群内を2つに区画するだけの格差が各竪穴住居には認められないなどその説明が難しくなる。したがって、櫛列と各竪穴住居との細かい時期差を確定できない現状では、竪穴住居41・43がつくられる以前の竪穴住居域と外部とを区画する櫛列であったと想定したい。

【土坑4】(図4・29・30)

F1-h3地区で検出した土坑で、規模は長軸175cm、短軸107cm、深さ11cmをはかる。土坑の平面形は南北にやや長い不整形な楕円形を呈している。竪穴住居23の東側に位置し、この竪穴住居より若干上層で検出した遺構である。つまり遺構検出状況からは竪穴住居23より後出する時期の土坑であると推定できるが、竪穴住居30など他の住居との先後関係を確定することは難しい。ただ調査区全体の遺構検出状況からみて、この土坑が弥生時代後期～古墳時代初頭の集落の廃絶時に近い時期の遺構である可能性が高い。

土坑内には全体的に土器片が多く含まれており、特に埋土上層からは多量の土器片が集中して出土している(図4・29)。土器片は細片ばかりで完形の土器がないため、これらは土坑内に廃棄された土器群であると推察できる。図化できた遺物(図4・30)は、壺蓋1点、底部片2点、高坏脚部片1点である。1は壺蓋で、体部を半分以上欠損しているが、器表面の残りはよく、外面に縦方向のヘラミガキを施し

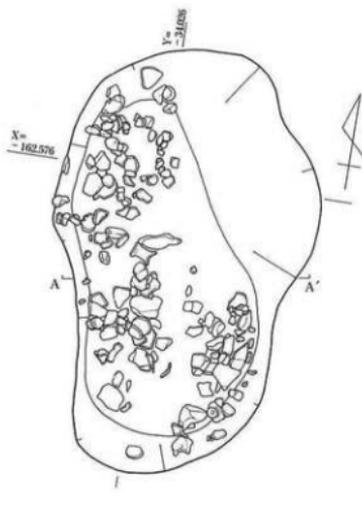


図4・29 A地区 土坑4平面図・断面図(S=1/20)

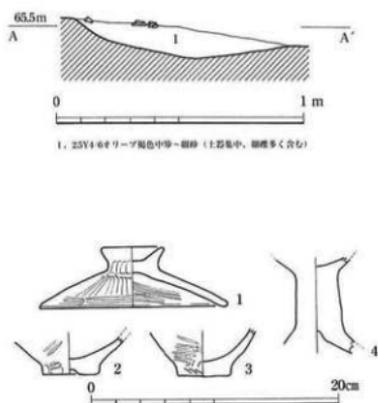


図4・30 A地区 土坑4出土土器(S=1/4)

た後に口縁部付近を横方向のヘラミガキで調整していることがわかる。内面にはハケ調整が確認できる。2は甕もしくは壺の底部で、3は甕あるいは鉢の底部である。両者とも外面はタタキの後ナデが施されている。4は高坏の脚部で、器表面が剥離しているため調整は不明であるが、脚部内面には鋭い屈曲部が認められる。いずれも弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の範疇におさまる遺物であると考えられる。この土坑に土器が廃棄された時期は、その時期であったと推定できる。このことは遺構検出状況から推定した時期とも矛盾しない。

【土坑53】(図4・31)

F1-g1地区で検出した土坑で、堅穴住居43と柵列290の中間に位置している。規模は、検出長450cm、最大幅160cmで、最も深いところの深さは20cmをはかる。南北に細長い形状を呈していて、一部西側へ分岐する部分もある。この土坑は細長い形状をしていることから、本来は溝として機能していた可能性がある。

土坑の中央付近の埋土上層からは土器が数片まとまった状態で出土しており、土坑埋没直前に土器が廃棄された状況であろう。ただこれらの土器片も含めてこの土坑から出土した遺物は細片ばかりであり、そのほとんどが体部片であったため図化することはできなかった。これらの遺物の時期は、いずれも弥生時代後期～古墳時代初頭の範疇におさまるものである。

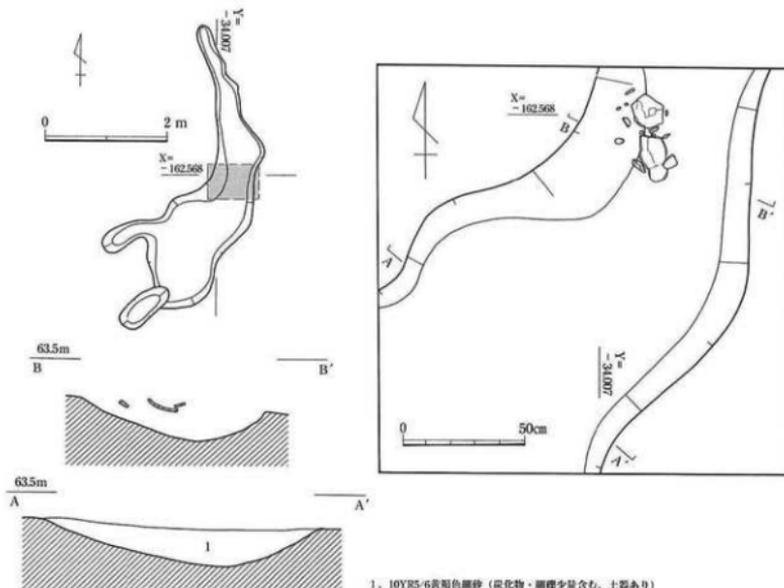


図4・31 A地区 土坑53平面図 (S=1/80)・断面図、土器出土状況 (S=1/20)

【土坑56】(図4. 32・34)

F 1 - h 2 地区で検出した土坑で、竪穴住居31の西側に位置する。平面形は長軸117cm、短軸68cmの長楕円形を呈し、深さ37cmをはかる。土坑の底には柱穴状に落ち込む部分が2箇所認められるが、掘り込みが2箇所あるため柱穴とは考えにくい。埋土上層には灰白色(10YR8/2)の塊状の粘土が確認できた。

埋土の中層からは弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と考えられる広口壺の口縁部が1個体出土している(図4. 34-1)。この土器は、器表面が剥離しているため内外面とも調整は不明である。

【土坑57】

F20-h10・g10地区で検出した土坑で、長軸70cm、短軸45cm、深さ15cmの規模である。この土坑からは弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の土器片数点と台石1点が出土している(図4. 34-2～5)。2は壺底部で、調整は不明である。3は甕もしくは鉢の底部片、4は壺の底部片と考えられ、3・4とも

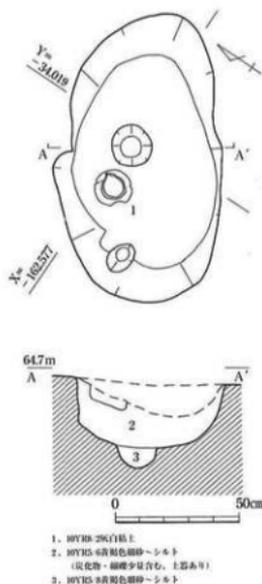


図4. 32 A地区 土坑56平面図・断面図 (S=1/20)



写真4. 9 土坑56土器出土状況(西から)

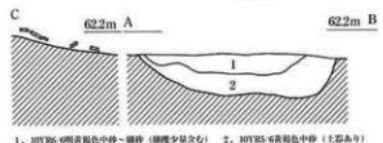
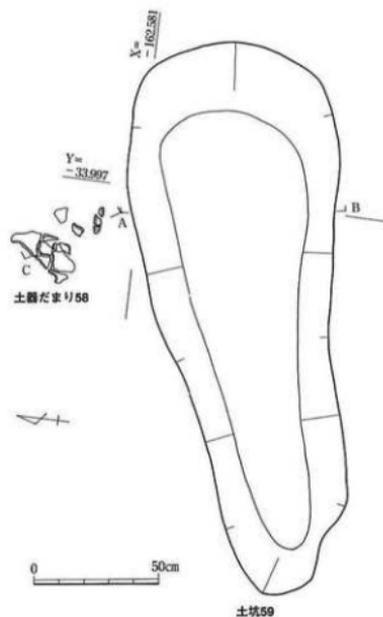


図4. 33 A地区 土坑59・土器だまり58平面図・断面図 (S=1/20)

外面はタタキ後ナデ、内面はハケ後ナデが施されている。5は完形の台石で、和泉砂岩製である。両面とも平坦面がみられることから砥石であった可能性もあるが、擦痕などの使用痕が観察できないことから台石としておく。

【土坑59・土器だまり58】(図4. 33)

ともにF20-i10地区で検出した近接する遺構で、竪穴住居50の南側に位置している。土坑59は、長軸227cm、短軸89cm、深さ17cmの規模で、平面形が東西に長い楕円形を呈している。その南側に接するように土器だまり58がみられ、両者は関連した遺構であると考えられる。また竪穴住居50に隣接することから竪穴住居に関連した遺構である可能性もある。遺構の検出状況からするとおそらく竪穴住居50と同じ時期の遺構であると考えられる。

土坑59からは図化できる遺物は出土していない。土器だまり58から出土した土器片も数が多いが、体部片ばかりで図化できるものはなかった。したがって、これら2つの遺構の細かい時期を判断することは難しいが、出土した土器片からおおむね弥生時代後期～古墳時代初頭の時期の遺構であると考えられる。

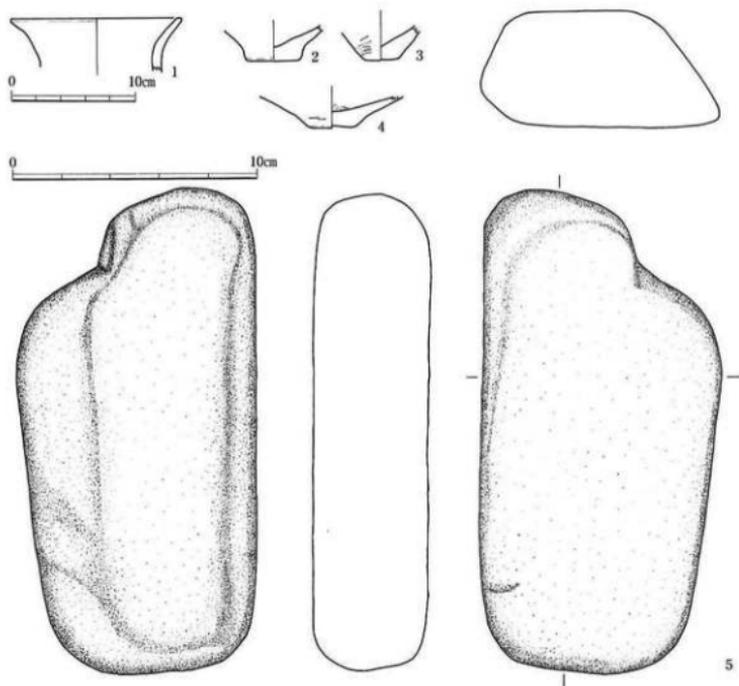


図4. 34 A地区 土坑56・57出土遺物 (S=1~4:1/4、5:1/2)

【焼土坑22】(図4. 35・36)

F 1 - i 3 地区で検出した焼土坑で、竪穴住居23の北東側に位置する。埋土に焼土や炭化物が多量に含まれているため、他の土坑と区別して焼土坑として扱うことにした。長軸115cm、短軸80cmの楕円形を呈し、深さは15cmである。埋土は炭化物で充填され、多数の土器片と若干の焼土片、小礫を含んでいる。

この焼土坑の埋土を水洗した結果、炭化米が数十個選別できた。この焼土坑の機能は、炭化米が検出されたことや、竪穴住居42などの炉に類似した形態と埋土を有していることなどから、炉のような火を焚く施設であると推定できる。焼土坑付近には柱穴や壁溝など竪穴住居の諸施設を構成する可能性がある遺構が全くみられないため、竪穴住居の炉と考えることはできない。そこでこの焼土坑については屋外炉であると判断している。この焼土坑の壁には後述する焼土坑17や45のような被熱によって赤変した箇所は認められない。

出土遺物については、弥生時代後期～古墳時代初頭と考えられる土器片が多く出土している。いずれも細片ばかりで図化できるものはわずかであった(図4. 36-1)。そのため細かい時期比定は困難である。この焼土坑からは鉄製品が1点出土している(図4. 36-2)。この鉄製品は全体的に錆で覆われているが、先端が残存しており針状の形状であることがわかるので、針状鉄製品と呼称しておく。体部は

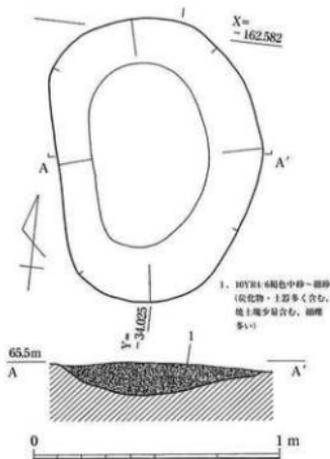


図4. 35 A地区 焼土坑22平面図・断面図 (S=1/20)

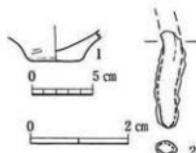


図4. 36 A地区 焼土坑22出土遺物 (S=1:1/4, 2:1/1)

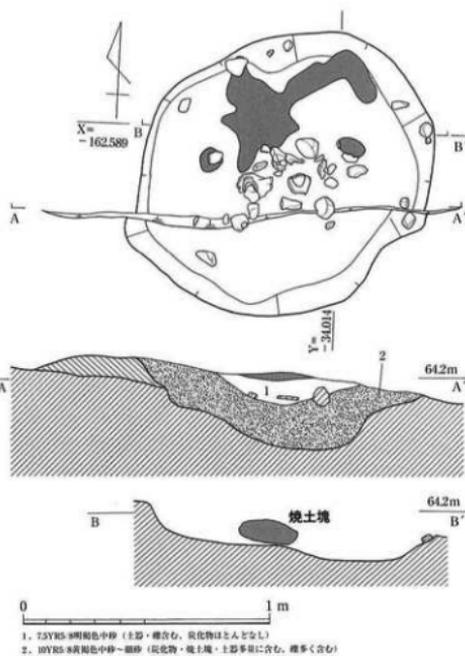


図4. 37 A地区 焼土坑46平面図・断面図 (S=1/20)

直線的でなく、わずかに「く」の字状に屈曲している。破断面は円形ではなく方形（菱形か長方形）である。

【焼土坑46】（図4. 37・38）

F1-i 2地区で検出した焼土坑で、竪穴住居32の南側に位置する。平面形はほぼ正円形を呈し、長軸120cm、短軸115cm、深さ30cmの規模である。北半の上面は若干攪乱による削平を受けている。焼土坑22と同様に埋土には炭化物、焼土、土器片、小礫が含まれている。特に埋土下層には炭化物が充填されている。焼土坑22と異なって焼土が塊状になって下層の広い範囲に広がっていた。また下層を中心に土器片や礫がまとまって出土している。埋土上層にも下層ほどではないが焼土塊がみられる。図化した土器（図4. 38-2~4）はいずれも弥生時代後期後葉~古墳時代初頭の時期の所産であると考えられ、焼土坑の埋没時期を示している。

焼土坑の壁には被熱によって赤変した箇所は認められない。この焼土坑の機能は、焼土坑22と同じく屋外炉であった可能性が考えられるが、焼土塊が集中してみられることなど焼土坑22とは異なる要素もみられる。また埋土を水洗した結果、炭化米などこの焼土坑の機能を判断できるものは含まれていなかった。

この焼土坑から土器片や礫などにもなって石杵が1点出土している（図4. 38-1）。和泉砂岩製で、全面が研磨されて整形されているが、一部に凹んだままで研磨が及ばない箇所がみられる。基部の

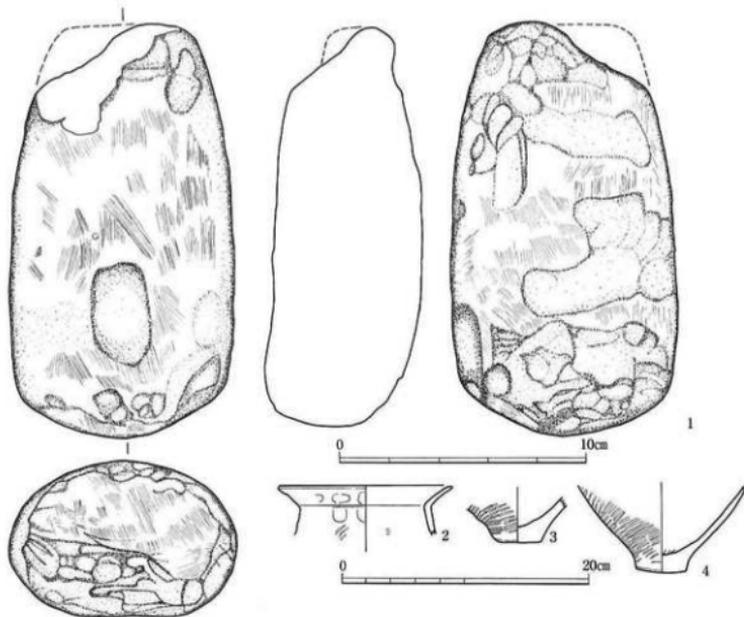


図4. 38 A地区 焼土坑46出土遺物（S=1:1/2、2~4:1/4）

一部を除いてほぼ完形品で、重量は1570.0gである。太形蛤刃石斧に似た形状をしており、太形蛤刃石斧の刃部に相当する部分（作用部）が面をなしてそこを磨面として使用している。また体部中央の作用部寄りの位置に親指大の凹みが敲打によってつくり出されている。おそらく石杵を持ちやすくするための凹みであろう。この凹みの存在や、作用部が使用によって平滑な面になっていることなど通常の磨石とは考えにくく、石杵と呼称することにした。作用部に赤色顔料などの付着は認められないが、形態は違うもののC地区の包含層から赤色顔料の付着した石杵（図6、27-5）が出土しており、この石杵も赤色顔料の生産に関わる遺物であろう。石杵が出土したことにより、この土坑が炊飯用の屋外炉ではなく、何らかの作業施設であったとも考えられる。

【溝2】（図4、39・40）

F2-i2・j2地区で検出したほぼ等高線にそって直線的に南北にはしる溝である。最大幅70cm、深さ15cmで、南側は調査区外につづいており、北端は竪穴住居32の南側までのびている。この溝は竪穴住居32より上層で検出し、竪穴住居32より後出する遺構であると考えられる。おそらく土坑4と同じく集落の廃絶時に近い時期の遺構であろう。

埋土上層を中心に廃棄されたような状態で多量の土器片が溝全体から出土している（図4、40）。これらの土器片は細片ばかりで完形品はほとんどなかったが、唯一調査区南端付近の溝内から大形鉢（図4、39-7）が完形で出土している。この大形鉢は、片口の口縁部をもち、底部は丸底になっており、古墳時代初頭（庄内式期）の特徴を有している。外面は、体部下半から底部にかけてケズリの後ナダやユビオサエが施されている。体部上半は横方向のヘラミガキで調整されている。内面は、口縁部付近に横方向のケズリが施されている。大形鉢は口縁部を上にした状態で溝の上層におさめられていた。鉢内部の土を水洗した結果、歯などの骨片が数点選別できた。骨片の残りはあまりよくなかったが、この鉢に関しては廃棄された土器ではなく土器棺としての埋葬施設であると推測できる。土器棺の蓋となるような土器片は出土していない。なお大形鉢をおさめるための掘方はみられず、埋没直前の溝に埋設されたものであろう。

大形鉢以外の出土土器（図4、39-1～6・8）も弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の範囲におさまると考えられる。1は壺底部で、外面はヘラミガキ調整されている。2～6は甕または鉢の底部である。8は高坏脚部であるが調整は不明である。

出土した土器などから溝が埋没した時期は弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と考えられ、その時期に多量の土器が投棄されたと推定できる。そして溝が最終的に埋没する前に大形鉢がおさめられたと考えられる。つまりこの大形鉢が示す古墳時代初頭がこの溝の最終埋没時期であり、遺構検出状況からの所見と矛盾しない。

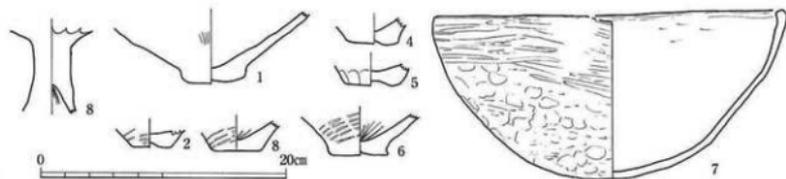


図4.39 A地区 溝2出土土器 (S=1/4)

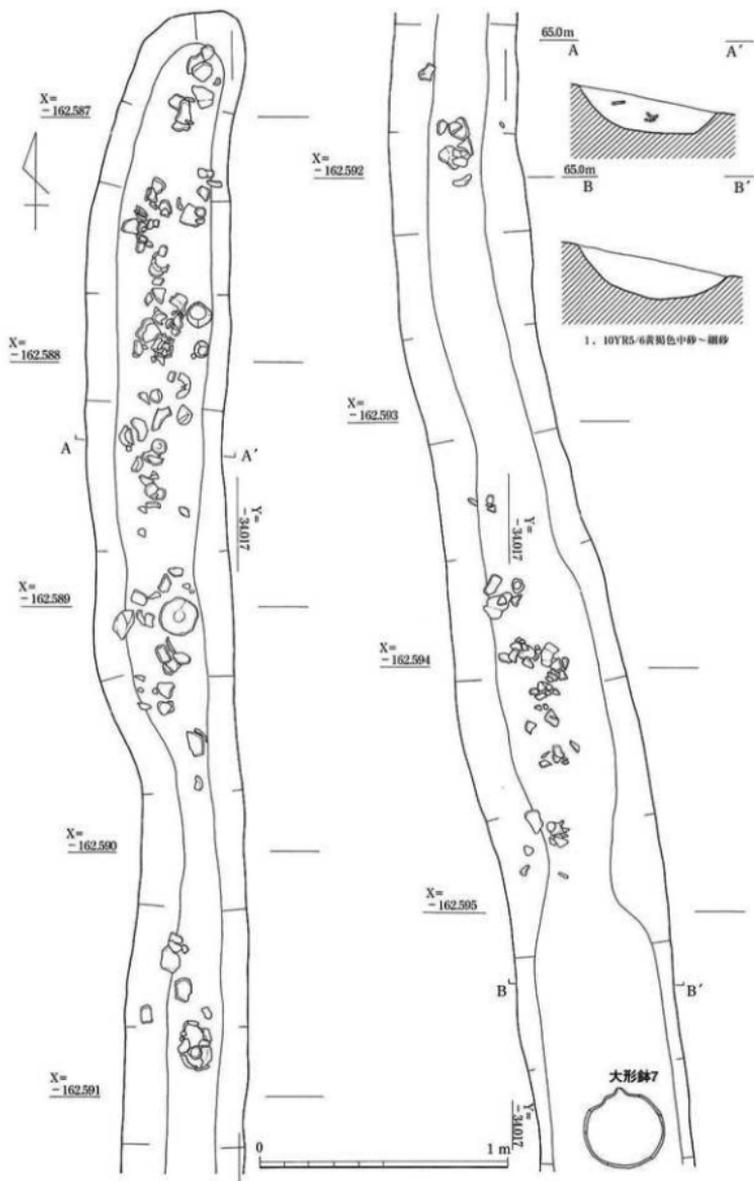


图 4. 40 A地区 溝 2 平面图·断面图 (S=1/20)

【溝49】(図4・41・42)

F 1 - h 1 地区で検出した溝で、竪穴住居42の北側に位置する。最大幅170cm、深さ20cmの溝で、東端が攪乱に切られている。溝は東西にのびて、西側は北に直角に折れ曲がっている。また一段浅くなって南側に分岐する部分もある。埋土は2層に分けることができ、その上層には土器片や礫が多量に含まれている。おそらく溝の埋没する所に土器片などを廃棄したものと考えられる。土器片はほとんどが細片で図化できるものは少なかった。そのため細かい時期について判断しがたいが、図化できた鉢または壺の底部(図4・42-1・2)の特徴から弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の所産であると考えられる。したがって溝の機能～埋没時期はこの時期であると推定できる。

この溝は竪穴住居42と近接して、軸を同じくすることから、竪穴住居42に関連する溝であった可能性がある。ただし竪穴住居よりレベルが低い位置にはないので、排水溝として機能していたとは考えられない。

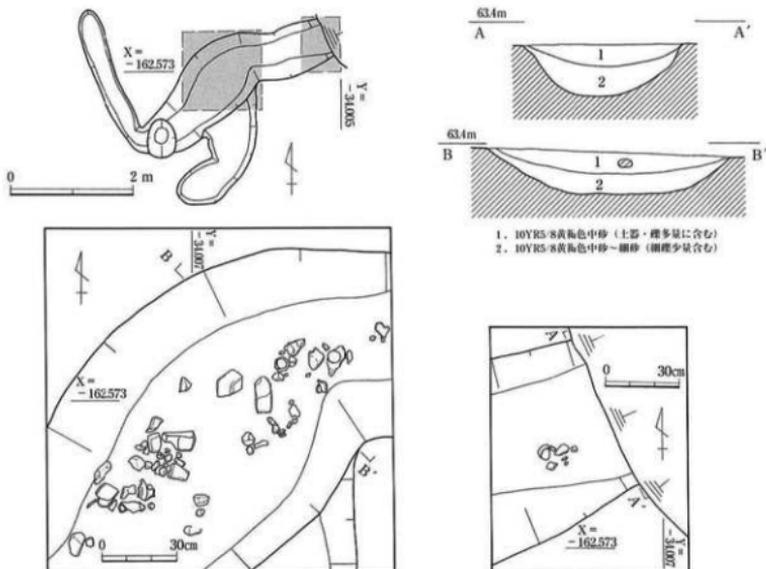


図4・41 A地区 溝49平面図(S=1/80)・断面図、土器出土状況(S=1/20)



写真4・10 溝49土器出土状況(東から)

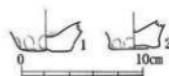


図4・42 A地区 溝49出土土器(S=1/4)

第2節 古墳時代後期～古代の遺構・遺物

A地区の東半部（2A地区）、つまり尾根斜面中腹以下の領域では、多数の柱穴が確認された。複数の柱穴からTK10型式以降の須恵器片が出土することから、これらの大半は古墳時代後期～奈良時代に属する可能性が高い。また、これらの柱穴以外にも、竪穴住居・土坑・焼土坑・溝などが検出されており、埋土からは古墳時代後期～古代の土器が出土している。

このように、A地区東半部の傾斜地には、古墳時代後期～奈良時代の居住域を構成する諸施設が複合的に検出されており、集落の構造が目まぐるしく見られる。これらの建物群は、さらに東側の丘陵裾～低地部における既往の調査区域（財）大阪府文化財調査研究センター1999「駒ヶ谷遺跡」で検出された古代集落から連続して形成されていたと考えられる。今回の調査では、従来確認されていた当遺跡の古代集落の西限部を確認確定したことになる。各遺構の詳細は以下の通りである。

【竪穴住居500】（図4.43・44・45）

F20j5・j4地区で検出された平面方形の竪穴住居跡。東半部は基盤層が流出しており、遺構の形状は不明である。完存しているのは西辺部のみで、北北西～南南東ラインに沿っている。この西辺の長さは約2.9m、深さは約0.08mであった。恐らく旧地表面は削平を受けており、実際の住居の掘りこみ深長は数十cmを見込む必要があろう。この西辺部の南寄りには竈下半部が良好な状態で残存していた。幅約0.48m、長さ約1.75mの範囲が平面長楕円形に掘りこまれており、内部には土器片・礫などが散乱していた。埋土の最下層には、焼土層が確認され、火を焚いていたことは確実である。ただ、焚口付近に粘土を貼った痕跡は確認できず、竈の上部の構造を類推するデータは得られていない。

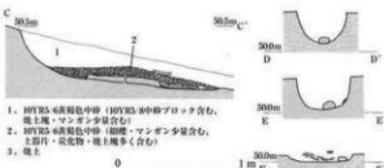
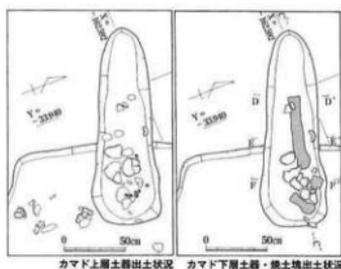


図4.44 A地区 竪穴住居500
カマド平面図・断面図（S=1/4）

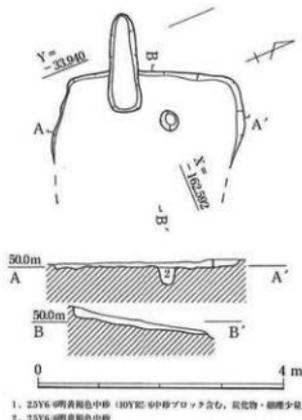


図4.43 A地区 竪穴住居500平面図・断面図（S=1/80）

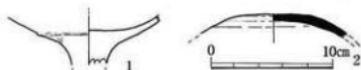


図4.45 A地区 竪穴住居500出土土器（S=1/4）

住居跡の埋土中からは、土師器・須恵器の小片が出土しているが僅少である。図化可能な個体は、図4.45に掲載した2点である。図4.45-1は土師器高坏で、坏部の屈曲部に小さく段が形成される形態である。図4.45-2は須恵器坏蓋で、つまみのつかない形状である。後者の須恵器はその形状から古墳時代後期後半の所産と考えられる。住居跡の埋没時期も6世紀後半を想定しておきたい。

【掘立柱建物292】(図4.46)

F20h 9地区で検出された掘立柱建物。柱穴73・74・75・76・77・78・79によって構成される。東半部は遺構面流出のために検出不可能であり、柱穴73～76によって構成される北北西-南南東方向の長軸列と、それに直交する方向の柱穴73・77・78によって構成される短軸列を確認したにとどまっている。検出された長軸長は約480cmで柱芯間隔は160cm程度、短軸長は約345cmで柱芯間隔は約170cmの平面規模である。

これらの柱穴配置からは、3×2間以上の規模が想定できる。3×2間規模を想定すれば、柱穴79は上屋を支える棟支の機能をもっていたとも考えられよう。この柱穴の位置は、長軸の側列に対応していないことから床支の梁材を組むための柱とは考えられず、当建物は床構造をもたない平地式住居であったと想定できる。柱穴からは少量の土師器・須恵器片が出土するものの所属時期の判別は困難である。周囲の建物群との関連から古墳時代後期～古代に機能していたと想定したい。

【掘立柱建物293】(図4.47)

F20H 9地区で検出された掘立柱建物。柱穴80・81・82・83によって構成される。東半部は遺構面流出のために検出不可能であり、柱穴80・81・82によって構成される南北方向の柱列とその南端から東西方向に柱穴83を確認している。柱穴80・81・82列は長さ約410cmで柱芯間隔は約210cmの平面規模である。一部の柱穴を検出しただけのため、全体の建物プランは明確でないが、最小で2×2間の規模が想定で

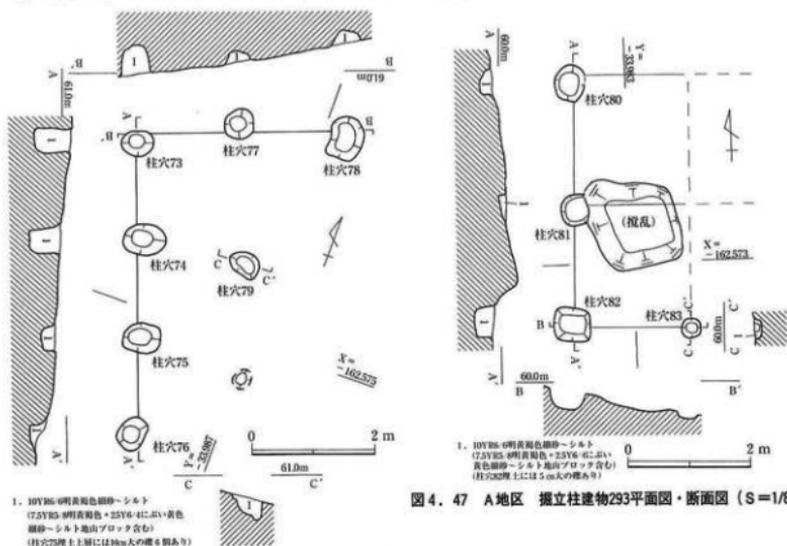


図4.46 掘立柱建物292平面図・断面図 (S=1/80)

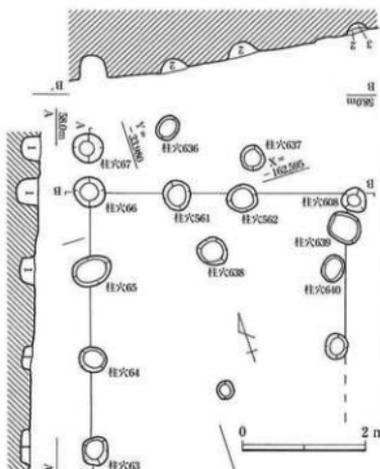
図4.47 A地区 掘立柱建物293平面図・断面図 (S=1/80)

きる。柱穴からは少量の上石器・須恵器片が出土するものの所属時期の判別は困難である。周囲の建物群との関連から古墳時代後期～古代に機能していたと想定したい。

【掘立柱建物294】(図4.48・49)

F20j9・j8地区で検出された掘立柱建物。柱穴63・64・65・66・561・562・608により構成される。南東半については遺構面流出のため柱穴を検出できず、北北東-南南西方向の柱穴列(柱穴63・64・65・66)とそれに直交する西北西-南南東方向の柱穴列(柱穴66・561・562・608)を中心とする柱配列だけが確認できた。北北東-南南西方向の柱穴列長は約420cmで柱芯間隔約160cm、西北西-南南東方向の柱穴列長は約420cmで、柱芯間隔は約170~80cmと均一ではない。検出された柱穴配置からは3×3間以上の平面規模が想定される。ただし、南端部に関しては調査区外のため、柱列の有無は判断できない。現状では平面正方形のプランにみえるが、実際には柱列はさらに南側に延びる長方形の平面形態であったかもしれない。側柱列の内側に明確な床支えの柱穴列が見当たらないため、平地式住居の構造をとっていたと想定できる。

柱穴67の埋土中からは図4.49に示す土器器碗が出土している。深い半球形の形態や内面に施された放射状のヘラミガキ調整などの属性から飛鳥時代の所産と考えられる。その他の柱穴からは、土器器・須恵器片が出土するものの詳細な時期判断の可能な個体は見当たらない。図4.49の土器の所属時期から、当建物は7世紀に設営されたものと考えたい。

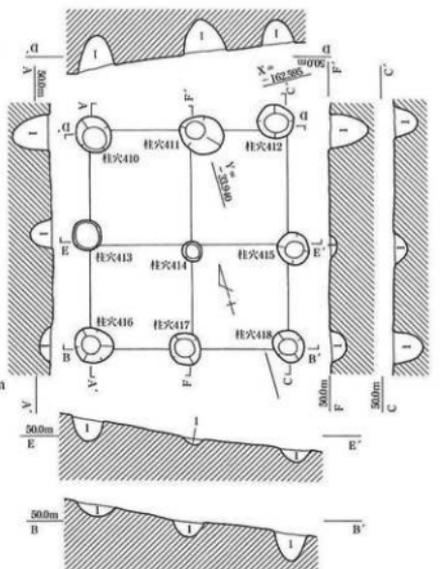


1. 10YR86-6明黄色細砂-シルト
(7.5YR5-8明黄色+2.5Y6-41.2黄-黄色細砂-シルト地山ブロック含む)
2. 10YR5-6黄褐色中砂-細砂 (塵多い、マンガン含む)
3. 10YR5-6黄褐色中砂-細砂 (7.5YR6-8暗色シルト含む)

図4.48 A地区 掘立柱建物294平面図・断面図 (S=1/80)

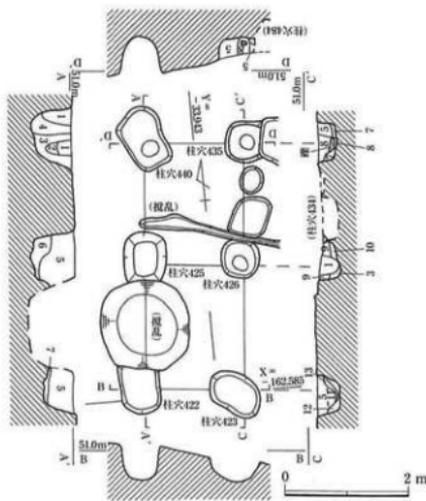


図4.49 A地区 掘立柱建物294柱穴67出土土器 (S=1/4)



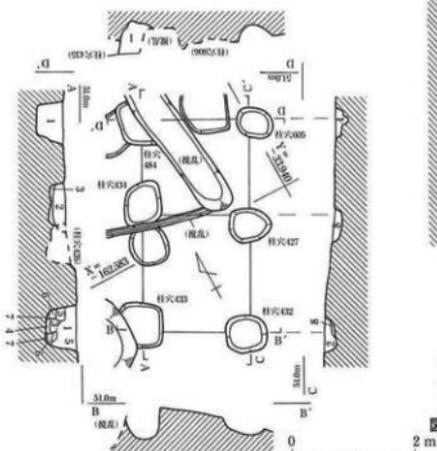
1. 10YR5-41黄褐色細砂

図4.50 A地区 掘立柱建物409平面図・断面図 (S=1/80)



1. 10YR5 4C2.5黄褐色中砂 (灰化土・細礫含む) = 柱礎
2. 10YR5 4C2.5黄褐色中砂 (細礫なし) = 柱礎
3. 10YR5 6黄褐色中砂 + 25Y7 3.5黄褐色シルト
4. 10YR5 6黄褐色中砂 (25Y7 3.5シルト・細礫含む)
5. 10YR5 6黄褐色中砂 - 中砂 (礫混じり)
6. 25Y7 3.5黄褐色シルト + 7.5Y 8.6 8シルト
7. 10YR5 6黄褐色細砂 + 7.5Y 8.6 8シルト = 柱礎
8. 10YR5 6黄褐色細砂 = 柱礎
9. 10YR5 6黄褐色細砂 + 7.5Y 8.6 8細砂
10. 7.5Y 8.6 8細砂含む
11. 10YR5 6黄褐色細砂 + 10YR5 4黄砂
12. 10YR5 4C2.5黄褐色中砂
13. 10YR5 3C2.5黄褐色中砂

図4.51 A地区 掘立柱建物501平面図・断面図 (S=1/80)



1. 10YR5 6黄褐色中砂 (7.5Y 8.6 8細砂含む)
2. 10YR5 6黄褐色中砂 (礫含む)
3. 7.5Y 8.6 8細砂 + 10YR5 6黄褐色中砂 = 柱穴
4. 10YR5 4C2.5黄褐色細砂 (7.5Y 8.6 8中砂含む) = 柱礎
5. 7.5Y 8.6 8棕色中砂地山アロツク
6. 10YR5 6黄褐色中砂 + 7.5Y 8.6 8棕色中砂 (25Y7 3.5シルト含む)
7. 25Y7 3.5黄褐色シルトアロツク
8. 10YR5 6黄褐色中砂 + 10YR5 8黄褐色細砂 + 中砂

図4.53 A地区 掘立柱建物503平面図・断面図 (S=1/80)

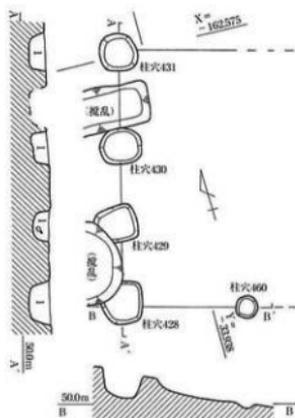
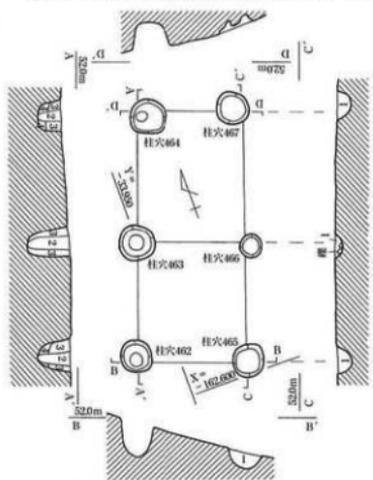


図4.52 A地区 掘立柱建物502平面図・断面図 (S=1/80)



1. 10YR5 6黄褐色中砂 - 細砂 (細礫含む)
2. 10YR5 4C2.5黄褐色中砂 - 細砂 (細礫少量含む) = 柱礎
3. 10YR5 6黄褐色中砂 (7.5Y 8.6 8中砂含む)
4. 10YR5 6黄褐色中砂 - 細砂 (7.5Y 8.6 8 + 25Y7 3.5細砂含む)

図4.54 A地区 掘立柱建物504平面図・断面図 (S=1/80)

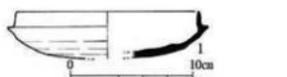


図4.55 A地区 掘立柱建物504柱穴463出土土器 (S=1/4)

【掘立柱建物409】(図4.50)

F20j5・J4地区で検出された掘立柱建物。柱穴410・411・412・413・415・416・417・418による側柱列に構成され、2×2間で側柱列内側の中央部に柱穴414を配する平面形態をとる。当建物に関しては、比較的平坦面で検出されたため遺構面の流出などは考えられず、ほぼ完全な柱穴配置を確認したものと思われる。長辺は北北東-南南西方向で長さ約340cmで柱芯間隔約170cm、短辺は長辺に直交する方向で長さ約320cmで柱芯間隔約160cmの平面規模である。中央に配された柱穴414は、上屋の棟支えあるいは床支えの梁材を支持する機能を果たしていたと考えられ、床を有する建物構造も推定できる。柱穴410からは少量ながら飛鳥~奈良時代の須恵器片が出土することや、周囲の掘立柱建物の時期などから古代に機能していたと想定したい。

【掘立柱建物501】(図4.51)

F20i5地区で検出された掘立柱建物。柱穴422・423・425・426・435・440により構成されるが、2×1間で極端に小型の不自然な平面規模・形態となるため、さらに東側に柱穴列が展開していた可能性が高い。ただ、他の遺構との重複などのため東半部の柱穴列については明確ではない。柱穴440・425・422または、柱穴435・426・423により構成される列はほぼ南北方向に並び、どちらも長さ約400cmで柱芯間隔は約200cmの規模である。柱列の内側の側柱に対応する位置に柱穴がみられることから、床支えの梁の設営が可能な柱配置であり、床構造をもつ掘立柱建物であったと推定できる。柱穴からは少量の土師器・須恵器片が出土するものの所属時期の判別は困難である。周囲の建物群との関連から古墳時代後期~古代に機能していたと想定したい。

【掘立柱建物502】(図4.52)

F20h4地区で検出された掘立柱建物。柱穴428・429・430・431・460により構成される。遺構面流出により東半部は柱穴が確認できず、北北西-南南東方向の柱穴列(柱穴428・429・430・431)と直交する方向に柱穴460を確認したにとどまっている。長辺となる柱穴列の全長は約420cmで柱芯間隔は約160cm程度である。おそらく3×2間以上の規模の建物であったと考えられるが詳細は不明である。柱穴からは少量の土師器・須恵器片が出土するものの所属時期の判別は困難である。周囲の建物群との関連から古墳時代後期~古代に機能していたと想定したい。

【掘立柱建物503】(図4.53)

F20i5地区で検出された掘立柱建物。柱穴427・432・433・434・484・605により構成されるが、2×1間で極端に小型の不自然な平面規模・形態となるため、さらに東側に柱穴列が展開していた可能性が高い。ただ、他の遺構との重複などのため東半部の柱穴列については明確ではない。柱穴433・434・484または、柱穴432・427・605により構成される列はほぼ北東-南西方向に並び、どちらも長さ約360cmで柱芯間隔は約180cmの規模である。柱列の内側の側柱に対応する位置に柱穴がみられることから、床支えの梁の設営が可能な柱配置であり、床構造をもつ掘立柱建物であったと推定できる。各柱穴からは土師器・須恵器の細片しか出土していない。ただ柱穴485から飛鳥~奈良時代のものと思われる土師器小片が出土していることや、周囲の建物群との関連から古代に機能していたと想定される。

【掘立柱建物504】(図4.54・55)

F20j5地区で検出された掘立柱建物。柱穴462・463・464・465・466・467より構成されるが、2×1間で極端に小型の不自然な平面規模・形態となり、さらに東側に柱穴列が展開していた可能性が高い。他の遺構との重複などのため東半部の柱穴列については明確ではない。柱穴462・463・464また、柱穴

465・466・467により構成される列はほぼ北東-南西方向に並び、どちらも長さ約400cmで柱芯間隔は約200cmの規模である。柱列の内側の側柱に対応する位置に柱穴がみられることから、床支えの梁の設営が可能な柱配置であり、床構造をもつ掘立柱建物であったと推定できる。柱穴463からは図4.55に示す須恵器杯身が出土している。TK10型式に相当すると考えられ、この須恵器杯身の所属時期から当建物の設営時期も古墳時代後期の可能性が高い。

【掘立柱建物505】(図4.56)

F20j7~G20a7地区で検出された掘立柱建物。柱穴494・495・496・497・498・499から構成されるが、2×1間で極端に小型の不自然な平面規模・形態となり、さらに東側に柱穴列が展開していた可能性が高い。遺構面の流出などのため東

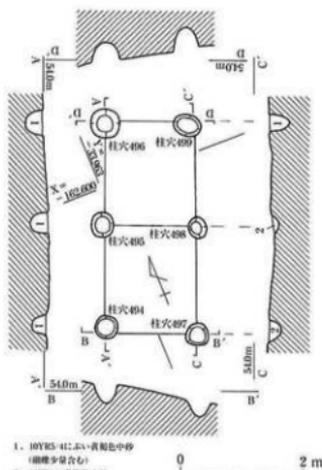


図4.56 A地区 掘立柱建物505平面図・断面図 (S=1/80)

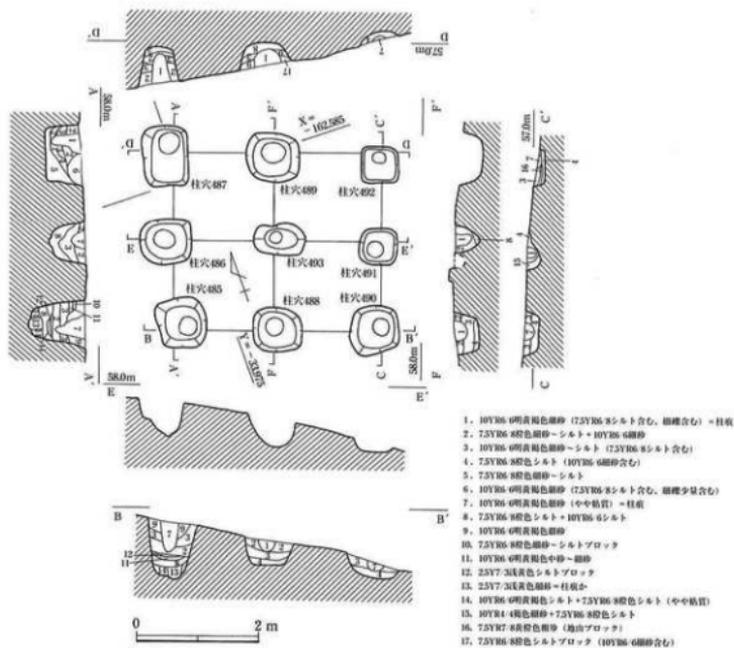


図4.57 A地区 掘立柱建物506平面図・断面図 (S=1/80)

1. 10YR5 6明黄褐色土 (7.5YR6 8シト合心・継継合心)・柱礎
2. 7.5YR6 8暗色黒砂・シト+10YR5 6暗砂
3. 10YR5 6明黄褐色土・シト (7.5YR6 8シト合心)
4. 7.5YR6 8暗色シト (10YR5 6暗砂合心)
5. 7.5YR6 8暗色黒砂・シト
6. 10YR5 6明黄褐色土 (7.5YR6 8シト合心・継継合心)
7. 10YR5 6明黄褐色土 (中中粘質) = 柱礎
8. 7.5YR6 8暗色シト+10YR5 6シト
9. 10YR5 6明黄褐色土
10. 7.5YR6 8暗色黒砂・シトアロツク
11. 10YR5 6明黄褐色土中砂・黒砂
12. 7.5YR6 8暗色シト・アロツク
13. 2.5Y7 2.5黄褐色粘土・柱礎土
14. 10YR5 6明黄褐色シト+7.5YR6 8暗色シト (中中粘質)
15. 10YR4 4褐色土砂+7.5YR6 8暗色シト
16. 7.5YR7 8黄褐色土 (地土アロツク)
17. 7.5YR6 8暗色シトアロツク (10YR5 6暗砂合心)

半部の柱穴列については明確ではない。柱穴494・495・496また、柱穴497・498・499により構成される2列は、ほぼ北東-南西方向に平行して並び、いずれも長さ約360cmで柱芯間隔は約180cmの規模である。柱列の内側の側柱に対応する位置に柱穴がみられることから、床支えの梁の設営が可能な柱配置であり、床構造をもつ掘立柱建物であったと推定できる。柱穴からは少量の土師器・須恵器片が出土するものの所属時期の判別は困難である。周囲の建物群との関連から古墳時代後期～古代に機能していたと想定したい。

【掘立柱建物506】(図4.57)

F20 i 8 地区で検出された掘立柱建物。柱穴485・486・487・488・489・490・491・492・493により構成され、2×2間の柱配置となる。西北西-東北東方向の長辺が約315cmで柱芯間隔は約162cm、それに直交する短辺が長さ約290cmで柱芯間隔が約145cmの平面規模である。当建物の柱穴は他のものに比べて平面規模がやや大きく、平面形態も隅丸方形で統一されている。各柱穴の土層断面には明確に柱痕跡が観察され、いずれも柱根が掘り方底面に達していないことがわかる。柱配置上は総柱建物の構造をとり、床をもつ建物構造であったと推定される。また、柱穴485からは飛鳥～奈良時代と思われる須恵器細片が出土しており、当建物の所属年代も7世紀～8世紀と考えられる。

【掘立柱建物507】(図4.58)

F20 i 6・j 6 地区で検出された掘立柱建物。柱穴550・551・552・553・554・555・556・557・558・559・560により構成され、4×2間の柱配置となる。東側長辺の中央には、西辺中央に対応する柱穴がみられないが、斜面傾斜のために流出したものと考えられる。北北東-南南西方向の長辺が長さ約650cmで柱芯間隔約183cm、直交する短辺は長さ約330cmで柱芯間隔は135～195cmとばらつきがみられる。今回確認した掘立柱建物の中では平面積は最大規模である。側柱列の内側には床支えの梁を設営するための柱痕跡は確認されず、床をもたない平地式住居の形態であったと考えたい。

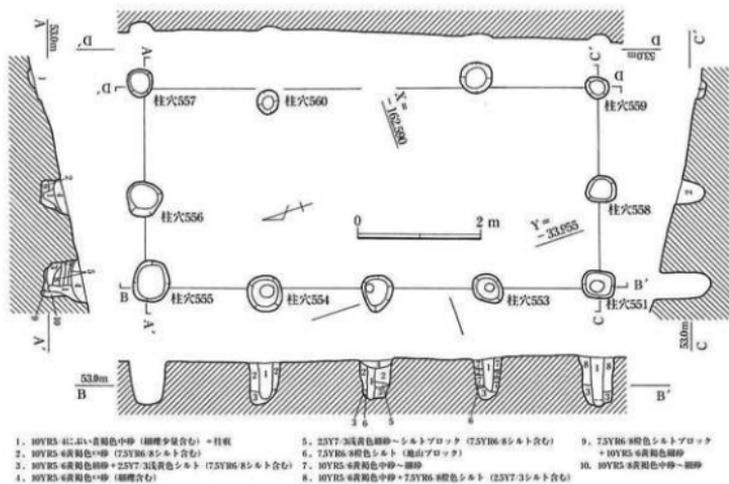


図4.58 A地区 掘立柱建物507平面図・断面図 (S=1/80)

各柱穴埋土からは、須恵器・土師器細片が出土しているが、詳細な時期決定は困難である。ただ、柱穴551埋土から古墳時代後期と思われる須恵器細片が出土していることから、当建物は6世紀に設営された可能性が高い。

【掘立柱建物509】(図4.59)

F20 i 8・j 8地区で検出された掘立柱建物。柱穴493・563・564・565・634・647により構成される。ただし、東側の長辺に関しては、隔柱穴が2基(柱穴493・634)検出されているだけであるが、これは遺構面流出のためと思われる。北北東-南南西方向の長辺は長さ約415cmで柱芯間隔が135~140cm程度、短辺は長さ約240cmである。短辺の柱穴間隔が広い理由としては、遺構面流出のために棟持柱が検出できなかったことが考えられる。棟持柱が存在していたとすれば3×2間の平面形態をとっていたと推定できる。

柱穴からは少量の土師器・須恵器片が出土するものの所属時期の判別は困難である。周囲の建物群との関連から古墳時代後期~古代に機能していたと想定したい。

【掘立柱建物511】(図4.60)

F20 f 8・g 8地区で検出された掘立柱建物。柱穴566・568・570・571・572により構成されるが、北半部は調査区外であり完全な平面形態は不明である。柱芯間隔はそれぞれ160~170cmである。柱穴569は欄柱列内側の規格的な位置に検出されていることから総柱建物の形態をとる可能性があり、床構造をもつ建物であったことが推定できる。また、当建物の柱穴568は掘立柱建物513を構成する柱穴574を削平している。掘立柱建物511と掘立柱建物513は重複した位置にあるが、前者は後者に後出して設営されたと考えられる。柱穴からは少量の土師器・須恵器片が出土するものの所属時期の判別は困難である。周囲の建物群との関連から古墳時代後期~古代に機能していたと想定したい。

【掘立柱建物513】(図4.60)

F20 f 8・g 8地区で検出された掘立柱建物。柱穴573・574・575・576により構成され、北半部は調査区外であり完全な平面形態は不明である。柱芯間隔はそれぞれ130~150cmである。また、当建物の柱穴574は掘立柱建物513を構成する柱穴568に削平されている。掘立柱建物511と513は重複した位置にあり、前者は後者に後出して設営されたと考えられる。おそらく掘立柱建物513から掘立柱建物511に建替

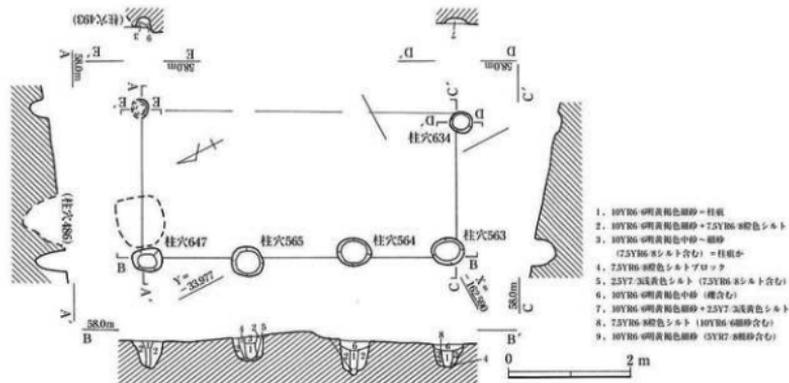
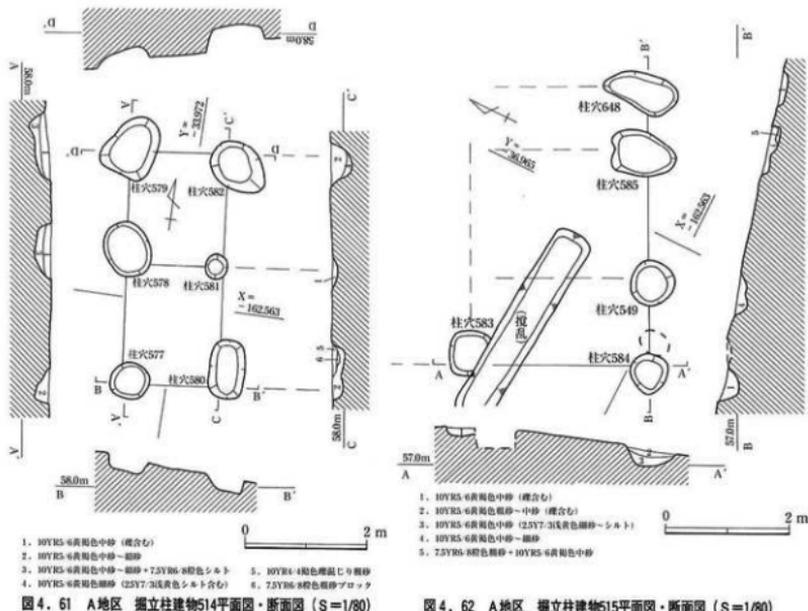
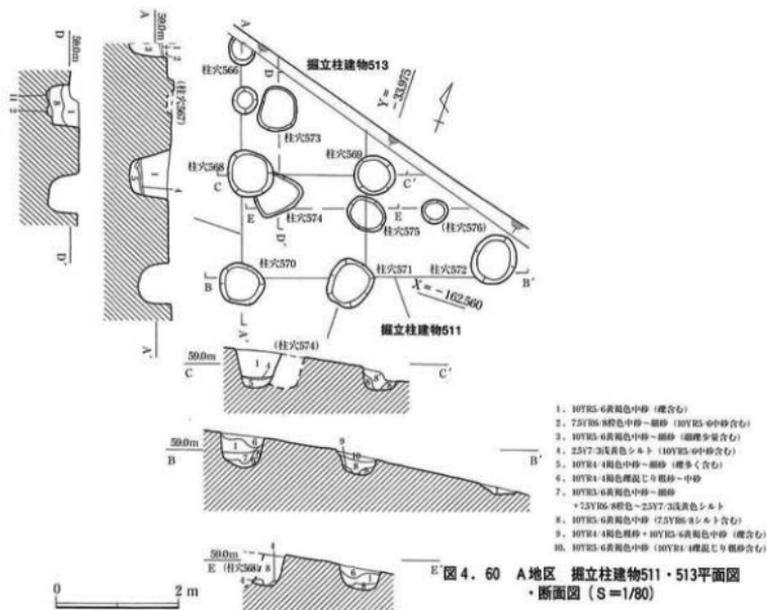
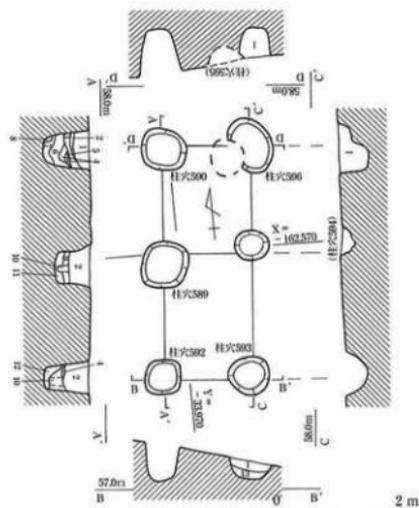


図4.59 掘立柱建物509平面図・断面図 (S=1/80)





1. 10YR5-6黄褐色中砂-粗砂 (埋含む)
2. 10YR5-6黄褐色中砂 (5YR7-8褐色じり粗砂含む)
3. 10YR5-6黄褐色中砂 (埋含む)
4. 10YR4-4褐色粗砂じり粗砂
5. 10YR5-6黄褐色中砂
6. 10YR5-6黄褐色中砂 + 10YR4-4褐色粗砂じり粗砂
7. 10YR4-4褐色粗砂 (10YR5-6中砂含む)
8. 10YR5-4L2.5-黄褐色シルトブロック
9. 5YR7-8棕色粗砂 (10YR5-6中砂含む)
10. 10YR5-4L2.5-黄褐色粗砂-シルト
11. 10YR5-6黄褐色中砂-粗砂
12. 5YR7-8棕色粗砂 + 10YR4-4褐色粗砂
13. 10YR5-6黄褐色中砂-粗砂 + 5Y7-3赤黄色シルト

図 4. 63 A地区 掘立柱建物516平面図・断面図 (S=1/80)

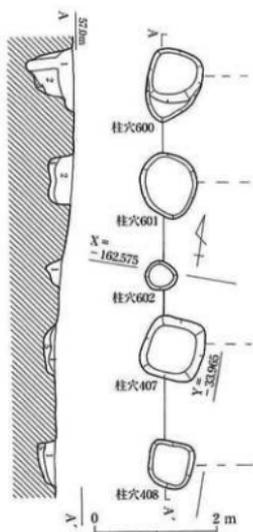
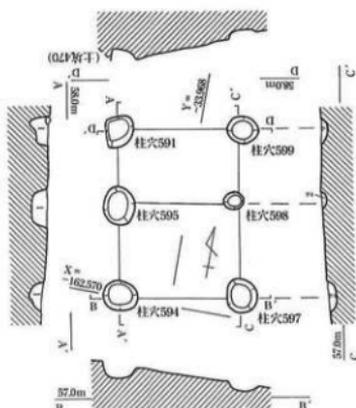
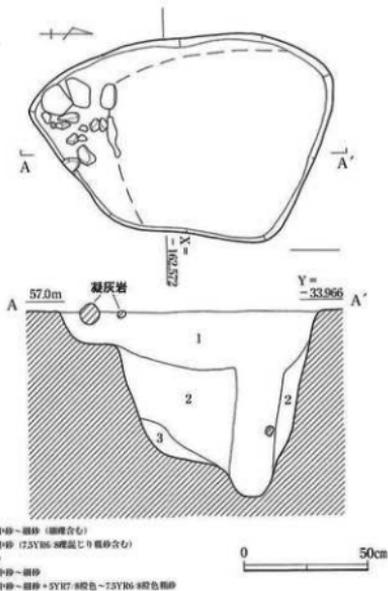


図 4. 65 A地区 掘立柱建物518平面図・断面図 (S=1/80)



1. 10YR5-6黄褐色中砂-粗砂 (埋含む)
2. 10YR5-6黄褐色中砂 (埋含む)

図 4. 64 A地区 掘立柱建物517
平面図・断面図 (S=1/80)



1. 10YR5-6黄褐色中砂-粗砂 (埋含む)
2. 10YR5-6黄褐色中砂 (7.5YR6-8褐色じり粗砂含む)
3. 5YR7-8棕色粗砂
4. 10YR5-6黄褐色中砂-粗砂
5. 10YR5-6黄褐色中砂-粗砂 + 5YR7-8棕色 - 7.5YR6-8棕色粗砂

図 4. 66 A地区 掘立柱建物518柱穴600
平面図・断面図 (S=1/20)

えが行われたと考えられる。柱穴からは少量の土師器・須恵器片が出土するものの所属時期の明確なものでは僅少である。柱穴573から出土した須恵器片のなかには奈良時代の所産と考えられるものがあり、当建物は8世紀に機能していたと想定できる。

【掘立柱建物514】(図4. 61)

F20g 8地区で検出された掘立柱建物。柱穴577・578・579・580・581・582により構成されるが、2×1間で極端に小型の不自然な平面規模・形態となるため、さらに東側に柱穴列が展開していた可能性が高い。現況ではほぼ南北方向に沿った長辺の長さは約390cmで柱芯間隔は約145cmである。床支えの梁設営が可能な位置に柱穴581があり、床をもつ建物構造であったと推定できる。

柱穴からは少量の土師器・須恵器片が出土するものの所属時期の判別は困難である。周囲の建物群との関連から古墳時代後期～古代に機能していたと想定したい。

【掘立柱建物515】(図4. 62)

F20g 7地区で検出された掘立柱建物。柱穴583・584・549・585・648により構成されているが、北半部は他遺構の重複などにより柱穴が確認できず全体プランは不明である。柱穴584・549・585・648により、長さ425cmにわたる北東-南西方向の柱穴列が形成されているが、柱芯間隔は不規則である。柱穴583と柱穴584を結ぶラインはそれに直交している。

柱穴からは少量の土師器・須恵器細片が出土するものの詳細所属時期の判別は困難である。ただ、柱穴584出土須恵器の中に飛鳥～奈良時代の所産と考えられる小片があるため、当建物の設営時期は7～8世紀にあると考えたい。

【掘立柱建物516】(図4. 63)

F20g 8・g 7・h 8・h 7地区で検出された掘立柱建物。柱穴589・590・592・593・594・596により構成されるが、2×1間で極端に小型の不自然な平面規模・形態となるため、さらに東側に柱穴列が展開していた可能性が高い。現況ではほぼ南北方向に沿った長辺の長さは約390cmで柱芯間隔は約145cmである。床支えの梁設営が可能な位置に柱穴594があり、床をもつ建物構造であったと推定できる。

柱穴からは少量の土師器・須恵器細片が出土するものの詳細所属時期の判別は困難である。ただ、柱穴592出土須恵器の中に飛鳥～奈良時代の所産と考えられる小片があるため、当建物の設営時期は7～8世紀にあると考えたい。

【掘立柱建物517】(図4. 64)

F20g 7地区で検出された掘立柱建物。柱穴591・594・595・597・598・599によって構成されるが、2×1間で極端に小型の不自然な平面規模・形態となるため、さらに東側に柱穴列が展開していた可能性が高い。現況での長辺は北北西-南南東方向で長さ約280cm、柱穴間隔約140cmの規模である。床支えの梁設営が可能な位置に柱穴598があり、床をもつ建物構造であったと推定できる。

柱穴からは少量の土師器・須恵器細片が出土するものの詳細所属時期の判別は困難である。ただ、柱穴591出土須恵器の中に古墳時代後期の所産と考えられる小片があるため、当建物の設営時期は6世紀に遡る可能性がある。

【掘立柱建物518】(図4. 65・66)

F20h 7地区で検出された掘立柱建物。柱穴600・601・407・408により構成されるが、列として検出ただけであり、さらに東側に柱穴列が展開していた可能性が高い。ほぼ南北方向となる柱穴列の長さは640cm、柱芯間隔は約210～215cm程度である。各柱穴の平面規模は、一辺80cm程度の不整形で、他の

建物に比べて大型である。注目されるのは柱穴600で、柱根を抜き取った後の柱穴最上層から凝灰岩の小片が多数出土した。後述するようにC地区でも寿福石と考えられる基壇装飾用の直方体に加工された凝灰岩が出土しており、同様の建築物関連の石材破片と考えられる。

柱穴からは少量の土師器・須恵器細片が出土するものの詳細所属時期の判別は困難である。ただ、建築物に凝灰岩を用いる慣習は飛鳥・奈良時代以降のものであり、当建物は7～8世紀に設営されたと考えられる。

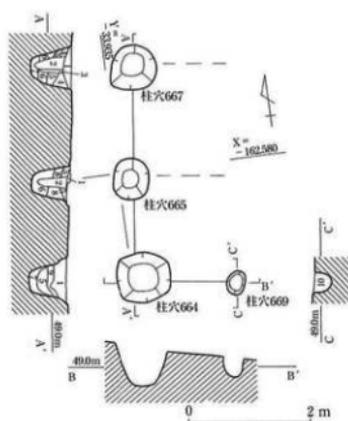
【掘立柱建物520】(図4. 67)

F20h 4・i 4地区で検出された掘立柱建物。柱穴664・665・667・669により構成されるが、2×1間で極端に小型の不自然な平面規模・形態となるため、さらに東側に柱穴列が展開していた可能性が高い。北北東-南南西方向の柱穴列は長さ約400cm、柱芯間隔は約200cmの規模である。

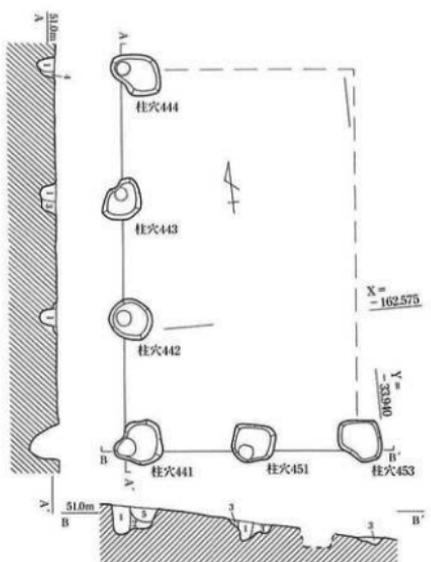
柱穴からは少量の土師器・須恵器細片が出土するものの詳細所属時期の判別は困難である。ただ、柱穴664出土須恵器の中に古墳時代後期の所産と考えられる小片があるため、当建物の設営時期は6世紀後半だった可能性がある。

【掘立柱建物522】(図4. 68)

F20h 5地区で検出された掘立柱建物。柱穴441・442・443・444・451・453より構成され、東半部は



1. 10YR5-6黄褐色中砂・土砂片・細砂少量含む
2. 10YR5-4L・黄褐色細砂 (7.5YR6.8シルト)・柱根
3. 10YR5-8黄褐色細砂・10YR5-6黄砂含む。マンガン多い
4. 10YR5-6黄褐色中砂・細砂 (7.5YR6.8シルト含む)
5. 10YR5-6黄褐色細砂・細砂少量含む
6. 7.5YR6.8黄褐色シルト・10YR5-6黄褐色細砂 (マンガン多い)
7. 2.5Y 7.3L黄褐色シルト (7.5YR6.8シルト含む)
8. 10YR5-6黄褐色細砂 (7.5YR6.8シルト含む。マンガン多い)
9. 10YR5-6黄褐色細砂 (細砂・マンガン多い)
10. 10YR5-6黄褐色中砂



1. 10YR5-4L・黄褐色中砂・細砂・柱根
2. 10YR5-4L・黄褐色中砂・細砂 (7.5YR6.8細砂含む)
3. 10YR5-6黄褐色細砂・シルト (7.5YR6.8シルト含む)
4. 10YR5-6黄褐色中砂・2.5Y 7.3L黄褐色シルト・7.5YR6.8黄褐色細砂
5. 10YR5-6黄褐色中砂・10YR5-8黄褐色細砂

図4. 67 A地区 掘立柱建物520
平面図・断面図 (S=1/80)

図4. 68 A地区 掘立柱建物522平面図・断面図 (S=1/80)

遺構面流出のため柱穴の検出はできなかった。おそらく 2×3 間の平面形態をとると考えられる。長辺となる柱穴列は北北東-南南西方向に沿い、長さ約630cmで柱芯間隔は210cm。短辺は長さ約360cmで柱芯間隔は約180cmの規模である。側柱列の内側に柱穴が確認できないことから、床支えの梁の設営は不可能だったと考えられ、平地式住居の構造であったと思われる。今回A地区で確認した掘立柱建物の中では、掘立柱建物507につぐ平面規模である。

柱穴からは少量の土師器・須恵器片が出土するものの所属時期の判別は困難である。周囲の建物群との関連から古墳時代後期～古代に機能していたと想定したい。

【土坑470】(図4. 69)

F20g7・g8地区で検出された平面不整形な縦長の形態をとる土坑。長軸約90cm、短軸約40cm程度、深さ約25cmの規模である。北端部から須恵器挿鉢(図4. 69-1)と長さ20cm程度の灰色泥岩礫が出土している。須恵器の特徴から古墳後期～飛鳥時代に埋没したと考えられる。遺構の性格は不明である。

【焼土坑17】(図4. 70)

F1i3地区で検出された土坑。平面形態は楕円～隅丸長方形を呈し、壁面がほぼ垂直に掘りこまれている。平面長軸長は約130cm、短軸長は約90cm、深さは約35cmで、埋土の最下層(図4. 70-3層)には厚さ約12cmにわたって炭化物が、その直上層(図4. 70-2層)には炭化物と焼土を多く含む土壌が堆積している。土坑壁面のうち2層の側面にあたる部分は焼成による赤化が顕著である。内部で何らかの焼成が行われたことは確実であり、遺構の性格としては、鍛冶炉の下部構造に相当する可能性が高い。鍛冶炉下部に炉の防湿のために火焚後に炭化物を集積させる例が多くみられることや、B地区で輪羽口が2点出土していることも、これを肯首する事実である。ただし、埋土中からは鉄滓・鍛造剥片など直接鍛冶作業に関連する遺物は出土していない。

同様の特徴を持つ遺構は他に、焼土坑25・45・52があり、すべて同一機能をもつ可能性が高い。埋土中には土器などの遺物はまったく含まれないので詳細な埋没時期は不明であるが、類似する焼土坑45・52が古代に属すると類推されることから、本遺構も同時期に使用されたものと思われる。

【焼土坑25】(図4. 71)

F1f3地区で検出された土坑。平面形態は、不整楕円形を呈し、断面形態は半円形である。平面長軸長は約70cm、短軸長は約50cm、深さ約12cmの規模である。焼土坑17と同様に最下層に炭化物が集積しているが、側壁には焼成痕跡は認められなかった。焼土坑17や後述する焼土坑45・52に埋土の状態が酷似しているため、遺構の性格としては鍛冶炉の下部構造が考えられる。ただし、埋土中からは鉄滓・鍛造

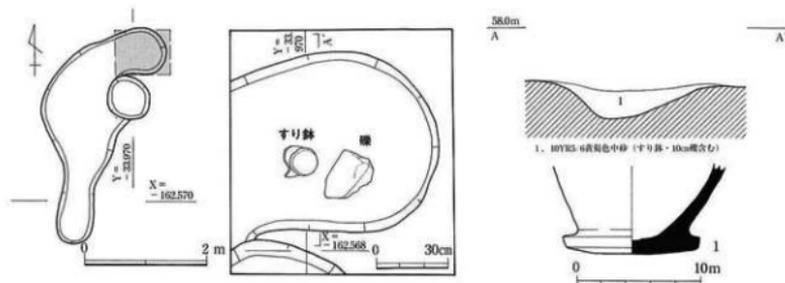


図4. 69 A地区 土坑470平面図・断面図・出土土器(S=1/20、出土土器1/4)

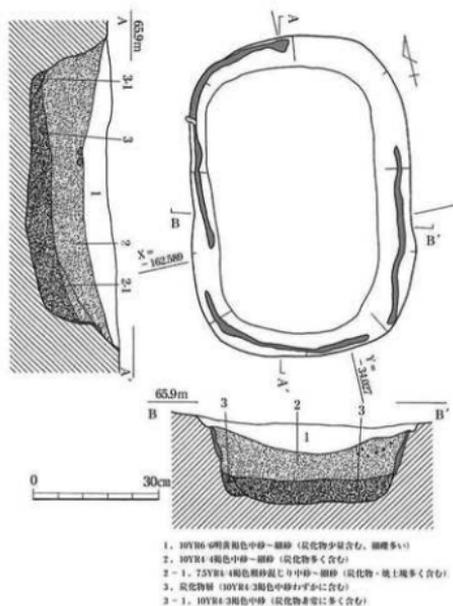


図 4. 70 A地区 焼土坑17平面図・断面図 (S=1/20)

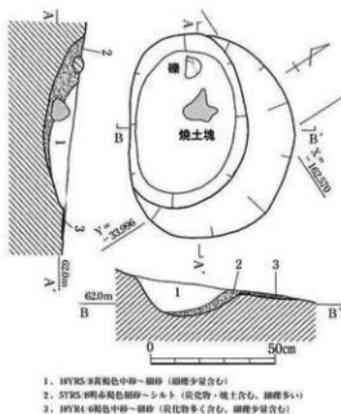


図 4. 73 A地区 焼土坑52平面図・断面図 (S=1/20)

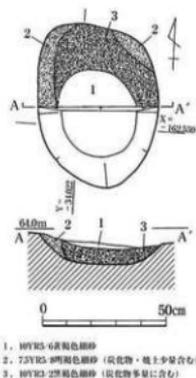


図 4. 71 A地区 焼土坑25
平面図・断面図 (S=1/20)

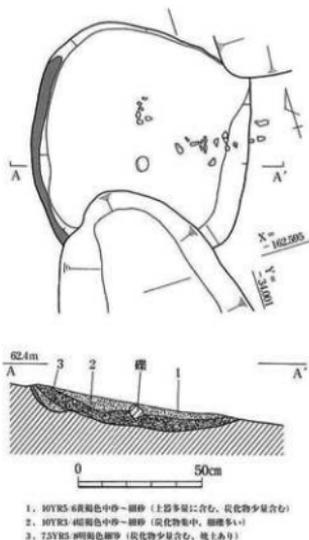


図 4. 72 A地区 焼土坑45平面図・断面図 (S=1/20)

剥片など直接鍛冶作業に関連する遺物は出土していない。

埋土中には土器などの遺物はまったく含まれないので詳細な埋没時期は不明であるが、類似する焼土坑45・52が古代に属すると類推されることから、本遺構も同時期に使用されたものと思われる。

【焼土坑45】(図4, 72)

F1j1地区で検出された焼土坑。平面形態は不整形で、長辺が約90cm、短辺は約75cm、深さ約25cmの規模である。埋土の下層(図4, 72-2層)は炭化物で充填されており、最下層(3層)には炭化物とともに焼土片が混じっている。西側の壁面は赤変しており、何らかの焼成が土坑内部で行われた結果と考えられる。埋土や壁面の状態は焼土坑17・25・52に酷似しており、同じ機能をもつ遺構と思われる。鍛冶炉の下部構造の可能性が高いが、埋土中からは鉄滓・鍛造剥片など直接鍛冶作業に関連する遺物は出土していない。本遺構は古墳時代後期～飛鳥時代の溝44を切る。

埋土中には土器などの遺物は僅少であったが、奈良～平安時代と考えられる土師器細片が出土している。周囲の遺構にも同時期の遺構が多くみられるため、古代に機能した遺構と考えたい。

【焼土坑52】(図4, 73)

F20g10～F1h10地区で検出された焼土坑。平面形態は不整形楕円で、長軸長約85cm、短軸長約65cm、深さ約18cmの規模である。北東肩部には炭化物集積層(図4, 73-3層)が確認され、最下部(2層)にも炭化物・焼土を含む土壌が堆積している。埋土の状態は焼土坑17・25・45に酷似しており、同じ機能をもつ遺構と思われる。鍛冶炉の下部構造の可能性が高いが、埋土中からは鉄滓・鍛造剥片など直接鍛冶作業に関連する遺物は出土していない。

埋土中には土器などの遺物は僅少であったが、奈良～平安時代と考えられる土師器細片が出土している。周囲の遺構にも同時期の遺構が多くみられるため、古代に機能した遺構と考えたい。

【溝6】(図4, 74・75)

F20f10・g9・h9～F1f1で検出された溝状遺構。北北西～南南東方向に沿い、溝肩部に全長約290cm、幅60～100cm、深さ8cm程度の落ち込みがある。落ち込み南半部に東側から投棄されたような状態で須恵器片が集中して出土している。図4, 75に掲げた3点が図化可能なもので、図4, 75-1が坏身、図4, 75-2が大甕の頸～口縁部片、図4, 75-3が器台脚部裾片である。いずれもTK43型式を中心とした時期のものと考えられ、当遺構の埋没時期も古墳時代後期後半(6世紀後半)と考えられる。周囲に当該期の掘立柱建物も確認されることから、集落内の落ち込みに生活用品を廃棄した痕跡とも考えられる。

【溝44】(図4, 76)

F20g10・h10・i10・j10～F1j1・i1地区で検出された溝。ほぼ南北方向に沿い、幅約350cm、深さ約30cm程度の規模である。出土した遺物は須恵器・土師器の細片が主体であるが、そのうち図化可能だったのは図4, 76に掲載した2点の須恵器である。図4, 76-1は坏蓋片で古墳時代後期後半の所産と考えられる。図4, 76-2は壺または横瓶類の底部片であるが古墳時代後期～飛鳥時代の所産と考えられる。この2点から、当遺構は古墳時代後期～飛鳥時代に埋没したものと思われる。

ただし、埋土中からは図4, 76-3のサヌカイト製の大型尖頭器片も出土している。いわゆる「石剣」とも呼ばれるもので、幅約5cm、厚さ約1.8cmという大きさや形態・製作手法から弥生時代中期に製作されたものと考えられる。古墳時代以降に製作されたとは考えられず、混入品の可能性が高い。周囲には弥生時代中期の遺構は確認されていないが、未調査の区域に弥生時代中期の遺構形成が行われた可能性

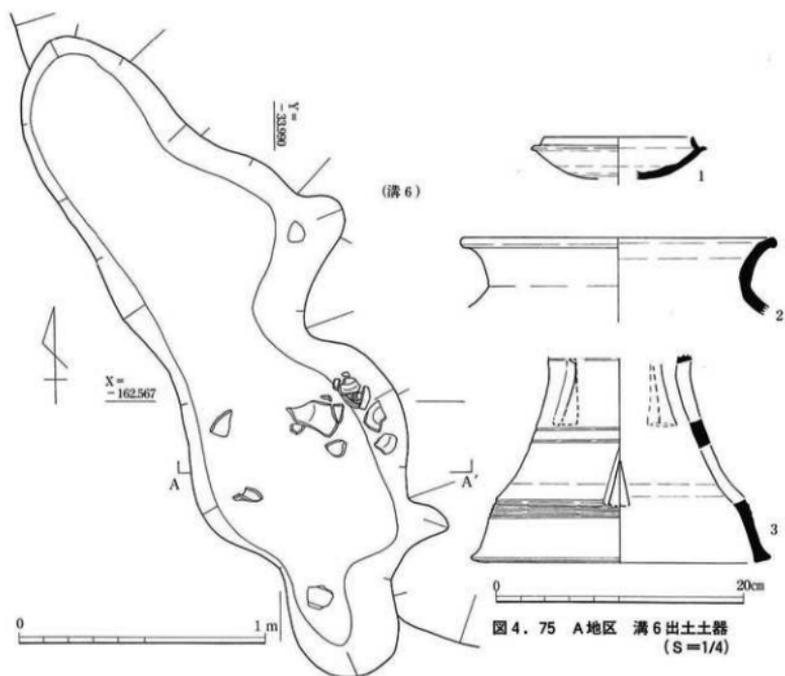


図4.75 A地区 溝6出土土器 (S=1/4)



1. 5YR5-6明褐色壤砂 (細粒わずかな須石あり)

図4.74 A地区 溝6肩部平面図・断面図 (S=1/20)

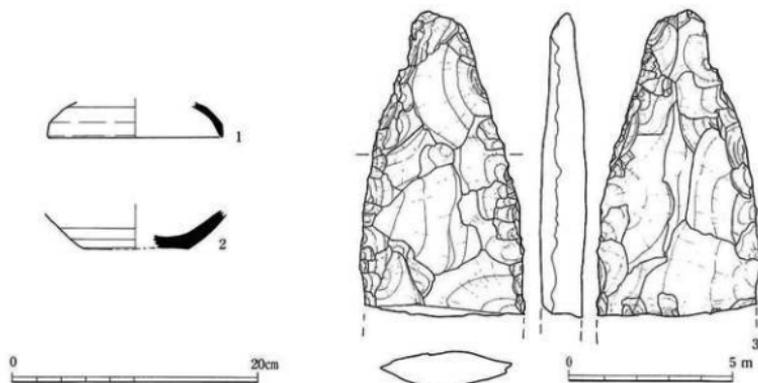


図4.76 A地区 溝44出土遺物 (S=1・2:1/4、3:2/3)

を示唆する出土品である。

【溝482】(図4. 77・78)

G20 a 5・b 5・b 6 地区で検出された溝。北東-南西方向に沿い、幅約110cm、深さ約25cm程度の規模である。埋土中からは須恵器・土師器細片が出土するが、図化・時期判別ができたのは図4. 78に掲載した大甕1点だけである。口縁部をまったく肥厚しない形態から、古墳時代後期後半から飛鳥時代の所産と考えられ、当遺構もその時代に埋没したと考えられる。遺構の機能は不明である。

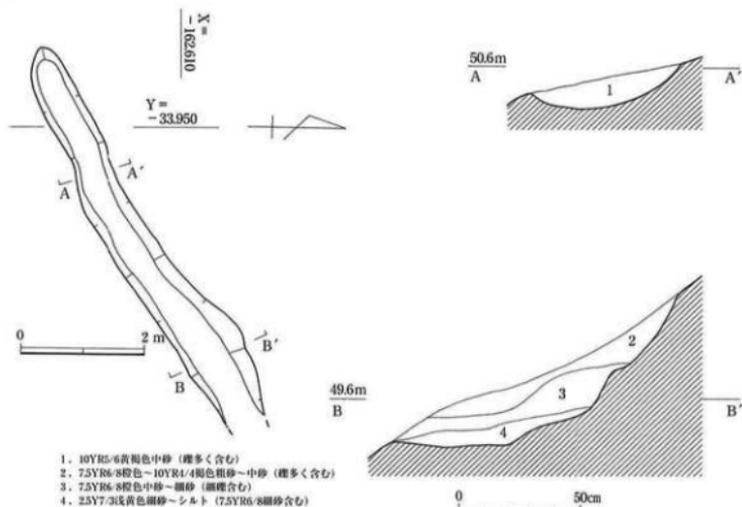


図4. 77 A地区 溝482平面図・断面図 (S=平面図1/80、断面図1/20)

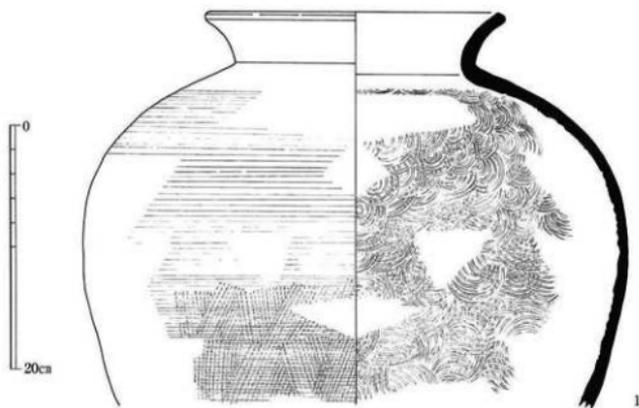


図4. 78 A地区 溝482出土土器 (S=1/4)

【その他の遺構・包含層出土の遺物】(図4・79)

図4・79に掲載した土器は、A地区の中でも上述以外の遺構あるいは包含層から出土したものである。図4・79-1は土坑3(F1j1・j2地区)から出土した弥生土器で、口縁内面に櫛描列点文、口縁端面に凹線文と円形浮文、頸部に櫛描直線文がそれぞれ施された広口壺である。文様・形態から弥生時代中期後半の所産と考えられるが、器面の荒れが顕著である。出土遺構は古墳時代初頭の堅穴住居群の上面で検出されていることから、混入品と考えるのが妥当であろう。周囲に弥生時代中期の遺構は検出されていないが、未調査の区域に弥生時代中期の遺構形成が行われた可能性を示唆する出土品である。

図4・79-2は土坑35(F1j2地区)から出土した甕の胴~口縁部片である。口縁部が緩やかに外反しながら立ちあがる形態で、胴部にはタタキメがうかがわれる。形態・調整手法から弥生時代後期末~古墳時代初頭の所産と考えられる。

図4・79-3~12はすべてA地区包含層から出土した須恵器である。図4・79-3は坏蓋で、頂部のみ回転ヘラケズリ痕が残り、口縁部にかけてなだらかな曲線を描く形態である。形態、手法からTK43~TK209型式に相当し、古墳時代後期後半~飛鳥時代の所産と思われる。図4・79-4~6は口縁部の立ち上がりが小型化した形状の坏身で、図4・79-3同様TK43~TK209型式に相当し、古墳時代後期後半~飛鳥時代の所産と思われる。図4・79-7・8も坏身だが、底部に高台をもつ形態である。底部以外の形態は不明だが、飛鳥~奈良時代の所産と考えられる。図4・79-9は器台脚部片である。全体形態は不明だが、最上段に方形透かし、その下段には3角形の透かしが穿たれている。古墳時代後期の所産と考えられる。図4・79-10・11は大甕の胴~口縁部片である。いずれも口縁端部の肥厚が顕著でなく、古墳時代後期後半~奈良時代の所産と考えられる。図4・79-12は胴部上半に稜線をもつ壺で、奈良時代の所産と考えられる。図4・79-13は土師器の甕で鐫付の形態である。奈良時代の所産と考えられる。

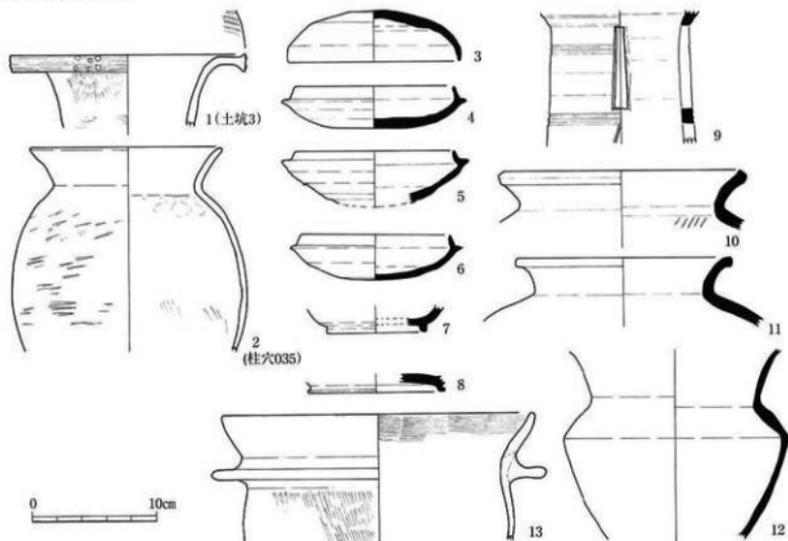


図4・79 A地区 その他の遺構・包含層出土土器 (S=1/4)

第5章 B地区の調査成果

1. 基本層序と遺構の概略

B地区は、A地区側の尾根斜面部からC地区側の尾根にはさまれた谷部分を中心とした調査区である。調査区西側の尾根上ではかつて駒ヶ谷遺跡調査会が試掘調査（8-1区）をおこなっているが、遺構・遺物は検出されていない。今回の調査でもこの尾根からは遺構や遺物は全く確認できなかった。A地区側の斜面部にも遺構はなく、ブドウ畑関係の攪乱が多くみられるのみである。

谷部分の調査は、まず調査区中央に南北・東西方向のサブトレンチを設けて堆積状況の確認をおこなった。その結果、古くから形成されていた谷は尾根から流入した砂礫などによって自然に埋積していることがわかった。そこにはほとんど人為的な作用は看取されず、また周辺には明確な遺構も検出できなかったが、CあるいはA地区の尾根から流れ込んだと思われる遺物が若干出土した。調査区東側斜面部～谷部分では、A地区の集落域から落ちてきたと考えられる遺物が多く出土している。最も遺物が多く出土した調査区北東部の谷部をさらに深く掘り下げて土層堆積状況の把握と遺物の検出をおこなった。

B地区の基本的な層序は、上層から順に大きく7層に分けることができる。1～3層は、尾根斜面部上層に堆積した層で、礫を含む中砂～細砂で構成される。少量の近現代遺物を含み、近現代に尾根上から流れこんだものである。4層は、礫を含む中砂～細砂で構成され、斜面部～谷部にわたって全体的に堆積している。遺物は全く含まず、近現代以前の人の活動がない時期における堆積である。

谷部上層である5層と6層は、礫を含む中砂～細砂で構成され、谷部全面に広く堆積している。5・6層が堆積した時期は、須臾器や土師器などを含んでいることから古墳時代後期～古代であることがわかり、一部は中世まで下る可能性がある。したがって今回の調査地では古代（一部中世）以降で近代のブドウ畑造成までは人の活動がほとんど認められないことがわかる。6層は、5層に比べシルトが多く混じり、若干多く弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物をともなう傾向にある。5～6層と6～5層は土壌化した層で、砂礫層を中心とした4層より上層とは異なった周辺環境が予想される。特に5～6層上面からは炭化物だまりが検出でき、周辺からは輪羽口や焼けた石、土師器片などが出土した。

谷部下層である7層は、谷底付近に堆積する層で、粗砂混じりのシルトで構成される。この層からは古墳時代後期～古代の遺物はみられず、全体に弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物が多く出土し、部分的に土器が集中する地点もある。

基本的な層序は上記の7層であるが、谷部には自然流路と判断できる流水堆積層があり、8層として区別している。谷底部の7層下部では有機物を多量に含む層が確認できる。この層からタタキ炭片が出土したことから谷最下層の堆積は弥生時代後期であることがわかる。この谷最下層より上層ではこのような有機物を含む層は確認できなかった。この堆積状況の変化から、弥生時代後期に周辺を開拓して以降、周囲の自然環境が変化した可能性がある。

表5.1 B地区検出遺構の概要

遺構 番号	遺 跡	トレン チ	地 区	層位（長軸×短軸 ×深さ） （1）西は尾根部	土 色	備 考
B	炭化物だまり	B	伊豆	炭化物だまり① 170×100×25、 炭化物だまり② 150×150×25	炭化物だまり①：10YR6/4シルト混じり中砂（炭化物 多量に多い）、10YR2/6粘砂混じり中砂、炭化物だまり ②：10YR6/4中砂～細砂（焼けた石・炭化物多量）、炭 化物骨片、10YR6/4シルト混じり中砂	古墳後期以降（中世以降）、炭化物だまり①：炭化物集中、炭化物だまり②： 炭化物集中、焼けた石と輪羽口集積（穀物の貯蔵の痕跡物か、斜面部の土壌化 痕跡か）

2. 弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構・遺物

【谷部下層包含層出土遺物】(図5.4)

谷部下層(7層)には須恵器や土師器など古墳時代後期以降の遺物は含まれず、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物のみが出土している。何箇所かで土器が集中する地点があり、そのうち2箇所について土器出土状況を図示した(図5.1・3)。いずれも尾根上から投棄された状況で土器がまとまっている。特に遺物が集中するのはA地区側斜面部に近い部分で、A地区の集落から廃棄物の多くがB地区の谷部に投棄されたことを物語っている。A地区側斜面部寄りで検出した土器群(図5.1)は、7層の上部に属するもので、この周辺では土器片が多数出土している。この土器群には完形品はないが、比較的残りがよく図化できる遺物も多い(図5.4)。図5.4-4の壺は口縁部を欠くが残りはよく、壺内部に完形の小形甕(図5.4-11)が入っていた。7層下部からも土器片は多く出土するが、上部ほどまとまりがなく出土遺物も小片が多い傾向にある(図5.3)。しかし出土遺物から7層上部と下部の時期差は看取できず、7層全体が弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物を含む遺物包含層である。したがって図化した遺物は7層の上部・下部あわせて報告している。なお図5.4-2・12・15・16・17・20は7層下部から、それ以外は7層上部の土器群及びその周辺から出土した土器である。

1は広口壺の口縁部で、外面には縦方向のヘラミガキ、内面には横方向のヘラミガキが施される。2は無頸壺で、口縁端部と底部を欠く。内外面ともナデ調整される。3は壺で、色調の異なる2種類の胎土を用いてつくられている。実測図断面に矢印で示した部分は赤っぽい胎土を用い、間の部分は褐灰色の胎土を用いている。4は口縁部を欠く壺で、壺内部に小形甕11が入った状態で出土した。5は大形の鉢で、古墳時代初頭の所産であろう。6～14は甕である。11は壺内部から出土した小形甕である。16は甕あるいは鉢の底部、15は壺の底部と考えられる。15はほぼ丸底を呈しており、古墳時代初頭に属すも

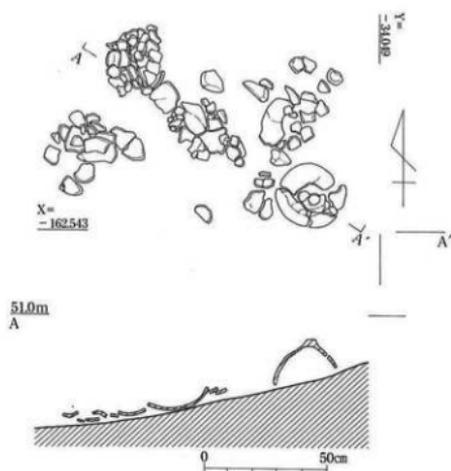


図5.1 B地区 谷部下層土器出土状況①(S=1/20)



写真5.1 谷部下層土器断面(南から)



写真5.2 谷部下層土器出土状況①(南西から)

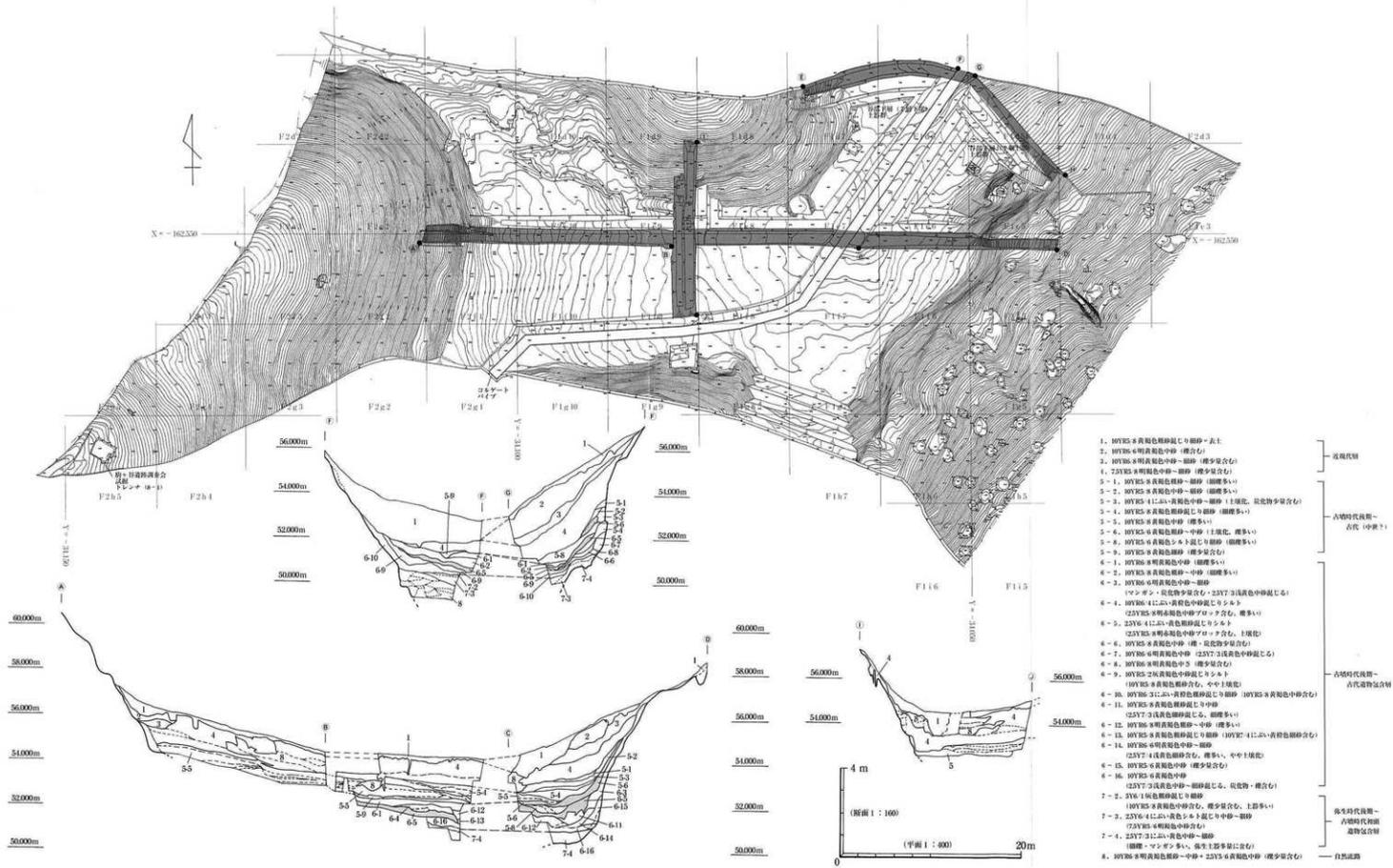


図 5.2 B地区 遺構配置図・断面図 (S=1/400)

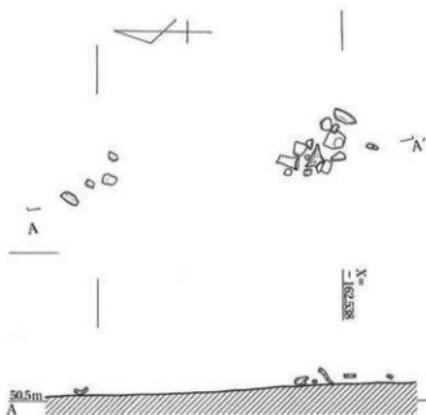


写真 5. 3 谷部下層土器出土状況② (南から)

Y= -34.063



图 5. 3 B地区 谷部下層土器出土状況② (S=1/20)

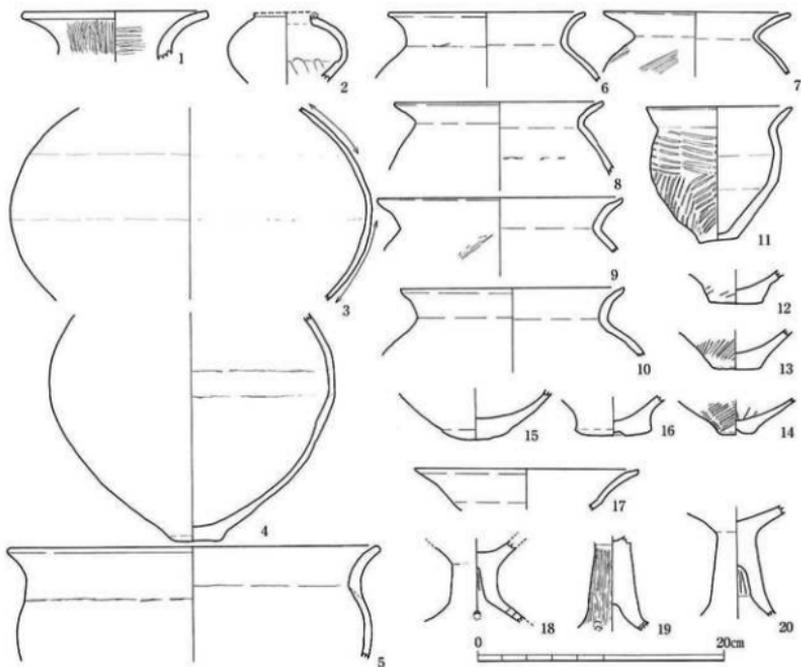


图 5. 4 B地区 谷部下層出土土器 (S=1/4)

のである。17～20は高坏である。脚部は中位から大きく屈曲する形態であり、古墳時代初頭の所産であると推定できる。19の脚部外面には縦方向のヘラミガキがみえる。これらの遺物は、おおむね弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の範疇でとらえることができ、A地区の集落の継続期間と矛盾しない。したがってB地区谷部下層の出土遺物はA地区側から投棄されたものであると判断できる。

谷部下層から石器が2点出土している(図5.5)。1は和泉砂岩製の凹石で、欠損部が多く全体の形状は不明である。厚さ8.4cmで、径8.8cm、深さ3.7cmの半球状の凹みが極めて丁寧に作り出されており、石臼と呼称すべきかもしれない。体部は半球状の凹みも含め全体が平滑に仕上げられている。特に残存する側面は最も平滑な面をもち、擦痕がみえることから砥石面であった可能性がある。側面の下半部には敲打による整形痕を残す。裏面も平滑な面を作り出しているが、若干火を受けているため擦痕は観察できない。2は和泉砂岩製の磨石で、端部に磨石面がある。磨石面には擦痕が残る。端部以外は使用痕や整形痕がみえず、細長い自然礫を用いて磨石としたと推定できる。2点とも谷部下層(7層上部)の土器群とともに出土したもので、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の遺物である可能性が高い。両者はセットであったと考えることもでき、その場合C地区包含層出土の石杵(図6.27-5)やA地区焼土坑46出土の石杵(図4.38-1)と同様に赤色顔料の精製にかかわる石器であった可能性がある。

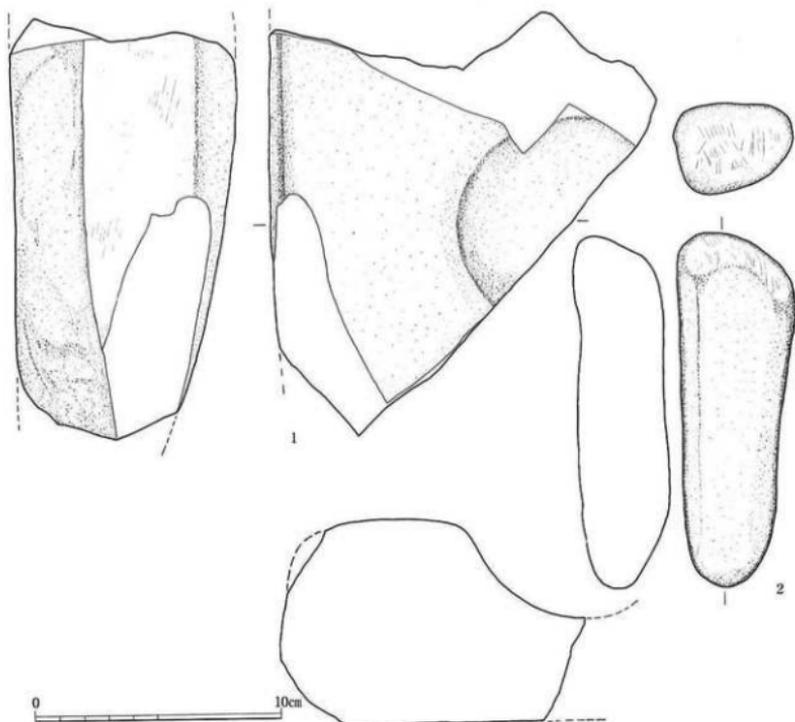


図5.5 B地区 谷部下層出土石器(S=1/2)

3. 古墳時代後期以降の遺構・遺物

【炭化物だまり8】(図5. 6・7)

F1i3地区に位置する炭化物だまりで、谷部上層の土壌化層である5-6層上面で検出した。炭化物を多く含んでいる浅い土坑状の凹みが2箇所あり、東側を炭化物だまり①、西側を炭化物だまり②と呼称する。炭化物だまり①と炭化物だまり②ともに全体的に多くの炭化物を含んでいるが、特に炭化物だまり①では中央部付近に、炭化物だまり②では東端付近にそれぞれ多量の炭化物が集中している。2箇所とも浅い掘り込みの上層に炭化物が集中している状況である。

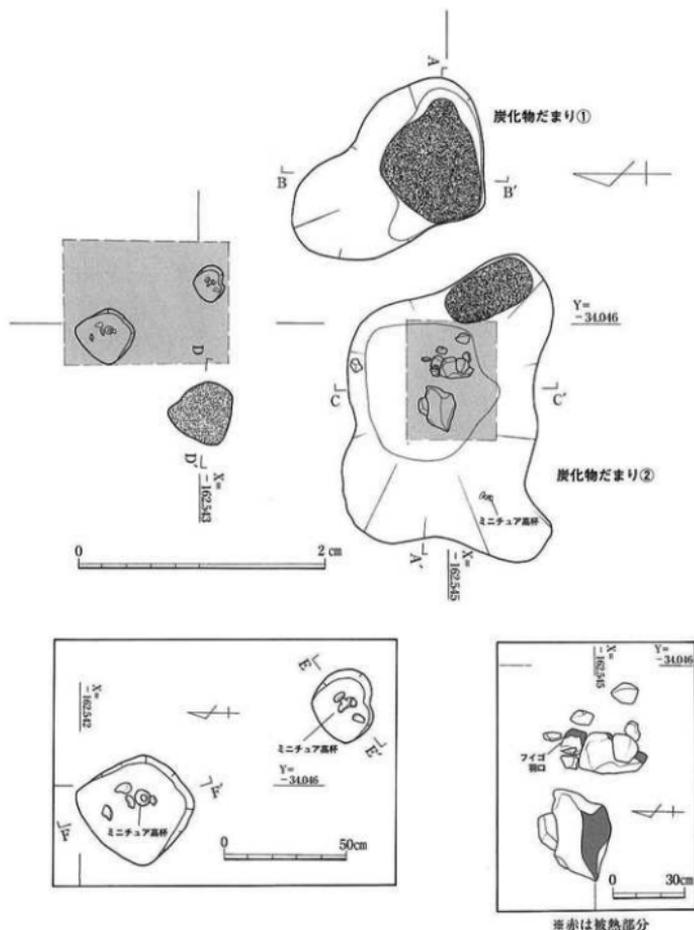


図5. 6 B地区 炭化物だまり8平面図、遺物出土状況 (S=1/40、遺物出土状況1/20)

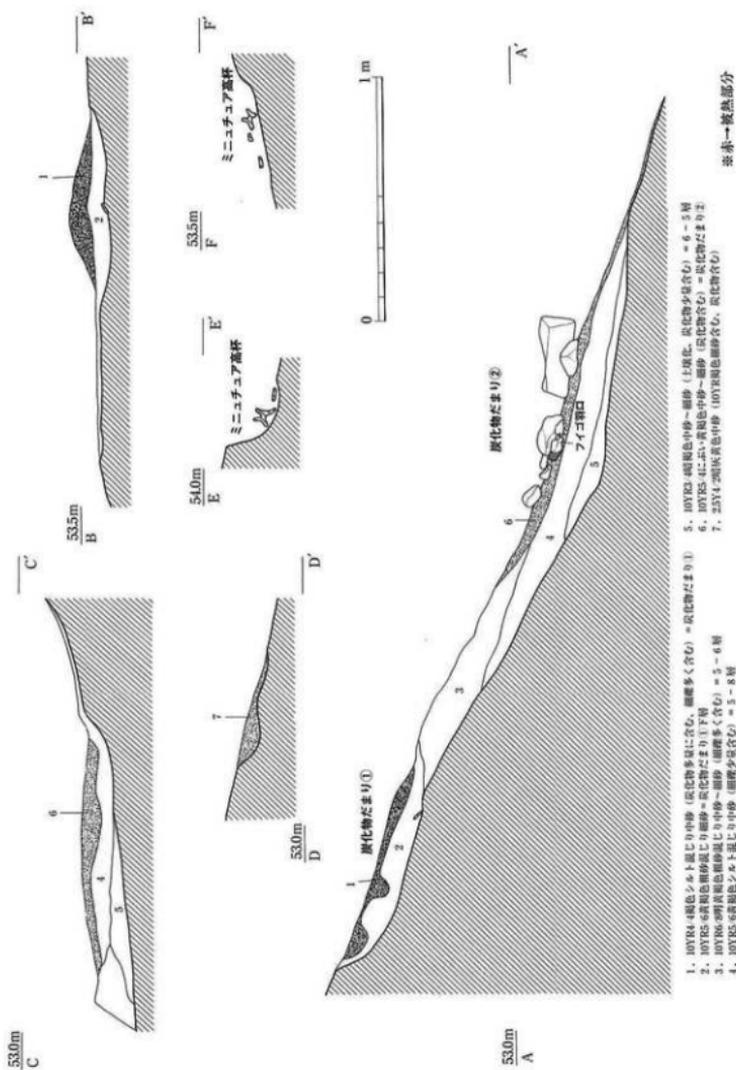


図5.7 B地区 炭化物だまり8断面図 (S=1/20)

この炭化物だまりで特筆すべきことは、炭化物だまり②において輪羽口1点とともに片面が被熱した2つの礫がままとって出土したことである。被熱した礫とともに小さな礫も数点ままとっていたが、それらには熱を受けた痕跡は認められなかった。被熱した礫と輪の羽口がそろって出土したことから鍛冶遺構の可能性を考えて調査をおこなった。しかし被熱した礫と羽口以外は周辺において被熱の痕跡や焼土が認められなかったこと、炭化物だまりやその周辺の土を水洗選別した結果でも鉄滓や鍛造剥片などの鍛冶に関わる遺物が未検出であることなどから、この地点では鍛冶関連の作業はおこなわれていなかったことがわかった。

輪の羽口(図5・8-1)は、一部を欠損しているものの残りがよく炉との装着部分や角度などが把握できる。先端部にはガラス質や金属質の付着が顕著にみられ、この部分が炉内部に装着されて使用されていたことがわかる。炉内に装着されたガラス質の付着した先端部分と、炉体にあたる部分との境は明瞭であるが、炉外側との境は不明瞭である。

輪の羽口に使用痕跡があることや礫が2つとも一面のみ被熱していることなど、これらが鍛冶炉関係の施設を構成していた可能性は高い。おそらく尾根上にあった鍛冶炉の一部がままとって谷に廃棄されたか、もしくはすべり落ちてきたものであろう。ただし炭化物だまり周辺からは鍛冶関係の鉄片や剥片などの遺物が認められなかった。また炭化物だまりの炭化物も鍛冶に直接関係したものであろうかは不明である。

この炭化物だまり①・②の北側には、小さい土坑状の凹みが3箇所検出できた。そのうち1つには炭化物がたまっており、残り2つからはそれぞれミニチュア高坏が出土した。ミニチュア高坏は炭化物だまり①内の西半からも1個体出土しており、この周辺から計4個体出土したことになる(図5・8-3~6)。このうち3の坏部は、4または6の脚部と同一個体である可能性もある。脚部は3点とも酷似した形態をしており、それぞれユビナデによる調整が施されている。これらは古代の所産であろう。これらの高坏や谷部上層の包含層出土遺物などから炭化物だまりは古代の所産である可能性が高いが、輪の羽口の形態から中世まで下る可能性は否定できない。



写真5・4 炭化物だまり8羽口・礫出土状況(南から)



写真5・5 ミニチュア高坏出土状況(南から)



写真5・6 炭化物だまり8土層断面(西から)

【谷部上層包含層出土遺物】(図5. 8 - 2・7・8)

谷部上層である5～6層からは古墳時代後期～古代の遺物が多く出土している。この谷部からは中世以降の遺物は出土していない。細片資料が多く園化できるものは少ないが、図5. 8 - 8のように完形に復元できる須恵器の短頸壺も出土している。この短頸壺の底部外面は回転ヘラケズリで調整されている。古墳時代後期～古代の遺物が主体を占める中で、尾根上から流れ込んだと思われる弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物も若干混入していた。なかには布留式期(古墳時代前期)まで下る可能性がある内面に横方向のミガキで調整された二重口縁壺(図5. 8 - 7)が出土しており、尾根上の集落の存続時期を考えるうえで注目すべき遺物である。

谷部上層からは炭化物だまり8出土の羽口以外にもう1点輪羽口が出土している(図5. 8 - 2)。この輪の羽口は完形品で炉に対する装着部分や角度が明確に把握できる。先端部はガラス質の付着が顕著にみられ若干溶解している部分が認められることから、炉の内側に装着された部分であることがわかる。炉体部分にあたる羽口中央部は灰色を呈しており、炉の外側にあたる酸化された赤褐色の部分との境界は明瞭である。炭化物だまり②から出土した羽口と形態的に似ていることから同時代の遺物であると考えられる。他の谷部上層の包含層出土遺物から判断すると羽口の時期も古代の所産であると考えられるが、両者とも大形の羽口であることなど形態的からみて中世に下る可能性がある。

谷部上層より類似した形態の輪羽口がほぼ完形の状態で2点出土したことから、尾根周辺で鍛冶関係の作業がおこなわれていたと推測できる。尾根上のA地区では炭化物が充填していた焼土坑17・25・45があり鍛冶関係の遺構であった可能性もあったが、これら焼土坑からは鉄滓や鍛造剥片などの鍛冶関連遺物は検出されていない。なお尾根部分には中世の遺物は全く出土していないが、駒ヶ谷遺跡の前回調査部分である尾根東側の平坦部では中世の遺構・遺物が確認されており、羽口をこの時期まで下げて考えることも否定できない。

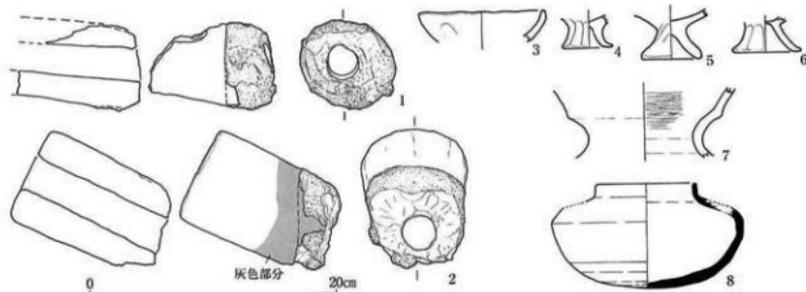


図5. 8 B地区 谷部土層出土遺物 (S=1/4)

第6章 C地区の調査成果

1. 基本層序と検出遺構の概略

C地区は、今回の調査区域の中でも、最も西に位置している。そのさらに西側には1990年に羽曳野市教育委員会が調査を行った尾根が南北方向に貫いている。今回C地区とした範囲は、その主尾根の東斜面の裾部と谷、それに対面する斜面部に相当する。

調査区のうち、遺構・遺物が検出された領域は西半部に限定されている。つまり、羽曳野市教育委員会調査区の東側に隣接した領域にのみ、遺物・遺構群が形成されていたことになる。検出された遺構・遺物の時期は弥生時代後期～古墳時代初頭（庄内式期）と古墳時代後期～奈良時代に二分することができる。主尾根上にある羽曳野市教育委員会調査区で弥生後期と古墳後期の遺構が検出されていることから、C地区出土の土器のなかには、上部の尾根筋に形成されていた遺物包含層からの流入品も少なからず含まれていると考えられよう。

C地区で確認された遺物包含層は、図6.1に示した5-1・2・3・4・5・6、6-1・2・3・4層である。これらはすべて暗褐色系統の色調の土壌化層であり、遺構形成などの人為的掘削・埋積によって形成された土層と推定できる。先述のように、検出された遺構の時期は弥生時代後期～古墳時代初頭と古墳時代後期～古代に二分することができるが、この遺物包含層を各時期の土器の出土する層に細別することは困難だった。つまり、両時期の土器が5～6層（図6.1）のいずれの土層においても混在している状況であった。このことは、当地区の遺物包含層の形成に関して、人為的掘削・埋積のみならず、丘陵部からの土器・土壌の流入が関係している可能性を示唆している。実際、遺物包含層として認識した5～6層（図6.1）はC地区の西半部の斜面地を中心に分布している。C地区西半部の遺物包含層は、丘陵尾根部からの土砂・遺物流入と、その地点での生活活動の両要因により生成されたと推測できる。

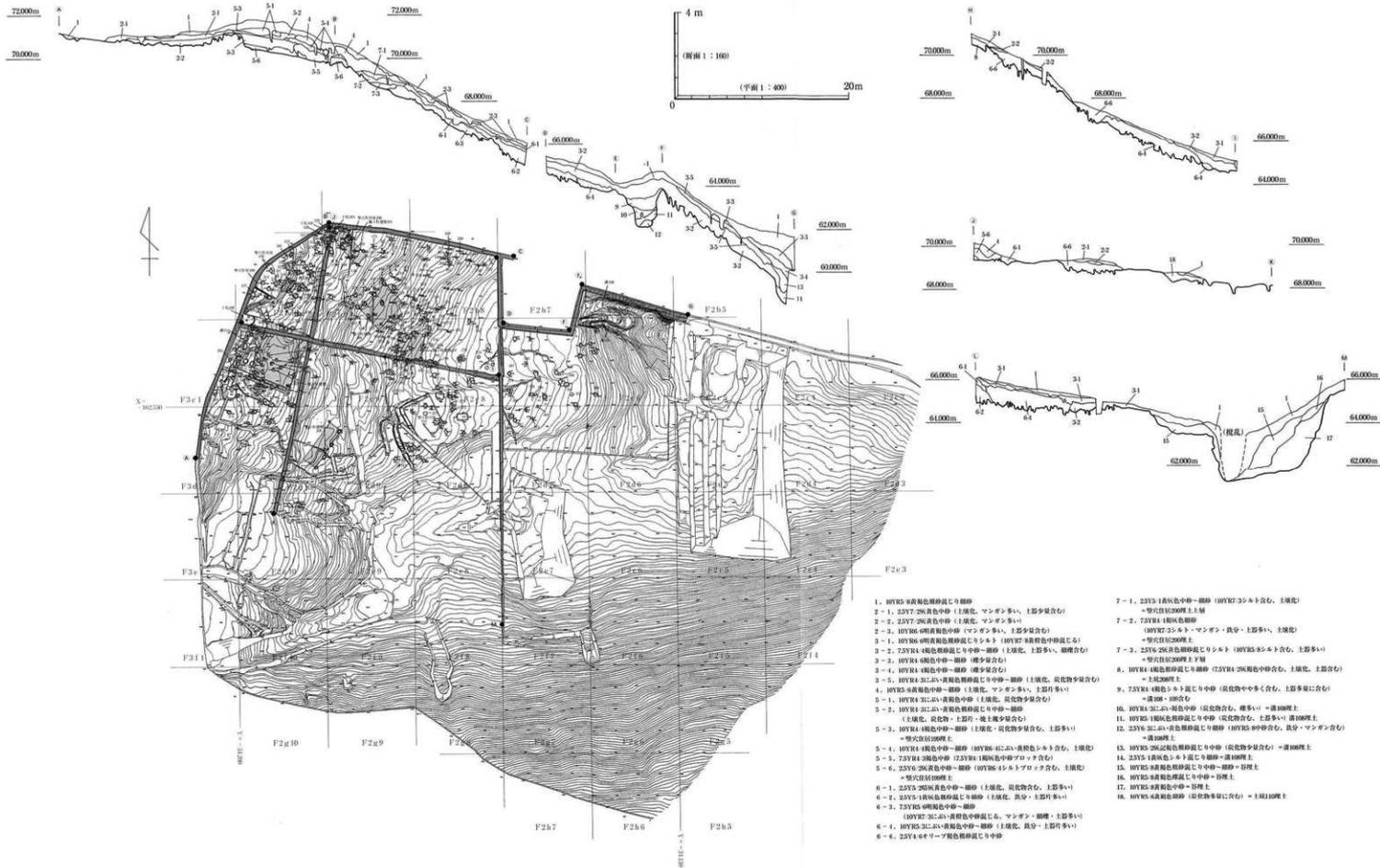
出土遺物が帰属する主要な2時期のうち、弥生時代後期～古墳時代初頭（庄内式期）の遺構としては、竪穴住居が1軒（竪穴住居200）検出されているだけである。古墳時代後期～奈良時代の遺構としては竪穴住居2軒（竪穴住居111・199）の他に多数の柱穴が検出されている。これら柱穴群のいくつかには建物を構成する配列が確認され、6軒の建物（掘立柱建物201・202・203・206・207・209）の存在が確実である。ただし、それ以外にも流出・未検出の柱穴の存在は想定され、実際には古墳時代後期～奈良時代にもっと多くの掘立柱建物が並列する状態が推測される。また長期間にわたり機能した溝（溝108・109）も確認できる。これは自然流路を加工したものと考えられ、水場としての利用が想定される。

また、上述の時期の土器多数とともに、古墳時代後期の円筒埴輪の破片が複数出土している。当調査区の領域には古墳の存在は認められないことから、西側の尾根筋からの転落品と考えたい。この仮定の基づけば、C地区西側の尾根上には、古墳時代後期に何らかの古墳が造営されていた可能性がある。

2. 弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構・遺物

【竪穴住居200】（図6.2・3）

F2a9・b9地区で検出された方形の竪穴住居跡である。調査区の北端に位置するため、住居の北辺は調査区外にあって検出できなかった。また、東半部も斜面地ゆえに基盤層が流出しているため、全体の南西部分1/4の区画だけを確認したにとどまっている。西辺では幅約20cm・深さ約15cm程度の壁溝が



1. 10YR5 赤褐色細砂混じり層
- 2 - 1. 2.5Y7.2/6.5 赤色中砂 (土壌化、マンガン多い、上部少量含む)
- 2 - 2. 2.5Y7.2/6.5 赤色中砂 (土壌化、マンガン多い)
- 2 - 3. 10YR5 赤褐色細砂中砂 (マンガン多い、上部少量含む)
- 3 - 1. 10YR5 赤褐色細砂混じり中砂 (10YR7 赤褐色中砂混じり)
- 3 - 2. 7.5YR4 黄褐色細砂混じり中砂 - 細砂 (土壌化、上部多い、細砂含む)
- 3 - 3. 10YR4 黄褐色中砂 - 細砂 (増少量含む)
- 3 - 4. 10YR4 黄褐色中砂 - 細砂 (増少量含む)
- 3 - 5. 10YR4 3C1-1 黄褐色細砂混じり中砂 - 細砂 (土壌化、炭化物少量含む)
4. 10YR5 赤褐色細砂 - 細砂 (土壌化、マンガン多い、上部少ない)
- 5 - 1. 10YR4 3C1-1 黄褐色細砂 - 細砂 (炭化物少量含む)
- 5 - 2. 10YR4 3C1-1 黄褐色細砂混じり中砂 - 細砂 (土壌化、炭化物) 上部、炭土少量含む)
- 5 - 3. 10YR4 黄褐色中砂 - 細砂 (土壌化、炭化物少量含む、上部多い) = 厚穴部100層上
- 5 - 4. 10YR4 黄褐色中砂 - 細砂 (10YR5 3C1-1 黄褐色細砂含む、土壌化)
- 5 - 5. 7.5YR4 3C1-1 黄褐色中砂 (土壌化、炭化物含む、上部多い)
- 5 - 6. 2.5Y6.2/6.5 赤色中砂 - 細砂 (10YR5 4R6.5/7.0 赤色中砂含む、土壌化) = 厚穴部100層上
- 6 - 1. 2.5Y7.2/6.5 赤色中砂 - 細砂 (土壌化、炭化物含む、上部多い)
- 6 - 2. 2.5Y5.1 赤褐色細砂混じり中砂 (土壌化、炭化物含む、上部少ない)
- 6 - 3. 7.5YR4 黄褐色中砂 - 細砂 (10YR5 3C1-1 黄褐色細砂混じり中砂含む、マンガン - 細砂、上部多い)
- 6 - 4. 10YR5 3C1-1 黄褐色中砂 - 細砂 (土壌化、炭分、上部少ない)
- 6 - 5. 2.5Y4.6 赤褐色細砂混じり中砂
- 7 - 1. 2.5Y5.1 赤褐色中砂 - 細砂 (10YR7.5/6.5 赤褐色土、土壌化) = 厚穴部100層上
- 7 - 2. 7.5YR4 1R 赤褐色 (10YR7.5/6.5 赤褐色土、マンガン - 炭分、上部少ない、土壌化) = 厚穴部100層上
- 7 - 3. 2.5Y6.2/6.5 赤褐色細砂混じり中砂 (10YR5 5R6.5 赤褐色土、上部多い)
8. 10YR4 黄褐色細砂混じり中砂 (10YR4 2R6 黄褐色中砂含む、土壌化、上部少ない) = 土壌100層上
9. 7.5YR4 4R 黄褐色中砂混じり中砂 (炭化物中多く含む、上部少量含む) = 土壌100層上
10. 10YR4 3C1-1 黄褐色中砂 (炭化物含む、層多い) = 土壌100層上
11. 10YR5 1R 赤褐色細砂混じり中砂 (炭化物含む、上部少ない) 厚100層上
12. 2.5Y5.1 赤褐色細砂混じり中砂 (10YR5 5R6.5 赤褐色土、炭分、マンガン含む) = 土壌100層上
13. 10YR5 2R 赤褐色細砂混じり中砂 (炭化物少量含む) = 土壌100層上
14. 2.5Y5.1 赤褐色中砂 (炭分含む) = 土壌100層上
15. 10YR5 5R 黄褐色細砂混じり中砂 - 細砂 = 土壌100層上
16. 10YR5 5R 黄褐色細砂混じり中砂 - 細砂 = 土壌100層上
17. 10YR5 5R 黄褐色中砂 - 細砂 = 土壌100層上
18. 10YR5 5R 黄褐色細砂 (炭化物少量含む) = 土壌100層上

図 6. 1 C地区 全体図 (S=1/400)・断面図 (S=縦/160・横/1/400)

表6. 1 C地区検出遺構の概要(4)

発掘 番号	遺 構	ト シ ナ	規 模	地 質	取 得 土 器 品	注 意	所 見
308	柱穴	1.C	F2b10	30×25×25	10YR5-10黄～黒膠		古墳後期～古代
309	柱穴	1.C	F2b10	30×20×20	10YR5-10黄～黒膠		古墳後期～古代、黒土直建物201、柱穴あり、土坑30を穿る
310	柱穴	1.C	F2b10	40×50×50	10YR4-6黄～シト	10YR5-6シト(10YR5-6シト)アブツク凝じ、土器片、灰土層あり	古墳後期～古代、柱穴あり、黒土直建物201柱穴201に穿られる
311	柱穴	1.C	F2b10	70×30×5	2.5YR4-6黄緑～シト		古墳後期～古代
312	柱穴	1.C	F2b10	40×70×40	10YR4-4中砂～黒膠(灰+土器含む)、10YR4-4中砂～黒膠(10YR5-10黄～シト凝じ)		古墳後期～古代、黒土直建物201、柱穴30、35を穿る
313	柱穴	1.C	F2b10	40×40×4	2.5YR4-6黄緑～シト		古墳後期～古代
314	柱穴	1.C	F2b10	30×30×7	2.5YR4-6黄緑～シト		古墳後期～古代
315	柱穴	1.C	F2b10	65×45×40	10YR4-4中砂、10YR5-6黄緑～中砂(灰含む)、10YR5-6中砂、10YR4-6黄緑、10YR7-4黄膠		古墳後期～古代、柱穴316を穿る
317	柱穴	1.C	F2b10	30×25×5	2.5YR4-6黄緑～シト		古墳後期～古代
318	柱穴	1.C	F2b10	30×(25)×30	10YR4-4中砂(10YR5-6黄緑～中砂凝じ)、10YR5-6中砂		古墳後期～古代、柱穴319に穿られる
319	溝	1.C	F2b10	100×20×12	2.5YR4-6黄緑～シト		古墳後期～古代、溝312は平行する溝
320	溝	1.C	F2b10	100×20×17	2.5YR4-6黄緑～シト		古墳後期～古代、溝312は平行する溝
321	柱穴	1.C	F2b10	50×50×35	10YR4-4中砂～黒膠(灰+土器含む)、10YR4-4中砂～黒膠(10YR5-6シト)アブツク凝じ		古墳後期～古代、柱穴322を穿る
322	柱穴	1.C	F2b10	30×30×20	10YR4-4中砂～黒膠		古墳後期～古代、黒土直建物202
323	柱穴	1.C	F2b10	30×45×40	10YR4-4中砂～黒膠(2.5YR5-6黄緑凝じ)、土器片、1.5Y中砂含む、2.5YR5-6黄緑～シト		古墳後期～古代、柱穴323を穿る
324	柱穴	1.C	F2b10	40×40×7	2.5YR4-6黄緑～シト		古墳後期～古代
325	柱穴	1.C	F2b10	30×15×7	2.5YR4-6黄緑～シト		古墳後期～古代
326	柱穴	1.C	F2b10	40×30×30	10YR4-6黄緑～シト+2.5YR5-6シト(灰わずか含む)		古墳後期～古代
327	柱穴	1.C	F2b10	20×20×-	2.5YR4-6黄緑～シト		古墳後期～古代
328	柱穴	1.C	F2b10	10×10×-	-		古墳後期～古代
329	柱穴	1.C	F2b10	25×15×25	10YR4-6黄緑～シト(10YR5-6シト)アブツク凝じ、10YR5-1+10YR5-6シト		古墳後期～古代、柱穴と、柱敷あり
330	柱穴	1.C	F2b10	20×20×16	10YR5-6シト		古墳後期～古代
331	土坑	1.C	F2b10	40×(45)×5	10YR5-2黄膠		古墳後期～古代、溝312は平行する溝
332	土坑	1.C	F2a10	65×55×55	2.5Y7-2中砂(10YR5-6+2.5Y6-1中砂)アブツク凝じ、土器片含む、10YR5-6中砂(2.5Y7-2中砂)アブツク凝じ		古墳後期～古代、黒土直建物203
333	柱穴	1.C	F2c1	35×30×20	10YR4-4中砂(10YR6-2黄緑～黒膠凝じ)		古墳後期～古代
334	柱穴	1.C	F2c1	35×25×8	10YR5-2+2.5YR1-6黄緑		古墳後期～古代
335	柱穴	1.C	F2c1	35×25×8	2.5YR4-6黄緑～シト		古墳後期～古代
336	柱穴	1.C	F2c10-F2c4	35×20×25	10YR4-4中砂～黒膠(土器片あり)、10YR5-1(シト)10YR5-6シト(含む)		古墳後期～古代
338	柱穴	1.C	F2c1	40×40×20	10YR4-4中砂(黒膠多く含む)		古墳後期～古代
339	柱穴	1.C	F2b10	60×50×50	10YR4-4中砂(5YR7-2黄緑シト)アブツク含む		古墳後期～古代、柱敷あり、溝312に穿られる
340	柱穴	1.C	F2b10	55×35×30	10YR4-4中砂(5YR7-2黄緑シト)アブツク含む		古墳後期～古代、壁穴195に穿られる
341	柱穴	1.C	F2b10	30×20×5	2.5YR4-6黄緑～シト		古墳後期～古代
342	柱穴	1.C	F2b10	40×40×5	2.5YR4-6黄緑～シト		古墳後期～古代
343	柱穴	1.C	F2b10	25×25×15	10YR5-6中砂～黒膠(10YR4-4中砂凝じ)		古墳後期～古代、柱穴324に穿られる
344	柱穴	1.C	F2b10	25×25×15	10YR5-1中砂～黒膠(10YR5-6シト)アブツク		古墳後期～古代
345	柱穴	1.C	F2b10	45×45×40	2.5YR4-6黄緑～シト		古墳後期～古代、柱穴325に穿られる
346	柱穴	1.C	F2b10	40×40×40	10YR4-4中砂～黒膠(10YR5-6中砂)黒地(アブツク凝じ)		古墳後期～古代、黒土直建物202
347	柱穴	1.C	F2b10	35×35×-	2.5YR4-6黄緑～シト		古墳後期～古代
348	柱穴	1.C	F2b10	20×20×16	10YR5-6シト		古墳後期～古代
349	柱穴	1.C	F2b10	15×15×6	10YR6-1中砂～黒膠		古墳後期～古代
348	柱穴	1.C	F2b10	40×40×15	10YR4-4中砂(黒膠多く含む)		古墳後期～古代
350	柱穴	1.C	F2b10	30×20×10	2.5YR4-6黄緑～シト		古墳後期～古代
351	柱穴	1.C	F2b10	45×45×50	10YR4-4中砂(10YR5-6シト)アブツク凝じ、土器片あり、10YR5-6中砂～中砂(10YR4-4中砂凝じ)、10YR5-6中砂～黒膠(10YR5-6中砂)～シト		古墳後期～古代、黒土直建物202
352	柱穴	1.C	F2b10	25×20×40	10YR4-4中砂(10YR5-6シト)アブツク含む		古墳後期～古代
353	柱穴	1.C	F2b10	45×45×25	10YR3-6黄緑～シト(3cm厚あり、灰+土器片含む)、2.5Y6-2中砂(土器含む)		古墳後期～古代、黒土直建物201、柱敷あり、壁穴195に穿れる
354	柱穴	1.C	F2b10	30×30×20	10YR4-4中砂～黒膠		古墳後期～古代
355	柱穴	1.C	F2b10	30×(25)×25	10YR4-4中砂～黒膠		古墳後期～古代、黒土直建物201柱穴212に穿られる
356	柱穴	1.C	F2b10	25×21×21	10YR5-1中砂(2.5YR5-6黄緑～中砂凝じ)		古墳後期～古代
357	柱穴	1.C	F2b10	20×20×20	10YR5-1中砂(2.5YR5-6黄緑凝じ)		古墳後期～古代
358	柱穴	1.C	F2b10	35×25×12	10YR6-1中砂(10YR4-4中砂～黒膠凝じ)		古墳後期～古代
359	柱穴	1.C	F2b10	20×20×20	10YR4-4中砂～黒膠(10YR4-4中砂～黒膠凝じ)		古墳後期～古代
360	土坑	1.C	F2b10	100×90×40	10YR4-4中砂+2.5YR5-6黄緑～シト(灰わずか含む)		古墳後期～古代、柱穴326に穿られる
361	柱穴	1.C	F2b10	30×20×20	10YR5-1中砂(2.5YR5-6シト)アブツク含む		古墳後期～古代
362	柱穴	1.C	F2b10	50×50×35	10YR4-6黄緑～シト(10YR5-6シト凝じ)		古墳後期～古代、壁穴195に穿られる
363	柱穴	1.C	F2b10	50×45×30	10YR4-6黄緑～シト		古墳後期～古代、壁穴195に穿られる
364	溝	2.C	F2c7	1400×100×27	10YR4-6黄緑(3cm厚あり)		古墳後期～古代、溝100に横り付く(溝30と同層部か)
365	土坑	2.C	F2c7	120×120×27	10YR4-6黄緑		古墳後期～古代
366	柱穴	1.C	F2b10-F2b9	25×25×35	10YR6-1シト+10YR5-6シト)アブツク、10YR6-1シト(柱敷)、10YR5-6中砂～黒膠(10YR4-4中砂凝じ)		古墳後期～古代、柱敷あり
367	柱穴	1.C	F2b10	35×35×30	10YR6-2中砂(10YR5-6中砂)～シト、10YR5-2中砂～シト(10YR5-6シト+灰含む)、柱敷		古墳後期～古代、黒土直建物207、柱敷あり
368	柱穴	1.C	F2b10	30×30×27	10YR5-2中砂～シト(マンガン含む)、10YR4-6黄緑～シト		古墳後期～古代
369	柱穴	1.C	F2b10	20×20×15	10YR6-1中砂～シト(10YR5-6シト凝じ)、土器片あり		古墳後期～古代、柱敷と土か
371	柱穴	1.C	F2b10	20×20×10	10YR6-1中砂～シト		古墳後期～古代、柱敷と土か
372	柱穴	1.C	F2b10	35×30×18	10YR5-6黄緑(マンガン含む)		古墳後期～古代
373	柱穴	1.C	F2b10-d8	18×18×26	10YR5-6黄緑(土器片含む)		古墳後期～古代
374	柱穴	1.C	F2b10	20×20×8	10YR5-6黄緑(土器片含む)		古墳後期～古代
375	柱穴	1.C	F2b10	18×18×15	10YR4-4中砂～黒膠(土器片+灰含む)		古墳後期～古代
376	柱穴	1.C	F2b10	30×45×8	10YR4-4中砂～黒膠		古墳後期～古代
377	柱穴	1.C	F2b10	60×45×30	10YR4-4中砂～黒膠(マンガン含む)		古墳後期～古代、壁穴195に穿れる
379	柱穴	2.C	F2c7	35×30×35	10YR5-6黄緑、10YR5-6+2.5YR5-6黄緑～シト		古墳後期～古代
380	柱穴	2.C	F2c7	30×28×25	10YR5-6黄緑(5YR5-6シト)アブツク含む		古墳後期～古代
381	柱穴	2.C	F2c7	60×53×55	10YR5-6黄緑、10YR5-6黄緑(5YR7-4中砂)アブツク含む		古墳後期～古代
382	柱穴	2.C	F2c7	40×35×25	10YR5-6黄緑、10YR5-6黄緑(5YR7-4中砂)アブツク含む		古墳後期～古代
383	柱穴	2.C	F2c7	20×20×15	10YR5-6黄緑		古墳後期～古代
384	柱穴	2.C	F2c7	20×18×13	10YR5-6黄緑(土器片含む)		古墳後期～古代
385	柱穴	2.C	F2c7	20×20×10	10YR5-6黄緑		古墳後期～古代
386	柱穴	2.C	F2c7	24×24×5	10YR5-6黄緑		古墳後期～古代
387	柱穴	2.C	F2c7	40×40×10	10YR5-6黄緑(マンガン含む)		古墳後期～古代
388	柱穴	2.C	F2c7	25×25×13	10YR5-6黄緑(土器片あり)		古墳後期～古代

表 6. 1 C地区検出遺構の概要(5)

遺構番号	遺 構	トレンチ シフト	地 区	規模(長軸×短軸 ×高さ) 単位(m) ()内は残存高	土 質	備 考
309	柱穴	2.C F267		30×25×15	10YR5-6細砂	古墳前期～古代
309	柱穴	2.C F267		45×40×10	10YR5-6細砂(土器・瓦含む)	古墳前期～古代
309	柱穴	2.C F267		60×55×30	10YR5-6細砂(マンガン含む、5cm埋含む)	古墳前期～古代
309	柱穴	2.C F267		55×55×30	10YR5-6細砂(5YR5-6シト石下まじり、マンガン多い)	古墳前期～古代
309	柱穴	2.C F267・F267		35×30×10	10YR5-6細砂(マンガン含む)	古墳前期～古代
309	柱穴	2.C F266		30×45×30	10YR5-6細砂(マンガン多い)、10YR7-8シトプロット、10YR5-6細砂(マンガン多い)	古墳前期～古代
305	柱穴	2.C F266・F266		30×30×30	10YR5-6細砂～シト(土器含む)、10YR6-8細砂～シト(土器・瓦含む)、10YR7-8細砂～シト	古墳前期～古代、溝跡・100mmにあり(溝より新しい)、柱穴305と対になる
306	柱穴	1.C F268		60×50×16	10YR5-6細砂	古墳前期～古代か
307	柱穴	1.C F268		30×45×38	10YR5-6細砂(土器片・マンガン含む)、10YR6-7シト・10YR5-6細砂	古墳前期～古代か
308	柱穴	1.C F2610		70×30×30	10YR6-8粗砂(土器・細砂(土器含む))	古墳前期～古代、掘り付建物200、1区11297F層
309	柱穴	1.C F2610		70×50×45	10YR6-8粗砂(土器・細砂(土器含む))	古墳前期～古代、掘り付建物200、1区11297F層
400	柱穴	1.C F269		40×40×45	10YR6-8粗砂(土器・細砂(土器含む))	古墳前期～古代、掘り付建物200、1区11297F層
401	柱穴	1.C F269		40×40×25	10YR6-8粗砂(土器・細砂(土器含む))	古墳前期～古代、掘り付建物200、1区11297F層
402	柱穴	1.C F269・F2610		40×35×30	10YR6-8粗砂(土器・細砂(土器含む))	古墳前期～古代、掘り付建物200、1区11297F層
403	柱穴	2.C F266		35×100×30	7.5YR7-8シト(マンガン・瓦含む)	古墳前期～古代、溝跡(外へ向く)、柱穴305と対になるか(溝100より新しい)

確認できる。東西方向の土層断面図(図6.2上)をみると、住居の掘りこみ底面は大きく東側が凹む形状となっているが、その底面直上に7-3層を埋積させることによって床面を水平に整えている。

床面直上層(7-2層)からは、図6.3-1・2の高坏脚部が出土している。1は脚部中位から明確に屈曲して裾が広がる形態と推定され、弥生時代後期末~庄内式期の特徴を有している。2も弥生時代後期後葉に通用な形態である。これら床面直上層の出土土器の特徴から、当住居跡の廃絶時期は弥生時代後期末から古墳時代初頭(庄内式期)と考えることができる。また当住居上層(7-1層)から出土した土器群(3~8)も弥生時代後期~庄内式期に属することから、上述の遺構廃絶時期と矛盾はし

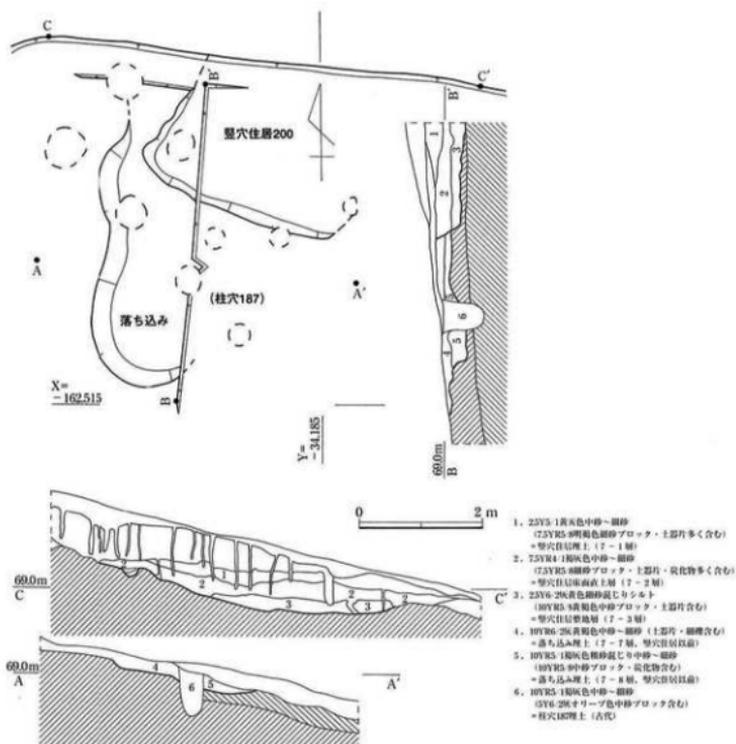


図6.2 C地区 竪穴住居200平面図・断面図 (S=1/80)

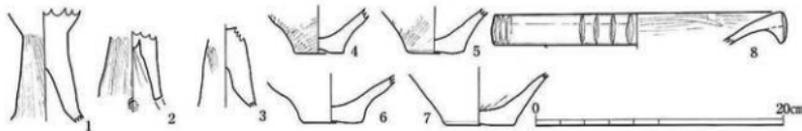


図6.3 C地区 竪穴住居200出土土器 (S=1/4)

ていない。ただ、6. 3 - 8の器台の所属時期については、口縁端面に棒状浮文を貼付する特徴から、弥生時代後期中葉以前に遡る可能性がある。これについては、住居跡が不完全に埋没してできた凹みへ西側尾根筋からの流入した遺物とも考えられ、住居跡の帰属年代とは関係しないと考える。

3. 古墳時代後期～古代の遺構・遺物

【竪穴住居199】(図6. 4・5)

F 2 b 10地区で検出された平面方形の竪穴住居跡である。遺構の北半部が調査区外であり、なおかつ東端部も基盤層が流出していたため、東南部を中心として全体の約1/3程度の範囲を検出したにとどまっている。壁溝は明確に確認できなかったが、断面図をみると東辺の底面がわずかに凹み形状となっている。地山掘削面は明確に認識でき、埋土最下層は床面整地土層の可能性はあるが、遺構内埋土と床面整地土層を分別して確認することは難しかった。

炉跡や竈は確認されず、おそらく調査区外に存在しているものと考えられる。遺構底面に複数検出された柱穴のうちどれが主柱穴に相当するのかについても確定することは難しい。

出土遺物としては、埋土中から須恵器・土師器細片が多数出土しているものの、図化可能だったのは1点(6. 5-1)のみである。完形で出土し、その形態からTK10～TK43型式と考えられ、古墳時代後期後半(6世紀後半)に帰属すると思われる。このことから、当竪穴住居の使用・廃絶年代も、古墳時代後期後半を中心とした時期を想定しておきたい。

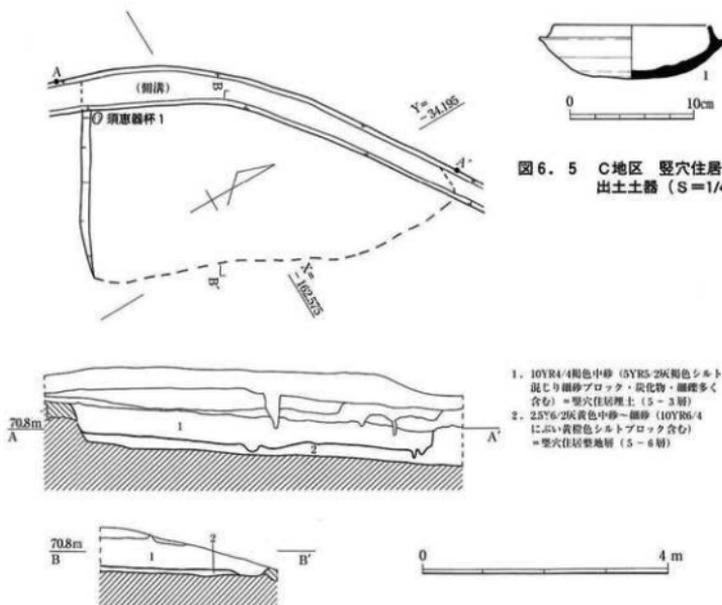


図6. 4 C地区 竪穴住居199平面図・断面図 (S=1/80)

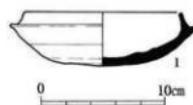


図6. 5 C地区 竪穴住居199出土土器 (S=1/4)

【竪穴住居111】(図6. 6・7)

F2c8・c9・d8・d9地区にまたがって検出された平面方形の竪穴住居跡。南辺部の基盤層が流出しており、完全な状態での遺構検出はできなかった。短辺約380cm、長辺400cm以上の規模となり、壁溝の幅は約44cmである。柱穴が住居跡底面で数個確認されているものの、いずれも深さが10cmにも満たず、主柱穴とするには不十分である。床面整地土層は確認されず、掘り込んだ底面をそのまま床面と

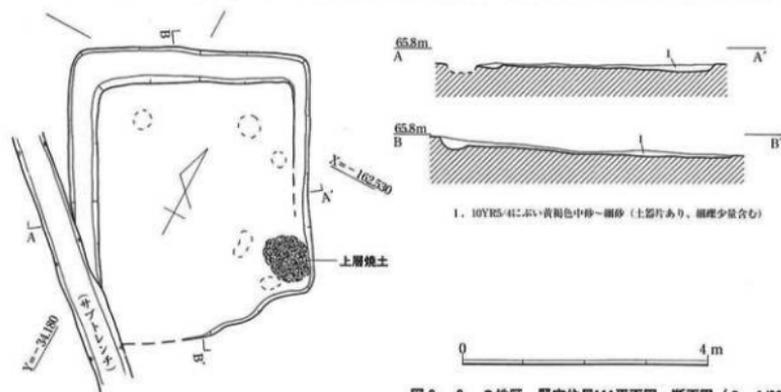


図6. 6 C地区 竪穴住居111平面図・断面図 (S=1/80)

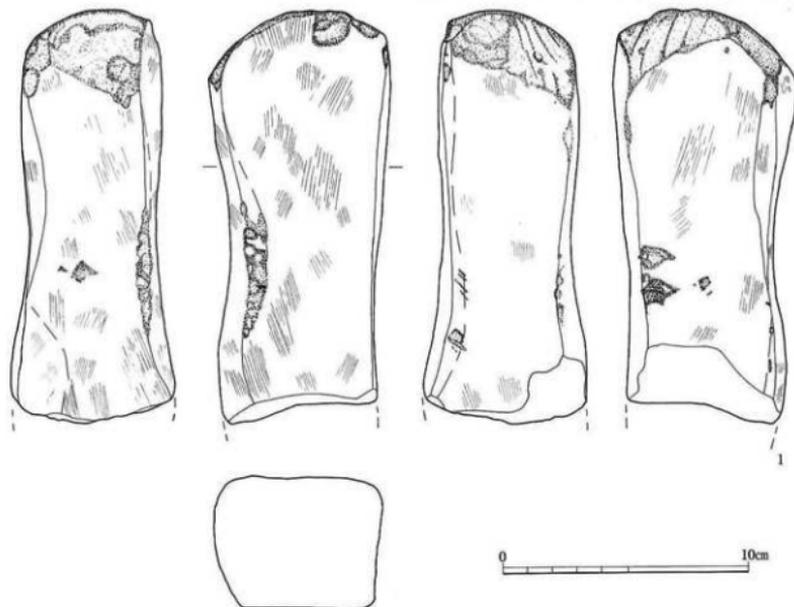


図6. 7 C地区 竪穴住居111出土石器 (S=1/2)

して使用していたと考えられる。

厚さ約6cmの埋土中からは土師器・須恵器片が出土している。すべて細片で詳細な時期決定は困難である。ただし、竪穴住居199に規模・形態が類似するため、ほぼ同時期、つまり古墳時代後期後半の使用時期を想定しておきたい。埋土中から出土した砥石(図6・7-1)は、和泉砂岩製で、表面のきめの細かなものである。鉄器用と推測され、古墳時代～古代に属する可能性も高い。なお、一部に敲打痕がみられ叩石・台石に転用されたと考えられる。

【掘立柱建物201】(図6・8・9)

F2b9地区で検出された掘立柱建物で、柱穴139・160・174・180・187・353によって構成される。東半部は流出していて検出できなかったため、建物全体の平面プランは明確ではない。柱穴139・160・187・174が直線的に並び、柱穴180・353がそれに平行するように検出されている。おそらく、柱穴139を建物の隅部とし、そこから柱穴174に向かって北西-南東方向に延びる列を一边として北東方向に柱穴列の展開する建物構造であったと推定できる。ただし、この一边もさらに南東方向に展開していた可能性もあり、建物の規模を確定することは難しい。なお柱穴353は弥生時代後期～庄内式期の竪穴住居200を切って構築されている。

各柱穴からは、土師器・須恵器の細片が多く出土しているが、時期の判別できる個体は少ない。図6・9-1だけが図化可能な個体で、高坏の蓋と推定できる。形態から、TK43型式を前後する時期のものと考えられる。この土器にもとづけば、当建物の使用廃絶時期が古墳時代後期後半であったことが類推できる。

【掘立柱建物202】(図6・10)

F2b10地区で検出された柱穴列。柱穴列を1列検出したのみである。柱穴351・321・128・312が列状に検出されたため掘立柱建物の一边と考えられるが、全体の建物プランは不明である。柱穴列は北北東-南南西方向に沿っており、南東方向が斜面で基盤層の流出が顕著なため、この柱穴列を一边として南東側に建物が展開していたと想定できる。

柱穴内からは、土師器・須恵器細片が出土しているものの、詳細な時期決定のできる個体は確認できなかった。周囲で検出された掘立柱建物の時期や、包含層から出土した土器などから、古墳時代後期～奈良時代の間に使用されたものと考えられる。

【掘立柱建物203】(図6・11)

F2c10地区で検出された大型の掘立柱建物。柱穴117・118・119・120・125・289・305・306・307・309・331によって構成される。北東部分の柱穴は基盤層流出のために検出できなかったが、長軸が北北東-南南西方向に沿った4×3間の規模の掘立柱建物と考えられる。柱穴306・289・117・118・119を長辺とし、柱穴306から直交する方向に柱穴307・309が、柱穴119から直交する方向に柱穴120・331・125がそれぞれ検出された。長辺約680cm、短辺約460cmの規模で、各柱間距離は約160cm程度である。

掘立柱の内側には、床支えのための柱穴は見当たらない。このため、当建物は、いわゆる平地式住居の形態をとっていたものと考えられる。各柱穴埋土中からは、土師器・須恵器の細片が出土しているものの、詳細な時期決定のできる個体は確認できなかった。この建物の周囲で検出された掘立柱建物の時期や、遺物包含層より出土した土器などから、古墳時代後期～奈良時代の間に使用されたものと考えられる。今回の調査で検出された掘立柱建物のなかで最大規模をほこる建物で、集落内の中心施設と考えられる。

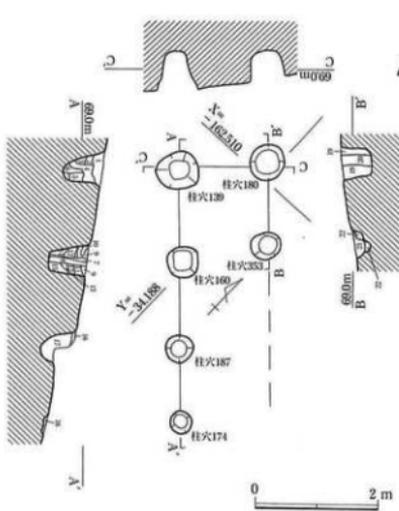


図 6. 8 C地区 掘立柱建物201平面図・断面図 (S=1/80)

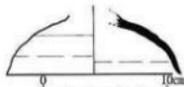
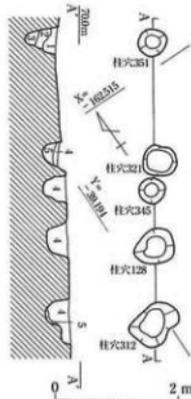


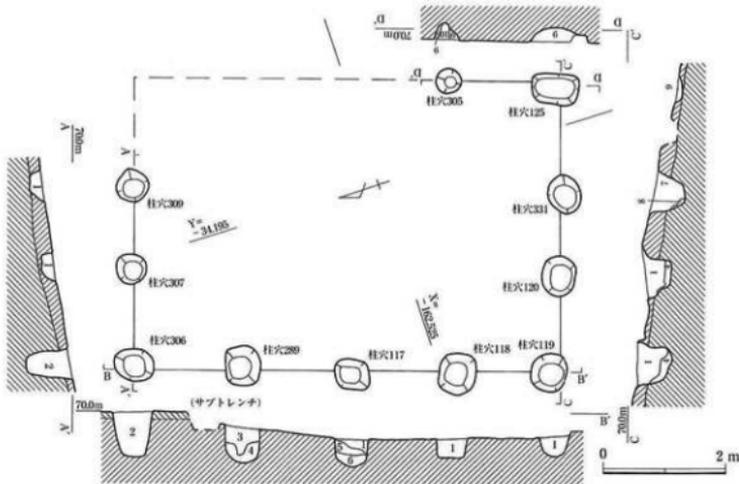
図 6. 9 C地区 掘立柱建物201柱穴187 出土土器 (S=1/4)

- 掘立柱建物201層
- 10YR5-1-5-8中砂 (炭化物・土器)
 - 10YR5-1中砂 (25YR7-3.5-6土炭化物)
 - 2.5YR6-1-7-3シルト
 - 2.5YR5-1細砂 (10YR5-8中砂・マンガン)
 - 2.5YR5-1-7-3中砂
 - 2.5YR5-1細砂 (5より粒状) - 柱底
 - 2.5YR7-2中砂 + 10YR5-4中砂
 - 10YR6-1中砂 (炭化物) - 柱底
 - 10YR5-1細砂 (5Y6-2中砂・炭化物)
 - 10YR5-8褐色シルト
 - 2.5YR6-2細砂 (10YR5-8中砂・炭化物・マンガン)
 - 2.5YR6-1細砂 + 2.5YR7-2中砂
 - 2.5Y6-1細砂 (12よりやや粒状)
 - 10YR5-8-5-1細砂
 - 10YR5-1-5-8中砂 (マンガン)
 - 2.5Y5-1中砂 + 10YR5-8中砂
 - 10YR5-1細砂 (5Y6-2中砂・土器)
 - 5Y6-2細砂 (10YR5-8中砂・マンガン)
 - 10YR6-3-8.5-6シルト
 - 10YR4-3.5-4 (土器・炭化物) - 柱底
 - 10YR6-2中砂 (土器・炭化物・細砂)
 - 2.5Y6-2シルト



- 掘立柱建物202層
- 10YR6-4中砂
 - (10YR5-6.5-6.5-6.5中砂・土器含む)
 - 10YR5-6.5-6.5-6.5中砂 (10YR4-4細砂含む)
 - 10YR5-6.5-6.5-6.5中砂 - 細砂
 - 10YR5-1細砂 - シルト含む
 - 10YR4-4褐色中砂 - 細砂 (炭化物・土器片少量含む)
 - 10YR4-4褐色中砂 - 細砂 (10YR6-1褐色色細砂 - シルト含む)

図 6. 10 C地区 掘立柱建物202 平面図・断面図 (S=1/80)



- 10YR6-1褐色中砂 (10YR5-8-7.5YR7-3.5にぶい・橙色地山シルトブロック含む)
- 10YR6-6明黄褐色粗砂混じり中砂 - 細砂 (土器片・炭化物少量含む)
- 2.5Y6-6明黄褐色粗砂混じり中砂 (粗砂多い)
- 10YR5-8黄褐色中砂 (2.5Y6-3.5にぶい・黄色中砂 - 粗砂含む)
- 10YR5-8黄褐色中砂
- 10YR5-1褐色色粗砂混じり中砂 - 細砂
- 2.5Y7-2灰黄色中砂 (10YR5-8-2.5Y6-1黄褐色中砂・ブロック含む)
- 10YR5-8黄褐色中砂 (2.5Y7-2中砂・ブロック含む)
- 7.5Y5-6明褐色細砂 - シルト (10YR4-4中砂含む)
- 10YR6-1褐色色粗砂 - 細砂 (10YR4-4粗砂含む) - 柱底

図 6. 11 C地区 掘立柱建物203平面図・断面図 (S=1/80)

【掘立柱建物206】(図6. 12)

F 2 b 9・c 9 地区で検出された柱穴132・131・195・211・212・213・223・225・230(163・227・133?)により構成される掘立柱建物。2×2間の平面形態をとり、長軸が北東-南西方向に沿う。長辺が約400cm、短辺が約320cmの規模である。また、南側の短辺については、上記の柱穴131・195・230ではなく、柱穴163・227・133によって構成される可能性もあり、その場合は長辺が330cmの規模となる。

各柱穴のうち、北西よりの柱穴群が南東よりの柱穴群に比べ検出深長が深くなっているのは検出面自体が南東方向へと傾斜しているためである。深さには差が有るものの、柱穴底面のレベルには大きな差はない。中央にも柱穴があり、床支えの梁の設営が可能なプランであることから、床構造をもっていたと推測できる。上記の想定可能な2種類の柱穴構成のうち、いずれの場合においても、小型の倉庫状の建物であったと考えられよう。

これらの柱穴からは、須恵器・土師器細片が出土したが、古墳時代中期以降であることが明らかだけでなく詳細な所属時期の決定は困難である。ただ、包含層中の出土土器が古墳時代後期～奈良時代を中心としているため、当掘立柱建物も同時期に設営・使用されたものと推測できる。また、掘立柱建物203とほとんど軸方向が同じであり、同時存在していたとすれば対を成して建物群を構成していたとも考えられる。

【掘立柱建物207】(図6. 13)

F 2 c 8～c 9 地区で検出された掘立柱建物。柱穴182・145・149・154・178・185・237・242・367によって構成される2×2間の建物である。長軸がほぼ東西方向に沿い、柱間隔はすべて140～150cmで長辺が約300cm、短辺が約290cmの規模である。中央にも柱穴があり、床支えの梁の設営が可能なプランであることから、床構造をもっていたと推測できる。

これらの柱穴からは、須恵器・土師器細片が出土したが、古墳時代中期以降であることが明らかだけでなく詳細な所属時期の決定は困難である。ただ、包含層中の出土土器が古墳時代後期～奈良時代を中心としているため、当掘立柱建物も同時期に設営・使用されたものと推測できる。

また、本調査における最大規模の建物である掘立柱建物203と軸方向が同じであることから、同時存在していたとすれば対を成して建物群を構成していたとも考えられる。大規模施設にともなう倉庫施設といった想定も可能であろう。

【掘立柱建物209】(図6. 14)

F 2 d 9～d 10地区で検出された柱穴列。柱穴列を1列とそれに付随する可能性のある柱穴1基を検出したのみである。柱穴398・399・400・401が列状に、柱穴402がそれに直交する方向に検出されたため掘立柱建物の一部と考えられるが、全体の建物プランは不明である。柱穴列は北北東-南南西方向に沿っており、柱穴398～401列を一辺として南西側に建物が展開していたものと想定できる。

柱間隔は約160cm程度と広く、柱穴398～401列の全長は約480cmである。柱穴内からは、土師器・須恵器細片が出土しているものの、詳細な時期決定のできる個体は確認できなかった。周囲で検出された掘立柱建物の時期や、包含層から出土した土器などから、古墳時代後期～奈良時代の間に使用されたものと考えられる。なお掘立柱建物209の柱穴は土坑112埋土掘削後の底面で確認できたもので、これらの柱穴上部は土坑112によって削平を受けていると考えられる。

また、先述の掘立柱建物206と軸方向がほとんど同じであることから、同時存在していたとすれば対を成して建物群を構成していたとも考えられる。

【土坑110】(図6. 15)

F 3 c 1 地区で検出された平面楕円形の土坑。長軸約360cm、短軸約170cm、深さ約40cmの規模である。底面の中央付近が柱穴状に凹む形状となっている。埋土中には炭化物が集中してみられた。

上層を中心に土器片が出土するが、大半は細片で時期決定は困難である。唯一図化可能であった高坏(図6. 15-1)は、古墳時代後期～飛鳥時代の所産と考えられる。当土坑の埋没時期を6～7世紀の範疇で、想定することが可能である。

【土坑112】(図6. 16)

F 2 d 9・d10地区で検出された、落ち込み状の土坑。平面形態は不定形で、変形L字型を呈する。南北方向の長さは約760cm、東西方向の長さは約680cm、深さは約40cmの規模である。

底面も凹凸が大きく不整形であるが、掘立柱建物209の柱穴を破壊して形成されていることから、人為的な遺構と考えたい。埋土中には多量の須恵器・土器片が出土したが、いずれも細片で図化可能な個体はない。また時期決定の可能な個体もなく、詳細な遺構形成時期については不明である。

古墳時代後期～古代の遺構と考えられるが、掘立柱建物209に後出することから、当遺跡の遺構群形成期間のうち比較的遅い段階で形成された遺構と考えたい。機能としてごみ捨て穴的な生活廃棄場所であったと想定しておきたい。

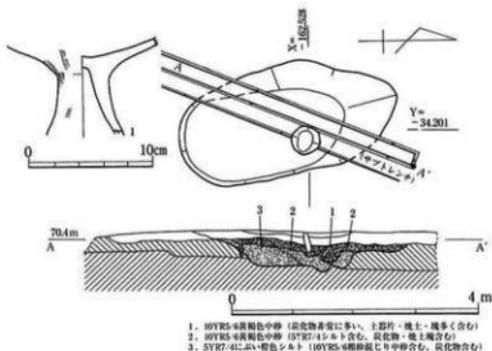


図6. 15 C地区 土坑110平面図・断面図・出土土器 (S=1/80, 出土土器1/4)

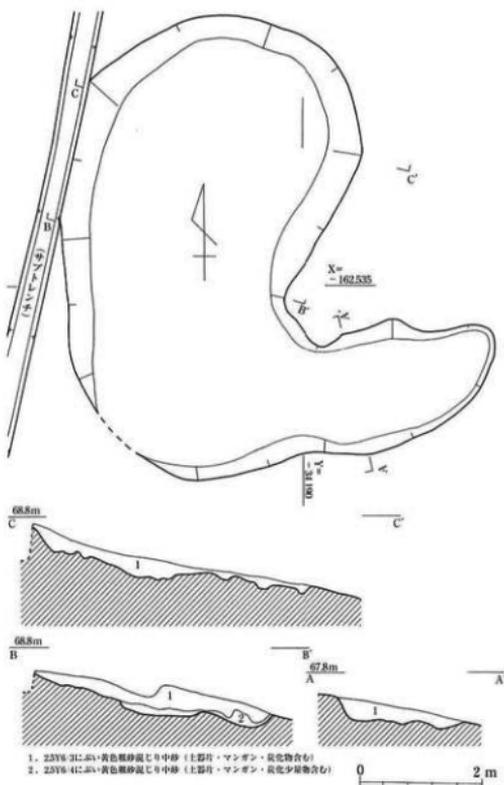


図6. 16 C地区 土坑112平面図・断面図 (S=1/20)

【凝灰岩集積土坑208】(図6. 17~19)

F2 b 10・c 10地区で検出された土坑。両端が検出できなかったため正確な形態・規模は不明だが、平面はほぼ円形で径約180cm、深さ約30cmである。埋土中には多量の凝灰岩片が含まれており、出土状況(図6. 17)からみると、西側から凝灰岩を土坑内に廃棄したものと考えられる。

出土した凝灰岩には加工面が残存しており、建築物の基壇の部材であったと想定できる。実際に図6. 19に示したものは、複数の石片が接合復元し柱状の石製品であったことが判明した。恐らく基壇を構成する寿福石の一部であろう。この石製品は、表面に炭化物が付着して黒化しており、使用時に火を受けた可能性がある。なお、同様の石製品の破片はさらに4点程度出土している。1996~1997年の胸ヶ谷遺跡の発掘調査でも約20点程度同様の凝灰岩石製品が出土しており、当遺跡の性格を考える上で重要な要素となっている。基壇石を用いる古代の建物群がこれまでの当遺跡調査区に近接して存在していた可能性はきわめて高い。

また、当遺構からは、砂岩製の台石も出土しており、基壇部材以外の大型石製品もともに廃棄されていたものと考えられる。当遺構からは、須恵器・土師器細片が出土しているものの、時期決定の類推で

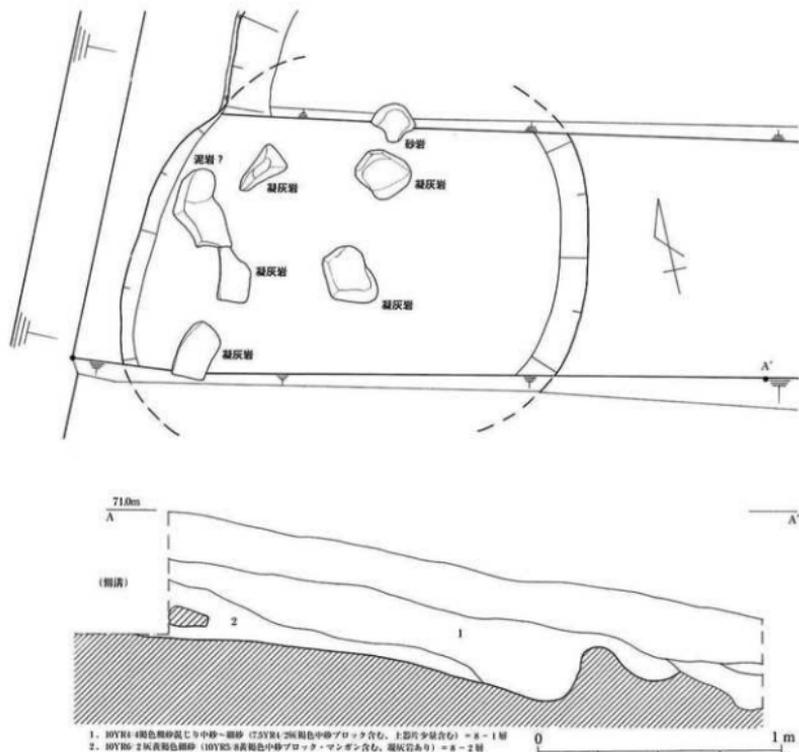


図6. 17 C地区 土坑208平面図・断面図 (S=1/20)

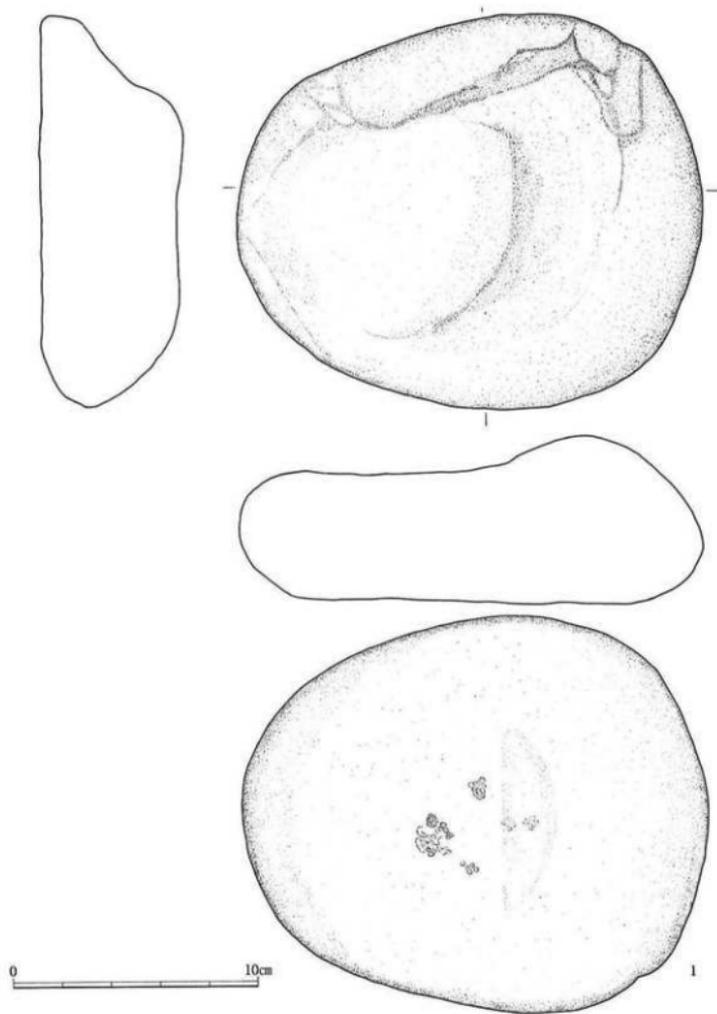


图 6. 18 C地区 土坑208出土石器 (S=1/2)

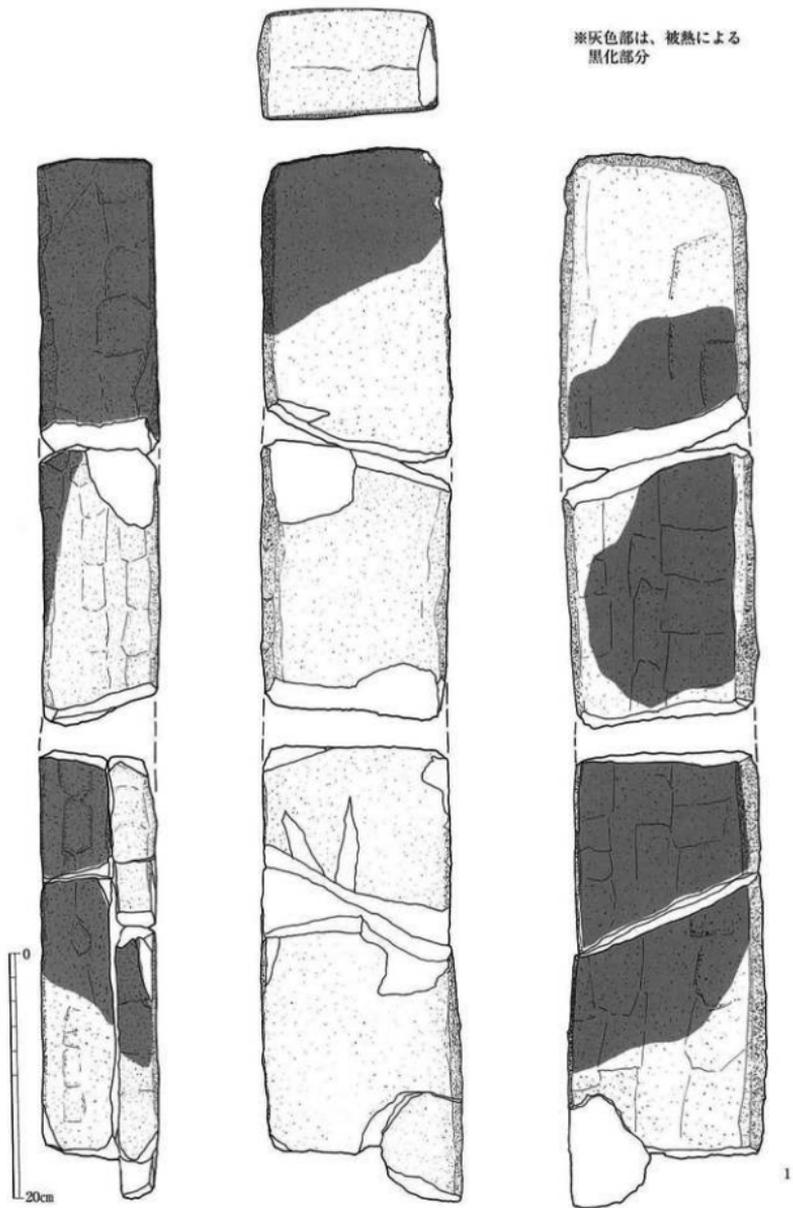


図 6. 19 C地区 土坑208出土凝灰岩 (S=1/4)

きる個体は見当たらない。周囲に形成されている遺構の時期から、古墳時代後期～奈良時代の廃棄施設と推定しておきたい。

【溝108・109】(図6. 20・22～24)

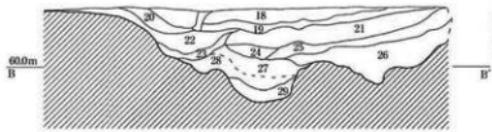
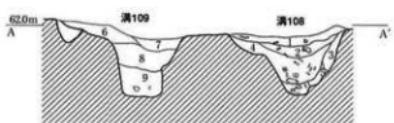
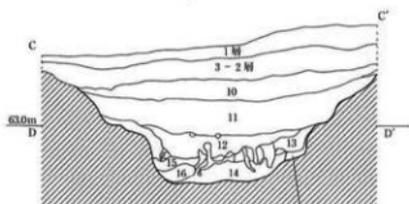
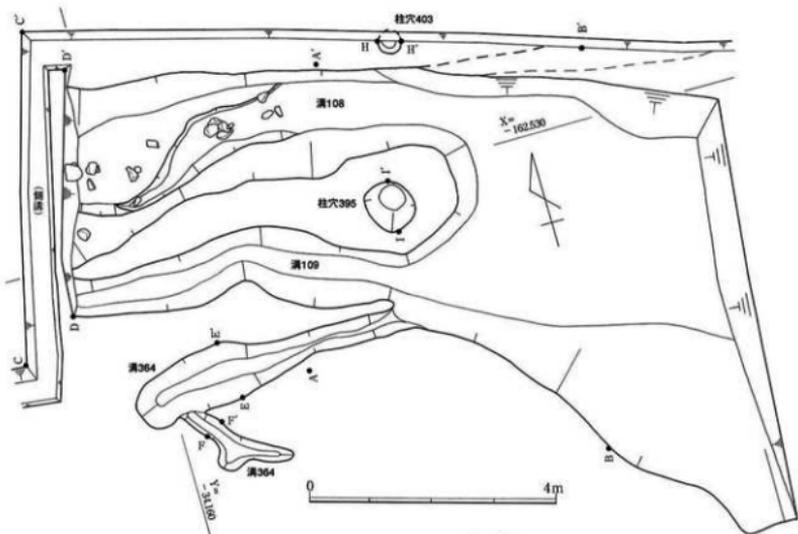
F 2 b 6・b 7・c 6・c 7 地区で検出された東西方向の2条の溝。東端で合流して落ち込みを形成している。北側のものを溝108、南側のものを溝109と呼び、合流した落ち込み部分を溝108-109とする。溝108・109ともに幅約160cm、深さ約200cm程度と規模は大きい。ただし、いずれも平面形態が蛇行し、底面も不整形なことから、自然流路の可能性が高い。ただし、埋土中からは多量の土器片が出土しており、近接する集落部分からの廃棄行為が盛んに行われたことを示している。これは、自然流路であった溝108・109が集落に付属する共有施設として機能し続けていたためではないだろうか。出土遺物の時期は、後述するように、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と古墳時代後期～奈良時代の2時期にわけることができる。これは、周囲の住居・建物群の所属時期に一致し、この領域での集落形成期間中常に土器などが廃棄されていた遺構であったと考えられる。

図6. 22に掲載したのは両溝から出土した土器片である。図6. 22-1～14は弥生時代後期～古墳時代初頭(庄内式期)の土器群である。図6. 22-1・2は、二重口縁壺の頸部～口縁部の破片である。1は無文、2は屈曲部外面に円形浮文を添付するもので、いずれも庄内式期～布留式期初頭の所産と考えられる。図6. 22-3は器台である。筒部中位と下位の2段に円形透かし孔が穿たれていることから弥生時代後期中葉を中心とした時期の所産と考えたい。図6. 22-4は甕上半部片であるが、口縁部が立ち上がる形態で、外面に叩き目などはみえない。おそらく弥生時代後期中葉の所産と考えられる。図6. 22-5～6は、甕もしくは甕の底部片であり、弥生時代後期～庄内式の特徴を有している。特に6は、丸底に近い形態で外面に細かなタタキメとその上からハケ調整を行っていることが覗かれることから庄内式期の所産であることは確実である。また、図6. 22-9～14は高坏脚部である。いずれも裾部が大きく広がる形態となり、弥生時代後期後葉～庄内式期の特徴を有している。

図6. 22-15～21は須志器片である。図6. 22-15・16は坏蓋で、TK10～TK209型式に属すると考えられ、古墳時代後期末(6世紀末～7世紀初頭)の所産と考えられる。図6. 22-18～20は大甕口縁部で、19・20は口縁下端部が丸く肥厚する形態から古墳時代後期後葉～飛鳥時代の、18は口縁端部が肥厚しない形態から奈良時代後半の所産と考えられる。図6. 22-21の壺はたれ下がり気味の口縁形態から飛鳥時代～奈良時代の所産と考えられる。

また、両溝からは石器類も多数出土している。サヌカイト製打製石器としては、図6. 23-1・2が図化可能であった。1は、平面不整形三角形の剥片の側縁部に調整剥離を施した剥片石器である。2は、いわゆる石槍といわれる尖頭器の破片と考えられる。鏃のラインが不整形なため、加工途中の欠損品である可能性もある。両者ともに弥生時代中期～後期の所産と考えられる。

図6. 23-3～5、図6. 24-1～3、図6. 25-1～4は礫石器である。図6. 23-5、図6. 24-1・2には平坦面の中央部、または先端部に敲打痕が形成されており、台石もしくは叩き石として使用されたと考えられる。その他のものにも平坦面が作り出されている。いずれの平坦面にもわずかながら擦痕が観察されることから、研磨によって形成された面と考えられ、砥石として使われた可能性がある。これらの礫石器のうち、図6. 25-3・4の2点は泥岩製と考えられるが、その他はすべて砂岩製と考えられる。所属時期については明確ではなく、弥生時代後期～古代のものが混在した状態にあると考えられる。



1. 25YR4 (褐色シト) 混じり細砂 (マンガン・細砂多い)
2. 25YR5 明褐色 + 10YR6 4C2 黄褐色細砂 - シルト (上部・マンガン・細砂)
3. 10YR5 8 明褐色 + 25Y6 2 黄褐色細砂 - シルト (上部・マンガン・細砂)
4. 10YR5 2 黄褐色細砂 - シルト (上部非常に多い・マンガン多い)
5. 25Y5 1 黄褐色細砂 - シルト (+ 7.5YR6 4 シルト, 上部・マンガン)
6. 10YR5 6 黄褐色中砂 17.5YR6 4C2 黄褐色地山シルトブロック含む)
7. 10YR4 1 褐色細砂混じり中砂 (上部片・雑多)
8. 10YR5 4C2 黄褐色細砂混じり中砂 (上部片・混多)
9. 10YR6 2 黄褐色シト混じり中砂 (上部片少量含む・粘土部あり)
10. 10YR4 4 暗砂混じり中砂 - 細砂 (上部・炭化物多い・雑含む)
11. 7.5YR4 4 シルト混じり中砂 (上部・炭化物成分に集中) = 9層
12. 10YR4 2 黄褐色中砂 (炭化物・雑多・礫石含む) = 10層
13. 25Y6 2 黄褐色中砂 (上部片・雑多・礫石含む) = 11層
14. 25Y6 2 暗砂混じり細砂 (+ 10YR5 8 中砂, 上部・細砂) = 12層
15. 10YR5 1 褐色細砂混じり中砂 (上部・マンガン・細砂多い)
16. 25Y6 2C1 黄褐色細砂混じり中砂 (上部非常に多い・マンガン・細砂多い)
17. 10YR5 8 黄褐色細砂混じり中砂 (上部片含む)
18. 10YR5 1 暗褐色 - 8.2 黄褐色細砂 - 中砂 (上部多い・細砂含む)
19. 10YR5 2 暗砂混じり中砂 (上部片多い・細砂少量含む)
20. 10YR5 2 暗砂混じり中砂 (上部・10YR5 8 中砂ブロック含む)
21. 10YR5 2 暗砂 - 中砂 (上部・マンガン多い・炭化物・細砂含む)
22. 10YR5 2 暗砂混じり中砂 - 細砂 (上部・マンガン少量含む)
23. 10YR5 2 暗砂混じり中砂 - 細砂 (細砂少量含む)
24. 10YR5 1 暗砂混じり中砂 (マンガン・雑多)
25. 10YR5 2 暗砂混じり中砂 (上部・炭化物・マンガン多い・10YR6 2 - 5YR7 6 シルト含む)
26. 10YR5 2 暗砂 (+ 10YR5 4 シルト・粘土部・炭化物含む・上部多量)
27. 10YR5 2C1 黄褐色シト混じり中砂 - 細砂 (上部・粘土部あり)
28. 10YR5 3 シルト混じり中砂 - 細砂 (上部含む・暗砂ブロック多い)
29. 25Y6 1 黄褐色シト混じり中砂 - 細砂 (炭化物・細砂含む)

図 6. 20 C 地区 溝108・109平面図・断面図 (S=1/80)

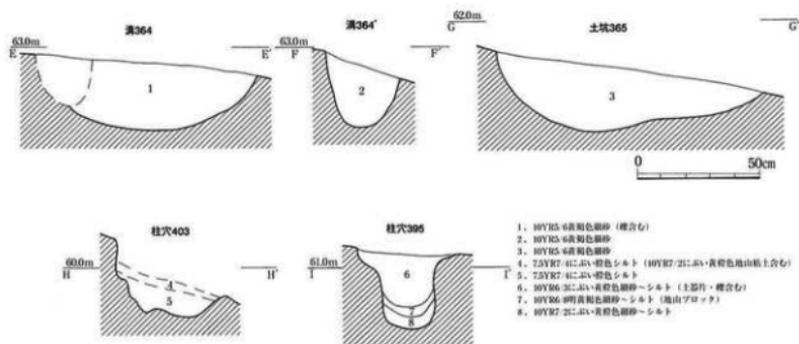


図 6. 21 C地区 その他の土坑・溝断面図 (S=1/20)

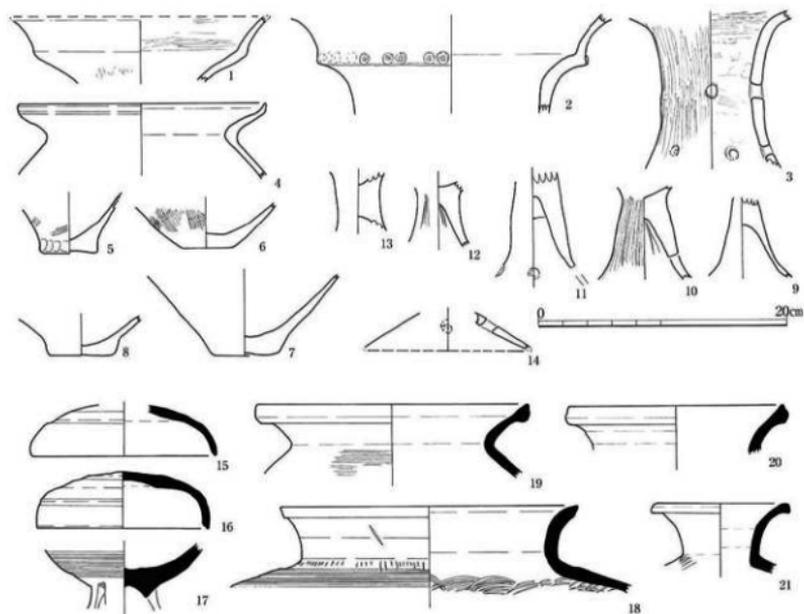


図 6. 22 C地区 溝108・109出土土器 (S=1/4)

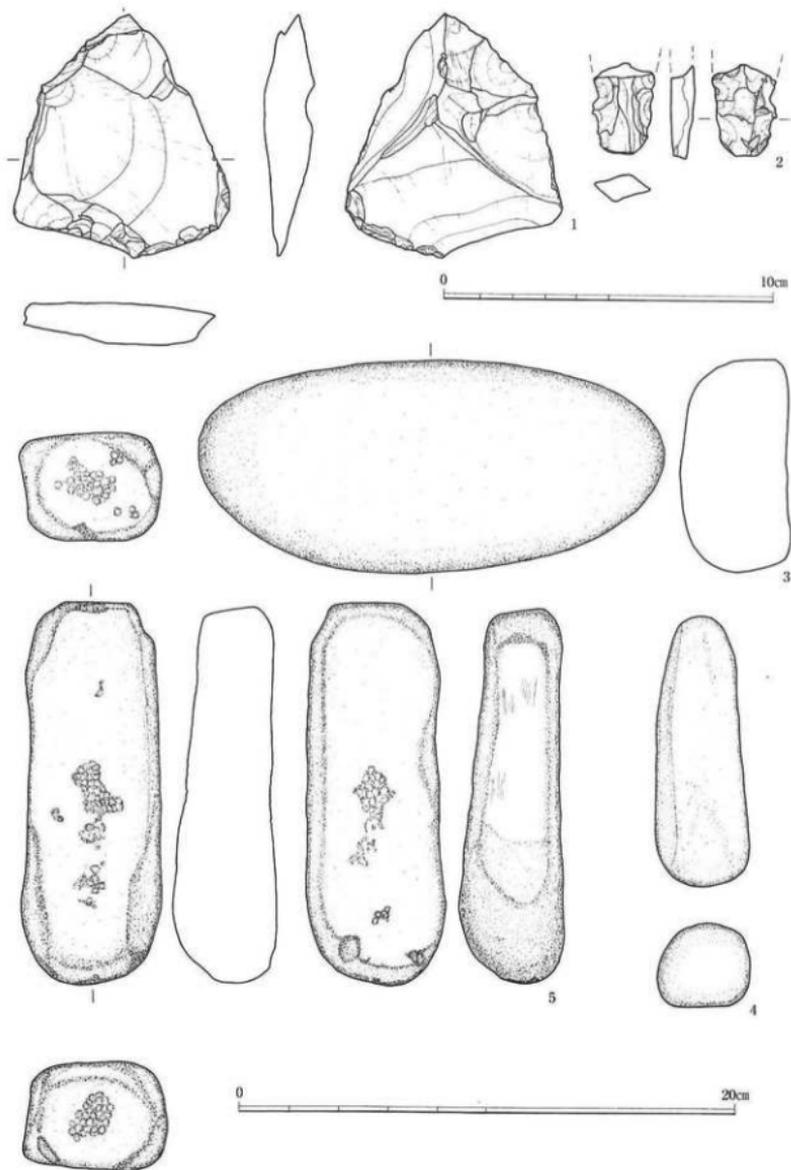


图 6. 23 C地区 清108出土石器① (S=1·2:2/3、3~5:1/2)

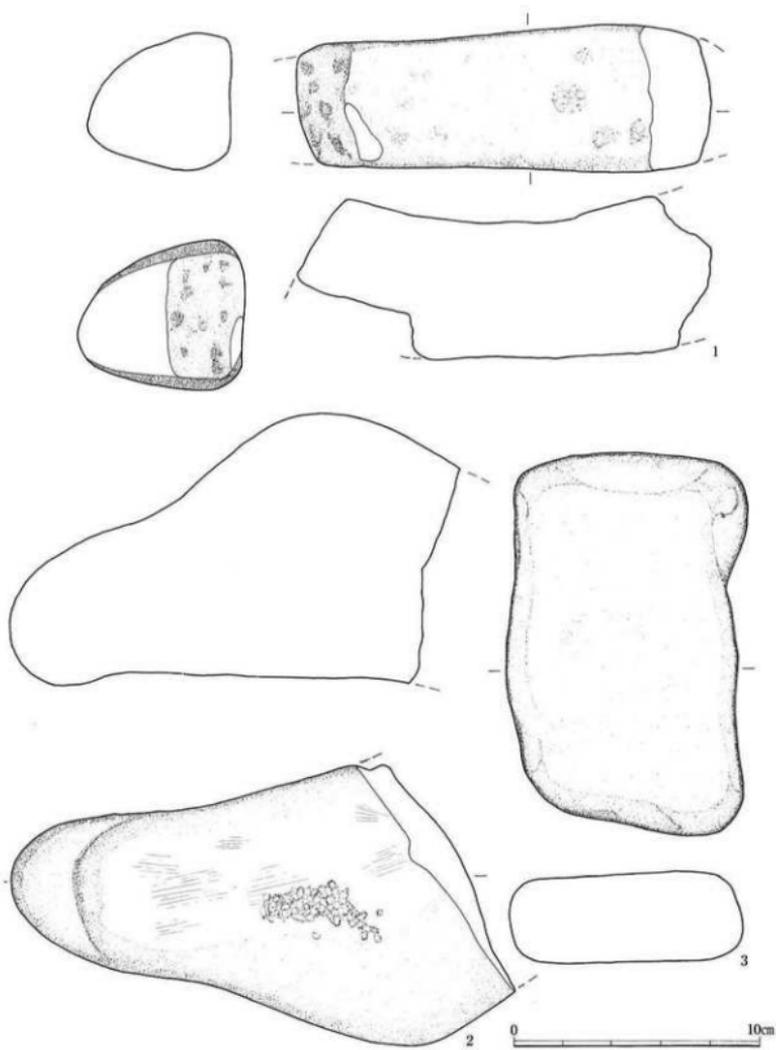


图 6. 24 C地区 溝108出土石器② (S=1/2)

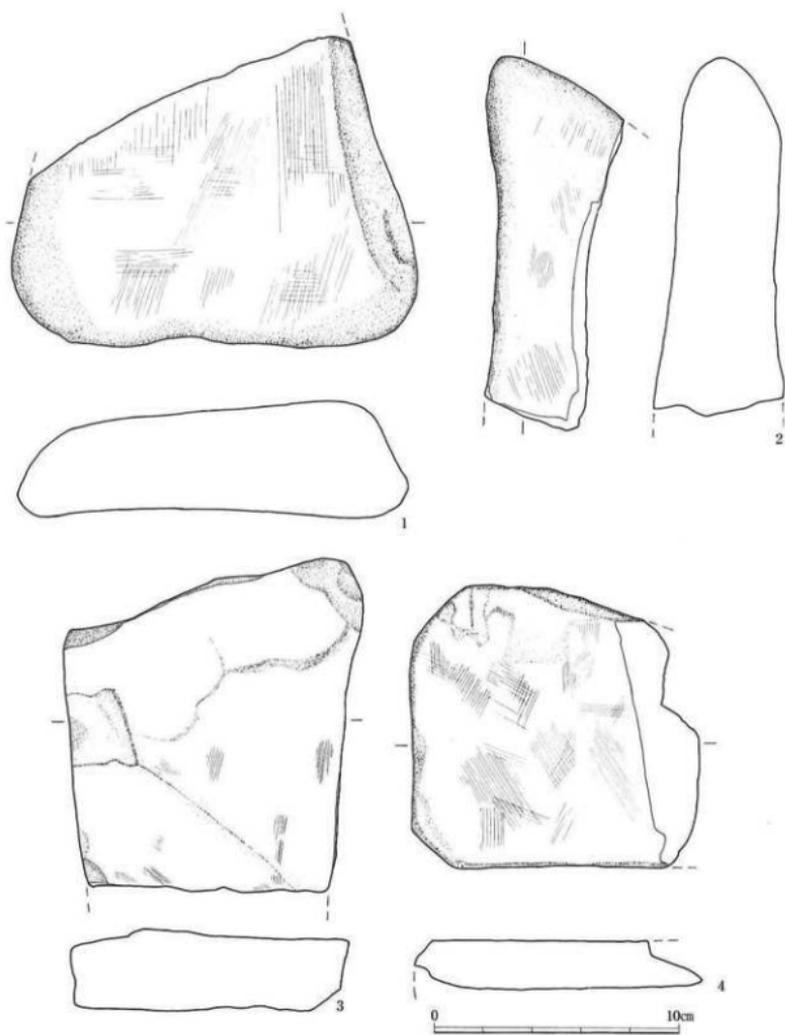


图 6. 25 C地区 满108出土石器③ (S=1/2)

【包含層出土遺物】(図6・26～28)

図6・26～28はC地区包含層出土遺物のうち図化できたものである。図6・26-1～7は弥生時代後期～庄内式期の土器である。図6・26-1・2は広口壺の頸～口縁部片であるが、直立した長めの頸部から外反して幅広い端部を有する口縁部を作り出した形状である。弥生時代後期前～中葉の所産と考えられる。図6・26-3も、広口壺頸～口縁部であるが、頸部が短く、口縁端面を拡張しない形態から弥生時代後期中葉～庄内式期の所産と考えられる。図6・26-4は外面にタタキメがうかがわれる小型の甕で、弥生時代後期後葉～庄内式期の所産であろう。図6・26-5・6は弥生時代後期～庄内式期の壺もしくは甕の底部と考えられるが詳細な時期は不明である。図6・26-7は高坏脚部で、中位から屈曲して大きく広がる裾部を持つ形態から、弥生時代後期末～庄内式期の所産と考えられる。

図6・26-8～17は須恵器である。坏蓋(図6・26-8～11)・坏身(図6・26-12～14)・高坏(図6・26-16)・甕(図6・26-15)・壺(図6・26-17)のうち、いずれもTK10～TK43型式の特徴を有しており、古墳時代後期後半の所産と考えられる。図6・26-18は円筒埴輪の下半部で、外面が縦方向のハケ調整で仕上げられていることから川西宏幸氏による円筒埴輪編年(川西1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号)のV期に相当する。古墳時代後期に相当し、上述の須恵器群の所属時期と矛盾しない。また、図6・26-19は直交する突帯を有する大型の土製品で、陶棺の一部と考えられる。色調は暗赤褐色で黒斑がみられ、酸化焙焼成されたものと考えられる。

このように、C地区の包含層中からは古墳時代後期の土器とともに古墳に關係する遺物が出土している。これらの遺物は、C地区の西側の主尾根からの転落品と考えられ、尾根上に古墳時代後期の墳墓が存在していた可能性を示している。

図6・27・28には石器類を掲載している。図6・27-1～4はササカイト製の打製石器である。図6・27-1は尖頭器の先端部、図6・27-2は石錐である。図6・27-3・4は一個縁に調整剝離を施した剥片で、いわゆる不定形刃器とよばれるものである。これらは弥生時代中～後期の所産と考えられる。

図6・27-5～8、図6・28-1～7は、平坦面に研磨痕・敲打痕がみられる礫石器である。特に注目されるのは、図6・27-5の砂岩製の乳棒状石製品である(巻頭カラー)。平坦に研磨された先端には赤色顔料が付着していることから、この石製品は赤色顔料を精製する際に用いられた石杵と考えられる。その反対側の丸くなった基部にも若干の赤色顔料が付着している。この2面は赤色顔料の粉砕時の作用部位であったと考えられる。先端部には細かい敲打痕も認められる。また、側面にも赤色顔料が付着しているが、顔料の量はわずかである。重量は285.5gである。同種の遺物出土例は従来の研究によると弥生時代後期～古墳時代初頭に多い。実際にその時期の土器・遺構が当遺跡から多数検出されていることから、弥生時代後期～庄内式期のものと考えるのが妥当であろう。

その他の礫石器では、図6・27-7、図6・28-2・3・4の4点の先端部には敲打痕がみられ、叩き石として使用されたと考えられる。図6・27-6、図6・28-1・5～7は平坦面に擦痕がみられることから、砥石として使用された可能性がある。特に図6・28-1は泥岩製で表面は緻密なことから鉄器用の仕上げ砥と考えられよう。図6・27-8は投弾と考えられる。これらの所属時期を決定づけることは困難であるが、叩き石(図6・27-7、図6・28-2・3・4)に関しては、弥生時代後期を中心とした時期を想定しておきたい。また砥石の可能性のあるもののうち、図6・27-6、図6・28-5～7は砂岩製で、表面が粗い粒子により形成されており、鉄器用砥石の可能性は低い。このことから、古墳時代以降に使用されたとは考えにくく、これらも弥生時代後期を中心とした時期の所産と考えたい。

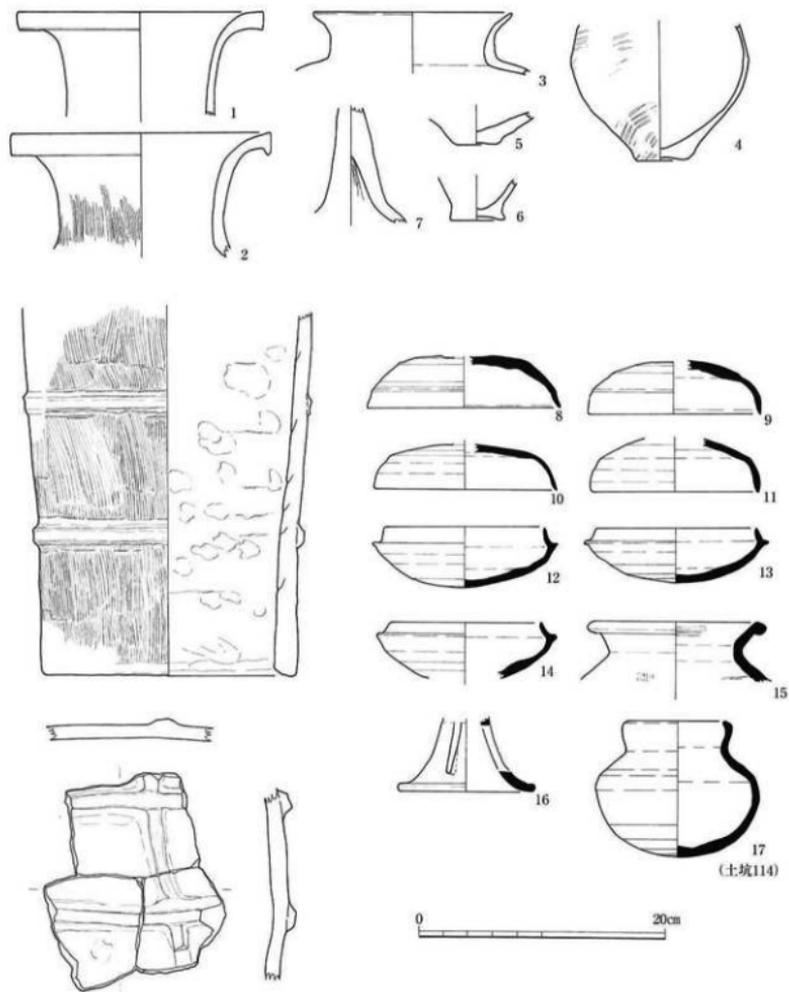


図6. 26 C地区 その他の遺構・包含層出土遺物 (S=1/4)

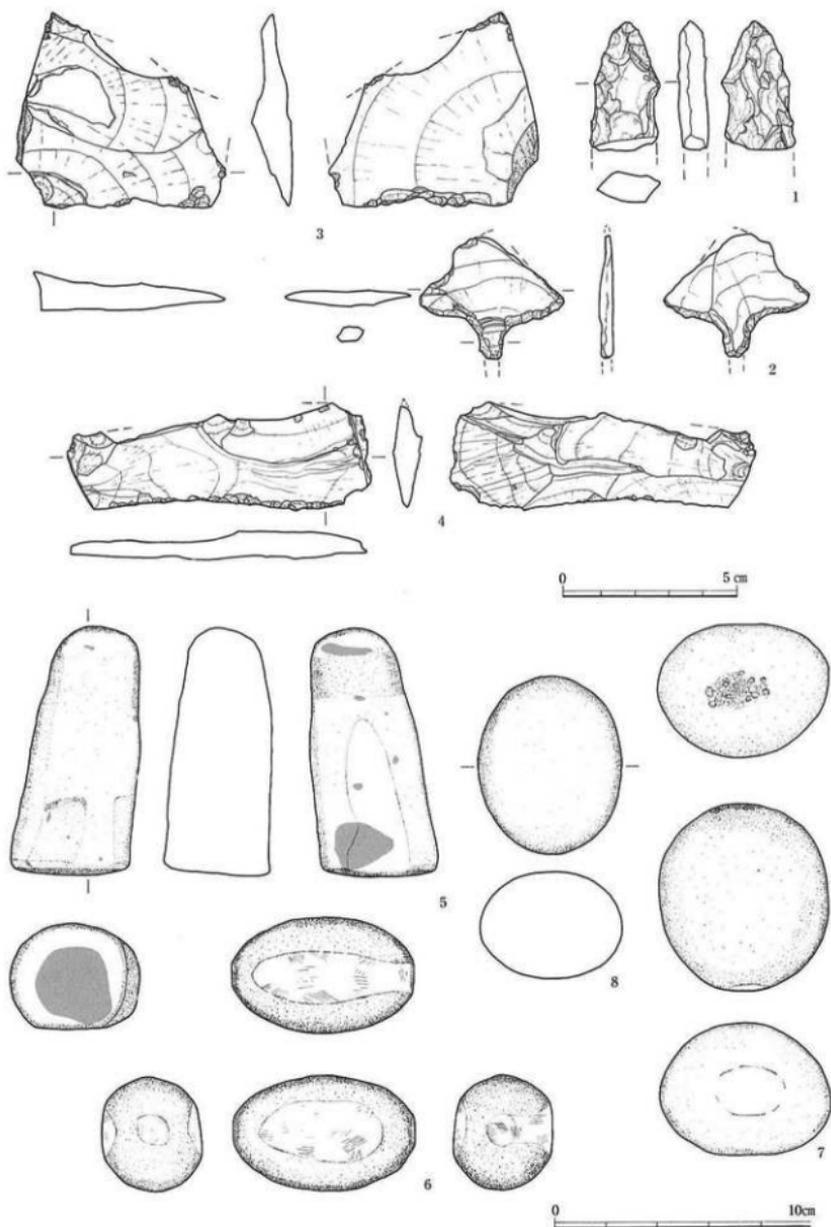


图 6. 27 C地区 包含层出土石器① (S=1~4:2/3、5~8:1/2)

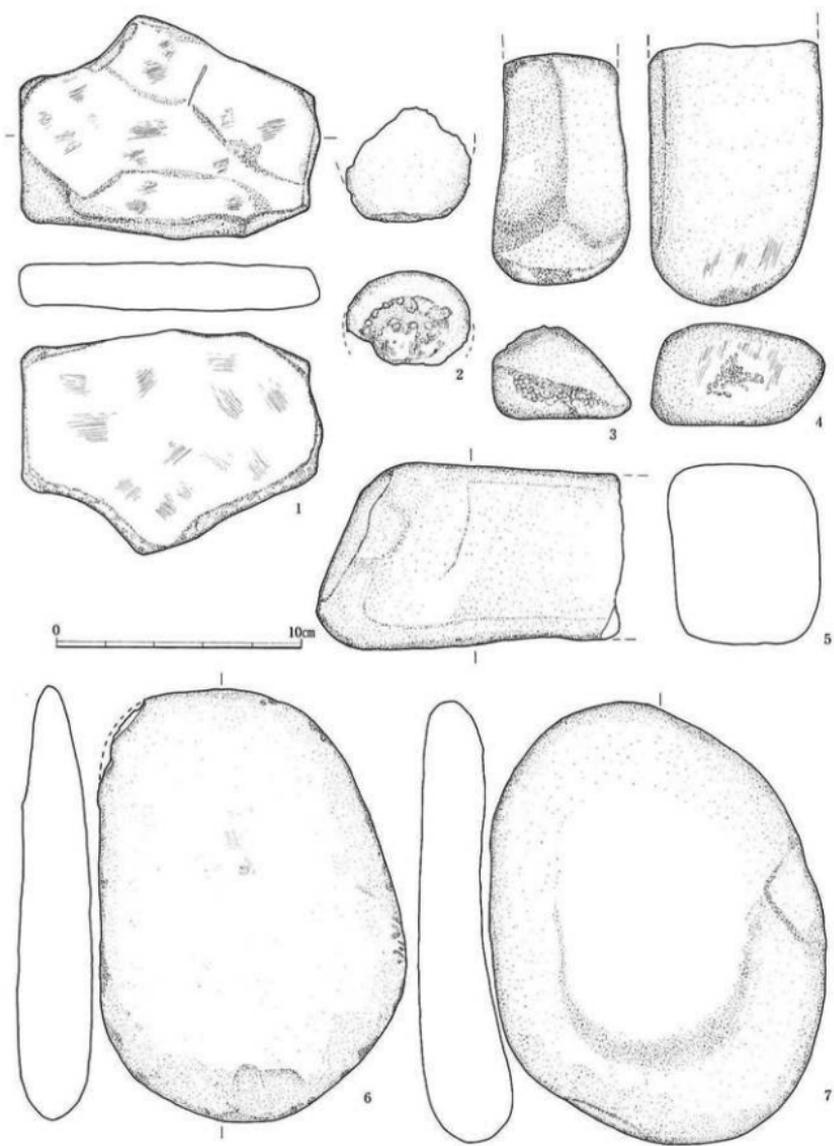


图 6. 28 C地区 包含层出土石器② (S=1/2)



写真6.1 C地区 全景航空写真(南から)

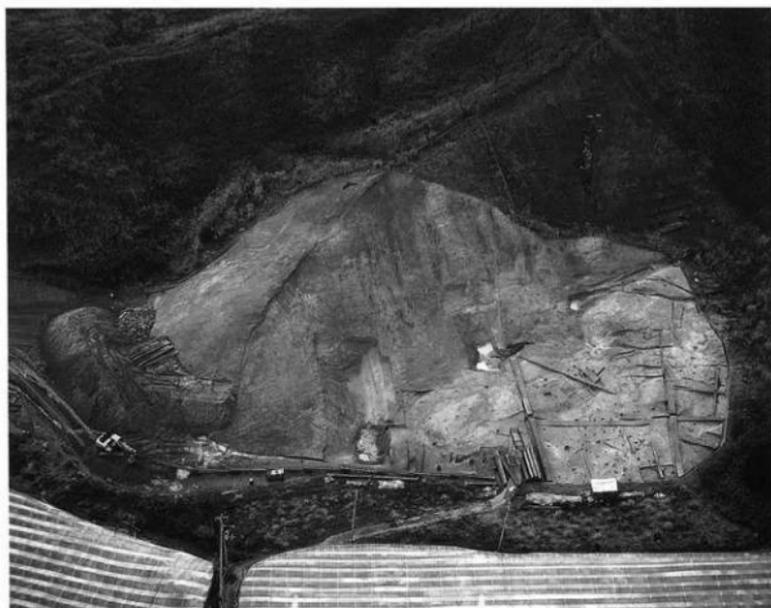


写真6.2 C地区 全景航空写真(北から)

第7章 基礎分析・考察

第1節 弥生時代後期～古墳時代初頭の駒ヶ谷遺跡と南河内地域

－集落構造の分析を中心に－

仲原知之

1. はじめに

駒ヶ谷遺跡は、丘陵上に立地する集落として知られており、駒ヶ谷遺跡調査会によって弥生時代後期の竪穴住居群が調査されている(羽曳野市教育委員会1992)。今回の調査では、かつて竪穴住居群が調査された丘陵主尾根から派生する支尾根部分で新たに弥生時代後期～古墳時代初頭(庄内式期)の竪穴住居群を検出することができた。ここでは今回A地区で検出した9棟の竪穴住居を中心に、既往調査例を踏まえながら駒ヶ谷遺跡の集落について基礎的な分析をおこないたい。そのうえで南河内地域における他の丘陵上集落との比較を通じて駒ヶ谷遺跡の集落構造の把握を試みたい。

2. 集落の立地と既往調査成果

駒ヶ谷遺跡の弥生時代後期～古墳時代初頭の集落は、石川と飛鳥川にはさまれた標高85mの大黒丘陵と呼ばれるほぼ独立した丘陵上に立地している。大黒丘陵は南北に細長く、開析谷が入り込んでいくつもの派生する小尾根を形成している。この大黒丘陵の主尾根とそこから派生する支尾根上で遺構や遺物が検出されている。尾根裾からつづく低位段丘面や氾濫原には当該期の遺構は検出されていない。したがって弥生時代後期～古墳時代初頭の集落域はこの丘陵上に限られるようであり、標高の高い山腹に立地しているわけではないがいわゆる広義の高地性集落という範疇で捉えることが可能である¹。

図7-1は今回の調査区と既往調査区の位置と弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構分布を示したものである。駒ヶ谷遺跡調査会による試掘調査は、丘陵の尾根筋を中心に数多くのトレンチを設けて実施して、丘陵内における遺構の分布状況が明らかになった(羽曳野市教育委員会1992)。この調査によって駒ヶ谷遺跡の集落域が丘陵全体に広がっていたことが把握できた。この図は独立した大黒丘陵の全体図であるが、丘陵北端は現在道路によって削平されており、本来はさらに北側へならかにのびていたようである。この北側にのびていた部分にも弥生時代後期の遺物出土地点があり、集落域がさらに北側にのびていた可能性もあるが遺構は未検出である。

駒ヶ谷遺跡調査会の調査では、最も平坦面が広い主尾根の部分で9棟の竪穴住居が検出されている。主尾根からつづく北側の尾根でも竪穴住居が1棟検出され、また丘陵南端でも当該期の遺物包含層が確認され周囲に集落域の存在が指摘されている。さらに主尾根のやや険しい最高所で方形台状墓が2基確認されており、木棺墓と推定される土坑8基や土器棺2基が検出されている。周囲には他の遺構がないため、この部分は墓域であったと推測されている。南河内地域で他に方形台状墓が検出された例はなく、弥生時代後期～古墳時代初頭の墓制を考えるうえで重要である。

今回の調査では、主尾根から派生する支尾根上のA地区において竪穴住居9棟が検出できた(図7-2)。さらにC地区の緩斜面部でも主尾根の集落域に含まれると思われる竪穴住居を1棟検出している。この他弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構として、A地区で屋外炉の可能性のある焼土坑2基、欄列と考えられる柱列、溝、土坑などが確認できた。井戸などの取水施設や掘立柱建物も未検出である。

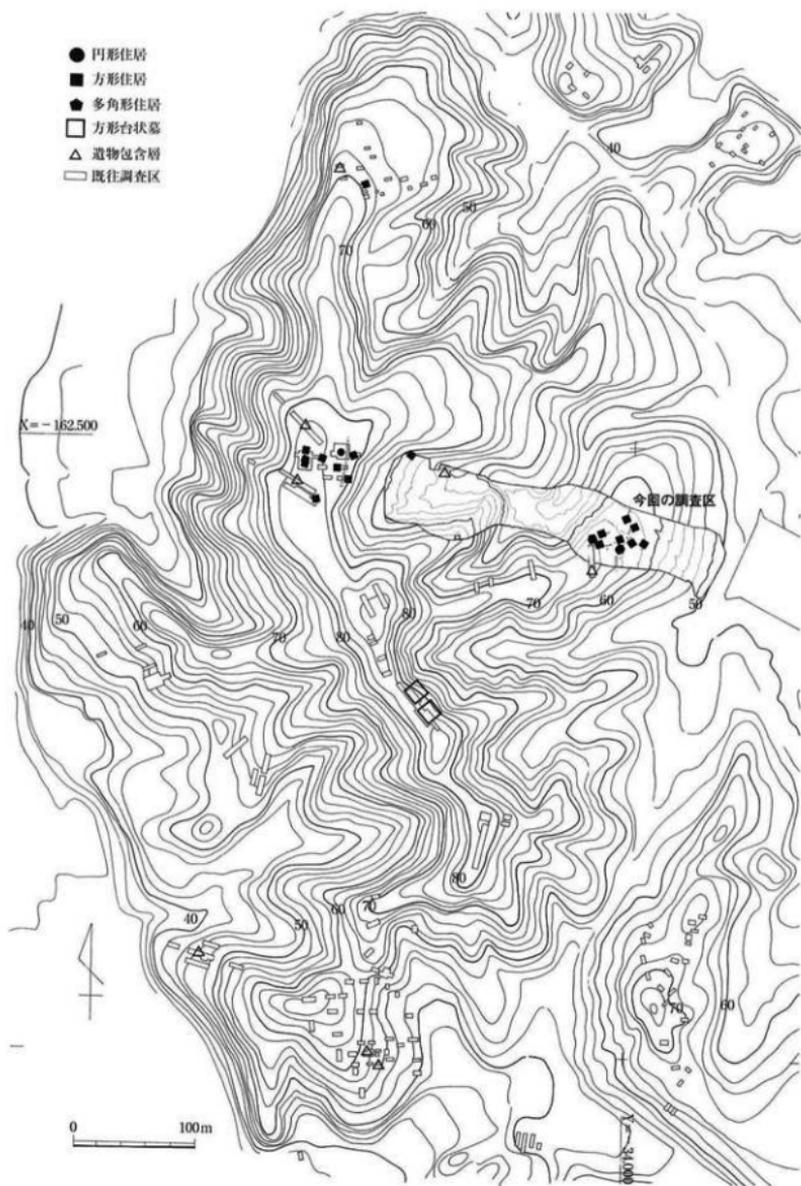


図 7. 1 駒ヶ谷遺跡の既往調査区と遺構分布図 (S=1/4000)

3. 竪穴住居の構造

①竪穴住居の選地

駒ヶ谷遺跡の集落構造を考えるうえで、まず竪穴住居群の選地をみておく。図7. 1をみてわかるとおり、竪穴住居は平坦面のある尾根上につくられているが、すべて標高60mを越える丘陵に分布している。遺物包含層も谷部や斜面などに流れ込んだものを除けば、おおむね標高60mを越える範囲に認められる。丘陵の東側には低位段丘で構成された平坦面が広がっているが、その部分には当該期の遺構は認められない。したがって駒ヶ谷遺跡では竪穴住居の立地に丘陵上が選択されていることがわかる。

今回はA地区西半（1A地区）の尾根上平坦部で9棟、C地区の主尾根東側緩斜面上で1棟の竪穴住居を検出した。A地区は主尾根から派生した尾根上にあたる。主尾根～A地区間の駒ヶ谷遺跡調査会の試掘調査区では遺構・遺物が検出されず、A地区の遺構群は主尾根とは直接的に連続しないひとつのまとまりと考えられる。A地区東半（2A地区）の緩斜面上には竪穴住居は存在せず、また西側のB地区は急斜面で遺構がないので、竪穴住居群域はこれ以上東西には広がらない。また調査時の所見で、調査区の北端や南端付近では遺物出土量が減少する傾向にあったので、竪穴住居群が調査区の南北に大きく広がらないと推測している。よって今回の調査ではこの支尾根の竪穴住居の大半が調査できたといえる。

②竪穴住居の平面形

表7. 1は、調査によって明らかにできた各竪穴住居の構造についてまとめたものである。A地区の竪穴住居9棟のうち多角形住居は2棟（竪穴住居20・32）、方形住居は7棟（竪穴住居23・30・31・41・42・43・50）である。竪穴住居20は五角形住居で、竪穴住居32は六角形から五角形住居への変遷を考え



図7. 2 A地区竪穴住居配置図 (S=1/400)

ている。C地区でも方形竪穴住居を1棟検出しているが残存状況は良くなかった。かつての胸ヶ谷遺跡調査会による試掘調査で円形の住居が1棟(SB001)確認されているが、今回の調査では円形住居は検出していない²。逆に試掘調査では円形の他には方形住居が9棟確認されているが、多角形住居は検出されていなかった。既往調査例と今回の調査例を合計すると20棟の竪穴住居が検出されており、その平面形の内訳は、円形1棟・方形17棟・多角形2棟である。近畿では基本的に弥生時代後期に竪穴住居の平面形が円形から変遷して方形が主流を占めるようになり、古墳時代になるとほぼ方形に統一されるが(石野1990)、胸ヶ谷遺跡の場合はほぼ方形住居に移り変わった段階であるといえる。

多角形住居は、播磨地域を中心として近江や山陰～北陸に分布がみられる(福島1999)³。山陰を除いては多角形住居が主流を占める集落はなく、近畿では集落内に複数の多角形住居の検出例は少ない(福島1999)。そのため多角形住居を集落の中心的建物や集会場、工房関連施設など特殊な役割をもった建物であるという想定もされている。その観点でみれば竪穴住居32からは複数の炉跡や砥石が検出され工房としての役割を担っていた可能性がある⁴。

③竪穴住居内諸施設

まずA地区の竪穴住居内の諸遺構を観察してみる。いずれの住居にも共通する要素として、貼床や主柱穴、中央炉、壁溝があげられる。また多くの住居には、排水溝や壁溝内側にとりつく土坑が認められる。これらの諸施設には共通する特徴が多く、竪穴住居が同一の構造で建てられていたと判断できる。なお竪穴住居内の諸施設の名称については、主に石野氏の用語に依っている(石野1990)。なお竪穴住居壁体外部の施設については排水溝を除いて何一つ検出していない。

貼床 貼床は、A地区のすべての竪穴住居で検出できた。C地区の竪穴住居200にも貼床が1面確認できる。住居の建替えがない竪穴住居20と30には貼床が1面認められる。建替えが確認できる竪穴住居32、41、50には貼床が1面しか確認できないが、竪穴住居23、31、43には貼床が2面確認でき建替えとともに新たに貼床を施したことがわかる。この尾根の地山はしまった土質であるが、拳大のサヌカイト礫が多く含まれている。貼床にはこれらの礫を取り除いた地山が用いられている。おそらく竪穴住居床面を掘削した際に掘り出された土から大きな礫を取り除いて貼床に使用したのであろう。貼床は水平に貼られているが、床を貼る際に水平を整えたのではなく、住居を掘削する段階で水平を作り出している。竪穴住居42のような緩斜面に構築する場合、標高の高い側をより大きく掘り込むことで床面を水平にしている。そして水平になった面の上に貼床を施すのである。こうすることによって各竪穴住居の貼床面はいずれも水平を保っているのである。このように貼床敷設の目的は、床面の水平を作り出すためではなく、礫の除去を含めた床面の整地、湿気の防止などであろう。

主柱穴 主柱穴の残存状況は良好であり検出は容易であった。そのためいずれの住居でも主柱穴が検出でき、特に方形住居の場合はすべて4本柱穴であることが確認できた。方形住居の主柱穴はそれぞれ住居の各辺に対応する位置に作られ、4本柱穴が住居の平面形と同様のほぼ正方形を形成している。このことから方形住居が平面形だけでなく上屋構造まで方形を基準として建てられていたと想像できる。多角形の場合も、竪穴住居20のように五角形の各辺に対応した位置に5本の主柱穴が存在している。竪穴住居32も各辺に対応して主柱穴が作られているのが看取できる。竪穴住居の上屋構造を想定できるほどの力量は持ち合わせていないが、少なくともこれらの住居は平面形に沿った位置に主柱穴を据える建築方法で共通していることは間違いない。

竪穴住居20は、不整形な五角形で南東隅がほぼ直角を呈しており、主柱穴の位置もそれに対応してい

型穴住居20	
地区/位置	A地区 (1A) - F1h2b/A地区西側の尾根平陸部 (尾根の高さ5m)
規模	730×718×40m、不整形な多角形 (一辺350~650m)
1階穴(南北長×深)	44.5m
住居面積	3層
礎石	1階、1.8YR5/6中砂 (厚8cm)
柱礎	1層
土柱穴	5本 (深30~70cm)
土坑	1基 (130×100×20cm)、伊用道の南側にうすく設置広がる
土壌	なし
排水溝	不明
礎柱土	不明
出土土層	上層に土層のみ
住居の先後関係	型穴住居23と同時
時期	弥生時代前期 (中期) 後葉 - 古墳時代初期 (一区内前期)
備考	南側壁に付いた柱穴があり、中央に土層が埋まり (土坑部)、南側壁は後葉、フタが崩壊していること一層知られる

型穴住居30	
地区/位置	A地区 (1A) - F1g3b/A地区西側の尾根平陸部、型穴住居20の北東側
規模	530×518×30m、方形
1階穴(南北長×深)	34.2m
住居面積	1層
礎石	1階、1.8YR5/6中砂 (厚10cm)
柱礎	1層
土柱穴	4本 (深35~65cm)
土坑	1基 (66×95×15cm)、壁際に埋土
土壌	1層 (120×70×35cm)、南側壁の内側に敷り付く (盛り合いなし)
排水溝	あり、1.2Y1 X20×10cm、東側壁から東側へ、北坑4に落ちるもの
礎柱土	なし
出土土層	柱穴に埋土、柱穴間に土層片
住居の先後関係	(弥生時代後葉後) - 古墳時代初期
時期	弥生時代後葉 - 古墳時代初期
備考	東西の一部溝1に落ちる

型穴住居32	
地区/位置	A地区 (1A) - F1h2d/型穴住居31の南側
規模	720×719×45m、不整形な多角形 (一辺300~500m)
1階穴(南北長×深)	44.2m
住居面積	3層
礎石	1階、1.8YR5/6中砂 (厚8cm)
柱礎	1層
土柱穴	6本 (深35~65cm)、柱穴に建てたおとしあり
土坑	1基 (75×80×15、3~50×35×12、3~45×35×16、4~100×75×10)
土壌	東側壁に埋土あり (埋土なし) が敷り付く (付着層あり)
排水溝	東側壁に排水溝あり
礎柱土	中央部が埋土から3時間分 (柱穴) の深さでまきより2時間分
出土土層	なし
住居の先後関係	型穴住居31とは同時存しない (型穴住居31と北坑5は同時存する)
時期	弥生時代中期 - 後葉 (一古墳時代初期)
備考	柱穴6は柱穴4に落ちる柱穴4は南側壁内に落ちる。柱4は埋土層から1基に埋土、柱3は柱2と同時存、柱4から瓦割れ破片7、土層破片

型穴住居42	
地区/位置	A地区 (1A) - F1h1n/型穴住居39、39の南側
規模	538×500×55m、方形
1階穴(南北長×深)	25.0m
住居面積	2層
礎石	1階、1.8YR5/6中砂 (厚20cm)
柱礎	2層
土柱穴	4本 (深35~65cm)
土坑	1基 (115×110×10cm)
土壌	南側壁の埋土部分内側に敷り付く土壌の可能性あり
排水溝	あり、深さ35cm、東側壁から東側へ落ちる。溝4に落ちるもの
礎柱土	東側壁、1~2時間分 (埋土層が敷られ礎柱土、埋土あり)
出土土層	埋土に埋土層片
住居の先後関係	型穴住居40とは同時存しない (排水溝が型穴住居50へ向かう)
時期	(弥生時代後葉後) - 古墳時代初期 (一区内前期)
備考	土層の柱間に埋土層あり、東側壁の一部を覆っている

型穴住居50	
地区/位置	A地区 (1A) - F20n10/a/型穴住居42の南側
規模	550×(540)×40m、方形
1階穴(南北長×深)	24.6m
住居面積	2層
礎石	1階、1.8YR5/6中砂 (厚6cm)
柱礎	2層、北東側2基、南側3基
土柱穴	6 (一基) 本 (深30~60cm)、柱穴6・8は土坑か
土坑	1基 (60×80×20cm)
土壌	柱穴6・8は土坑の可能性あり
排水溝	不明
礎柱土	不明
出土土層	上層に土層のみ
住居の先後関係	型穴住居42とは同時存しない (42の排水溝が50へ向かう)
時期	弥生時代後葉後 - 古墳時代初期
備考	南側壁に付いた柱穴4が全長約5m (溝で両側の埋土層あり)、柱穴4が柱穴8と同時存、柱穴2が柱穴8と同時存、築造時期

型穴住居23	
地区/位置	A地区 (1A) - F1h2b/A地区西側の尾根平陸部、型穴住居20の南東側
規模	600×590×20m、方形
1階穴(南北長×深)	35.5m
住居面積	1層
礎石	2層、吉 - 2.5YR7/2細砂 (厚8cm)、新 - 10YR7/中砂 (厚14cm)
柱礎	西側2基、北 - 南側2基、東側1基
土柱穴	8本、吉 - 4本 (深30~45cm)、新 - 4本 (深50~90cm)
土坑	不明
土壌	不明
排水溝	あり、700×30×10cm、南側壁から東側へひく。(溝12)
礎柱土	中央部が埋土から3時間分 (埋土層が敷られ礎柱土、埋土あり)
出土土層	南側壁に手摺り土層片あり
住居の先後関係	型穴住居20に同時
時期	弥生時代後葉 - 古墳時代初期
備考	北側壁に一定の溝1が埋土 (埋土層あり)、東側壁の溝、溝間に埋土層あり (ハット状の溝あり)、東側壁は下層の土層も切る

型穴住居31	
地区/位置	A地区 (1A) - F1h2d/型穴住居29の北東側南側
規模	560×500×25m、方形
1階穴(南北長×深)	33.9m
住居面積	1層
礎石	2層、吉 - 10YR5/6中砂 (厚10cm)、新 - 7.5YR5/6細砂 (15cm)
柱礎	北 - 南側2基、南側1基
土柱穴	7 (一基) 本 (深25~65cm)、柱穴3に建てたおとしあり
土坑	1基 (85×75×10cm)、壁際に埋土
土壌	1層 (75×75×20cm)、壁際に敷り付く
排水溝	東側壁に排水溝あり (溝1) の溝より (排水溝の可能性あり)
礎柱土	北 - 南側に埋土、2時間分
出土土層	なし
住居の先後関係	型穴住居32と同時存しない (型穴住居32の北坑5とは同時存する)
時期	弥生時代後葉 (中期以降) - 古墳時代初期
備考	柱の基部に高さ約10cm (一、2時間分) の埋土層あり (埋土層10cm)、吉の柱にも埋土層あり、東側壁は下層に埋土

型穴住居41	
地区/位置	A地区 (1A) - F1h1g/a/A地区中で最も北側
規模	618×600×15m、方形
1階穴(南北長×深)	34.7m
住居面積	2層
礎石	1層、5YR5/6 - 2.5YR5/6細砂より粗砂 (厚8cm)
柱礎	西側2基、北 - 南側1基
土柱穴	4本 (深35~65cm)、柱穴3に建てたおとしあり
土坑	1基 (95×80×20cm)
土壌	1層 (160×70×30cm)、南側壁の内側に敷り付く
排水溝	あり、530×30×10cm、北側壁から東側へひくもの
礎柱土	東側壁に埋土、2時間分 (柱穴) の深さでまきより、西側壁が2時間分
出土土層	南側壁に埋土、柱土層あり
住居の先後関係	不明
時期	弥生時代後葉後 - 古墳時代初期
備考	なし

型穴住居43	
地区/位置	A地区 (1A) - F1g1c/a/型穴住居41の南側
規模	530×(440)×35m、方形
1階穴(南北長×深)	25.0m
住居面積	3層
礎石	2層、吉 - 10YR5/6中砂 (10cm)、新 - 7.5YR5/6中砂 - 中砂 (8cm)
柱礎	北 - 南側2基、南 - 東側1基
土柱穴	5 (一基) 本、2坑穴1本 (深40~50)、浅い柱穴2本 (深10~25)
土坑	2層、伊1 (120×70×15cm)、伊2 (95×45×35cm)
土壌	不明 (柱穴6・7は土坑の可能性あり)
排水溝	不明
礎柱土	北 - 西へ埋土、2時間分
出土土層	なし
住居の先後関係	不明
時期	弥生時代後葉後 - 古墳時代初期
備考	伊1埋土に礎石、伊2土層に礎石、伊2は南側壁の埋土層から南側壁か、東側壁あり (埋土層の埋土層あり)、北側壁は下層に埋土

型穴住居200	
地区/位置	C地区 (1C) - F20b/尾根の南側
規模	(240) X (220) X50m、方形
1階穴(南北長×深)	(11.6m) X 7
住居面積	2層
礎石	1層、2.5YR6/2細砂よりシルト (7~3層)
柱礎	なし (土層直接で礎石)
土柱穴	確認できず
土坑	不明
排水溝	不明 (溝間に先行する溝もみみあり)
礎柱土	なし
出土土層	南側面上層 (7~2層) - 埋土上層 (7~2層) に土層片あり
住居の先後関係	不明
時期	弥生時代後葉 (中期) 後葉 - 古墳時代初期
備考	北側壁に一定の溝1が埋土 (埋土層あり)、柱穴1は南側壁の埋土層から南側壁か、東側壁あり、南側壁埋土層の埋土層あり (古墳時代後葉 - 古墳時代後葉)

表7. 1 型穴住居一覽

る。このことはこの住居が他の方形住居と同様に方形の原理を基準として構築されていたことを示唆している。竪穴住居32は六角形から五角形へと変遷したと考えられるが、六角形住居には6本柱穴、五角形住居には5本柱穴がそれぞれの角に対応している。このうち六角形住居の場合は、平面形や柱穴の位置から円形住居によくみられる求心構造であったと考えられる。しかし五角形住居に建替えた際には南半部分が方形住居に近い形をとり、方形住居同様の方形原理との関連が指摘できるようになる⁵。

方形竪穴住居の多くは建物方向を等高線に沿って建てられているのではなく、むしろ1つの隅を西側に向けて建てられているのに基づく。この調査区では、調査期間中（特に冬季）にかなり強い西風を経験してきた。住居の1隅が西側を向いているのは、強い西風をまともに受けないように対応させた結果ではないだろうか。竪穴住居20が多角形であるのも西風対策に関係あるかもしれない。

各竪穴住居の主柱穴には礎板や礎石などは認められないが、ほとんどの主柱穴で埋土最下層にシルト質の層が確認できる。礎板と同じく柱穴の沈下を防止するため、もしくは柱の高さを調節するためであろうか。明らかに地山の土とは違うので、他所より柱穴設置用に持ち込んだものと推測できる。このように主柱穴の構築方法にも共通点が見受けられる。

炉 竪穴住居23を除いてすべての住居で炉が確認できる。竪穴住居23の場合、炉が想定できる中央部分が後世の溝によって削平されているので、おそらく存在していたであろう。いずれの住居にも中央に作られており、共通性がうかがえる。また炉側面が赤変し焼土化しているものが多く、埋土には炭化物がみられる⁶。炉埋土の一部を水洗した結果、竪穴住居20や32の炉から炭化米をわずかながら選別できたので、これらは炊飯用であったと判断できる。竪穴住居32炉4や竪穴住居43炉2の場合は中央に位置しないため、炊飯用とは別機能を想定すべきかもしれない。

竪穴住居32のように中央に複数の炉が検出されるものもあるが、大半は建替への有無にかかわらず中央炉は1基のみ確認できる。炉には作り替えた痕跡は見出せなかったため、建替えがあっても以前の炉を継続して使用していたのであろう。

竪穴住居23と30の近くに焼土坑22と46があり、焼土坑22からは炭化米が多く選別できたことから、これらの焼土坑は屋外炉と考えられる⁷。竪穴住居にはそれぞれ炉があるのもかわらず屋外炉が存在することは興味深い事実であるが、竪穴住居の中央炉と屋外炉との機能差は明らかにできなかった。

壁溝・排水溝 壁溝は検出したすべての住居に認められた。住居の壁に沿って1重の壁溝をめぐるしており、住居の拡張の際には壁溝の位置も拡張させている。竪穴住居31の建替えのように、ももとの壁溝を貼床で覆ってしまい、拡張した壁際に壁溝を作り替える例がある。この例から壁溝が2重以上確認できる場合、その住居は建替えられた可能性が高いといえる。なお住居が拡張される時、拡張された部分は壁溝も作り替えるが、拡張されなかった部分ではももとの壁溝をそのまま使いつづけるようである。つまり壁溝はつねに住居の壁際をめぐるように作られているのである。

竪穴住居42や41では壁溝内からはほぼ完形の土器群が出土している。これらの土器群は住居の使用時～廃絶直後に壁溝内に入り込んだものと推定できる。したがって住居が使用されている期間は、壁溝が埋められることなくあいている状態であった可能性が高い。壁溝の部分に板や土などの壁体構造を想定する見解（都出1975）もあり、今回検出した住居ではそのような痕跡は見つけられなかったが、板壁があったことは否定できない。

排水溝は、竪穴住居23、30、41、42で検出でき、竪穴住居31、32ではその痕跡と思われる小溝を確認している。つまり大半の竪穴住居で排水溝が確認できたことになる。排水溝はいずれも標高の高い側か

ら低い側にのびているので、排水の役割を果たしていたと理解できる。また排水溝はすべて壁溝に取り付いていることから、壁溝の役割は排水溝と同じく排水や除湿であったと考えることができる。

土坑 竪穴住居30、31、41には壁溝内側に接する位置に土坑が認められる⁸。これらは方形住居の南側壁溝のほぼ中央に位置することで共通している。多角形住居にはこの土坑はみられない。壁溝との切り合いはなく同時併存しており、壁溝同様に住居機能時には埋められずあいていた可能性が高い。住居内にある土坑は、貯蔵穴や出入口施設などの機能が想定されている。しかし今回の調査では土坑からの出土遺物はほとんどなく、埋土の水洗などをおこなったが貯蔵穴としての性格を判断するものは何も選別できなかった。また出入口施設である痕跡も見出せなかった。

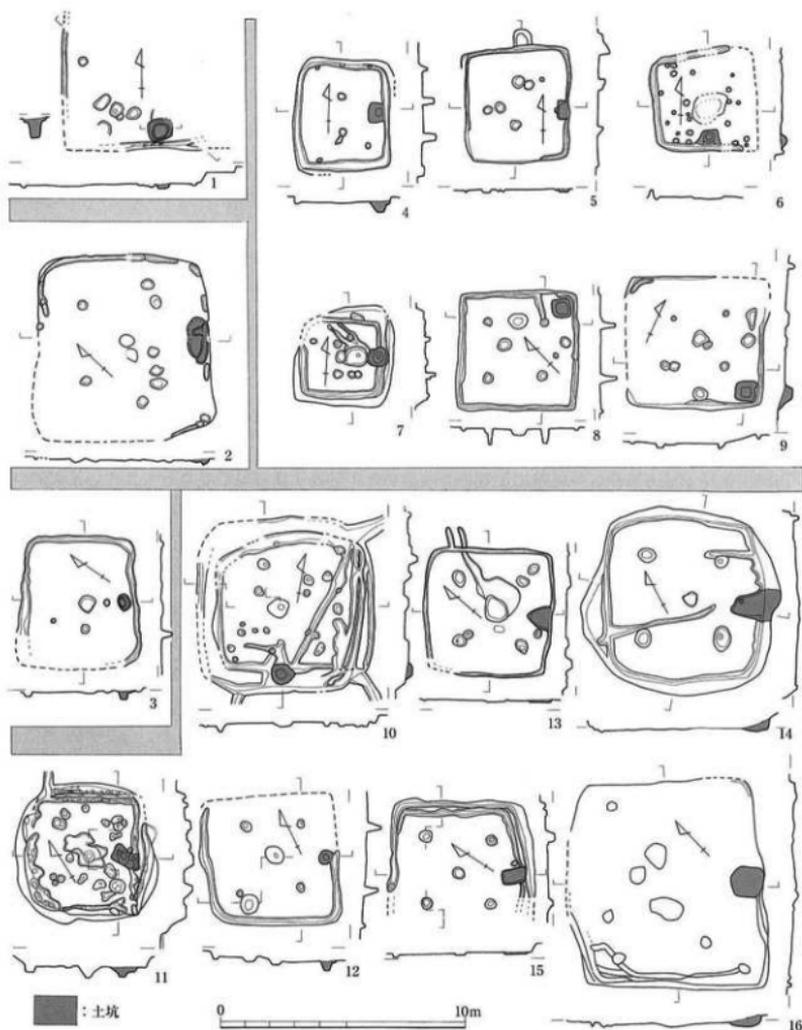
竪穴住居31には、後述する屋内高床部が住居内の西側～北側にかけて認められた。壁溝に接する土坑は、住居南側の屋内高床部がない部分に配置されている。住居の東側が削平されているため屋内高床部が東側につづいていたかどうかは判断できない。しかし南側には確実に屋内高床部が途切れる部分があり、屋内高床部がない所に出入口がある可能性が考えられ、この土坑が作られている南側に出入口部分があった蓋然性が高い。つまりこの土坑が出入口に関わる施設であるということは充分想定できる。直接的に土坑の性格を判断できる根拠はないが、竪穴住居31の住居内の配置からこの土坑は出入口関連施設であると想定しておきたい。

南河内地域では方形住居の壁際に土坑をもつ例が弥生時代後期以降散見されるようになる。(図7、3)。しかし駒ヶ谷遺跡の今回調査区のように大半の住居に土坑が認められる遺跡は少なく、いずれの集落でも少数の住居にしか土坑は確認できない。これらの土坑例は、古墳時代初頭～前期にかけて類例がやや増加するが、古墳時代中期には減少していく。住居内における土坑をみると、住居の南側～東側の壁際に認められる例が多い。このことが土坑の機能に関係するのであれば、南～東側は日当たりのよい方向であり、出入口の方向としては相応しい。また南～東側は冬季に風が吹きつけにくい方向でもあり、そのことからこの方向に出入口を設けることは理にかなっている。ただ出入口部分が住居内で最も風通しの良い場所であれば、この土坑が貯蔵穴を兼ねていた可能性も充分に考えられる。

屋内高床部 (ベッド状遺構) 竪穴住居内に一段高まった部分が認められる例があり、「屋内高床部」と呼称されている⁹(石野1990)。

竪穴住居31で屋内高床部が明確に確認できた。竪穴住居23でも建替えなどによる削平のため明確に検出できなかったが屋内高床部があった可能性がある。竪穴住居31の屋内高床部は先述したとおり住居内の西側～北側に認められ、貼床を一段高くして構築されている。住居の東側は削平されていて不明であるが、南壁中央部には屋内高床部は認められない。したがって屋内高床部の配置はL字状かコ字状でのどちらかである(石野分類-方L型か方3型、寺井分類-E類、西岡分類-Ⅲ類かⅣ類)。屋内高床部をもつ住居は弥生時代中期以降に北部九州を中心として瀬戸内地域まで多く認められ、弥生時代後期には山陰や近畿でもみられるようになるが、分布の中心は北部九州である(西岡1988、石野1990)。

駒ヶ谷遺跡ではわずかながら屋内高床部をもつ住居が検出できたが、南河内地域ではほとんど類例がない¹⁰。屋内高床部と壁溝に接する土坑のセットをもつ例が北部九州を中心に瀬戸内地域までみられ、近畿では播磨地域や紀伊地域に散見される(石野1990、寺井1995)。したがって内的発生ではなく他地域からの情報もたらされた可能性が高い。竪穴住居31は屋内高床部をもつということで他と比べて異なった構造をしているといえるが、住居の規模や立地などからはその特殊性は全くうかがえない。



1. 駒ヶ谷遺跡S3014 2. 尺取遺跡1770住居 3. 石曳遺跡壱穴住居1 4. 寛弘寺遺跡壱穴住居3004
 5. 寛弘寺遺跡壱穴住居3006 6. 寛弘寺遺跡1号住居址 7. 寛弘寺遺跡壱穴住居跡6 8. 寛弘寺遺跡壱穴住居3002
 9. 寛弘寺遺跡壱穴住居3007 10. 東山遺跡壱穴住居跡B-3a 11. 東山遺跡壱穴住居跡A-3a 12. 東山遺跡壱穴住居跡C-3
 13. 東山遺跡壱穴住居1 14. 東山遺跡壱穴住居2 15. 東山遺跡壱穴住居3 16. 東山遺跡 S301
- ※1: 羽曳野市教委1992 2: (財)大阪府文化財調査研究センター-1999 3: 大阪府教委1991 4・5: 大阪府教委1992 6: 大阪府教委1986
 7: 大阪府教委1996 8: 大阪府教委1990 9: 大阪府教委1982 10・11・12: (財)大阪文化財センター-1980 13・14・15: 河内町教委1988
 16: 大阪府教委1985 各報告書を再トレース(なお、16は平面検出と断面調査のみの調査である。)
- 土坑
- 0 10m
- ※寛弘寺遺跡4～9と表7-2の対応関係は、4=041、5=056、6=017、7=038、8=041、9=057である。

図7.3 南河内地域の住居内土坑例(S=1/200)

4. 竪穴住居の変遷

A地区で検出した竪穴住居の時期は、出土土器から一部弥生時代後期中葉の特徴を有するものもあるが、いずれも弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の範疇で捉えられ、比較的短期間に営まれた住居群である¹⁾。このため出土土器からそれぞれの竪穴住居の細かい時期差を明らかにすることは難しい。また竪穴住居42では床面より良好な形で土器群の出土をみたが、その他の竪穴住居の出土遺物は埋土中のものが多く良好な出土状況を示すものはわずかであった。竪穴住居20や50のように埋土中より多量の土器が出土したものもあるが、埋土中の土器は竪穴住居廃絶後に入り込んだものであるため、その竪穴住居が営まれていた時期を示すとは限らない。したがって今回調査した各竪穴住居の変遷を出土土器のみで追うのは困難である。しかし竪穴住居23と20のように切り合う住居があることからすべてが同時併存していないことは確実である。そこで住居の配置や廃絶後の状況、出土土器の様相など様々な角度からの分析によって各竪穴住居の変遷を考えてみたい。竪穴住居の変遷を推定することは、集落の構造を探るうえで不可欠な作業である。

ブロックの設定 はじめに同時に併存していない竪穴住居を確認しておく。竪穴住居23と20には切り合い関係があり、23が20に切られている。竪穴住居31と32は距離がほぼ接することから同時併存は考えられない。また竪穴住居42の排水溝が竪穴住居50に向かってのびていることから両者は同時には存在しないと考えられる。竪穴住居20と30は同時に併存することは不可能とはいきれないが、やはり距離が近いことから同時には営まれていなかったと推測したい。以上のことから竪穴住居20・23・30や竪穴住居31・32、竪穴住居42・50のように近接した住居は同時併存せず、先後関係があったことが想定できる。そしてこの場合、近接した住居へと変遷していったと考えるのが妥当であろう。竪穴住居41と43は同時併存を想定することは可能であるが、近接する住居であることからひとつのまとまりと捉えておきたい。このようにA地区で同時併存していた竪穴住居は、41と43が同時に存在しない場合は、最大に見積って4棟ということになる(仮に竪穴住居41と43が同時に存在した場合は最大5棟となる)。これらの同時併存しない近接した住居群をブロックとして捉えると4ブロックに分けることができる。この4つのブロックをA～Dブロックと呼称して、Aブロック＝竪穴住居20・23・30、Bブロック＝竪穴住居31・32、Cブロック＝竪穴住居41・43、Dブロック＝竪穴住居42・50とする(図7、2)。ここでいうブロックというのは、古曽部・芝谷遺跡(高槻市教育委員会1996)で想定されている竪穴住居の「群」という立地的なまとまりではなく、最小単位である竪穴住居1棟分の変遷の単位を指すことになる。いいかえれば各ブロック内には1時期に最大1棟の竪穴住居しか存在せず、複数の住居は併存しないことを意味する²⁾。次にこれらブロック内の竪穴住居の変遷を、各竪穴住居の建替えを含めて考えていきたい。なお竪穴住居の変遷が比較的つかみやすいDブロックから分析をはじめ、ついでA→C→Bブロックの順に分析していく。

Dブロックの変遷 Dブロックは竪穴住居42と50の2棟で、42の排水溝が50へむかってのびている。残念ながら竪穴住居42の排水溝と竪穴住居50の切り合う部分が後世の溝44に切られているためその切り合い部分は不明である。このように竪穴住居どうしの切り合いがないため確実な先後関係がつかめないのが現状である。竪穴住居42の出土土器は古墳時代初頭の特徴を有し、新しい傾向にあるようにみえるが、竪穴住居50の床面から良好な状態で出土した土器がないため比較が難しい。

そこで竪穴住居内それぞれの土器群の出土状況を見ていく。竪穴住居42では床面直上より良好な状態で完形土器が出土している。この土器群は竪穴住居廃絶直後の状況を示している。その後竪穴住居42

は、土層断面の観察から長期間凹みであったと判断することができ、埋土1層の下部から須恵器などの遺物が出土している。つまり住居廃絶後に当該期の土器などが多量に廃棄されることなく、古墳時代後期まで凹みの状態が続いていたのである。一方堅穴住居50では床面出土の土器はほとんど出土せず、埋土上層より当該期の多量の土器群が検出できた。この土器群は、住居廃絶後の凹みに長期間にわたって徐々に流入したのではなく、短期間のうちに廃棄された状況を反映している。この土器群の所属時期はA地区の堅穴住居群が存続していた時期におさまり、古墳時代前期以降の遺物は含んでいない。つまりこの土器群は集落の廃絶までに廃棄行為がおこなわれたことを示している。この堅穴住居42と50の埋没状況の違いから、仮に堅穴住居42が先行すると考えた場合、堅穴住居50廃絶後の凹みに廃棄行為がおこなわれた際に、同じく凹みであった堅穴住居42に土器を廃棄しなかったのは不自然である。堅穴住居50が先行すると考えた場合は、堅穴住居42機能時に凹みであった堅穴住居50に廃棄をおこなっていたことは想像にかたくない。以上のことから堅穴住居42と50には直接切り合い関係は存在しないが、住居の埋没と土器廃棄状況から堅穴住居50が先行すると推察できる。このことは堅穴住居42の機能時～廃絶直後の所産と考えられる床面出土土器に新しい傾向がみられることから矛盾しない。

Aブロックの変遷 Aブロックは堅穴住居20・23・30の3棟で、最も住居数の多いブロックである。このブロックは尾根上最高所の平坦面に位置している。住居の変遷で確実なのは、切り合い関係のある堅穴住居23→20への流れである。堅穴住居30については、出土土器の様相が他の住居より新しい傾向にあるようにもみえるが確実なことはいえない。

先述のとおり堅穴住居20と23は切り合い関係があり、23が20より先行する。これらと堅穴住居30とは切り合いがなく先後関係は不確定である。そこで先に分析した堅穴住居42・50の関係をふまえて、住居廃絶後の土器廃棄状況を試みる。堅穴住居20埋土上層には多量の土器が廃棄された状態で出土しているのに対し、堅穴住居30埋土から出土した土器は少ない。堅穴住居20に比べて堅穴住居30の上層が削平されていることを考慮してもその出土状況の差は明らかである。よって堅穴住居42・50の関係と同様の状況が想定でき、堅穴住居20が30より先行すると考えることができる。仮に堅穴住居30が20より先行したとすると、堅穴住居30が23に先行する場合でも後続する場合でも、堅穴住居20に土器が廃棄される時点では3棟とも廃絶していることになり、3棟の中で堅穴住居20のみに土器が廃棄されるのは不自然である。したがって堅穴住居30が20より先行する想定は考えにくい。この場合、堅穴住居30機能時にすぐ隣にある堅穴住居20の凹み部分へと土器が廃棄された可能性が高い。このことは堅穴住居20廃絶後の上層出土土器群に比べ、堅穴住居30の機能時～廃絶直後の所産である柱穴3・4や土坑1から出土した土器の方が新しい傾向にあることも矛盾しない結果である。しかしここで堅穴住居23にも廃棄された土器群が未検出であることが問題になるが、堅穴住居23に土器群がみられないのは、堅穴住居30機能時にすぐ隣の堅穴住居20の方に土器廃棄をおこなっていたためと理解したい。以上の分析からAブロックでは、堅穴住居23→20→30の変遷であったと想定することができる。

Cブロックの変遷 AブロックとDブロックについては堅穴住居の変遷を想定することができたが、B・Cブロックに関してはその変遷を示す根拠がほとんどないのが現状である。しかしながら推論の余地が全くないわけではないので、その変遷の先後関係について私見を述べておく。Cブロックは堅穴住居41と43の2棟で、距離がやや離れていることから同時併存の可能性は完全に否定できない状況である。当然前後関係を示す根拠も乏しい。そこでさらに堅穴住居どうしの関係を詳細に検討することによってその変遷について考察していくことにする。

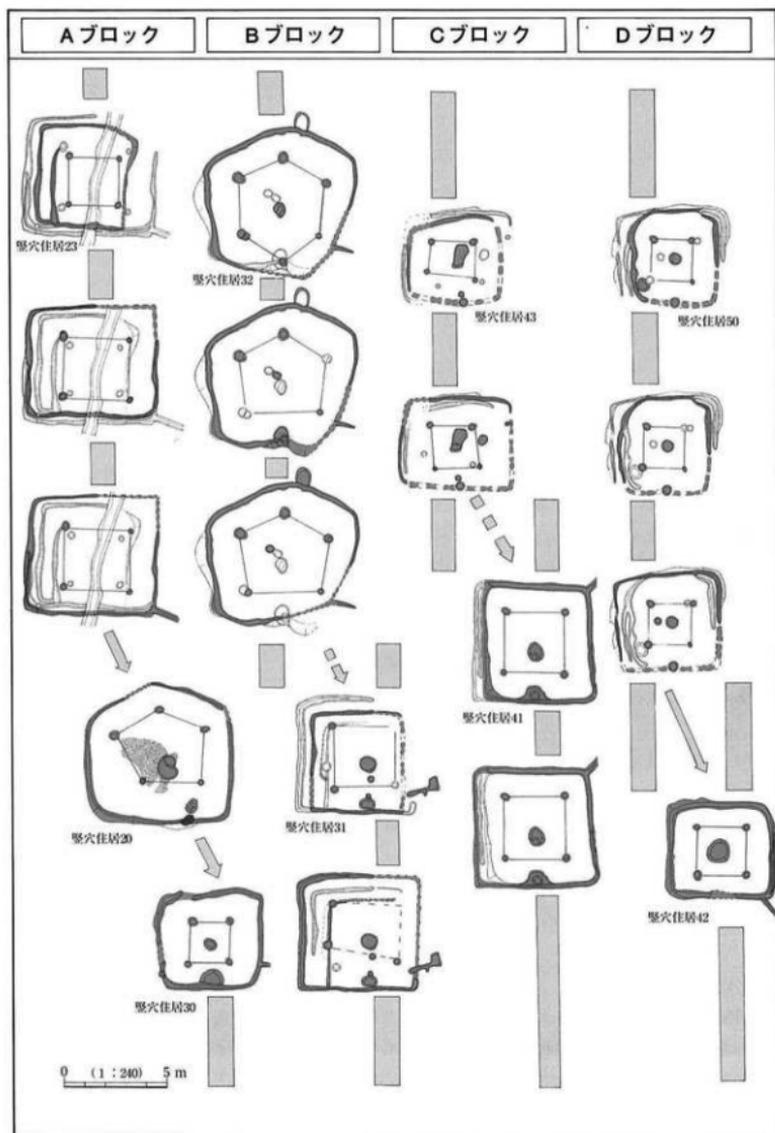


図 7. 4 A地区竪穴住居実測図 (S=1/240)

先にA・Dブロックで住居の先後関係が確認できたわけであるが、その先行する住居と後出する住居の特徴を概観する。先行する住居である竪穴住居23・50と後出する住居である30・42を比較すると、先行する住居の方は建替えが多く残存状況が良くない傾向にある。一方後出する住居は、集落存続期間の最終段階であるためか建替えがみられず、住居の形態が整然とした感がある。また上層に廃棄された出土土器群が認められず、床面出土土器が確認できる。以上の特徴をふまえてCブロックについてみる。

竪穴住居41と43を比較してみると、竪穴住居41の南側壁溝内から機能時～廃絶直後の所産である可能性のある土器・粘土塊が出土しているが、竪穴住居43には認められない。加えて竪穴住居41の方が43に比べて住居の残りも良く整然とした感があり、上層出土遺物も少ない。このことから竪穴住居41の廃絶時の状況は竪穴住居42に、竪穴住居43の状況は竪穴住居50にそれぞれ似ているのではないだろうか。このことにより不確定要素は払拭しきれないが、現時点では竪穴住居43の方が41より先行する住居であると考えておきたい。ただし先述したとおり両竪穴住居が同時併存していた可能性は否定できない。

Bブロックの変遷 Bブロックは竪穴住居31と32の2棟で、両者に切り合い関係はない。確実に前後関係を示す根拠はないが、出土土器からは竪穴住居32の方がやや古い傾向を示す可能性がある。

竪穴住居31と32は、住居の残存状況にそれほど違いは認められない。また竪穴住居32は多角形住居であり複数の炉を有しており、竪穴住居31は屋内高床部が存在するなど比較も難しく、そのため両者の先後関係を探る手段はほとんど持ち合わせていない。そこでわずかながらでも先後関係を示す情報をあげておく。建替えについて回数が多いのは竪穴住居32の方である。竪穴住居31の南側壁溝に接する土坑は、後出する住居である竪穴住居30や41にもみられる。竪穴住居32の北側壁溝に外接する土坑51を仮に出入口施設と仮定すると、竪穴住居31が先に廃絶した場合は凹み状になっている部分から出入りしなければならず出入口施設としては不適格である。逆に竪穴住居32が先行する場合は出入口施設として機能することに無理はない。出土土器からみると竪穴住居32の方が若干古いものが含まれる傾向にある。このように先後関係を明確に示す根拠にはならない情報ではあるが、これらを総合的に判断すると竪穴住居32の方が31より先行すると考えるのが妥当であろう。

各ブロック内の住居の変遷を示したのが図7、4である。各ブロック内の変遷については検討してきたが、同時期にどの住居が併存していたかを示すことは難しい。この図は各ブロックの変遷回数を単純に等分して並べたものであって、厳密に住居の存続期間や併行関係を示すものではない。しかしこの地区の竪穴住居が1棟だけで存続していた期間があるとは考えられず、必ず複数の住居が営まれていたはずである。各ブロック内では竪穴住居が継続して営まれつつ変遷したと考えられ、この図で示した併行関係が大きく前後しないであろうと考えたい。

5. 竪穴住居の規模

駒ヶ谷遺跡の住居面積 ここでは竪穴住居の規模(住居面積¹⁾)から集落構造の一端を理解したい。図7、5は各ブロックごとの住居面積の変遷を示したもので、駒ヶ谷遺跡調査会が調査した竪穴住居の例(羽曳野市教育委員会1992)も含めている。この図からまず読み取れることは、建替えをする前の方形住居の住居面積が18～25㎡の範囲に多く分布することである。13棟中過半数の7例がこの範囲内にあり、方形住居だけに限れば10棟中7例である。竪穴住居43や50のように建替えた後の面積もこの範囲におさまり、これが駒ヶ谷遺跡の標準的な住居規模であるといえる。これらの住居が建替えられると、竪

穴住居23や31のように35㎡前後の住居面積を示すものがある。竪穴住居41の場合は拡張前後にかかわらず、同じような面積である。このことは住居建替えの際に同じ割合だけ拡張していることになり、住居を拡張する理由が居住人数の増加に対処する居住空間の拡大にあったことを推測させる。

多角形住居は住居面積が40㎡を越え、標準的な住居に比べて大形であるといえる。方形住居SB011もこれと同様の規模をもち、他の方形住居との格差がうかがえる¹⁵。多角形や円形住居が方形住居より大きな規模をもつ場合は、住居形態や構造の差異であるかもしれない。しかし方形住居の間で面積に差がある場合、住居の機能差や居住者の役割の違いを考えるべきであろう。この住居が多角形住居と同じような面積を有していることは、他と違った性格の住居であることを示唆している。多角形住居である竪穴住居32と20は、図7. 4の変遷図からもわかるとおり存続時期が重ならないことは充分に考えられ、その場合A地区では大形の多角形住居が継続して営まれていたと想定できる。この想定が正しいならば、A地区においては常に多角形住居1棟が尾根の高い部分に存在していたことになり、この尾根の中心的な建物であったと考えることができる¹⁶。

このように駒ヶ谷遺跡では、20㎡前後の面積をもつ標準的な住居と40㎡を越える大形の住居の存在が指摘でき、建替えなどの結果その中間的な35㎡前後の住居があることがわかった。

他集落の住居面積比較 ここまで駒ヶ谷遺跡の住居面積の分析をおこなってきたが、次に駒ヶ谷遺跡と南河内地域の他集落との住居面積の比較をおこないたい(図7. 6)。比較するにあたって、南河内地域の弥生時代後期～古墳時代初頭の集落で竪穴住居の検出数が多い東山遺跡・寛弘寺遺跡・尺度遺跡を対象にする。東山遺跡と寛弘寺遺跡は駒ヶ谷遺跡と同じく丘陵上の集落で、尺度遺跡は扇状地～低地に立地する集落である¹⁷。いずれも駒ヶ谷遺跡の存続時期に一定期間併存していたと考えられる集落である。

東山遺跡では方形住居の面積は、25㎡以下と35㎡前後のまとまりにわけることができる。他の方形住居と比べ格段に大きい58㎡の大形方形住居が1棟検出されているが、これは駒ヶ谷遺跡SB011と同様の存在であろう。25㎡以下の一群は、さらに20㎡前後の一群と10㎡前後の一群にわけることができる。こ

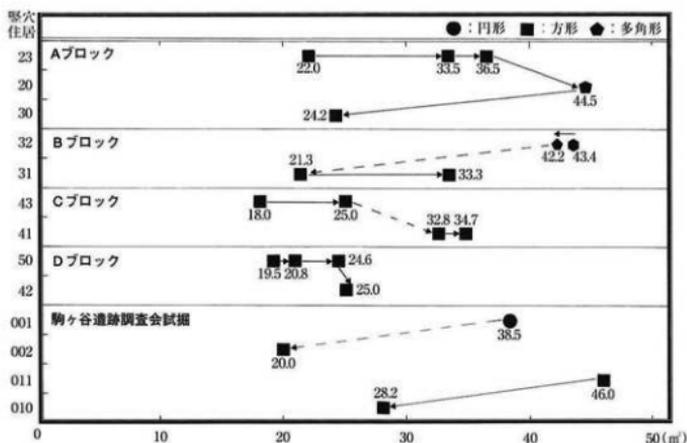


図7. 5 駒ヶ谷遺跡竪穴住居面積

のうち20㎡前後の一群は、駒ヶ谷遺跡でみた標準的な住居に対応すると考えられる。10㎡前後の面積をもつ方形住居は、規模が小さいことから一般的住居ではなく作業小屋や祭祀施設と想定されることもあり、住居と呼ばない方がいいかもしれない。駒ヶ谷遺跡ではこの一群の小形住居は検出されていない。35㎡前後の一群は、駒ヶ谷遺跡でみた中間的な住居に対応すると推測でき、この住居面積が一定の意味をもつ可能性がある。このように駒ヶ谷遺跡同様、方形住居の面積が20㎡前後と35㎡前後に集中することは、駒ヶ谷遺跡での住居拡張例から考えて、夫婦の住まいにおける子供の誕生または1世帯から2世帯への増加など構成人数の変化に対応する住居面積であると推測したい。なお円形住居は25～40㎡・45～65㎡のそれぞれの一群にわけられ、80㎡を超える大形住居も検出されている。方形住居より全体的に規模が大きい傾向にあり、80㎡を超える大形住居は先述の大形方形住居に対応する可能性がある。

寛弘寺遺跡の方形住居には大形方形住居はないが、東山遺跡同様に25㎡以下の一群と35㎡前後の一群にわけることが可能である。さらに25㎡以下のうち10㎡前後の一群が存在することも東山遺跡と類似する点である¹⁹。このことから駒ヶ谷・東山・寛弘寺遺跡の方形住居面積には共通点が見出せる。寛弘寺遺跡の円形住居は、全体的に東山遺跡に似た状況であり、78㎡という大形住居も存在する。東山遺跡と異なる点は、10～20㎡の円形住居としては小形のものが認められることである。これも方形住居と同じように住居とは違う機能を考えた方がよいであろう。

尺度遺跡では、20㎡前後と25～50㎡の一群にわけることができる。前者は東山遺跡や寛弘寺遺跡でみられた小形の方形住居に相当するであろう。後者は尺度遺跡の標準的な住居面積を示し、全体的に若干大形化しているもの他集落とほぼ同じ傾向が看取できる。ただ標準的な住居と大形住居の区別がつかなくなっているのはこの特徴であろう²⁰。

以上駒ヶ谷遺跡と周辺遺跡の住居面積を比較してきたが、方形住居に関しては共通点が多いことがわかった。方形住居を建てる際の知識が広く伝わっていたことを示していると考えられ、この時期に方形住居が一般化していくことも無関係ではないであろう。方形住居が円形住居に変わって広く採用されるようになるのは、居住人数に適應する合理化・簡便化された建築技術の確立などの背景が考えられる。

6. 周辺遺跡との集落構造の比較

南河内地域では、駒ヶ谷遺跡以外にも弥生時代後期～古墳時代初頭の丘陵上の集落が存在する。特に石川右岸では、玉手山、五十村、駒ヶ谷、御嶺山、チンチの森、葉室西峰、東山、西大寺山、寛弘寺、彼方、大師山遺跡などが一定の距離をあけて営まれている²¹（図7. 7）。これらのうち集落構造がある程度把握されている駒ヶ谷遺跡、東山遺跡、寛弘寺遺跡について集落構造の比較をおこなっていく。

駒ヶ谷遺跡の集落構造 これまでの分析と図7. 1を基にして居住域を推定したのが図7. 8である。竪穴住居が検出されているまともは3箇所あり、主尾根中心部の最も平坦面が確保される部分を中地区と呼称する。中地区では竪穴住居が10棟検出されており²²、集落の中心であったと推定できる。この地区から北へ派生する尾根で竪穴住居1棟と土坑が検出され、この部分を北地区とする。遺構の密集度から北地区の方が規模が小さいと推測できる。中地区と北地区の間は調査が及んでいないため一連であった可能性は否定できない。主尾根から東側へ派生する尾根上で今回調査した竪穴住居9棟が検出でき、ここを東地区とする。東地区と主尾根との間のトレンチにおいて遺物・遺構が検出されていないため、東地区は主尾根から連続していない一群であるといえる。丘陵の南端部分では遺構は検出されていないが遺物包含層が確認されており、この部分にも居住域があった可能性が高く南地区とする。中地区

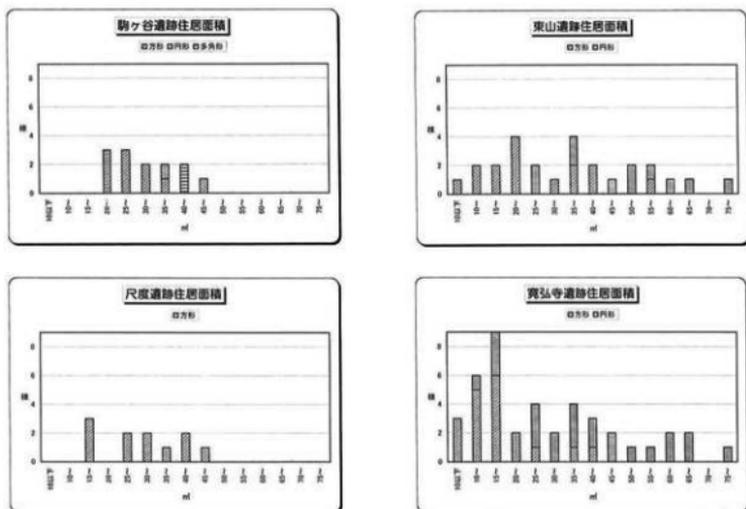


図 7. 6 竪穴住居面積表

駒ヶ谷遺跡住居面積

竪穴住居	20	23	30	31	32	41	42	43	50	001	002	011	010
住居面積	44.5	36.5	24.2	33.3	44.2	34.7	25.0	25.0	24.6	38.5	20.0	46.0	28.2
平面形	多角	方形	方形	方形	多角	方形	方形	方形	方形	円形	方形	方形	方形

東山遺跡住居面積

竪穴住居	府1	河1	河2	河3	河4	河5	河C	A1	A3a	A4	A5	B1a	B3a	B2
住居面積	58.1	22.1	39.7	24.5	11.2	9.9	47.8	11.5	20.5	52.8	55.7	17.8	42.5	39.9
平面形	方形	方形	方形	方形	方形	方形	円形	方形	方形	円形	円形	方形	方形	円形
	B4	B5	B7	B9-6	B10-4	B10-3	C2a-2	C3	C5	C6-1	C6-3	C7		
	26.7	38.5	81.7	29.8	53.0	32.5	66.7	23.0	19.3	66.2	42.6	36.3		
	円形	円形	円形	円形	円形	方形	円形	方形	方形	円形	方形	方形		

寛弘寺遺跡住居面積

竪穴住居	001	005	006	008	015	016	017	018	021	026	031	033	035	038
住居面積	47.8	18.8	50.2	42.0	29.4	32.2	13.0	11.8	7.6	12.1	36.5	10.2	36.3	27.5
平面形	円形	方形	円形	円形	円形	円形	方形	方形	方形	方形	方形	方形	円形	方形
	039	040	041	042	043	044	045	046	048	049	050	053	056	057
	8.1	16.8	18.6	43.9	31.7	17.2	50.0	19.8	18.5	8.1	22.5	12.8	16.6	23
	方形	方形	方形	円形	円形	方形	円形	円形	方形	方形	方形	方形	方形	方形
	059	064	066	071	073	084	087	090	097	102	103	111	113	116
	18.1	63.9	63.6	35.2	69.3	41.8	35.3	55.4	27.3	26.4	78.5	11.9	65.0	19.6
	円形													

尺座遺跡住居面積

竪穴住居	499	500	556	577	623	699	700	1333	1334	1555	1770
住居面積	19.8	19.3	27.4	19.1	30.3	43.6	31.4	38.4	42.0	25.5	47.6
平面形	方形										

(注) 住居面積は各報告書掲載の数値を使用。それぞれ算出方法に若干の相違はあるが、集計に影響する誤差はほとんどないと思われる。使用した竪穴住居は以下のとおり。駒ヶ谷：001～010＝羽曳野市教委（1992）S B001～010、東山：府1＝大阪府教委（1985）SB01・河1～5＝河南町教委（1998）B調査区竪穴住居1～5・河C＝河南町教委（1998）C調査区竪穴住居・その他＝大阪文化財センター（1980）、寛弘寺：藤田（1996）表1～3の住居番号に対応、尺度：大阪府文化財調査研究センター（1999）

表 7. 2 竪穴住居面積表

と南地区の間には方形台状墓があり、居住域としては連続していない。このことから胸ヶ谷遺跡では、大きく4箇所の居住域が推定できる。これらはそれぞれ孤立した集団であることも否定できないが、ひとつの独立した丘陵上に営まれていることから互いに無関係であるとは考えられない。中地区（C地区含む）の出土土器には、東地区よりも若干古いものを含むことから、東地区は中地区から派生した居住域であると考えることが可能である。おそらく弥生時代後期中葉である集落出現期（後期前葉まで遡る可能性あり）から連綿と継続していた中地区から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭のある時期に東側へ集落を拡大したのであろう。北地区と南地区の存続時期は判然としないが、東地区と同様に中地区から派生したと考えたい。このように胸ヶ谷遺跡では複数の居住域にわかれ、集落内に複数の単位集団の存在が予想できるが、これらの居住域の分散化は集落の拡大に一因があると推測したい²²。

中地区につづく主尾根には方形台状墓が2基確認され、主体部と考えられる土坑8基と土器棺2基が検出されている。これらは中地区の居住者の墓域であると考えられるが、堅穴住居数から考えて中地区のすべての居住者が埋葬されたとはいえない。未発見の墓域があるかもしれないが、少なくともこの墓域にはすべての居住者が埋葬されていないと考えられる。さらに中地区以外の居住域の墓域は確認されておらず、この丘陵とは別の地点に墓域があったと考えざるを得ない。このように考えると丘陵上で検出された方形台状墓は、この集落の中心的役割を担っていた人物およびその家族の墓域である可能性が高いといえる²³。この他A地区の溝2上層より土器棺を1基検出している。

東山遺跡の集落構造 胸ヶ谷遺跡同様に集落の居住域を推定したのが図7.9である（(財)大阪文化

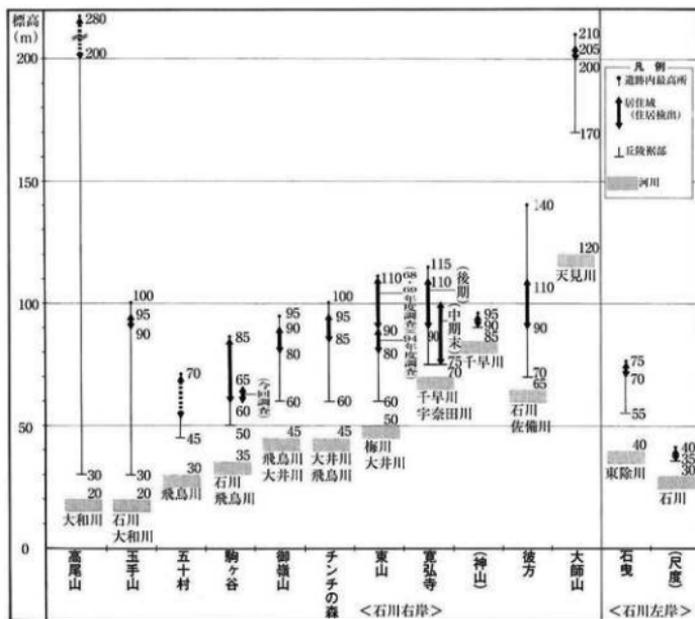


図7.7 南河内地域の丘陵上集落の標高概念図

財センター 1980、大阪府教委1985、河南町教委1998)。竪穴住居が検出された尾根は一続きにはなっているが、大きく北半と南半に居住域がわかれるようである。そして北半、南半ともさらに複数の居住域にわかれている。南半部分は、尾根上全体に竪穴住居が分布しているようにもみえるが、A地区やC地区で居住域を区画するような溝が検出されている。またA地区、B地区、C地区の3箇所に竪穴住居のまとまりが確認できるため、それぞれ別の居住域を形成していたと考えることができる。3地区の中間部分でもある尾根中央部にも竪穴住居が数棟検出されているが、密集せずに分散していることから違った性格の竪穴住居であった可能性もある。この部分は共有地的な場所であったと推測しておきたい。以上のように南半部では3箇所（中央部分をいれると4箇所）の居住域にわかれていることがわかる。

一方北半部でも94年度C調査区に竪穴住居を区画するような溝が検出されていることから、隣接するB調査区と居住域を異にしていたと考えられる。このように北半部でも2箇所の居住域が想定できる。

このように東山遺跡では大きく北半部と南半部の居住域にわかれ、さらに北半部では2箇所、南半部では3（～4）箇所の居住域にわかれていたことがわかる。ここでも駒ヶ谷遺跡と同じく複数の単位集団の存在が予想できる。南半部は弥生時代後期前葉と中葉～後葉を主体とする竪穴住居群が検出されている。わずかに中期末の遺物も出土しており集落の出現が遡る可能性がある。北半部では後期中葉～後葉の竪穴住居群が検出され、一部は古墳時代初頭（庄内式期）まで継続している可能性がある。このことから北半部の居住域の方が南半部に比べて若干遅れて形成されているようである²¹。南半部では円形住居が主体となり方形住居が混在しているが、北半部では方形住居が主体となっていることも注目すべきである。このことから東山遺跡では南半部から北半部へと集落が拡大されたと判断できる。

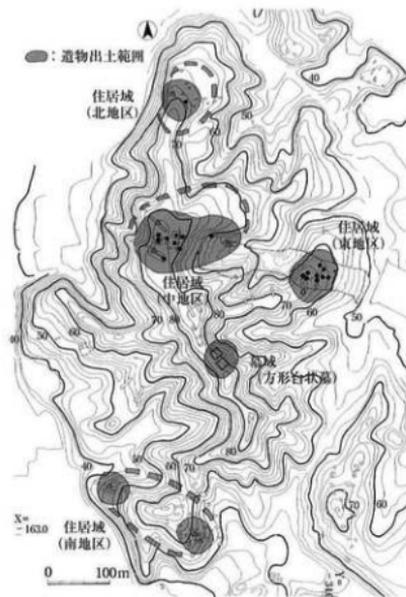


図7. 8 駒ヶ谷遺跡の集落構造 (S=1/800)

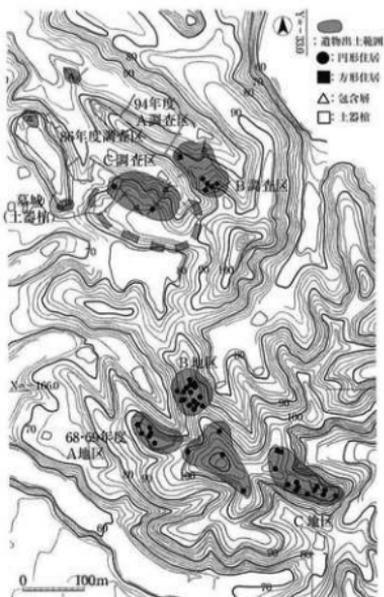


図7. 9 東山遺跡の集落構造 (S=1/800)

東山遺跡では、北半部の西端で土器棺2基が検出されている。しかしこの他には墓域は検出されておらず、現状では集落構成員の墓域が丘陵上にはないと考えられる²⁵。

寛弘寺遺跡の集落構造 寛弘寺遺跡は丘陵上の大半が調査された集落である。居住域は大きく北部・南部・東部の3つの丘陵ごとにわけることができる(図7, 10)。集落の成立は弥生時代中期末～後期前葉と考えられ²⁶、北部丘陵南端部と南部丘陵北端部を中心に小規模な竪穴住居群が検出されている。一部丘陵裾でも竪穴住居が確認できるが、居住域の範囲は限定的である。その後は後期中葉～後葉にかけて竪穴住居群が多数形成されるが、中期末～後期前葉の集落とは時間的に隔絶している(藤田1996)。後期中葉～後葉の竪穴住居は3つの丘陵全域に分布している。さらに北部丘陵では2～3箇所の居住域のまとまりが確認でき、南部丘陵ではA・C尾根、B尾根、D尾根の3つの尾根に居住域がわかれている。東部丘陵でも南端部に竪穴住居が認められ、居住域のまとまりが2箇所にわかれている。寛弘寺遺跡の場合は、駒ヶ谷遺跡や東山遺跡と違って丘陵のほぼ全域に居住域が広がっており、各集団ごとに居住域がわかれていたと判断することは難しい。したがってこのような居住域の分布は集落の拡大の結果と捉えることが可能で、居住域がわかれているようにみえるのは地形的制約のためであるとも考えられる。

そこで各居住域の竪穴住居の構成からその差異をみていく。中期末～後期前葉の居住域では円形住居が主体を占めている。後期中葉～後葉の集落のうち、南部丘陵では円形住居を主体として複数の竪穴状遺構が付属している(鍋島2000)。北部丘陵では円形住居と方形住居が混在し、複数の竪穴状遺構も確認できる。北部丘陵では円形住居は少なく、方形住居が主体となっている(藤田1996)²⁷。このことから後期中葉～後葉の集落は、南部丘陵にまず出現し、その後北部丘陵、東部丘陵へと広がっていったと考えられている(藤田1996)。このことを集落の移動と考えることも可能ではあるが、各居住域出土土器の示す存続時期に大きな差が認められないことから、集落の移動というより集落の拡大と捉えておく。南部丘陵→北部丘陵→東部丘陵への大まかな変遷は認めうるが、北部・東部丘陵とも一定量の円形住居が確認できることから、3

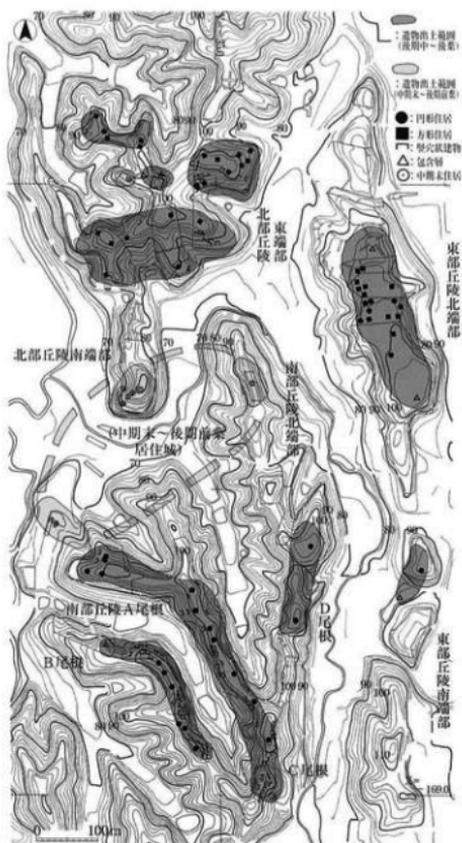


図7. 10 寛弘寺遺跡の集落構造 (S=1/800)

丘陵の居住域において存続時期が重なっていたと解釈しておきたい³⁸。

寛弘寺遺跡では丘陵のほぼ全面を調査したにもかかわらず墓域は見つかっていない。つまり丘陵上には墓がつくれることはなく、低地部分など他所に墓域があったと考えなければならない³⁹。

駒ヶ谷、東山、寛弘寺遺跡の集落構造を比較してきたが、いずれにおいても複数の居住域の存在と居住域の拡大が認められた。このことは丘陵上集落が一過性の居住地ではなく、長期間の集住地であったことを示している。そして長期間の居住のうちに集落の拡大を招いたと考えられる。また集落の拡大にともない中心地が移動した可能性もあり、方形住居を主体とする居住域の形成にも反映されている。このように3つの集落内では同じような展開をしており、南河内地域における堅穴住居の方形化や集落構造の変化は、集落内の内的な要因だけでなく外的な社会からの何らかの影響を受けている可能性がある。

従来丘陵上の集落は、弥生時代後期後葉まで継続し、古墳時代初頭（庄内式期）になると低地に移動するとされてきた。しかし駒ヶ谷遺跡や東山遺跡などは古墳時代初頭まで集落が継続し、古墳時代初頭に出現する周辺の神山遺跡や伽山遺跡、石川流域対岸の尺度遺跡と一時期併存した可能性がある。丘陵上集落が単に低地に移動しただけといえるかどうかは再考の余地がある⁴⁰。しかし丘陵上の集落にはいわゆる庄内式の出土がみられないためその併行関係を示すことは困難である。いずれにしても丘陵上の集落は庄内式期後半までには衰退しているようであり、一方で低地の集落は増加していくことは間違いない。低地の集落には庄内式がみられることも丘陵上の集落との性格上の差異の表れであろう⁴¹。

なお山田氏の研究によると、古墳時代初頭の中河内地域の集落は他地域系土器が多く認められ、瀬戸内→河内湖→中河内集落（中田遺跡群）→旧大和川→大和東南部地域（纏向遺跡）という人為的に設置された物流ルート上に立地することで発展したという。一方で南河内地域の石川流域集落はそのルートからはずれたため他地域系土器はほとんど確認できず、地域間交流の不活発さや閉鎖性が認められるという（山田1994・2001）。石川左岸の中期集落消滅や石川右岸の後期丘陵上集落出現の背景を読み解くためには、本来ならこのような地理的に接する中河内地域や大和地域の社会的状況を踏まえたうえで、南河内地域における弥生後期の集落動向を探る必要があった。今回は駒ヶ谷遺跡を中心に集落の個別分析のみに終始したため、このような社会的背景を十分に考慮することができず今後の課題としたい。

7. まとめにかえて

発掘調査で検出した遺構を検討することにより、駒ヶ谷遺跡の集落構造の把握を試みた。今回の調査では堅穴住居の残りがよく、その変遷や内部構造の分析が可能であり、堅穴住居を中心に検討をおこなうことができた。また既往の調査成果が羽曳野市教育委員会によって詳細にまとめられていたおかげで、今回の調査例と合わせることで駒ヶ谷遺跡の集落構造の一端を明らかにできた。この結果、駒ヶ谷遺跡のデータは今後の当該期の集落研究に有効な視点を与えることになるであろう。しかし今回は周辺集落との比較が不十分で、丘陵上集落の性格や成立・衰退の問題については深く言及することはできなかった。駒ヶ谷遺跡の歴史的・社会的位置付けを含めて今後の課題としてさらに検討を重ねていきたい。

遺跡上に立てば当時の集落景観や面影を想い浮かべる事ができるが、寛弘寺、東山、大師山遺跡のように一部または大半が開発により消滅し、それが出来なくなった丘陵上集落は多い。幸いにも駒ヶ谷遺跡は駒ヶ谷遺跡調査会が調査した主尾根部の居住域が保存されることになり、地域学習の場として、丘

陵上集落の研究対象として、積極的な活用が期待できる。本稿がそのことに寄与できれば幸いである。

〈引用・参考文献〉

- 青木勘時1995「弥生集落から古墳集落へ」『みずほ』16（大和弥生文化の会）
- 粟田薫1992「彼方遺跡」『第31回埋蔵文化財研究会 弥生時代の石器 第Ⅱ部第5分冊大阪府以東編』
- 粟田薫1996「彼方遺跡出土の絵画土器『鹿を射る狩人』」『みずほ』19（大和弥生文化の会）
- 石野博信1990「日本原始・古代住居の研究」（吉川弘文館）
- 市毛勲1998『新版 朱の考古学』（雄山閣出版）
- 大阪府教育委員会1982「伽山遺跡発掘調査概要・Ⅱ」
- 大阪府教育委員会1985「東山遺跡試掘調査報告書—大阪芸術大学校内遺跡試掘調査—」
- 大阪府教育委員会1986「河南西部地区農地開発事業に伴う 寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅱ」
- 大阪府教育委員会1987「河南西部地区農地開発事業に伴う 寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅲ」
- 大阪府教育委員会1988「農農農道・河南中地区建設に伴う 神山遺跡発掘調査概要・Ⅰ」
- 大阪府教育委員会1990「河南西部地区農地開発事業に伴う 寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅳ」
- 大阪府教育委員会1991「石曳遺跡発掘調査概要・Ⅰ」
- 大阪府教育委員会1992「河南西部地区農地開発事業に伴う 寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅴ」
- 大阪府教育委員会1996「河南西部地区農地開発事業に伴う 寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅵ」
- （財）大阪文化財センター 1979「太子町西山地区特定土地地区画土地整理事業予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書」
- （財）大阪文化財センター 1980「東山遺跡」（大阪府文化財調査報告書）
- （財）大阪府文化財調査研究センター 1999「尺度遺跡Ⅰ」（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書44）
- 岡山真知子1998「古代における辰砂生産工程の復原—徳島県若杉山遺跡を例として—」『考古学雑誌』84-1
- 柏原市教育委員会1994「玉手山遺跡」（柏原市文化財概報1993-Ⅱ）
- 柏原市教育委員会1994「高尾山山頂遺跡採集遺物」『柏原市所在遺跡発掘調査概報』（柏原市文化財概報1993-Ⅴ）
- 河南町教育委員会1998「大阪芸術大学グラウンド等造成に伴う 東山遺跡発掘調査報告書」
- 関西大学文学部考古学研究室編1977「河内長野 大師山」（関西大学文学部考古学研究5）（河内長野市教育委員会）
- 駒井正明2001「高地に作られたムラ」『弥生時代の集落』（大阪府立弥生文化博物館編、学生社）
- 近藤玲1999「二つの高地性集落—観音寺山遺跡と古曾部・芝谷遺跡の出現とその背景—」『同志社大学考古学シリーズⅡ 考古学に学ぶ—遺構と遺物—」（同志社大学考古学シリーズ刊行会）
- 三宮弘1999「尺度遺跡Ⅱ—中期集落の分析」『尺度遺跡Ⅱ』（財）大阪府文化財調査研究センター）
- 音楽太郎1999「弥生時代環濠集落小論」『同志社大学考古学シリーズⅡ 考古学に学ぶ—遺構と遺物—』
- 高槻市教育委員会1996「古曾部・芝谷遺跡—高地性集落遺跡の調査—」（高槻市文化財調査報告書20）
- 都出比呂志1974「古墳出現前後の集団関係」『考古学研究会』20-4（考古学研究会）
- 都出比呂志1975「堅穴式住居の周堤と壁体」『考古学研究』22-2（考古学研究会）（都出1989所収「堅穴式住居の立体構造」）
- 都出比呂志1983「環濠集落の成立と解体」『考古学研究』29-4（考古学研究会）（都出1989所収）
- 都出比呂志1984「農耕社会の形成」『講座日本歴史』（歴史学研究会・日本史研究会編、東京大学出版会）
- 都出比呂志1985「弥生時代住居の東と西」『日本語・日本文化研究論集』（大阪大学文学部）（都出1989所収）
- 都出比呂志1989「日本農耕社会の成立過程」（岩波書店）
- 帝京大学山梨文化財研究所1999「帝京大学山梨文化財研究所1999年度研究会集『遺跡・遺物から何を説くのか（Ⅲ）—住まいと住まい方—』資料集」
- 寺井誠1995「古墳出現前後の堅穴住居の形態変化」『第37回埋蔵文化財研究会発表要旨』（埋蔵文化財研究会）
- 寺井誠1995「古墳出現前後の堅穴住居の変遷過程」『古文談叢』34（九州古文化研究会）
- 同志社大学歴史資料館1999「大阪府和泉市観音寺山遺跡発掘調査報告書」（同志社大学歴史資料館調査報告書2）
- 鍋島隆宏2000「南河内・石川流域における弥生後期集落の動向」『古代文化』52-7（古代学協会）
- 西岡誠司1988「屋内高床部に関する一試論」『網干善教先生華甲記念考古学論集』（網干善教先生華甲記念会）
- 福宜田佳男1999「近畿地方の集落と墓の変化」『考古学研究会岡山例会シンポジウム記録Ⅱ 論争古備』
- 橋本正太郎1971「堅穴住居の分類と系譜」『考古学研究』23-3（考古学研究会）
- 橋本裕行1995「低地性の遺跡と山間・丘陵上の遺跡の違いを考える」『みずほ』16（大和弥生文化の会）

羽曳野市教育委員会1992「羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財試掘調査報告書」

羽曳野市史編纂委員会編1994「羽曳野市史」第3巻史料編1

福島孝行1999「平面多角形の竪穴住居の検討」『同志社大学考古学シリーズⅢ 考古学に学ぶ—遺構と遺物—』

藤田憲司1984「単位集団の居住領域—集落研究の基礎作業として—」『考古学研究』31-2（考古学研究会）

藤田道子1996「まとめ—高地性集落としての寛弘寺遺跡—」『寛弘寺遺跡発掘調査概要・ⅩⅤ』（大阪府教育委員会）

藤原学・森岡秀人1977「弥生遺跡に伴う焼土礫について」『河内長野 大師山（関西大学文学部考古学研究5）』

本田光子1990「石杵考」『古代』90（早稲田大学考古学会）

村川行弘・小林博編「弥生時代の大阪湾沿岸—河内地域史—」『みずほ』32（大和弥生文化の会）

森岡秀人1996「弥生時代抗争の東方波及—高地性集落の動態を中心に—」『考古学研究』43-3（考古学研究会）

宮崎康雄1993「丘のムラと低地のムラ」『みずほ』10（大和弥生文化の会）

宮崎康雄1996「集落の構成」『古曾部・芝谷遺跡』（高槻市教育委員会）

宮崎康雄2000「淀川北岸の弥生集落—三島地域を中心に—」『みずほ』32（大和弥生文化の会）

宮本長二郎1989「古墳時代竪穴住居論」『研究論集Ⅷ（奈良国立文化財研究所学報47）』（奈良国立文化財研究所）

山田隆一1994「古墳時代初期前後の中河内地域」『弥生文化博物館研究報告』3（大阪府立弥生文化博物館）

山田隆一2001「大阪府南部、石川流域における弥生時代後期から古墳時代初期頭土の特質」『弥生時代の集落』（大阪府立弥生文化博物館編、学生社）

若林邦彦1999「大阪平野における拠点集落の性格」『みずほ』31（大和弥生文化の会）

〈図版出典〉

図7-1：今回調査成果と羽曳野市教委1992を基にトレース、図7-9：（財）大阪文化財センター1980・府教委1985・河内町教委1968を基にトレース、図7-10：府教委1996図1・図30を基にトレース

- 1 駒ヶ谷は、都出1983高地性集落分類のAタイプ（急峻な山頂～尾根上・狭義の高地性）ではなく、Bタイプ（比高差20～30mの丘陵上・広義の高地性）に相当する。図7-7では高尾山がAタイプ、それ以外がBタイプである。
- 2 報告書では、SB001の平面形は円形であるが一部に直線的な部分が認められることから多角形住居の可能性を指摘している。しかし竪穴住居20や32のような明確な多角形ではないためここでは円形住居として扱うことにする。
- 3 駒ヶ谷遺跡ではこの地域で類例のない方形台状墓が認められる。丹後など日本海側に多く分布する方形台状墓や多角形住居の存在からそれらの地域との関連も指摘できようが、他の遺構・遺物からはその状況はうかがえない。
- 4 多角形住居ではないが、大形住居は家長世帯住居とともに共同作業場や集会場の役割が想定できる（都出1984）。
- 5 西日本では円形住居と方形住居の柱穴位置は求心構造が主流で共通しているという（都出1985）。
- 6 内部に炭化物がみられ側面が赤化している炉は灰穴炉（都出1985）と推定できるが、竪穴住居32炉1は炉底部まで赤化しており、床床炉などにより形態や機能が違う可能性がある。
- 7 高地性集落での焼土坑検出例（大師山、会下山道跡など）については、狼煙台（都出1974）や土器焼成遺構（藤原・森岡1977）などが想定されている。今回の例も狼煙台の可能性もあるが、炭化木の検出により屋外炉と推定した。
- 8 壁際にある土坑については、屋内貯蔵穴という名称が与えられている（石野1990）が、これらの土坑に関しては貯蔵穴とする説と出入口とする説があるため、ここでは機能を表す名称を使用しないことにした。
- 9 屋内高床部は、大半が住居内の壁際で確認され、寝床としての機能を推定して「ベッド状遺構」とも呼ばれる。しかし屋内高床部が祭壇であったという想定もあり、ベッドとしての機能を果たしていたと限定できない。
- 10 南河内地域で屋内高床部が数例確認できる。東山遺跡＝大阪文化財センター1980-B地区10-4号住居、河南町教委1998-B調査区竪穴住居2。尺度遺跡＝大阪府文化財調査研究センター1999-699住居・1334住居。
- 11 A地区土坑3より中期後半の特徴をもつ土器（図4-79-1）が出土した。また古墳時代後期の溝44より中期の可能性のある大形尖頭器が出土している。丘陵周辺に中期集落および活動域が存在した可能性はある。
- 12 住居全体外部構造や防火対策などの検討から同時併存住居の間には通常20mほどの空間が必要であるという見解がある（藤田1984）。A地区の各ブロック間はおおむね10mほどの距離しかなく、防火対策にはやや疑問も残る。特にB・Dブロック間の距離はさらに短いため両者が1つのブロックであった可能性もある。
- 13 古曾部・芝谷遺跡という「群」に相当するまともは、A地区の9棟全体のまともであると考えられ、今回のA地区では1つの竪穴住居「群」が調査されたことになる。1つの「群」＝1単位集団の可能性が考えられる。
- 14 竪穴住居の面積は、壁溝を除いて算出する場合（床面積）もあるが、今回の「住居面積」は壁溝を含めた壁の内側の範囲で算出した（石野1990）。

- 15 東山道跡でも他の方形住居の面積と格差がある58㎡の方形住居が検出されている(図7, 3-16)。
- 16 駒ヶ谷道跡で現在のところ唯一検出されている円形住居SB001の住居面積は、拡張後の方形住居と大形住居である多角形住居との中間ほどの面積を有しているため、この住居の位置づけは難しい。
- 17 東山道跡は、弥生中期末に出現している可能性もあるが、確実に集落が形成されるのは後期前葉以降で、後期後葉まで継続する。河南町教委による調査区(河南町教委1998)では後期後葉～庄内式期の竪穴住居群が検出されている。寛弘寺道跡は、中期末～後期前葉の竪穴住居群と、後期中葉～後葉を主体とする竪穴住居群が検出され、前葉～中葉の間に断絶があると指摘される(藤田1996)。なお今回の寛弘寺道跡の住居面積には中期末～後期前葉の住居は除外している。尺度道跡は後期後葉に出現しているようであるが、古墳時代初期が主体である。
- 18 寛弘寺道跡には、尾根斜面部にいわゆる竪穴状遺構が多数検出されている。これらは円形住居に付属する施設であるとも考えられている(鍋島2000P15図10)。古曾部・芝谷道跡でも同様の遺構が多数存在する。
- 19 尺度道跡の竪穴住居は他集落と比べ大形化するとともに、角のある正方形を呈し、柱穴も浅く、殆も未検出または浅いという特徴がある。時期差か集落差かの判断は難しいが、尺度道跡には方区画の出現や庄内式の搬入などが認められ、集落差と考えるとよい。却が浅いまたは未検出であるのは庄内式の使用方法に関連する可能性がある。
- 20 各道跡の存続時期や引用文献は、本書第2章-2「石川流域における弥生集落の動向」を参照していただきたい。
- 21 駒ヶ谷道跡調査会が調査した9棟と、今回のC地区で検出した竪穴住居200をあわせて計10棟になる。
- 22 丘陵上集落の居住単位集団を「数世帯で形成された親族集団」と類推し、古曾部・芝谷、観音寺山道跡などは親族集団が複数結合する集落であり、この複数の集団は中期環濠集落内にも存在した可能性が高いという(若林1999)。
- 23 古曾部・芝谷道跡における丘陵上での木棺墓4基の例から、首長墓は丘陵上にあると想定している(瀬江田1999)。
- 24 鍋島2000では、南半部分を「存続時期は長く、その周辺において核をなす一帯で」あり、北半部などの「丘陵上の他の道跡は、このような集落から派生したものと述べられている。また北半部を区画溝や二重口縁溝の在り方から「前段階の中心的な集落と地点を異にして」、「明らかに前段階の集落構造は払拭され」、「新たな規範のもとに集落が再構築されていると考えなければならない。」と述べられている。
- 25 南河内地域において駒ヶ谷道跡の方形台状墓を除けば、丘陵上の集落では墓制として土器棺のみが検出されている。南河内地域の低地集落では、川北道跡や船橋道跡、西大井道跡などで弥生時代後期後葉～古墳時代初期の方形周溝墓が確認されている。東山道跡でも集落構成員の墓域を求めると低地部分がその候補となるのか。
- 26 寛弘寺道跡の出現期については弥生時代中期後半とされている(藤田1996)、鍋島2000では中期～後期への過渡期にあたると思えているので、本稿ではこれらの竪穴住居の時期を中期末～後期前葉としている。
- 27 藤田1996では、北部丘陵と東部丘陵の方形住居について、北部丘陵に隅丸方形の割合が高いと指摘されている。また竪穴住居平面形について円形→隅丸方形→方形への変遷が想定されており、このことから集落の中心は南部丘陵→北部丘陵→東部丘陵→東部丘陵へ変遷したと想定している。
- 28 南部丘陵のA尾根では最高8回建替えられた円形住居(竪穴住居1016)が検出されており(大阪府教委1987、藤田1996)、南部丘陵における居住域の存続時期の長さがうかがえる。なお寛弘寺道跡の存続期間の終盤には東接する低地で神山道跡が営まはじめる。寛弘寺道跡の集団の一部が移動したのであろうか。
- 29 北部丘陵中央部の割竹形木棺(粘土槨)主体部をもつ91号墳は、周囲から古墳時代遺物が検出されず、墳丘からの弥生後期後葉土器群の検出により、弥生方形台状墓の可能性が指摘される(大阪府教委1996・瀬江田1999)。
- 30 尺度道跡で方形区画を伴う首長居館が想定され(三宮1999)、弥生後期集落とは異なる集落構造が出現した可能性がある。丘陵上集落が衰退する庄内式期には庄内式の移動など人・物・情報の広域移動が想定できるようになり、前段階の集落間ネットワークによる流通システムと異なる広域物資流通網の存在を感じる。丘陵上集落の利点は眺望に優れる点であり、新たな情報網による人・物・情報の活発な動きを観察・監視する要素を想定したい。
- 31 東山道跡で多く出土した磨石・礮石・石皿を食料加工具と考え、高地性集落が採集活動主体であったという想定がある(大阪文化財7890)。今回の調査でも磨石・礮石など礮石器が多く出土し東山道跡との類似性が伺える。今回出土した礮石器の中に赤色顔料精製用の石片が含まれており、彼方(栗田1992)、古曾部・芝谷(高槻市教委1996)、観音寺山道跡(同志社大学歴史資料館1999)でも赤色顔料付着石片が出土している。このように丘陵上集落の礮石器には赤色顔料精製用石製品が含まれている可能性があり、すべてを食料加工具と考えることはできない。

第2節 古墳時代後期～古代の駒ヶ谷遺跡

若林邦彦

1. はじめに

今回の調査では、弥生時代後期末～古墳時代初頭の堅穴住居群だけでなく、古墳時代～古代の建物も多く検出された。当遺跡における既往の発掘調査でも、飛鳥～奈良時代・平安時代の掘立柱建物が多数検出されている。本節では、既往の調査成果と今回の成果を総合して、古墳時代後期～古代の駒ヶ谷遺跡の景観復元を行いたい。それによって、飛鳥川流域の6～8世紀の状況を推定し、大和・河内を結ぶ丹波道をめぐる古代地域社会の様相の一端を露わにしてみたい。

その前提として、既往の調査成果のうち、当該期に関する概略を総括する必要がある。第1章で述べたように、当遺跡での発掘調査のさきがけとなったのは、駒ヶ谷遺跡調査会による大黒地区丘陵上と飛鳥川左岸近辺の試掘調査であった（駒ヶ谷遺跡調査会1990）。この調査区（以後 試掘調査区と略称）では、弥生時代後期～古墳時代初頭の堅穴住居群とともに、大黒地区の主尾根上に複数の木棺主体部をもつ方形台状墓が検出された。この一部を削平する状態で6世紀築造と考えられる古墳が存在していたことが確認されており、大黒地区尾根上に古墳時代後期の小古墳が構築されていたことは確実である。

また、この一連の試掘調査では、飛鳥地区（飛鳥川左岸近辺）で7世紀の掘立柱建物や平安時代寺院建物の基壇と思われる遺構が検出されている。大黒地区東側の低位段丘～沖積地には古代の建物群の存在が想定されたのである。これを裏づけたのが、(財)大阪府文化財調査研究センターによる調査（(財)大阪府文化財調査研究センター1998・同1999）であった。大黒地区東側の低位段丘部分におけるこの調査区（以後「駒ヶ谷遺跡」調査区と略称）では、「蔵塚古墳」と名づけられた6世紀後半の前方後円墳と7～9世紀の掘立柱建物群などが検出されている。

今回の調査範囲は、大黒地区丘陵上と飛鳥川左岸の低位段丘との間の領域である。調査区のうち、東端のA地区は丘陵支尾根の東側斜面、B地区は2つの支尾根間の谷部、C地区は主尾根東斜面裾と谷部に相当する。このうち、B地区からは人為的な遺構は検出されていない。A地区では6～8世紀の柱穴群・掘立柱建物や堅穴住居が、C地区でも6世紀の掘立柱建物・堅穴住居が検出されている。これらの遺構の変遷が、周囲の既往調査区での遺構変遷とどのように連動するのかが問題となる。以下、時代順に駒ヶ谷遺跡での遺構変遷を述べたい。

2. 古墳時代後期の遺構分布

6世紀の駒ヶ谷遺跡を語る上で、蔵塚古墳の存在は欠かせない。蔵塚古墳は「駒ヶ谷遺跡」調査区の東半部で検出された墳長約53.5m、周濠までを含めた全長約68.9mを測る前方後円墳である。調査時の墳丘盛土の観察により、土囊が列状に並べられた状況が確認されている。これは、墳丘築成時に土囊列によって盛土プランの骨組みを作り、その後それら土囊列の内側に土壌を充填した痕跡と考えられ、前方後円墳築造過程を復元する上で嚆矢の調査成果となった。この蔵塚古墳は盛土からTK10型式、周濠埋土からTK10・MT85・TK43型式の須恵器坏蓋・身が出土している。この土器から6世紀中頃の築造を報告者は推定している。

また、「駒ヶ谷遺跡」調査区のうち西端にあたるC地区では、埋土からTK10型式の須恵器坏や川西宏幸氏編年（川西1978）V期の円筒埴輪の出土した堅穴住居1が検出されている。これは、蔵塚古墳築造時

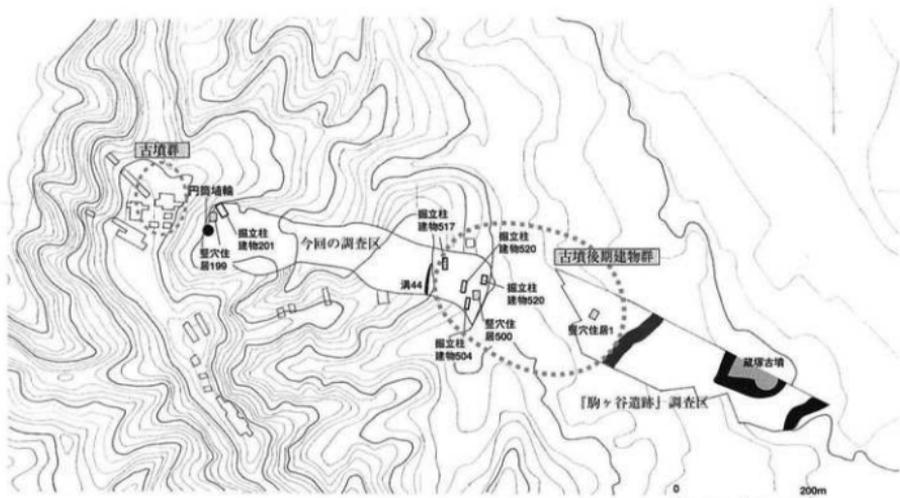


図 7. 11 古墳時代後期の胸ヶ谷遺跡

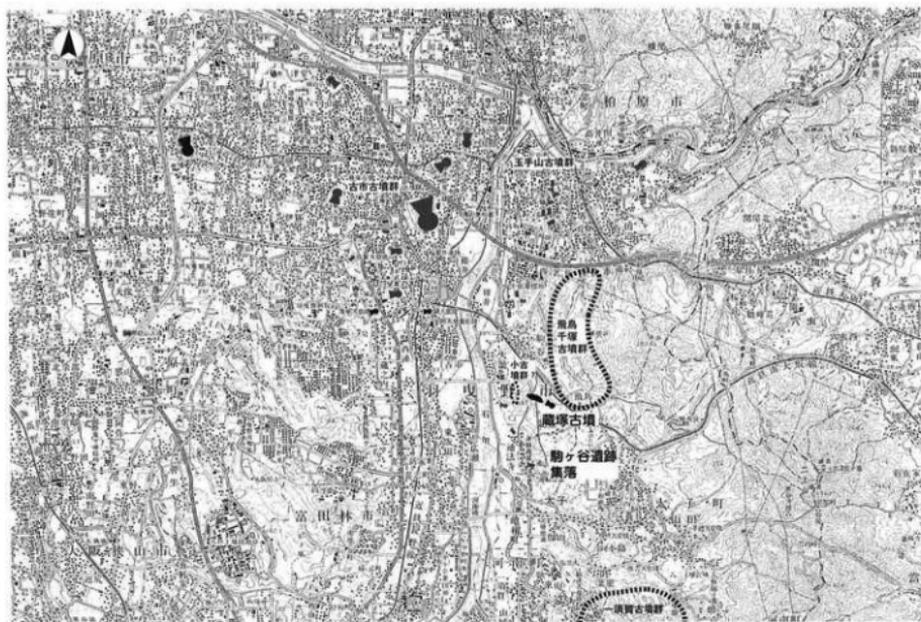


図 7. 12 胸ヶ谷遺跡近辺の古墳分布

期にはほぼ相当し、古墳造営行為との関わりが想定できる施設である。また、同じC地区では時期決定の困難な掘立柱建物や柱穴が複数検出されている。『駒ヶ谷遺跡』調査区のC地区包含層からは同時期の須恵器破片も出土しているため、これらの建物のうちいくつかは6世紀に機能していたと考えられる。このように、蔵塚古墳の西側には古墳築造時に形成された建物群が存在していた可能性が高い。

これに呼応するように、今回の調査区のうちもっとも東寄り、つまり『駒ヶ谷遺跡』調査区に最も近いA地区では、6世紀中頃に機能したと思われる居住遺構として竪穴住居500・掘立柱建物504・507・517・520が検出されている。いずれの遺構もA地区でも東半部の丘陵裾の緩傾斜地に立地している。また、概ね北北東-南南西方向に軸をそろえて配置されている。図7、11に示すように、これらの住居・建物群は、『駒ヶ谷遺跡』調査区西半部から連続して形成されていたことは明白であろう。『駒ヶ谷遺跡』調査区のうち蔵塚古墳から100m西には6世紀の須恵器類が出土する流路580があり今回調査区のA地区の建物群西限には6世紀の須恵器片の廃棄された溝44がある。流路580から溝44の間の緩斜面地帯は古墳築造時の建物群・居住域として機能していたと推定できる。

これら住居・建物群は、6世紀中頃に突如としてこの地に形成されたものであり、蔵塚古墳の築造に関連した施設群であった可能性はきわめて高い。7世紀前半の建物が、今回の調査区や『駒ヶ谷遺跡』調査区ではほとんど確認できないことから、住居・建物群の形成は短期間であったとも推定できる。想像を逞しくすれば、蔵塚古墳築造者たちの一時的居住施設と考えることも可能である。「古墳造営キャンプ」(酒井1977)という位置付けもできる遺構群である。

また、大黒地区試掘調査区の07地点では、先述のように後期古墳の存在が確認されている。主体部については未確認であるが、報告では木棺直葬墓の可能性が指摘されている。この後期古墳の位置する主尾根の先端東側斜面裾は今回調査区のC地区に相当するが、この包含層からは多量の古墳時代後期須恵器が出土している。それに加え、円筒埴輪破片(図6、26-18)や陶棺破片(図6、26-19)も出土している。当調査区出土遺物の量は非常に多く、主尾根上から谷部への転落品が多数含まれていると考えられる。円筒埴輪は川西幸氏編年(川西1978)Ⅴ期に相当し、6世紀の所産と考えられる。陶棺も詳細は不明だが古墳時代後期の所産とみてよいだろう。つまり、C地区には主尾根上から古墳に関連する遺物が転落してきていると考えられる。この想定に基づけば、試掘調査区以外にも大黒地区丘陵主尾根先端部にも後期古墳が形成されていた可能性が高い。

また、今回調査C地区の西端では6世紀中頃の須恵器を埋土中に含む竪穴住居199が検出されている。その他にも時期不明の柱穴・掘立柱建物は周囲に存在し、そのうちいくつかは6世紀段階で機能していたと推測できる。つまり、古墳時代後期には、大黒地区丘陵上に木棺直葬主体をもった小規模な古墳群が形成され、その直下の丘陵裾には同時期の集落も存在していたことになる。

これらの遺構分布をまとめると、以下のような状況が想定できる。蔵塚古墳造営期にはその西100~300mの範囲と、支尾根を隔てた主尾根裾に集落が形成され、その背後の丘陵上には木棺直葬主体をもつ小古墳群が形成されていた。集落は、蔵塚古墳造営期に形成されることから古墳築造作業に際して形成された可能性が高いことは先述のとおりである。集落背後の裏山に形成された木棺直葬の小規模古墳群が、その造営作業集団と密接な関係をもっていたことは想像に難くない。

3. 古代の遺構分布

当遺跡の調査では、古代に形成されたと考えられる柱穴が多数検出され、そのうち半数は掘立柱建物

を構成する柱穴列として認識できるものである。ただし、柱穴埋土から時期比定の可能な土器類が出土することは多くなく、詳細な時期決定は容易ではない。ただ、『駒ヶ谷遺跡』調査区・今回調査区いずれをみても、7世紀前半に確実に比定できる掘立柱建物は一棟も確認できない。つまり、飛鳥Ⅰ～Ⅱ式の須恵器が柱穴埋土から出土する掘立柱建物は存在しないのである。一方、先述のように確実に6世紀中頃といえる掘立柱建物は今回調査区で複数確認できている。また、7世紀後半以後の掘立柱建物については、『駒ヶ谷遺跡』調査区で多数確認されている。今回調査区の包含層出土土物の中にも確実に飛鳥Ⅰ～Ⅱ式に比定できる土器は存在しない。このような状況を考慮すると、7世紀前半には当遺跡において建物・居住遺構が形成されることはなかったと想定するのが妥当であろう。

明確な遺構群が確認できる7世紀後半以後に関しては、遺構形成の中心領域は『駒ヶ谷遺跡』調査区にあったと考えられる。個々の建物の詳細な時期決定は困難だが、『駒ヶ谷遺跡』調査区では、倉庫状建物は8世紀にのみ確認され、建物の数・規模ともにこの段階が最盛期とされている。この段階では、すでに蔵塚古墳周濠は埋め立てられたり墳丘の一部が破壊され始め、古墳として重要視する意識はないようである。また、包含層出土土器の年代幅からは、今回調査区A地区の掘立柱建物292・293・294・409・501・502・503・505・506・509・511・513・514・515・516・518・522のうち大半は7世紀後半～8世紀に機能していたと考えられる。掘立柱建物506は『駒ヶ谷遺跡』調査区で検出されている倉庫状建物に類似している。ただし、それら建物群の変遷の詳細は不明である。

つまり7世紀後半～8世紀には、蔵塚古墳の一部を破壊しながら、大黒地区丘陵部～飛鳥川左岸低位段丘部分の東西約400mの広い範囲に、倉庫群を含んだ建物群が形成されたと推定できる。この領域は、飛鳥川の氾濫原より上段となり、かつ丘陵部からの流路が安定して形成されていた地点である。丹比道・飛鳥川沿いにおいては、大規模な施設群を形成するには最適の立地といえよう。問題はそのような大規模な施設群の性格である。どのような意図を持って、前方後円墳を破壊しながら大規模施設が建設されたのだろうか。

『駒ヶ谷遺跡』調査区では、非常に大型の井戸が検出され、埋土中からは多量の製塩土器や三彩壺が出土し、大型の倉庫状建物が複数存在している特殊な状況が確認されている。さらに出土土器の中に「古厨」と記した墨書土器があることも注目される。「厨家」もしくは「饗宴を行う場」としての性格をもっていた可能性が報告書では指摘されている。『駒ヶ谷遺跡』報告者は、遺跡内におけるこれらの要素と丹比道沿いという立地から、8世紀の当遺跡建物群を何らかの郡衙などの出先機関としての迎賓的施設と想定している。

それ以外に注目される出土品に、凝灰岩製の切石が挙げられる。これは、『駒ヶ谷遺跡』調査区から出土したのみならず、今回の調査区でも出土している。不整形な碎片もあるが、いくつかは1～2m程度の長さの柱状製品である。その形態から、基壇状の建築物の縁石などとして用いられた可能性が高い。詳細時期は不詳であるが、古代の所産であることは間違いのない。奈良時代においてこのような装飾を施す建物があったとすれば、それは通常集落の一般的生活施設とは考えにくく、寺院もしくは官衙的施設であったのではないかと推定される。ただし、当遺跡からは瓦が全く出土せず、寺院と考えることは難しい。官衙的施設としても、単純な郡衙機能をもっていたとは考えにくい。やはり、官道関連の特殊施設を想定することが妥当であろう。また、『駒ヶ谷遺跡』調査区では9・10世紀まで、掘立柱建物が連続して形成され続ける。報告者は、倉庫群などは姿を消すため、施設群の性格が私的な居宅に変化したと想定している。いずれにしても、ここに地域拠点的な施設が置かれ続けたことは間違いのないだろう。

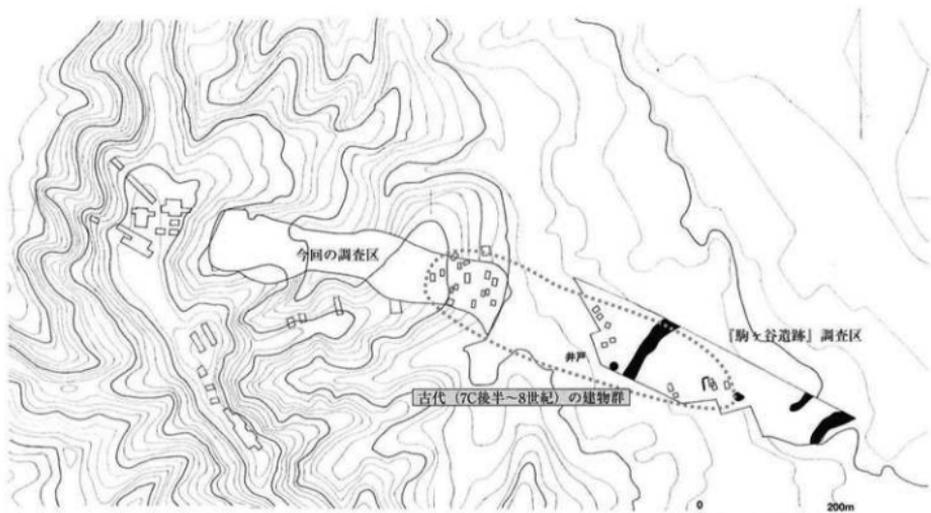


図 7. 13 古代(7世紀後半~8世紀)の駒ヶ谷遺跡

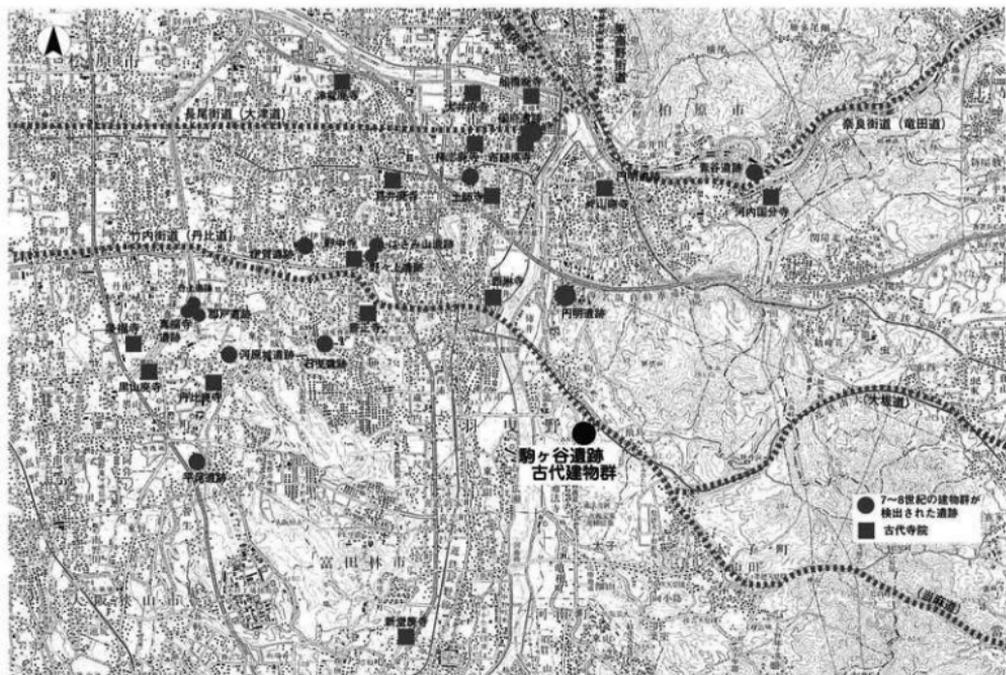


図 7. 14 古代の駒ヶ谷遺跡周辺

もう一つ、古代駒ヶ谷遺跡での人的活動の特徴づける遺構が検出されている。それは、今回調査区A地区で複数検出された焼土坑である。焼土坑17・25・45・52は、最下層に炭・焼土片を含む埋積層をもち、残存状況のよい遺構では、側壁が焼けて赤化しているものもあった。おそらく、鍛冶炉の下部構造と考えられる。また、B地区の谷斜面では、籾羽口が2点出土している。これらの遺構・遺物の存在は、古代の駒ヶ谷遺跡で金属加工作業が行われていたことを示唆しており、官営施設あるいは地域拠点施設で様々な諸工業生産も行われていたことが類推できる。

4. 景観変遷と地域社会

【古墳後期社会をめぐる構図】

これら駒ヶ谷遺跡の遺構変遷の実態は、飛鳥川流域もしくは南河内一帯の地域社会のありかたどのような関係をもっているのだろうか。

先述のように、6世紀中頃に成立する当遺跡の集落は、蔵塚古墳築造と同時期に形成されることから古墳築造のための実作業に従事した集団の居住地、もしくは作業の関連施設と想定できる。さらに、集落背後の丘陵上に形成された木棺直葬の小規模古墳群が、造墓作業集団と関連している可能性が高い。

この仮説を検証するためには、飛鳥川流域近辺における6世紀の古墳形成の状況を鳥瞰する必要がある。当該期で最も注目されるのは飛鳥川右岸の鉢伏山裾の丘陵部に大規模に展開する飛鳥千塚古墳群である。7つの大支群にわたって形成されたその古墳群は、耕作などのため破壊は著しいものの、大半は石英安山岩を使用した横穴式石室を主体部としていたと考えられている。飛鳥川左岸の蔵塚古墳は、飛鳥千塚古墳群に近接する同時期の前方後円墳である。『蔵塚古墳』（財）大阪府文化財調査研究センター1999）に指摘されているとおり、飛鳥千塚古墳群造営主体集団の盟主的首長墓と想定するのが自然であろう。

大黒地区丘陵上に存在が想定される小古墳群は、石室をもたない木棺直葬墓と推定されることから、飛鳥千塚古墳群被葬者群より下位に位置付けられる集団の墓域であったと考えられる。この想定は、小古墳群の被葬者が、地域有力者層の支配下にある零細な集団指導者であったことを想起させる。このことと関連して、駒ヶ谷遺跡建物群が蔵塚古墳造営作業集団と推定できることは注目される。2つの想定を重ね合わせると、蔵塚古墳造営作業に直接従事した零細集団内指導者層の墓域として大黒地区丘陵上古墳群が形成されたという推定が成り立つ。

このような図式の描ける当遺跡近辺での古墳時代の状況を振り返ってみよう。古墳時代前期に玉手山丘陵上に玉手山古墳群やそのやや東側に松岳山古墳群が、古墳時代中期以後には羽曳野丘陵東北裾部に古市古墳群が形成される。しかし、当遺跡の立地する飛鳥川流域には、古墳時代前～中期には際立った古墳は造営されていない。古墳時代後期には古市古墳群の形成は継続するものの、新たな造墓形態である群集墳の形成は、当遺跡対岸の飛鳥千塚古墳群を中心として行われる。群集墳とその盟主墳としての前方後円墳、それをとりまく造墓作業集団の施設群・墓域という駒ヶ谷遺跡をめぐる構図は、まさに古墳時代後期社会の典型的景観といえるのではないだろうか。しかも、それは未開の地であった飛鳥川流域で新たに展開された。

【古代への変化と連続】

新たな人的活動が再開される7世紀後半以後には、当遺跡の性格は古墳時代後期とはまったく異なっ

ている。新たに形成された建物群は、まだ墳丘の明確であった蔵塚古墳の一部を破壊し、周濠を埋めながら形成された。これは、当遺跡での人的活動の意図が、6世紀のそれとまったく異なっていたことを示している。

駒ヶ谷遺跡に倉庫群を含む広大な建物群が出現した7世紀後半～8世紀は、律令国家の確立期である。中央・地方の官衙の施設が整備され、多くの官道が整備されていった。当遺跡の眼前を通る丹比道も例外ではあるまい。倉庫群・大型井戸などを含む建物群の形成は、この官道整備と同時に進行している。三彩壺・墨書土器・多量の製塩土器の出土や、凝灰岩切石などが示す建物基壇部に想定される豪華な装飾は先述のように官道整備の一環として行われたと考えられる。

この二つの動きの連動は、当遺跡の古代建物群が「駅家」としての機能をもっていたことを類推させる。しかし、この地を文献上の何処かの「駅家」に比定することはできない。井戸から出土している大量の製塩土器は、多くの塩の必要性を類推させる。一般に、馬の飼育には塩が多量に必要なことが知られ、馬飼育がこの施設群で行われた可能性はある。恒常的な「駅家」でなかったとしても、官道沿いの公的施設として同様な機能を果たしていたことも推測できる。

ただ、公的施設であったとしても、どのような官衙の出先機関として考えるべきかは難しい。一般的には、地域管理の直接の管轄である郡衙がその候補となる。駒ヶ谷遺跡は「安宿郡」に所在している。その郡衙と推定されている遺跡は飛鳥川と石川の合流地点右岸の円形遺跡で、「郡田」「安宿寺」と記された墨書土器が出土している。駒ヶ谷遺跡からは約2kmの近さである。ところが、「駒ヶ谷遺跡」調査区出土墨書土器にみえる「古厨」の「古」の文字からは、隣接する古市郡との関連が推定される。駒ヶ谷遺跡古代建物群がどのような地域支配システム・管掌のもとに形成されたかについては不明な点が多いのが実情である。

ともあれ、ここまでみてきたような古墳時代後期～古代前半期の駒ヶ谷遺跡の変化は、古代社会の確立過程と密接な関連を持っている。蔵塚古墳の破壊と、「駅家」もしくは迎賓機能をもった公的施設の建設のありようは、もはや地域社会統合のためのモニュメントが必要ないことを示している。地域社会を編成する上で、地域の有力氏族の果たした役割は古墳時代後期も古代においても小さくないだろう。しかし、その役割の果たし方は、前方後円墳造営という地域社会関係の維持に力点を置いた行為から、中央の制度整備と連動したものへと変化している。ここに、社会全体の変化を読み取ることができる。

ただ、飛鳥川沿いの公的施設の形成地点が蔵塚古墳の位置と重複していることは偶然ではないだろう。おそらく、飛鳥川流域での地域拠点として前方後円墳やその作業集団の拠点が置かれていたことは、公的施設の設営地点を決定する上で留意されたことに間違いない。そこには、100年近く前の前方後円墳と建物の廃墟が残存していたであろうし、後期古墳形成とともに開発された周囲の沖積地では農作業が行われつづけていたかもしれない。古墳の破壊行為と施設の建設活動の実態からは、古墳時代から古代への断絶と連続の2つの側面をみることができる。

5. 結語

駒ヶ谷遺跡でのこれまでの調査成果を総合する形で、これまで論を進めてきた。蔵塚古墳と飛鳥千塚古墳群との関係のなかで理解できる古墳時代後期の集落像や古代の建物群の性格が主な論点であった。特に、官道整備と関連のある7世紀後半～8世紀の状況に関しては、羽曳野丘陵～石川流域全体で捉える必要もあろう。丹比道・大津道など主要官道が交錯するこの地域には、西琳寺・土師寺・善正寺・野

中寺・津堂庵寺・黒山庵寺・丹比庵寺をはじめとする奈良時代の古代寺院が多数存在する。当センターが近年調査している、羽曳野市～美原町の河原城遺跡、郡戸遺跡、丹上遺跡、真福寺遺跡では、7世紀後半～8世紀の集落跡が多数検出されてはじめています。本来なら、古代駒ヶ谷遺跡の性格は、これら周囲の遺跡群との関連づけの中で考察すべきであろう。その点は今後の課題として、稿を改めて論じたい。

《参考文献》

- 駒ヶ谷遺跡調査会 1990 『羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財調査概要』
(財)大阪府文化財調査研究センター 1998 『歳塚古墳』
(財)大阪府文化財調査研究センター 1999 『駒ヶ谷遺跡』
川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号
酒井龍一 1977 「古墳造営労働力の出現と煮沸用甕」『考古学研究』第9巻24号

第8章 調査成果のまとめ

今回の調査成果として、大きくわけて2時期の遺構群を検出し、その集落域の概要を把握できたことがあげられる。ひとつは弥生時代後期～古墳時代初期の竪穴住居群を中心とする丘陵上の集落で、駒ヶ谷遺跡調査会によって試掘調査されていた集落域の広がりを確認できた。もうひとつは前回の低位段丘上の調査で明らかにされていた古墳時代後期～古代における掘立柱建物群を中心とする集落域のつづきを検出したことである。以下前章の基礎分析をふまえて時代順にその調査成果の概要を総括しておく。

【弥生時代後期以前】

A地区の竪穴住居42埋土より縄文時代の可能性のある凹基式石畿が出土した。混入品と考えられるが、これまで駒ヶ谷遺跡周辺で縄文時代の遺物は出土していない。前回の低位段丘上の調査では弥生時代前期（～中期）の土器や石器が検出されていた。今回は弥生時代中期の遺構は検出していないが、A地区土坑3より中期後半の特徴をもつ土器が出土し、また古墳時代後期の溝44から中期によくみられる大形尖頭器が出土しており、周辺に中期の集落や活動域があった可能性がある。大黒丘陵に南接するお旅山遺跡や壺井散布地では中期の遺物包含層が確認されており関連があるかもしれない。

【弥生時代後期～古墳時代初期】

弥生時代後期になってはじめて本格的に集落が形成される。駒ヶ谷遺跡調査会の試掘調査によって大黒丘陵の主尾根部分で竪穴住居群が調査されていたが、その東側のC地区において方形竪穴住居1棟（竪穴住居200）が検出でき、主尾根の緩斜面部にも居住域が広がっていることがわかった。

主尾根から派生する支尾根部分の調査であるA地区では、竪穴住居9棟（多角形住居2棟・方形住居7棟）をはじめ欄外や焼土坑、土坑、溝などの弥生時代後期～古墳時代初期の遺構群を調査した。特に竪穴住居は良好に遺存しており、住居の変遷や住居内施設を分析することができた。

A地区の遺構から出土した土器は、弥生時代後期後葉～古墳時代初期（庄内式期）が主体で、従来漠然と弥生時代後期の集落とされていた駒ヶ谷遺跡の存続時期を明らかにすることができた。主尾根部分の試掘調査区やC地区出土土器には弥生時代後期中葉（一部前葉）に遡る要素をもつものがあり、A地区の居住域より先行していた可能性が高い。このことから主尾根において集落が出現し、そこから派生して後期後葉～古墳時代初期の段階で支尾根上のA地区に集落が営まれはじめたと推測できる。主尾根とA地区間の谷部のB地区では、A地区から廃棄された土器が多量に出土したが、遺構は未検出である。

南河内地域において弥生時代後期に丘陵上に展開していた集落は、古墳時代初頭までに衰退し低地に集落を営むようになると考えられていた。しかし駒ヶ谷遺跡で古墳時代初頭まで集落が継続していたことが確認でき、当該期の集落動向を探るうえで重要である。駒ヶ谷遺跡はいわゆる庄内壘を出土していないため集落との細かい併行関係の把握は難しいが、丘陵上の集落の成立・衰退の問題や庄内壘を含まない古墳時代初期の土器編年の問題などを考察するうえでの新たな視点となろう。

【古墳時代後期】

丘陵上集落の廃絶後、古墳時代中期まで遺構・遺物は確認できない。古墳時代後期になると再び集落が形成される。前回の調査地である低位段丘上には6世紀中頃の前方後円墳である蔵塚古墳が築造さ

れ、同時期の竪穴住居1棟が検出されていた。今回A地区の緩斜面地で同時期の竪穴住居（竪穴住居500）と複数の掘立柱建物が検出できたことにより、蔵塚古墳築造時にその西側において集落を形成していたことが再確認できた。この集落は蔵塚古墳と無関係とは考えられず古墳造営集団集落の可能性がある。

丘陵の主尾根部分ではかつて後期古墳が調査され、今回の調査で、主尾根東斜面部のC地区において丘陵部から転落したと考えられる同時期の遺物が多量に出土したことから、丘陵上に木棺直葬をもつ小規模古墳群の存在が想定できる。C地区で円筒埴輪片や陶棺片が出土していることからこの可能性が高いといえる。C地区一帯には掘立柱建物や柱穴群が多数存在し、その一部が古墳時代後期に所属していた可能性が高い。竪穴住居199において6世紀中頃の完形の須恵器が出土し、古墳以外にこの時期に集落として機能していたことは間違いない。これらはA地区の集落同様に古墳造営者集団の集落であると推測できる。

【古代（飛鳥・奈良時代）】

7世紀前半の遺構・遺物は確認できず、7世紀後半～8世紀にかけてA地区の緩斜面上を中心に掘立柱建物群が確認できる。前回の低位段丘上で検出されている倉庫と考えられる総柱建物と類似する建物も今回の調査で確認でき、この一群は前回調査の掘立柱建物群と一連のものと考えられる。このことにより飛鳥川左岸低位段丘～丘陵裾までの広範囲に掘立柱建物を主体とする大規模施設群が形成されていたと考えられる。前回の調査で奈良三彩、円面硯、墨書土器、製塩土器、凝灰岩切石などが出土したことからこの掘立柱建物群は一般集落とは考えられず、また古代の官道である丹比道沿いに当遺跡が立地することから、饗宴をおこなう場や駅家などの官衙的施設が想定されている。

A地区では最下層に炭化物を多量に含み側壁が赤化した複数の焼土坑が検出され、これらは鍛冶が下部構造の可能性もある。A地区西側のB地区谷部において輪羽口が2点出土している。官衙的施設内に諸手工業生産がおこなわれていた可能性を示すものである。

前回の調査地では9世紀以降の掘立柱建物などが検出されているが、前段階に比べて集落規模は縮小しているようである。今回調査区でも平安時代以降の遺構は検出していない。

【中世以降】

前回の低位段丘上の調査では12世紀後半～13世紀前半の掘立柱建物群が検出されているが、今回の調査ではその時期の遺構は検出していない。また当該期の遺物も出土していないため、今回調査地まで集落域が及んでいないことがわかった。B地区で検出された輪羽口が形態的に中世まで下る可能性は否定できないが、出土状況などから古代の所産であると推定しておく。その後駒ヶ谷遺跡には明確な居住域は形成されず、近現代以降、丘陵上はブドウ畑、段丘上は水田として利用され今日に至っている。

以上が調査成果の概要である。これらの調査結果に基づいて弥生時代後期～古墳時代初頭における丘陵上の集落構造の把握や古墳時代後期～古代の古墳造営集落や官衙的施設などの集落の性格づけなどの分析が可能になった。この分析を通じて駒ヶ谷遺跡における集落の具体像を一定程度解明できたことが今回の成果である。しかし周辺遺跡を含めた歴史的背景や社会構造の中での駒ヶ谷遺跡の位置付けがまだまだ不十分な点もあり、今回の発掘調査成果を十分に活用しながらさらなる検討が必要となろう。

写 真 图 版



図版1 駒ヶ谷遺跡周辺航空写真（1956年撮影）



图版2 A地区全景 (1)



A地区西半 (1A地区) 航空写真



A地区東半 (2A地区) 航空写真



A地区西半(北東から)



A地区西半(南から)

図版4 A地区全景(3)

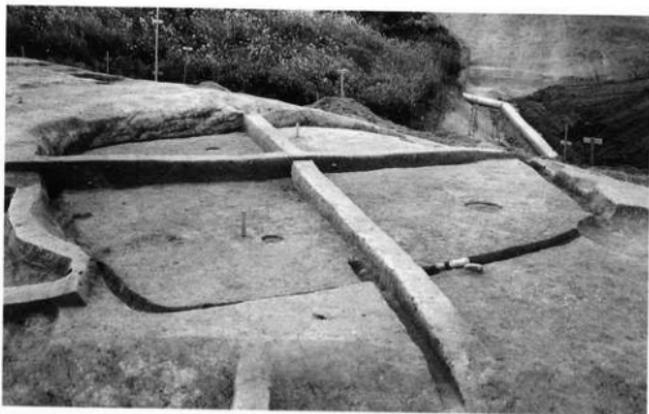


A地区東半(東から)



A地区東半(南西から)

竪穴住居20
(東から)



竪穴住居20
上層土器だまり
(東から)



竪穴住居23
(東から)



図版6 A地区遺構(2)



竪穴住居30
(東から)



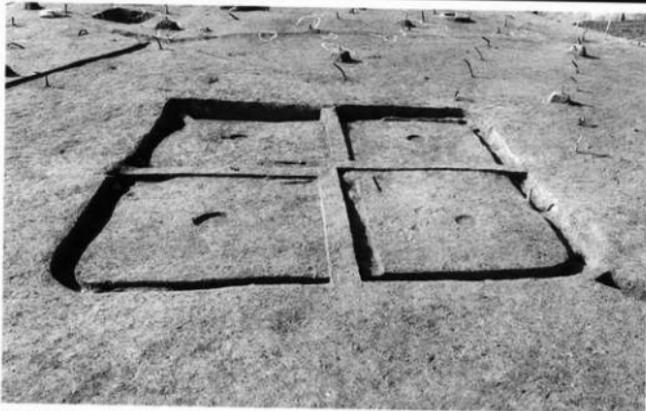
竪穴住居31
(東から)



竪穴住居31
屋内高床部
(北から)



竪穴住居32
(東から)



竪穴住居41
(東から)



竪穴住居41
土器出土状況
(東から)



竪穴住居42
(北東から)



竪穴住居42
土器出土状況①
(西から)



竪穴住居42
土器出土状況②
(東から)



竪穴住居43
(北から)



竪穴住居50
(北東から)



竪穴住居50
上層土器群
(北東から)



土坑4
検出状況
(北から)



土坑4
土器出土状況
(南から)



土坑56
土器出土状況
(西から)



焼土坑22
(北から)



焼土坑46
(北から)



溝49
土器出土状況
(東から)

溝2
検出状況
(南から)

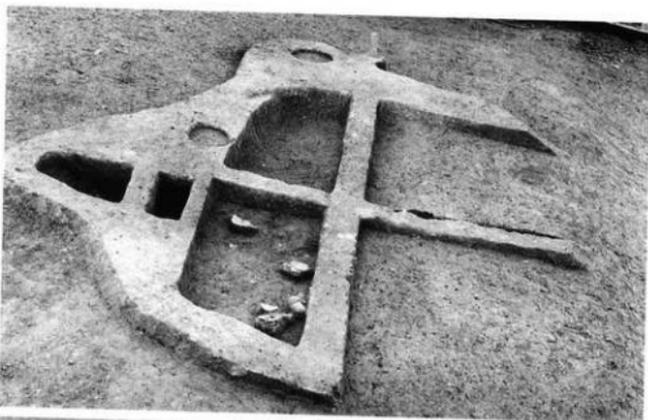


溝2
大型鉢出土状況
(北東から)



溝2
土器出土状況
(北東から)





竪穴住居500
(南から)



竪穴住居500
(南東から)



竪穴住居500
カマド
(西から)



掘立柱建物409
(北から)

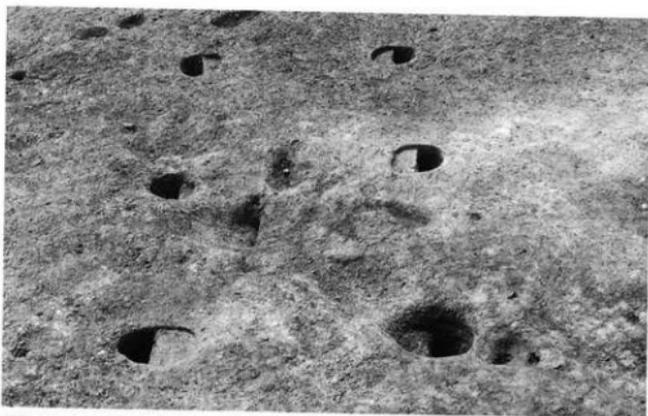


掘立柱建物501
-503
(南から)



掘立柱建物504
(南から)

掘立柱建物505
(北から)



掘立柱建物506
(南から)



掘立柱建物507
(南から)





掘立柱建物516
・517
(南から)



土坑470
すり鉢出土状況
(東から)



土坑478
(南から)

図版17 A地区遺構 (13)



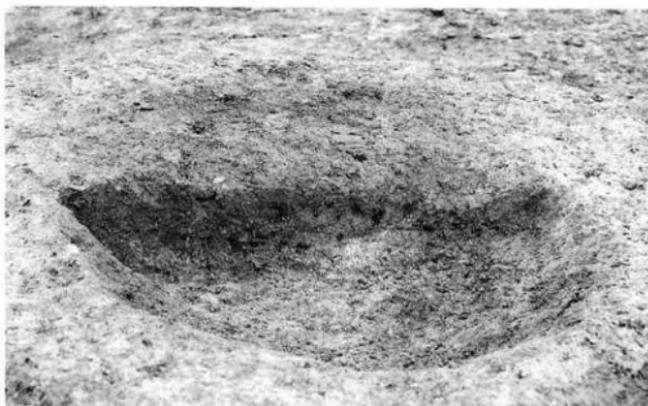
焼土坑17
検出状況
(南から)



焼土坑17
土層断面
(南東から)



焼土坑17
見推状況
(南から)



焼土坑25
(南から)



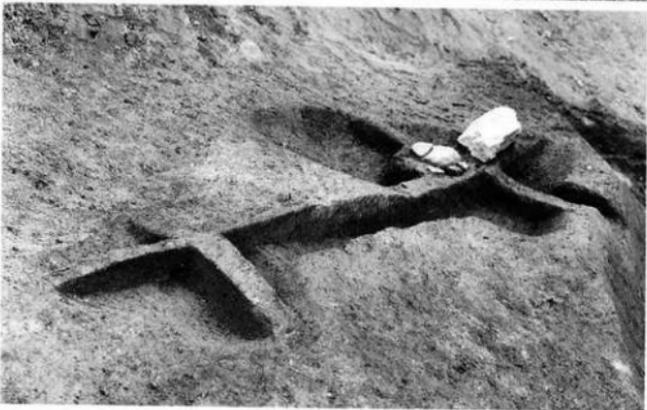
焼土坑45
(南から)



溝 6
須恵器出土状況
(東から)



炭化物だまり8
検出状況
(北から)



炭化物だまり8
全景
(北東から)



炭化物だまり8
羽口出土状況
(北東から)



谷部 (北東部)
堆積状況
(南西から)



谷部下層
土器出土状況①
(北から)



谷部下層
土器出土状況②
(東から)



C地区 航空写真



C地区西半（南から）



C地区西半（北東から）



C地区
堆積状況
(竪穴住居200部分)
(南西から)

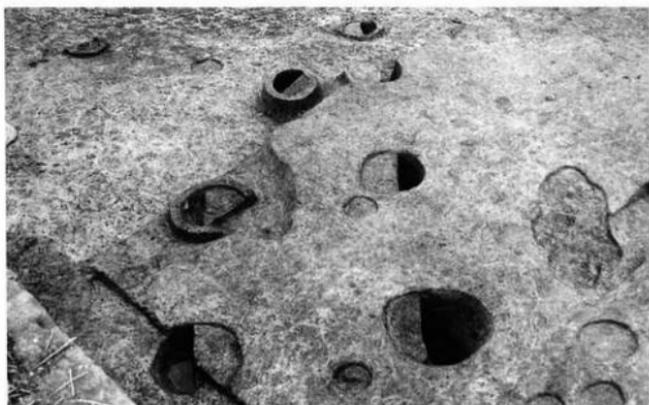


竪穴住居200
土層断面
(東から)



竪穴住居111
(北東から)

掘立柱建物201
(北西から)



掘立柱建物202
竪穴住居199
(北から)



掘立柱建物203
北半
(南西から)





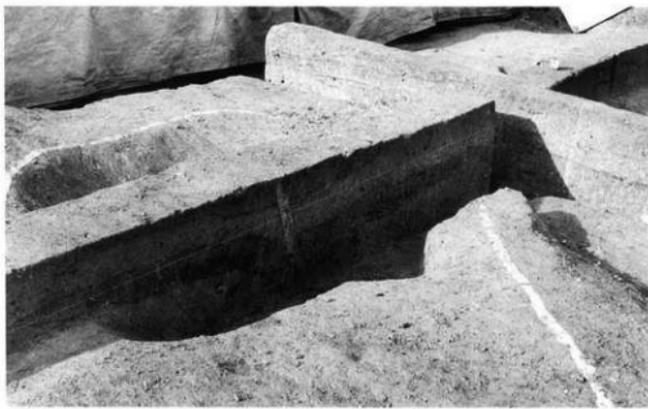
掘立柱建物206
(北東から)



掘立柱建物207
(東から)



掘立柱建物209
(南から)



土坑110
(南東から)



土坑208
凝灰岩出土状況
(北東から)



土坑208
(北東から)



溝108・109
全景
(東から)



溝108・109
土層断面
(東から)



溝108
掘出土状況
(北東から)



壑穴住居50
4. 26-3



壑穴住居50
4. 26-6



溝2
4. 39-7



壑穴住居41
4. 16-3



壑穴住居42
4. 21-7



壑穴住居42
4. 21-8



谷部下層
5. 4-11



壑穴住居42
4. 21-11



谷部下層
5. 4-2



包含層
6. 26-2



谷部下層
5. 4-4



土坑114
6. 26-17



溝108
6. 22-16



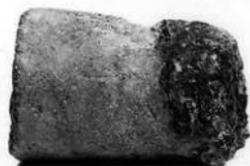
包含層
6. 26-12



竪穴住居199
6. 4-1

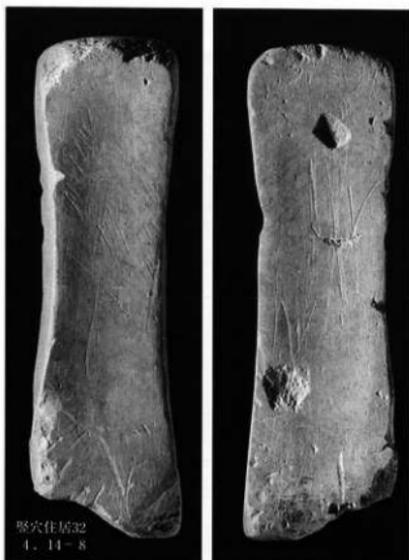


炭化物だまり8
5. 8-1



包含層
5. 8-2





聚穴住居32
4. 14-8



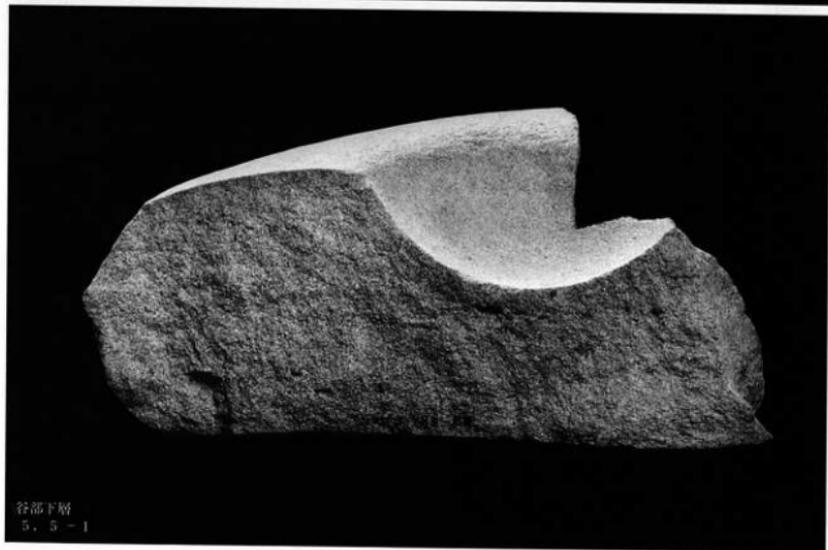
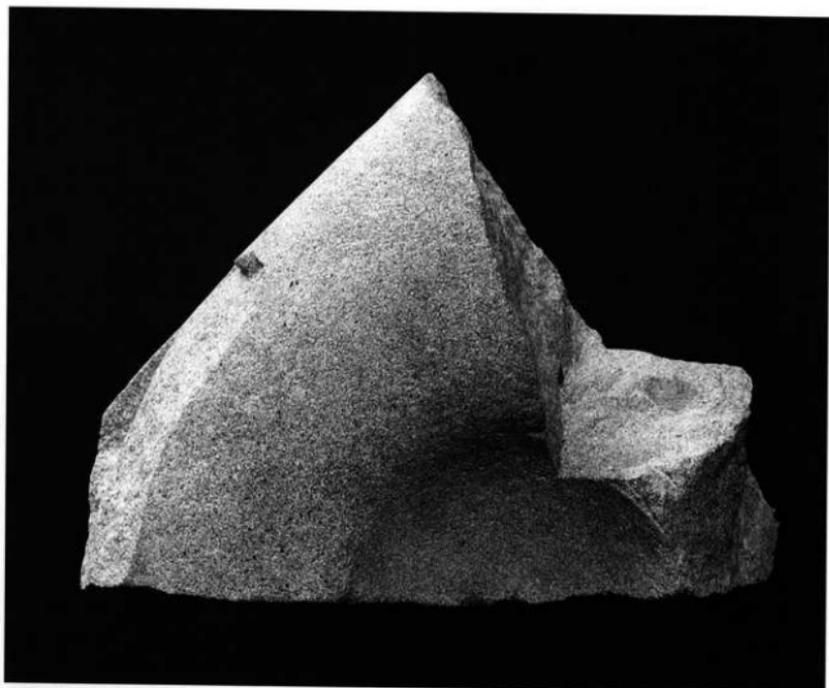
聚穴住居42
4. 21-1

溝44
4. 76-3

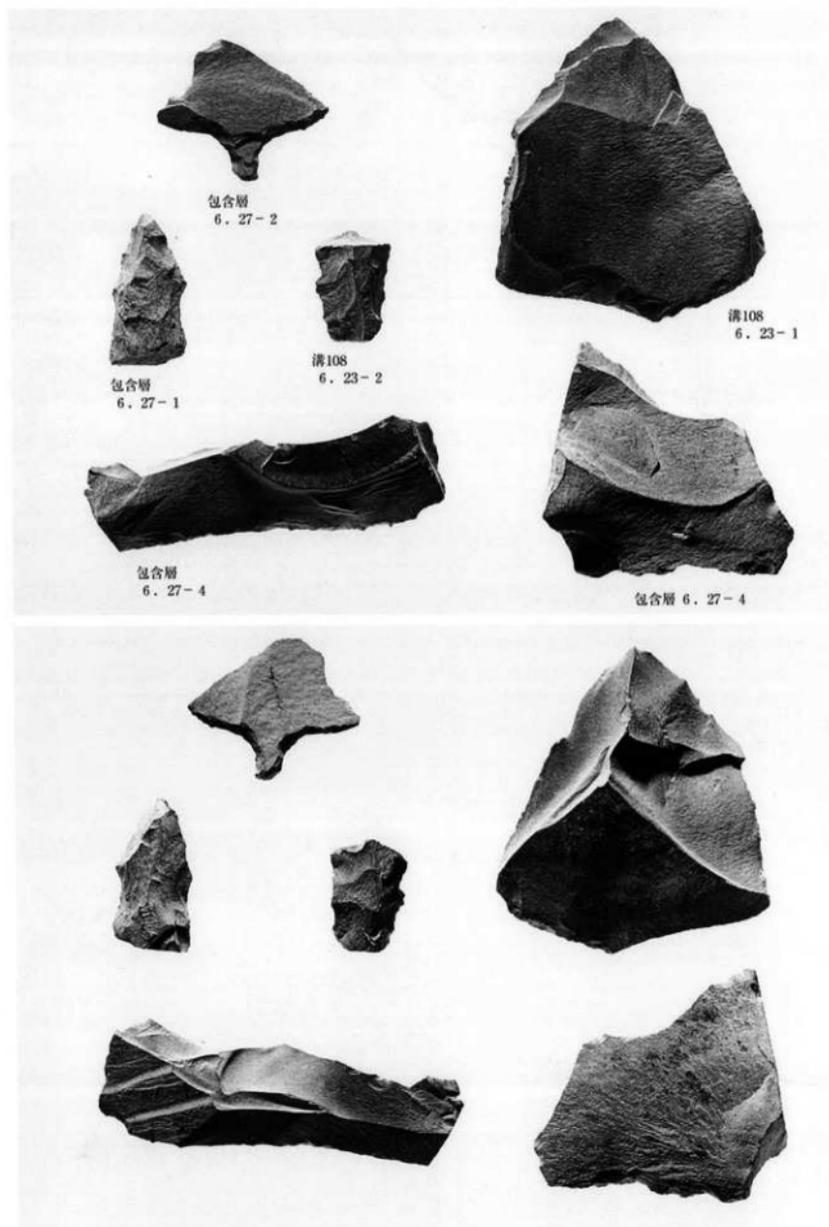


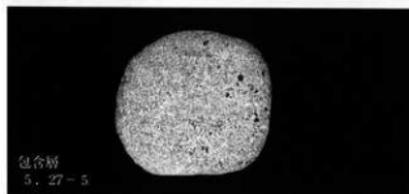
土坑46
4. 38-1

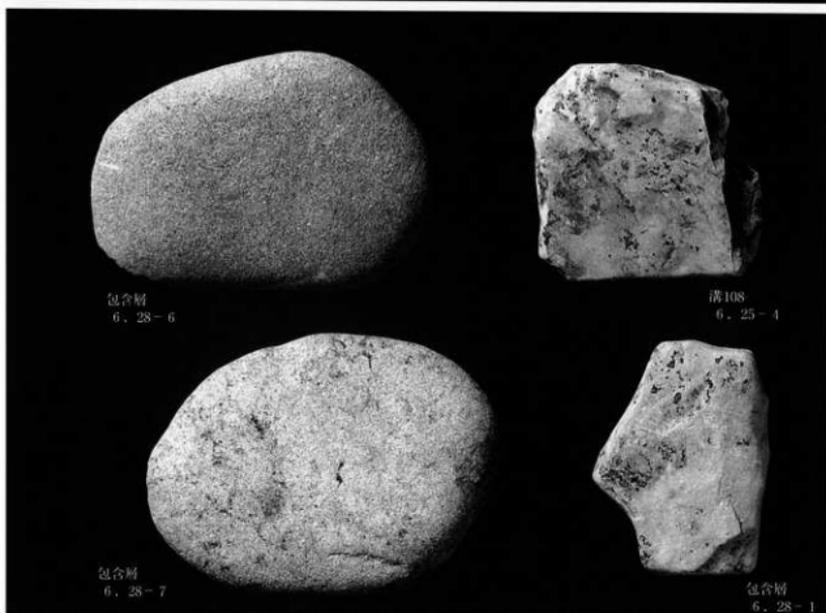
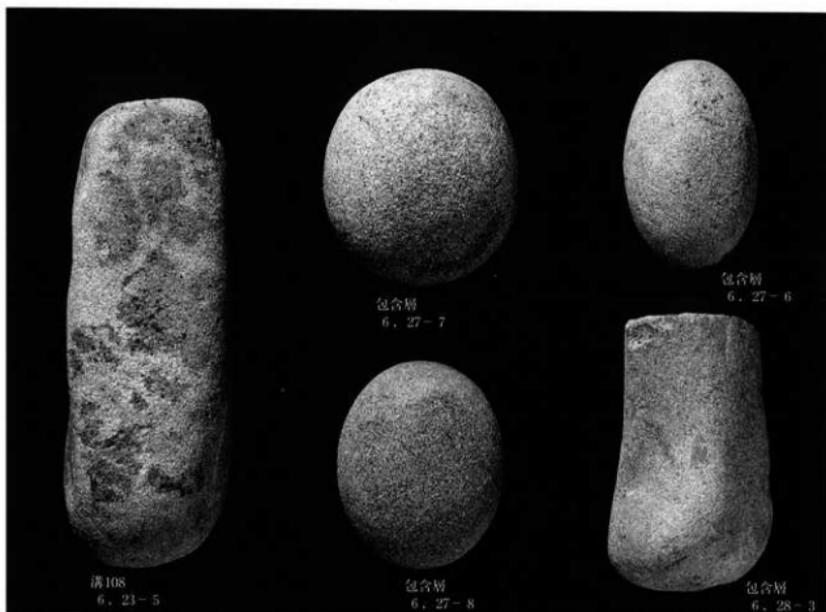




谷部下層
5. 5 - 1







土坑20
6. 19-1



土坑208

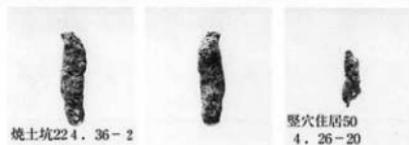


土坑208





土坑208
6. 18-1

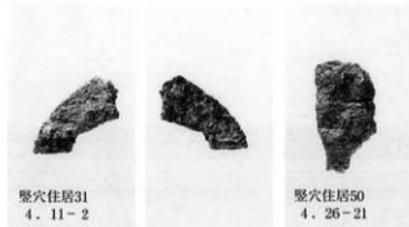


烧土坑224. 36-2

竖穴住居50
4. 26-20

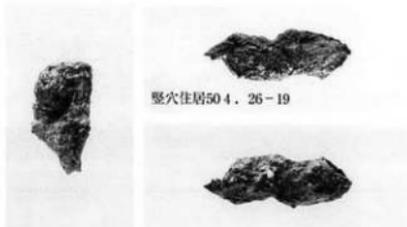


竖穴住居 4. 26-22

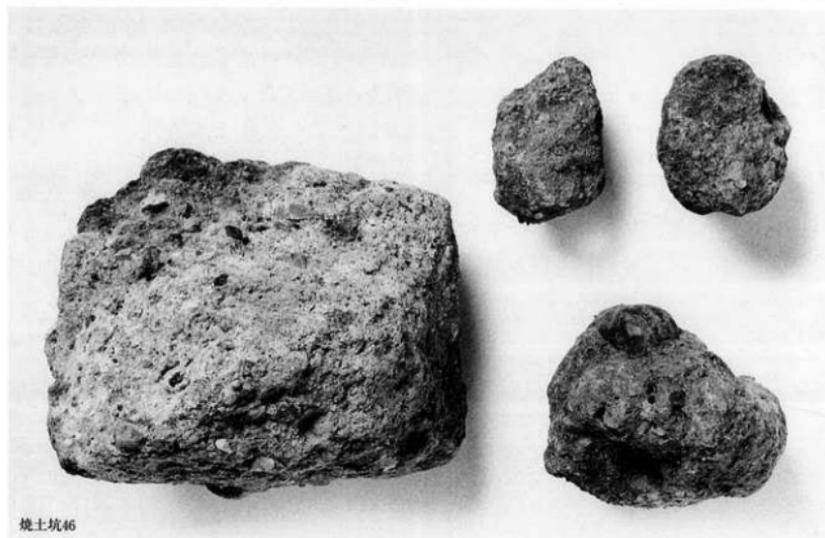


竖穴住居31
4. 11-2

竖穴住居50
4. 26-21



竖穴住居50 4. 26-19



烧土坑46

報告書抄録

ふりがな	こまがたにいせき に							
書名	駒ヶ谷遺跡Ⅱ							
副書名	南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書							
シリーズ番号	第67集							
編集者名	若林邦彦・仲原知之							
編集機関	(財)大阪府文化財調査研究センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 TEL072(299)8791 / FAX072(299)8905							
発行年月日	西暦2002年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こまがたにいせき 駒ヶ谷遺跡	おおさかふはびきのし 大阪府羽曳野市 あすか 飛鳥	27222	153	34度 32分 02秒	135度 37分 42秒	1999.6.24 ～ 2000.3.31	12,274㎡	南阪奈道 路建設に 伴う事前 の埋蔵文 化財の調 査
				X	Y			
				-162.500 ～-162.630	-33.920 ～-34.210			
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項			
駒ヶ谷遺跡	集落	縄文時代 弥生時代後期 ～古墳時代初期	堅穴住居・欄列・土 坑・溝・焼土坑・土 器棺	凹基式石畿 弥生土器(～土師 器)・石器(尖頭器・ 石鎌・砥石、赤色顔 料付着石片など)・鉄 製品・粘土塊	丘陵上の集落(広義 の高地性集落)を検 出			
	集落	古墳時代後期 飛鳥・奈良時代	堅穴住居・掘立柱建 物・溝・土坑 掘立柱建物・焼土坑・ 土坑・炭化物だまり	須恵器・土師器・円 筒埴輪・土師質陶棺 須恵器・土師器・輪 羽口・凝灰岩切石	古墳造営集団?の建 物群を検出 古代官道に関連する 建物群の検出			

(財)大阪府文化財調査研究センター 調査報告書 第67集

駒ヶ谷遺跡Ⅱ

- 南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書 -

発行年月日/2002年2月28日

編集・発行/財団法人 大阪府文化財調査研究センター

〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号

TEL 072(299)8791・FAX 072(299)8905

印刷・製本/明新印刷株式会社

〒630-8141 奈良市南宮終町3丁目464番地

